



# HPE Operations Bridge Reporter

ソフトウェアバージョン: 10.22

Windows®オペレーティングシステムとLinuxオペレーティングシステム

## 管理ガイド

ドキュメントリリース日: 2017年11月

ソフトウェアリリース日: 2017年11月



**Hewlett Packard**  
Enterprise

## ご注意

## 保証

Hewlett Packard Enterpriseの製品またはサービスの保証は、当該製品、およびサービスに付随する明示的な保証文によってのみ規定されるものとします。ここでの記載で追加保証を意図するものは一切ありません。ここに含まれる技術的、編集上の誤り、または欠如について、Hewlett Packard Enterpriseはいかなる責任も負いません。

ここに記載する情報は、予告なしに変更されることがあります。

## 権利の制限

機密性のあるコンピューターソフトウェアです。これらを所有、使用、または複製するには、Hewlett Packard Enterpriseからの有効な使用許諾が必要です。商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェアに関する文書類、および商用アイテムの技術データは、FAR12.211および12.212の規定に従い、ベンダーの標準商用ライセンスに基づいて米国政府に使用許諾が付与されます。

## 著作権について

© 2015 - 2017 Hewlett Packard Enterprise Development LP

## 商標

Adobe®は、Adobe Systems Incorporatedの商標です。

Microsoft®およびWindows®は、Microsoft Corporationの米国登録商標です。

UNIX®は、The Open Groupの登録商標です。

Java®は、Oracle Corporationおよびその関連会社の登録商標です。

## ドキュメントの更新情報

最新の更新のチェック、またはご使用のドキュメントが最新版かどうかの確認には、次のサイトをご利用ください。<https://softwaresupport.hpe.com/>

このサイトを使用するには、HPE Passportに登録してサインインする必要があります。HPE Passport IDを登録するには、HPEソフトウェアサポートサイトで **[登録]** をクリックするか、HPE Passportのログインページで **[アカウントを作成する]** をクリックします。

適切な製品サポートサービスをお申し込みいただいたお客様は、更新版または最新版をご入手いただけます。詳細は、HPEの営業担当にお問い合わせください。

## サポート

次のHPEソフトウェアサポートサイトを参照してください。<https://softwaresupport.hpe.com/>

一部を除き、サポートのご利用には、HPE Passportユーザーとしてご登録の上、ログインしていただく必要があります。また、多くのサポートのご利用には、サポート契約が必要です。HPE Passport IDを登録するには、HPEサポートサイトで **[登録]** をクリックするか、HPE Passportのログインページで **[アカウントを作成する]** をクリックします。

アクセスレベルに関する詳細は、以下のWebサイトにアクセスしてください。<https://softwaresupport.hpe.com/web/softwaresupport/access-levels>

**HPE Software Solutions Now**は、HPE SWのソリューションと統合に関するポータルWebサイトです。このサイトでは、お客様のビジネスニーズを満たすHPE製品ソリューションを検索したり、HPE製品間の統合に関する詳細なリストやITILプロセスのリストを閲覧することができます。このWebサイトのURLは <https://softwaresupport.hpe.com/km/KM01702731> です。

## オンラインヘルプの本PDFバージョンについて

このドキュメントはオンラインヘルプのPDFバージョンです。このPDFファイルは、ヘルプ情報から複数のトピックを容易に印刷したり、PDF形式でオンラインヘルプを閲覧することができます。本内容は、本来Webブラウザでのオンラインヘルプとして表示するように作成されているため、一部のトピックが正しくフォーマットされない場合があります。このPDF版では、一部の対話型トピックが表示されない場合があります。そうしたトピックはオンラインヘルプ内から正常に印刷できます。

# 目次

第I部: はじめに .....	12
第1章: 管理者の役割 .....	13
第2章: 管理コンソールへのアクセス .....	14
第II部 はじめに .....	16
第2章: 設定ウィザード .....	17
タイムゾーンの選択 .....	17
Verticaデータベースの作成 .....	18
管理データベースの作成 .....	18
コレクターの設定 .....	18
第3章: インストール後のデータソースの選択 .....	19
データソースの選択 .....	20
トポロジソースの設定 .....	20
コンテンツタイプの選択 .....	21
OMi管理パック/OM SPIの選択 .....	21
コンテンツパックのデプロイメント .....	21
データソースの設定 .....	21
第4章: ダッシュボード .....	22
タスクペイン .....	23
ライセンスの詳細 .....	23
ユーザー .....	23
ログアウト .....	23
オンラインヘルプ .....	23
表示ペイン .....	24
第5章: データソースの選択 .....	27
データソース設定の管理 .....	27
第6章: コンテンツパックの管理 .....	30
コンテンツパックの管理 .....	30
第7章: トポロジソースおよびデータ収集の管理 .....	32
エンタープライズトポロジの管理 .....	36
OMデータ収集の管理 .....	37

SiteScopeデータ収集の管理	38
汎用データベースからの収集の管理	39
VMware vCenterデータ収集の管理	40
Operations Agentデータソースのデータ収集の管理	41
管理データベース、プロファイルデータベース、Operationsデータベースのデータ収集の管理	42
第8章: 追加の設定	44
Verticaデータベースの管理	45
管理データベースの管理	45
コレクターの設定	45
データプロセスの管理	45
セキュリティの管理	46
時間シフトの管理	48
データエージングの管理	49
ライセンスの管理	50
ユーザーアカウントの管理	51
保留中の設定の管理	52
第9章: OBRの監視	53
OBRのコンテンツの監視	54
データ収集ステータスの監視	54
データプロセスの監視	55
ジョブストリームのステータスについて	56
シナリオ1	56
シナリオ2	57
シナリオ3	57
シナリオ4	58
OBR PostgreSQL管理データベースのバックアップおよび復元	58
アプリケーションプラットフォームの監視	59
第10章: ヘルプ	60
オンラインヘルプ	60
OBRのバージョン情報	61
第III部 管理コンソール画面	62
第11章: 設定ウィザード	63
第12章: データソースの選択ウィザード	67
第13章: ダッシュボード	71

ホームページの使用 .....	72
OBRのステータスの表示 .....	72
オーケストレーションアラートの詳細の表示 .....	74
第 14 章: データソースの選択 ウィザード .....	76
OMデプロイメントシナリオ .....	78
BSM/OMiデプロイメントシナリオ .....	79
VMware vCenterのみのデプロイメントシナリオ .....	80
その他のデプロイメントシナリオ .....	81
第 15 章: コンテンツパックのデプロイメント .....	83
コンテンツパックのデプロイメント .....	84
コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴 .....	85
コンテンツパックのインストール .....	97
コンテンツパックのアップグレード .....	98
インストール済みコンテンツパックのアンインストール .....	98
第 16 章: トポロジーソース .....	100
トポロジーソース .....	100
接続パラメーター: RTSM .....	101
接続パラメーター: OM .....	102
接続パラメーター: VMware vCenter .....	103
トポロジーソース接続の作成 .....	103
トポロジーソース接続の変更 .....	107
トポロジーソースデータ収集の有効化または無効化 .....	111
トポロジーソース収集のスケジュール設定 .....	111
トポロジーソース接続のテスト .....	112
トポロジーソース接続のステータスの表示 .....	113
トポロジーソースデータ収集ステータスの表示 .....	113
第 17 章: Operation Manager .....	115
接続パラメーター .....	116
OMデータソース接続の作成 .....	118
OMデータソース接続の変更 .....	120
OMデータ収集の有効化または無効化 .....	123
OMデータ収集のスケジュール設定 .....	123
OMデータソース接続のテスト .....	123
OMデータソース接続のステータスの表示 .....	124
OMデータ収集ステータスの表示 .....	124

OMデータソース接続の削除 .....	124
第 18章: SiteScope .....	125
接続パラメーター .....	126
SiteScopeのデータソース接続の作成 .....	127
SiteScopeのデータソース接続の変更 .....	129
SiteScopeデータ収集の有効化または無効化 .....	131
SiteScopeデータソース接続のテスト .....	131
SiteScopeデータソース接続のステータスの表示 .....	132
SiteScopeデータ収集ステータスの表示 .....	132
SiteScopeデータソース接続の削除 .....	132
第 19章: 汎用データベース .....	133
接続パラメーター .....	134
汎用データベース接続の作成 .....	135
汎用データベース接続の変更 .....	137
汎用データベースのデータ収集の有効化または無効化 .....	138
汎用データベースのデータ収集のスケジュール設定 .....	138
汎用データベース接続のテスト .....	139
汎用データベースの接続ステータスの表示 .....	139
汎用データベースの収集ステータスの表示 .....	139
汎用データベース接続の削除 .....	140
第 20章: VMware vCenter .....	141
接続パラメーター .....	142
VMware vCenterデータソース接続の作成 .....	142
VMware vCenterデータソース接続の変更 .....	143
VMware vCenterのデータ収集の有効化または無効化 .....	143
VMware vCenterデータ収集のスケジュール設定 .....	144
VMware vCenterデータソース接続のテスト .....	144
VMware vCenterデータソース接続のステータスの表示 .....	144
第 21章: Operations Agent (OA) .....	145
Operations Agentデータソースの詳細の表示 .....	147
Operations Agentデータソースのデータ収集の有効化または無効化 .....	149
Operations Agentデータソースのデータ同期のスケジュール設定 .....	150
ノードのブラックリスト .....	151
Operations Agentデータソース接続のテスト .....	151
データ収集のためのビュー/ノードグループベースのルールの割り当て .....	152

データ収集のためのパターンベースのルールの割り当て .....	152
第22章: BSM/APM/OMi .....	154
管理データベース .....	155
管理データベース: 新規作成: 接続パラメーター .....	156
プロファイルデータベース .....	158
プロファイルデータベース: 新規作成: 接続パラメーター .....	159
OMi .....	162
OMi: 新規作成: 接続パラメーター .....	163
管理データベース、プロファイルデータベース、Operationsデータベースの新規接続の作成 .....	165
新規管理データベースの作成 .....	165
新規プロファイルデータベースの作成 .....	170
新規Operationsデータベースの作成 .....	173
管理データベース、プロファイル、およびOperationsデータベースの新規接続の変更 .....	176
プロファイルデータベースのデータ収集の有効化または無効化 .....	179
プロファイルデータベースの同期のスケジュール設定 .....	179
管理データベース接続およびプロファイルデータベース接続のテスト .....	179
管理データベースおよびプロファイルデータベースの接続ステータスの表示 .....	180
管理データベースおよびプロファイルデータベースの収集ステータスの表示 .....	180
管理データベース接続の削除 .....	181
OMiデータソース接続の作成 .....	182
OMiデータソース接続の変更 .....	183
OMiデータ収集の有効化または無効化 .....	184
OMiデータ収集のスケジュール設定 .....	185
OMiデータソース接続のテスト .....	185
OMiデータソース接続のステータスの表示 .....	185
OMiデータ収集ステータスの表示 .....	185
OMiデータソース接続の削除 .....	186
第23章: Verticaデータベース & タイムゾーン .....	187
Verticaデータベースとタイムゾーン設定の表示 .....	188
OBRデータベースパスワードの変更 .....	188
VerticaでのTLSの有効化 .....	189
VerticaでのTLSの無効化 .....	190
第24章: 管理データベース .....	191

管理データベースの設定の表示	192
OBR管理データベースパスワードの変更	192
第25章: コレクター	193
リモートシステムにインストールされているコレクターの設定	194
リモートシステムにインストールされているコレクターの無効化	195
リモートシステムにインストールされているコレクターのテスト	195
第26章: データ処理	197
ストリームの詳細	197
ストリームリソースコントロール	197
最大再試行回数および最大実行時間の設定	198
ストリームリソースの詳細の設定	199
第27章: セキュリティ	201
LW-SSO認証の設定	202
SAP BusinessObjects Trusted Authenticationの設定	203
ログオンバナーの設定	203
第28章: シフト	206
シフト管理	206
シフトの新規作成	206
シフトの編集	207
シフト情報の表示	207
新しい時間シフトの作成	208
時間シフトの変更	208
時間シフトの満了	209
第29章: エージング	210
エージング	210
保持の設定	210
アクティブ保持期間の設定	211
第30章: ライセンス取得	212
ライセンス情報の表示	213
永久的なライセンスキーの取得	213
永久的なライセンスキーのインストール	214
SAP BOBJライセンスの再アクティブ化とSAP BOBJサーバーの再有効化	215
第31章: レポートプラットフォーム	218
SAP BusinessObjects中央管理コンソールへのアクセス	218
SAP BusinessObjects BI起動パッドへのアクセス	219



管理者アカウントのパスワードの作成	220
BusinessObjectsのサービスのトラブルシューティング	220
第32章: 保留中の設定	221
第33章: プラットフォームサマリー	222
アプリケーションサーバーの詳細の表示	223
第34章: データ収集ステータス	227
データ収集ステータスの表示	228
第35章: データ処理のステータス	229
ジョブストリームの詳細の表示	231
ストリームの履歴概要の表示	232
ストリームの履歴トレンドの表示	234
第36章: コンテンツヘルスのステータス	235
ファクトテーブルコンテンツパックコンポーネント名: <コンテンツパックコンポーネント名>	236
インストールされたコンテンツパックコンポーネントの表示	237
ファクトテーブルの詳細の表示	238
第37章: オンラインヘルプ	240
OBRのバージョン情報	240
	241
第IV部 付録	242
その他の管理の詳細	247
カスタムグループの設定	248
カスタムグループの作成	249
ディメンションの管理	252
非アクティブのディメンションの管理	253
非アクティブのディメンションの一覧表示	253
非アクティブのディメンションの削除	253
重複ディメンションの管理	254
重複ディメンションの一覧表示	254
重複ディメンションの削除	255
ビジネスキーの使用によるディメンションの管理	256
自然キーの使用によるディメンションの管理	257
データソース内の非アクティブまたは重複ディメンションの管理	258
データソース内の非アクティブディメンションの一覧表示	258
データソース内の重複ディメンションの一覧表示	258

レポートでのダウンタイムの設定 .....	260
ダウンタイムXMLファイルの作成 .....	261
1回実行するダウンタイムのスケジュールの構文 .....	262
毎週実行するダウンタイムのスケジュールの構文 .....	265
毎月実行するダウンタイムのスケジュールの構文 .....	268
過去のダウンタイムの設定 .....	272
レポートでのカスタマーの設定 .....	274
カスタマーXMLの作成 .....	274
カスタマーXMLの例 .....	277
レポートでの場所の設定 .....	279
場所XMLの作成 .....	279
場所のXMLの例 .....	282
OBRのレポート .....	283
Operations Smart Plug-in用のデータソースとの統合 .....	285
統合の作業 .....	285
Operations SPIデータからOBRレポートを生成するための前提条件 .....	286
Operations Manager i管理パック用のデータソースとの統合 .....	287
統合の作業 .....	287
Operations Manager i管理パックデータからOBRレポートを生成するための前提条件 .....	289
OBRを監視するためのOMLポリシー .....	290
前提条件 .....	290
OMLによって監視されるOBRサービス .....	291
OBRのOMLポリシーテンプレートのインポートおよびデプロイ .....	293
OMLシステムへのポリシーテンプレートのインポート .....	293
ポリシーテンプレートのデプロイ .....	293
OBRを監視するためのOMiポリシー .....	303
前提条件 .....	303
OMiによって監視されるOBRサービス .....	305
OBRのOMiポリシー .....	306
測定しきい値ポリシー .....	306
サービス/プロセスモニタリングポリシー .....	307
ポリシーのインポートおよびデプロイ .....	307
OMiシステムへのポリシーのインポート .....	307
Linuxポリシーテンプレートのデプロイ .....	311

Windowsポリシーテンプレートのデプロイ .....	313
OBRログファイルインベントリ .....	316
OBRサービスログファイル .....	326
ログファイルのメッセージ形式 .....	327
デフォルトパスワードの変更 .....	328
管理コンソールのログオンパスワード .....	328
Verticaデータベースのパスワード .....	329
管理データベースのパスワード .....	330
SAP BusinessObjectsデータベースのパスワード .....	331
ドキュメントに関するフィードバックの送信 .....	336

# 第1部: はじめに

Operations Bridge Reporter (OBR) は、クロスドメインの履歴ITインフラストラクチャーパフォーマンスレポートソフトウェアです。サーバー、ネットワークおよびアプリケーション環境全体のソース、イベント、応答時間に関するトップダウンおよびボトムアップレポートを表示します。リソースのメトリック、イベントのメトリック、応答時間データおよびビジネスサービストポロジデータを統合し、基盤となるインフラストラクチャーの稼働状態、パフォーマンス、および可用性が、既存のITインフラストラクチャーと動的なITインフラストラクチャーのパフォーマンスにどのように影響するかを示します。

OBRの機能やアーキテクチャの詳細については、『Operations Bridge Reporterコンセプトガイド』を参照してください。

OBRは、アプリケーションの設定と監視に役立つ広範囲に及ぶ管理機能を提供します。OBRのWebベースのユーザーインターフェイス (UI) である管理コンソールを使用して、これらの管理作業を実行することができます。

このガイドでは、管理コンソールの概要を説明し、管理コンソールを使用して実行する必要がある作業手順のガイドを提供します。

# 第1章: 管理者の役割

管理者は、OBRソフトウェアのインストール後に次の作業を実行する必要があります。以下に、優先度の高い必要な作業の一覧を示します。

- **設定作業:**これらの作業は、OBRをインストールした直後に実行します。これらの作業は、OBRが稼働し、要件に応じてデータ収集操作が実行されることを確認するために行う必要があります。次のような設定作業があります。
  - さまざまなインストール後の設定作業を実行する。
  - 必要なコンテンツパックを選択してインストールする。<sup>1</sup>。
  - データソースを設定し、データ収集のためにトポロジ情報を<sup>2</sup> OBRに提供する。
  - コンテンツパック内に定義された収集ポリシーを基にしてファクトデータを収集するためのさまざまなデータコレクターを設定する。
- **監視作業:**これらの作業は、OBRのパフォーマンスを監視し、アプリケーションやデータベースに関する問題を特定してトラブルシューティングを行うために役立ちます。次のような監視作業があります。
  - インストール済みの各コンテンツパックを対象としてOBRデータベースにロードされるデータを監視する。
  - データ処理の監視およびトラブルシューティングを行う。
  - OBRデータベースおよびホストプラットフォームのパフォーマンスと可用性を監視する。
  - OBRによってレポートされたエラーをトラッキングする。
  - OBR、SAP BOBJ、およびデータベースサービスを監視する。
- **管理作業:**これらの作業は、OBRのデータおよびデータベースの有効性、可用性、および正確性を常に維持するために役立ちます。次のような管理作業があります。
  - データベースのアクセスおよびセキュリティをセットアップする。
  - 製品ライセンスを管理する。
  - データプロセスの実行を制御する。
  - 各コンテンツパックのデータ保持ポリシーを定義する。

<sup>1</sup>OBRには、データ収集およびデータウェアハウスのポリシーを定義するコンテンツパックと呼ばれるビジネスインテリジェンスソリューションが用意されています(このコンテンツパックは追加の設定なしにすぐに使用できます)。コンテンツパックにはレポートを表示するために必要な情報も含まれています。

<sup>2</sup>IT環境のアプリケーション、サーバー、システムリソースなどの構成アイテム(CI)間の関係。

## 第2章: 管理コンソールへのアクセス

### 管理コンソールへのログオン

1. WebブラウザにOBRホストシステムアドレスを入力して管理コンソールにアクセスします。デフォルトのアドレスは、`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/OBRApp`です。サーバー名は、OBRをインストールしたホストシステムの名前です。さらに、このURLを使用して、他の任意のシステムからリモートで管理コンソールにアクセスすることができます。

管理コンソールにアクセスするためのWebブラウザの要件については、『Operations Bridge Reporterサポート一覧表』を参照してください。

2. 次のフィールドに入力します。

フィールド	説明
ログイン名	OBR管理者の名前。  注: 初めてアクセスするときにはデフォルトのログオン名とパスワードを使用してください。デフォルトのログオン名はadministratorです。デフォルトのユーザーであるadministratorは、すべての管理権限を持っています。
パスワード	OBR管理者のパスワード。デフォルトのパスワードは1ShrAdminです。  OBRの使用を開始する前に、デフォルトのパスワードを変更しておく必要があります。

3. **[ログイン]** をクリックします。  
管理コンソールが表示されます。

管理コンソールにadministratorとして初めてログオンした後に、デフォルトのパスワードを変更できます。次の手順を実行します。

1. 次のURLを使用して、Webブラウザで管理コンソールを起動します。

`http://<OBRサーバーのFQDN>:21411/OBRApp`

ここでの<OBRサーバーのFQDN>は、OBRのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

ログオンページが表示されます。

2. **[ユーザー名]** にユーザー名を「administrator」と入力し、**[パスワード]** にパスワードを「1ShrAdmin」と入力します。**[ログイン]** をクリックします。パスワード変更ページが表示されます。

3. パスワードを変更するには、[パスワードの変更]をクリックして次の手順を実行します。
  - a. [古いパスワード]にデフォルトのパスワードを入力します。
  - b. [新しいパスワード]に新しいパスワードを入力します。

**注:** 新しいパスワードは、6文字以上の大文字と小文字を含む英字と数字を指定する必要があります。

- c. [パスワードの確認]に新しいパスワードを再入力します。[パスワードの変更]をクリックします。

数秒後、Webブラウザが閉じます。administratorユーザーの新しいパスワードを入力するには、管理コンソールにログオンします。

**ヒント:** 中央管理コンソール(CMC)でパスワードポリシーを更新できます。次の手順を実行します。

- a. 新しいパスワードを使用して管理コンソールにログオンします。
- b. [その他の設定] > [レポートプラットフォーム]に移動します。
- c. [CMCの起動]をクリックします。中央管理コンソールのログオンページが表示されます。中央管理コンソール(CMC)にログオンします。または

次のURLからCMCにログオンすることもできます。http://<システムのFQDN>:8080/CMC

<システムのFQDN>は、SAP BusinessObjectsのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

パスワードポリシー設定の更新手順については、中央管理コンソールのヘルプを参照してください。

## 管理コンソールからのログアウト

不正なアクセスを防ぐために、使用後は管理コンソールからログアウトしてください。

管理コンソールで[ログアウト]をクリックして、管理コンソールからログアウトします。[ログアウトに成功しました]というメッセージが表示されます。

## 第II部はじめに

OBRアプリケーションをインストールした後に、次の設定作業を実行して、OBRが確実に動作してさまざまなデータソースからのデータの収集を開始できるようにする必要があります。これらの作業により、OBRデータベースのユーザーアカウントの詳細を設定し、データベーススキーマを定義することができます。

OBRデータベースの設定、管理データベースの作成と設定、およびコレクターの設定を順番に実行して、インストール後のタスクを実行します。

設定ウィザード

データベースとタイムゾーンの設定完了後すぐにトポロジとデータソースを設定できるガイド付きの設定ウィザードです。

データソースの  
選択ウィザード

HPE OBR、その関連サービス、データベース、およびホストプラットフォームの全体的なステータスを表示します。

ダッシュボード

初期設定作業を完了すると、管理コンソールの次のモジュールで続行できます。

デプロイメントシナリオに基づいて必要なデータソースを選択できる、ガイド付きの設定ウィザードです。

データソースの  
選択ウィザード

インストールされているさまざまなコンテンツパックコンポーネントのファクトデータの収集に使用される、OBRデータコレクターのトポロジとデータソースを設定します。

データソースの設定

トポロジソースに基づいてコンテンツパックのインストールとアンインストールを実行できる使いやすい統合インターフェイスです。

コンテンツパックの  
デプロイメント

OBRのアクセシビリティ、ユーザビリティ、操作性を向上する追加の管理タスクを実行します。

追加の設定

ステータス、データプロセス、OBRデータベースおよびアプリケーションサービスプラットフォームの監視を実行します。

内部監視

HPE OBR管理コンソールに関する詳細情報を参照できます。

ヘルプ



## 第2章: 設定ウィザード

設定ウィザードで、必須のOBRインストール後の設定タスクを実行します。このウィザードに従って、OBRデータベースの設定、データベースの作成、および管理データベースを設定するための手順を順番に実行できます。

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。

### 設定ウィザード

#### タイムゾーンの選択

#### Verticaデータベースの作成

#### 管理データベースの作成

#### コレクターの設定

設定ウィザードは、OBR管理コンソールを初めて起動すると表示されます。管理コンソールは、OBRのインストール後の設定タスクを正常に完了した後でなければアクセスできません。

設定ウィザードを使用して、次のような設定タスクを実行できます。

- OBRのタイムゾーンを設定する。
- OBRのデータベースを作成し、データベースにアクセスするための管理者ユーザーアカウントを設定する。
- 管理データベースのユーザーアカウントを管理する。管理データベースは、OBRによりデータ処理<sup>1</sup>ストリームステータス、変更されたテーブルステータス、およびノード情報などの実行時データを保存するために使用されるリポジトリです。
- データ収集のためのコレクターを設定する。

これらのタスクの詳細な実行手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

## タイムゾーンの選択

[タイムゾーンの選択] ページで、OBRを動作させるタイムゾーンとして [GMT] または [ローカル] を選択します。

**注:** ここで選択したタイムゾーンがOBRシステムとレポートに適用されます。ただし、収集やワークフローストリームなどのプロセスの実行時情報は、この選択に関係なく常にローカル時間に基づきます。

詳細については、「[設定ウィザード](#)」を参照してください。

<sup>1</sup>データ処理とは、データ保存のコンテキスト内のベストプラクティスのセットを意味します。これらは、データストアへのデータのロードの品質と管理精度を向上させるためにHPEによって開発されています。

# Verticaデータベースの作成

[Verticaデータベースの作成] ページでは、Verticaのデータベースを作成し、データベースにアクセスするための管理者ユーザーアカウントを設定できます。

詳細については、「[設定ウィザード](#)」を参照してください。

# 管理データベースの作成

OBR管理データベース (PostgreSQL) とは、ジョブストリームのステータス、変更されたテーブルのステータス、ノード情報などの実行時データを保存するために、OBRによって使用されるオンラインランザクション処理 (OLTP) ストアを意味します。[管理データベースの作成] ページで、管理データベースにアクセスするための管理者アカウントおよびユーザーアカウントのパスワードを変更することができます。

詳細については、「[設定ウィザード](#)」を参照してください。

# コレクターの設定

OBRでは、データ収集の一環として、Operations Manager i (OMi)、Business Service Managementプロファイルデータベース、NNMi、Operations Agentなどの各種製品の中央リポジトリからドメイン固有のデータが収集されます。収集されたデータはOBRデータベースに保存されてから、長期のクロスドメインパフォーマンス分析およびレポート作成に使用されます。

[収集設定] ページを使用して、リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターを作成して設定できます。

詳細については、「[設定ウィザード](#)」および「[コレクター](#)」を参照してください。

## 第3章: インストール後のデータソースの選択

インストール後のデータソースの選択ウィザードは、OBRのインストール後の設定タスクを実行するためのWebベースのユーザーインターフェイス(UI)です。このウィザードを使って、データソースの設定、トポロジソースの選択、コンテンツタイプの選択手順を順番に実行できます。データソースに基づいて、データソースの選択ウィザードを使用してOMi管理パックまたはOM SPIを選択できます。

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。

### データソースの選択ウィザード

データソースの選択

トポロジソースの設定

コンテンツタイプの選択

OMi管理パック/OM SPIの選択

コンテンツパックのデプロイメント

データソース設定

インストール後のデータソースの選択ウィザードは、OBRのインストール後の設定タスクを正常に完了した後に表示されます。

インストール後のデータソースの選択ウィザードを使用して、次のような設定タスクを実行できます。

- デプロイメントシナリオに基づいてデータソースを選択する。
- データ収集のためのトポロジソースを設定する。
- データ収集のためのデータソースを設定する。
- OMi管理パックまたはOM SPIを選択する。
- コンテンツパックをインストールする。

これらのタスクの詳細な実行手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

## データソースの選択

[データソースの選択] ページでは、デプロイメントシナリオに基づいて収集されるデータのデータソースを選択します。

次の表に、各デプロイメントシナリオに適用されるデータソースを示します。

デプロイメントシナリオ	データソースのタイプ
OM	<ul style="list-style-type: none"> <li>Operations Manager (OM)</li> <li>Operations Agent</li> <li>VMware vCenter (オプション)</li> <li>Network Node Manager i (NNMi) (オプション)</li> </ul>
BSM/OMi	<ul style="list-style-type: none"> <li>Business Service Manager (BSM)</li> <li>Operations Manager i (OMi) 10.x</li> </ul> <p><b>ヒント:</b> 環境にBSMのみがデプロイされている場合は、<b>[Business Service Manager (BSM)]</b> を選択します。環境にOMi 10.xのみがデプロイされている場合は、<b>[Operations Manager i (OMi) 10.x]</b> を選択します。環境にBSMとOMi 10.xの両方がデプロイされていて、BSMシステムとOMi 10システムが統合されている場合は、<b>[Business Service Manager (BSM)]</b> と <b>[Operations Manager i (OMi) 10.x]</b> の両方を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>SiteScope (オプション)</li> <li>Operations Agent (オプション)</li> <li>VMware vCenter (オプション)</li> </ul>
VMware vCenter	<ul style="list-style-type: none"> <li>VMware vCenter</li> <li>Network Node Manager i (NNMi) (オプション)</li> </ul>
Other	Network Node Manager i (NNMi)

**注:** このページにはカスタマイズされたコンテンツは含まれません。

詳細については、「[データソースの選択ウィザード](#)」を参照してください。

## トポロジソースの設定

[トポロジソースの設定] ページではトポロジソースを設定することができます。

詳細については、「[データソースの選択ウィザード](#)」および「[トポロジソース](#)」を参照してください。

## コンテンツタイプの選択

[コンテンツタイプの選択] ページで、選択されているデータソースに応じて表示されるコンテンツタイプを選択します。

詳細については、「[データソースの選択 ウィザード](#)」を参照してください。

## OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] ページで、選択したデータソースに合わせて表示されるOMi管理パック/OM SPIを選択します。

詳細については、「[データソースの選択 ウィザード](#)」を参照してください。

## コンテンツパックのデプロイメント

このページには、選択したデータソースに応じてインストール可能なコンテンツパックの一覧が表示されます。

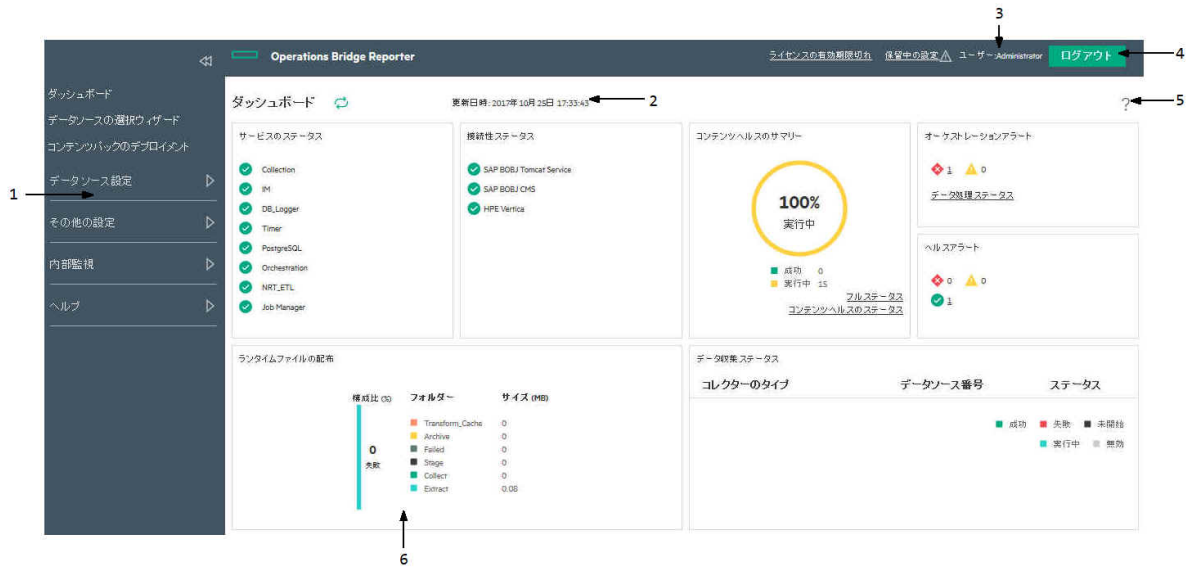
詳細については、「[データソースの選択 ウィザード](#)」および「[コンテンツパックのデプロイメント](#)」を参照してください。

## データソースの設定

データソースの選択 ウィザードで選択されたデータソースは左側のタブに表示されます。このページを使用してデータソースを設定できます。

詳細については、「[データソースの設定](#)」を参照してください。

# 第4章: ダッシュボード



凡例の説明:

1	タスクペイン
2	更新
3	ユーザー
4	ログアウト
5	ヘルプ
6	表示ペイン

# タスクペイン

OBRの収集設定、管理、および監視オプション:

- ダッシュボード
- データソースの選択ウィザード
- コンテンツパックのデプロイメント
- データソースの設定
- 追加の設定
- 内部監視
- ヘルプ

# ライセンスの詳細

OBRライセンス情報の概要。

# ユーザー

現在のOBRユーザーの名前。

# ログアウト










クリックして管理コンソールからログアウトします。

# オンラインヘルプ




このページを使用して、『管理者オンラインヘルプ』を表示します。





# 表示ペイン

管理、設定、および監視のオプションと属性を表示します。

グループ	フィールド	説明
ステータスサマリー	サービスのステータス	<p>OBRデータベースおよびSAP BOBJ Enterpriseサービスのステータスを表示します。</p> <p>サービスのステータスは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、すべてのサービスが正常に実行されていることを示します。</li> <li> は、1つまたはすべてのサービスが実行されていないことを示します。</li> </ul> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、 をクリックします。</p>
	接続性ステータス	<p>次のコンポーネントへのOBR接続のステータスを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>Tomcatサービス (SAP BOBJ Tomcatサービス)</li> <li>SAP BusinessObjects 中央管理サービス (SAP BOBJ CMS)</li> <li>HPE Vertica (Verticaデータベースサービス)</li> </ul>
	ランタイムファイルの配布	<p>ファイルサイズに従って次のフォルダーにOBRファイルシステムのデータの分布を示します。</p> <p><b>フォルダー</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li> Transform_Cache</li> <li> Archive</li> <li> Failed</li> <li> Stage</li> <li> Collect</li> <li> Extract</li> </ul> <p>データソースから収集されたデータが適切なVerticaデータベーステーブルにロードされる前に、データはOBRシステムに保持され、処理されます。また、データ処理ストリームを渡すことに失敗したデータ (\stage\failed_to_* フォルダー) は、OBRファイルシステムにも保存されます。ランタイムファイルの配布によって、これらのファイルにより使用されるディスク容量が示されま</p>

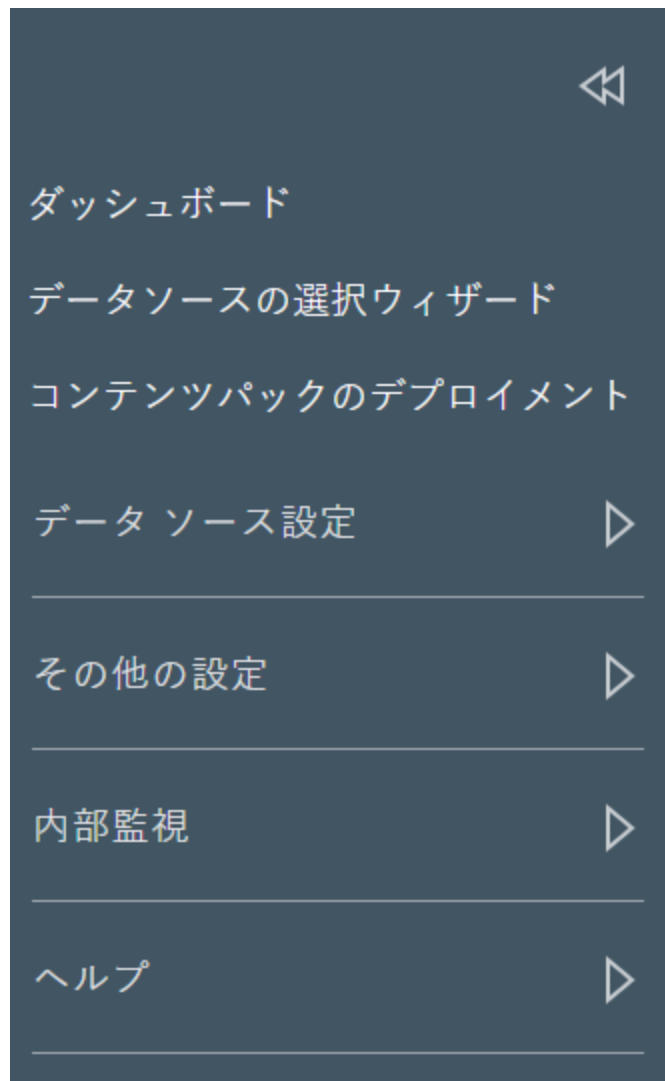


グループ	フィールド	説明
	データ収集ステータス	<p>す。</p> <p>各データコレクター用に構成されたデータソースの数が表示されます。ステータスは次のように表されます。</p> <p style="text-align: center;"> <span style="color: green;">■</span> 成功    <span style="color: red;">■</span> 失敗    <span style="color: black;">■</span> 未開始  <span style="color: cyan;">■</span> 実行中    <span style="color: gray;">■</span> 無効         </p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>成功</b>: データソースからのデータ収集が問題なく発生した場合。</li> <li>● <b>失敗</b>: データソースからのデータ収集が失敗した場合。</li> <li>● <b>未開始</b>: データソースからのデータ収集が未発生の場合。</li> <li>● <b>実行中</b>: データソースからのデータ収集が実行中の場合。</li> <li>● <b>無効</b>: データソースからのデータ収集が無効の場合。</li> </ul> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、 をクリックします。</p>
	コンテンツヘルスのサマリー	<p>データソースからインストール済みのコンテンツパックのディメンションに関連付けられたファクトテーブルへのデータフローの稼働状態をグラフで表示します。ステータスは次のように表されます。</p> <p style="text-align: center;"> <span style="color: green;">■</span> 成功    1  <span style="color: orange;">■</span> 実行中    15         </p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● <b>成功</b>: データフローが問題なく発生した場合。</li> <li>● <b>実行中</b>: データフローが実行中の場合。</li> </ul> <p>隣接するリンク <b>[フルステータス]</b> をクリックしてグラフによる詳細を表示するか、<b>[コンテンツヘルスのステータス]</b> をクリックして <b>[コンテンツヘルスのステータス]</b> ページに移動します。</p> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、 をクリックします。</p>
アラート	オーケストレーションアラート	<p>完了に失敗したか、警告メッセージとともに完了したデータ処理ジョブストリームの数を表示します。詳細については、「<a href="#">オーケストレーションアラートの詳細の表示</a>」を参照してください。次のようなアイコンが、アラートのタイプを識別するのに使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>●  は、エラーアラートを示します。隣接するリンクをクリックして詳細を表示します。</li> </ul>

グループ	フィールド	説明
	ヘルスアラート	<p>このテーブルは、OBRで生成されたすべてのエラー、警告および情報アラートの重要度、メッセージ、および日付を表示します。次のようなアイコンが、アラートのタイプを識別するのに使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>•  は、警告アラートを示します。隣接するリンクをクリックして詳細を表示します。</li> <li>•  は、情報アラートを示します。このタイプのアラートの場合、アクションは必要ありません。</li> <li>•  は、エラーアラートを示します。これは重大な危険を示すアラートなので、すぐにアクションをとって問題を解決する必要があります。</li> <li>•  は、警告アラートを示します。正しく機能するためには、このタイプのアラートの解決が必要なことがあります。ただし、すぐにアクションをとる必要はない場合もあります。</li> </ul>

## 第5章: データソースの選択

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。



これは、デプロイメントシナリオに基づいてデータソースを選択するときに役立つ、ガイド付き設定ページです。

データソースの選択ウィザードを使用して、次のような設定タスクを実行できます。

- データ収集のためのデータソースを設定する。
- データソースのコンテンツタイプを選択する。
- OMi管理パックまたはOM SPIを選択する。

このウィザードを使用して、インストール後の作業中に選択されていないデータソース、コンテンツタイプおよびOMi管理パックまたはOM SPIを選択できます。また、選択した内容をこのページで表示または変更することもできます。

これらのタスクの詳細な実行手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

## データソース設定の管理

このウィザードを使用して、インストール後に実行または完了されていないデータソースとコンテンツタイプを設定します。このウィザードを使用して、インストール後に選択されたデータソース、コンテンツタイプおよび

OMi管理パック/OM SPIを表示することもできます。

次の表に、各デプロイメントシナリオで報告できる領域を示します。

デプロイメントシナリオ	監視の領域
<b>OM</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• System Performance                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Operations Agent</li> </ul> </li> <li>• Virtual Environment Performance                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Operations Agent</li> <li>◦ VMware vCenter</li> </ul> </li> <li>• Network Performance</li> <li>• Operations Events                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ OMiイベント</li> </ul> </li> <li>• エンタープライズアプリケーションパフォーマンス                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Microsoft SQL Server</li> <li>◦ Microsoft Exchange Server</li> <li>◦ Microsoft Active Directory</li> <li>◦ Oracle</li> <li>◦ Oracle WebLogic Server</li> <li>◦ IBM WebSphere Application Server</li> </ul> </li> </ul>
<b>BSM/OMi</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• System Performance                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Operations Agent</li> <li>◦ SiteScope</li> </ul> </li> <li>• Virtual Environment Performance                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Operations Agent</li> <li>◦ SiteScope</li> <li>◦ VMware vCenter</li> </ul> </li> <li>• Network Performance</li> <li>• 操作イベントおよびKPI                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ OMiイベント</li> <li>◦ OMiイベント</li> <li>◦ サービスヘルス</li> </ul> </li> <li>• End User Monitoring                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Real User Monitor</li> <li>◦ Business Process Monitor</li> </ul> </li> <li>• エンタープライズアプリケーションパフォーマンス                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ Microsoft SQL Server</li> <li>◦ Microsoft Exchange Server</li> <li>◦ Microsoft Active Directory</li> </ul> </li> </ul>

デプロイメントシナリオ	監視の領域
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ Oracle</li> <li>○ Oracle WebLogic Server</li> <li>○ IBM WebSphere Application Server</li> </ul>
<b>VMware vCenterのみ</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Virtual Environment Performance</li> <li>● Network Performance</li> </ul>
<b>その他</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● Network Performance</li> </ul>

詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

### データソースの選択

[データソースの選択] ページでは、収集されるデータのデータソースを選択します。

注：このページにはカスタマイズされたコンテンツは含まれません。

### コンテンツタイプの選択

[コンテンツタイプの選択] ページで、選択されているデータソースに応じて表示されるコンテンツタイプを選択します。

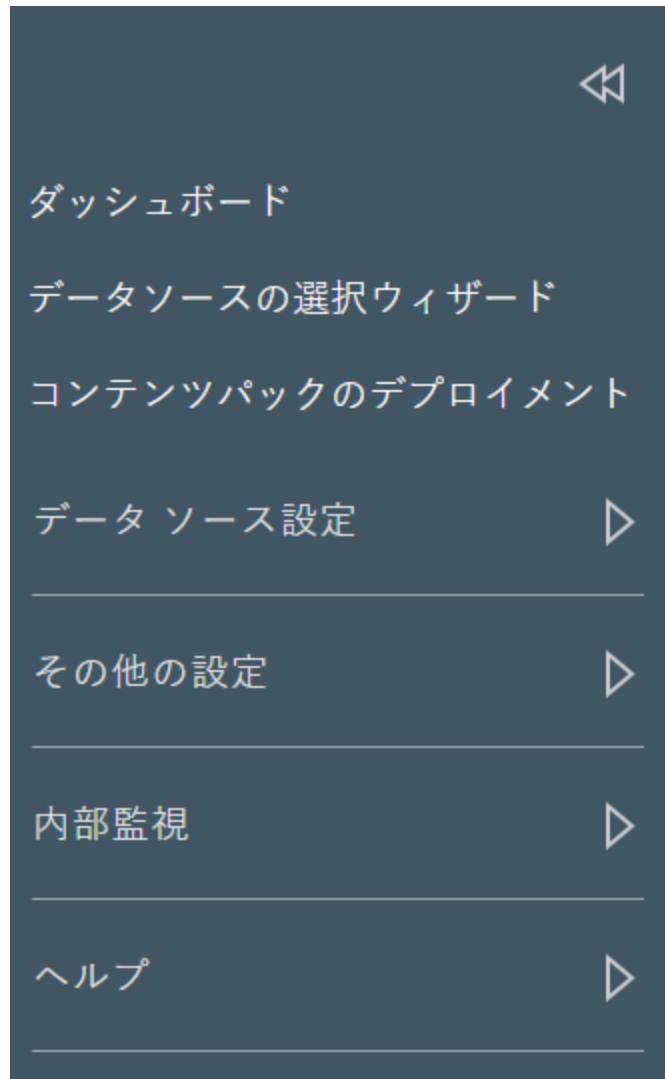
### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

詳細については、「[データソースの選択ウィザード](#)」を参照してください。

## 第6章: コンテンツパックの管理

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。



[コンテンツパックのデプロイメント] ページは、インストール後の設定段階中に定義したトポロジソースに基づいてコンテンツパックをフィルター処理することにより、これらのコンテンツパックの選択を簡略化します。フィルター処理されたリストからは、インストールするコンテンツパックまたは特定のコンテンツパックコンポーネントを選択できます。

### コンテンツパックの管理

OBRにより、[コンテンツパックのデプロイメント] ページ (管理コンソールの一部であるWebベースのインターフェイス) を併用してコンテンツパックをインストールして管理できます。

[コンテンツパックのデプロイメント] ページには、次のような利点があります。

- コンテンツパック全体の場合でも個々のコンポーネントの場合でも、コンテンツパックをインストールする方法をより制御する。
- 各コンテンツパックに対してデータソースの依存関係を表示する。
- カスタムコンテンツパックおよびカスタムコンテンツパックコンポーネントのインストールをサポートする。
- コンテンツパックをインストールおよびアンインストールするために提供されるインターフェイスは単一で使いやすい。

詳細については、「[コンテンツパックのデプロイメント](#)」を参照してください。

## 第7章: トポロジソースおよびデータ収集の管理

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。



### エンタープライズトポロジソース

OBRで、アプリケーション、データベース、システムリソースに関連するファクトデータなどのドメイン固有のデータをノードまたは構成アイテム (CI) から収集する処理を開始する前に、管理対象の環境、ビジネスサービス、および基盤となるITコンポーネントのトポロジ情報<sup>1</sup>を最初に識別して収集する必要があります。OBRは、この情報を使用して、収集したファクトデータを整理および調整し、長期間の保存、分析、クロスドメインレポートに使用することができます。

エンタープライズトポロジには、アプリケーション、サーバー、データベース、システムリソースなどのITコンポーネントが含まれます。これらは、ランタイムサービスモデル (RTSM) やOMなどのHPEのビジネスサービス指向製品によって監視されます。これらの監視対象のコンポーネントは、構成アイテム (CI) と呼ばれます。エンタープライズトポロジを識別すると、各ビジネスサービスが、基盤となるCIにどのようにリンクされているかを理解するために役立ちます。これにより、ビジネスサービスのITインフラストラクチャに対する依存関係のマッピングが提供されます。このマッピングは設定変更をトラッキングするために役立ちます。

OBRは、次のデータソースからのトポロジ関連データの収集をサポートしています。

- RTSM: 設定情報の中央リポジトリであり、検出<sup>1</sup>プロセスによってデータコレクターを介して収集および更新されたトポロジお

<sup>1</sup>IT環境内のアプリケーション、サーバー、データベース、システムリソースなどの構成アイテム (CI) 間の関係。

<sup>1</sup>ITインフラストラクチャーリソースおよびそれらの依存関係を検出することによってシステムに関するデータを収集できるようにするメカニズム。検出では、アプリケーション、データベース、ネットワークデバイス、さまざまなタイプのサーバーなどのリソースを検出できます。検出された各ITリソースは、RTSMに保存され、そこで管理対象のCIとして表現されます。



	<p>よび構成を保存して処理できます。検出されたCIおよびそれらの関係に関する情報は、ビジネス機能の基盤となっているIT環境を構成するすべてのコンポーネントのトポロジモデルを生成するために使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• OM: システム管理者が、エンタープライズ内のネットワーク、システム、およびアプリケーションで発生する問題を検出、解決、または防止するために役立つように設計された分散型クライアント/サーバーソフトウェアソリューション。OMIによって収集されるデータを使用することで、ITシステムのパフォーマンスを最大限に高め、ダウンタイムを減らし、オペレーターに作業を委任し、さらにコストを削減できます。OMIはすべての管理対象ノード<sup>1</sup>で起こる数千のイベント<sup>1</sup>を監視し、必要なときに必要な情報だけを表示します。OMIは、サービスナビゲーター (SN) というコンポーネントを使用して、管理対象ノードのトポロジサービスツリーを作成し、環境内のノードとアプリケーションの間の関係を構築します。</li> <li>• VMware vCenter: 分散型サーバー/クライアントソフトウェアソリューションです。パフォーマンスとイベントを一元的に監視し、仮想環境の視認性のレベルを拡張します。このようにして、IT管理者が環境を制御するのに役立ちます。</li> </ul> <p>これらのデータソースからのトポロジデータの収集は、OBRをデプロイするシナリオのタイプによって決まります。OBRは、現在のところ3つのタイプのデプロイメントシナリオをサポートしています。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• BSM Operations Bridge</li> <li>• Application Performance Management (APM)</li> <li>• OM</li> </ul> <p>OBRがBSM Operations BridgeまたはAPM環境内にデプロイされる場合は、RTSMからトポロジデータを収集するようにデータコレクターを</p>
--	--

<sup>1</sup>管理対象ノードとは、OMIによって制御され、監視されているコンピューターを指します。

<sup>1</sup>オブジェクトで起こるコンピューティング環境内の特定の障害またはインシデント。

設定する必要があります。OBRがOM環境内にデプロイされる場合は、OMデータベースがOBRのトポロジ情報のソースになります。

デプロイメントシナリオの詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

### データ収集

OBRでは、データ収集の一環として、Operations Manager i (OMi)、Business Service Managementプロファイルデータベース、Operations Agentなどの各種製品の中央リポジトリからドメイン固有のデータが収集されます。収集されたデータはOBRデータベースに保存されてから、長期のクロスドメインパフォーマンス分析およびレポート作成に使用されます。

OBRには、オープンで柔軟なデータ収集フレームワークが用意されており、これを使用して複数の異なる種類のデータソースからデータを収集できます。OBRは、次のようなさまざまなデータコレクターを使用して必要なデータを収集します。

- Operations Agentコレクター: システム管理コンテンツパック用のシステムパフォーマンスメトリックおよびドメイン固有アプリケーション用のアプリケーションメトリックを収集します。データは、ホストシステムにインストールされているOperations Agentによって収集されます。
- データベースコレクター: プロファイルデータベース、管理データベース、OMデータベース、OMiデータベース、Network Performance Server (NPS) などのデータソースのデータベースからイベント、メッセージ、可用性、および主要管理指標 (KPI) を収集します。データベースコレクターは、データベースシステムとしてSybase、Oracle、VerticaまたはSQL Serverを使用する汎用データベースからデータを収集することもできます。このコレクターは、データベースコレクター技術を使用してデータを収集します。

これらのデータコレクターは、OBRインフラストラ

	<p>クチャーで内部的に稼働してデータを収集します。したがって、これらのコレクターを直接操作することはできません。その代わりに、管理コンソールを通して、コレクターのデータの収集先のデータソースを指定できます。</p> <p>管理コンソールは、次の種類のデータソース接続の設定をサポートします。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• Operations Agent</li><li>• OM</li><li>• 汎用データベース</li><li>• VMware vCenter</li><li>• SiteScope</li><li>• SA/NA</li><li>• 管理データベース、プロファイルデータベース、OMi</li><li>• NNMi/NPS</li></ul> <p>コンテンツパックのデプロイメントによって、各種のデータソースから収集されるファクトデータと、データが収集される間隔が決定されます。インストールされているコンテンツパックのデータソース接続の設定は、使用するデプロイメントシナリオのタイプによって異なります。データ収集プロセス、およびデプロイメントシナリオごとにサポートされているコンテンツパックについての詳細は、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。</p> <p>各コンテンツパックの前提条件と詳細については、それぞれの『Operations Bridge Reporter Content Reference Guide』を参照してください。</p>
--	--

# エンタープライズトポロジの管理

OBRは、すぐに使用できる次のようなさまざまなデータコレクターでトポロジデータを収集します。

- RTSMコレクター: 環境内のさまざまなタイプのCIに関するトポロジ情報およびデータをRTSMデータベースから収集する。収集されるデータは、各コンテンツパックと共に提供されるRTSMビューによって定義されます。
- OMコレクター: 環境内のさまざまなタイプのCIに関するトポロジ情報およびデータをOMデータベースから収集する。OMコレクターによって収集される情報は、ノードリストおよびノードグループに制限されません。

これらのデータコレクターは、トポロジソースから必要なデータを収集します。トポロジソースはOBRで設定する必要があります。管理コンソールの[トポロジソース]ページではトポロジソース接続を作成して設定することができます。さらに、特定の間隔でデータリポジトリからデータを収集するようにOBRをスケジュール設定することができます。また、新しいデータソース接続を追加したり、既存の接続を変更したりすることもできます。

詳細については、「[トポロジソース](#)」を参照してください。

## OMデータ収集の管理

OMは、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステム、アプリケーション、およびサービスのサービス駆動イベントを提供し、それらのパフォーマンス管理を行う分散型サーバー/クライアントソフトウェアソリューションです。OMは、管理対象ノードにインストールされているエージェントを使用して、パフォーマンスとイベントを一元的に監視します。エージェントとは、データの収集、サービスの検出、イベントの監視、およびノードを制御するアクションとコマンドの実行によって、ノードを管理できるようにするデプロイメントパッケージのことです。

OBRは、イベントの統計や各イベントの重要度統計のほかに、各オペレーターによっていくつのイベントが処理されたかなどのオペレーター統計をOMデータベースから収集します。

詳細については、「[Operations Manager](#)」を参照してください。

## SiteScopeデータ収集の管理

SiteScopeページを使用して、環境内の複数のSiteScopeモニターからデータを収集する、SiteScopeデータソースを設定できます。このページを使用すると、データ収集を有効化または無効化したり、要件に応じてSiteScopeアプリケーションプログラミングインターフェイス (API) コレクターを追加または削除することができます。

詳細については、「[SiteScope](#)」を参照してください。

## 汎用データベースからの収集の管理

OBRを使用すると、任意の汎用データベースソースからのデータ収集を設定することができます。データベースシステムとしてSybase、Oracle、VerticaまたはMicrosoft SQL Serverを使用する汎用データソースに接続してデータを収集するようにOBRを設定するには、[汎用データベース] ページを使用します。

このページは通常、OBRでネットワークレポート用にNetwork Performance Server (NPS) からネットワーク関連データを収集するように設定するために使用されます。Network Performance Server (NPS) は、ネットワークインフラストラクチャの動作パフォーマンスを監視するために、Network Node Manager i Software (NNMi) とともに使用されるインフラストラクチャを提供します。異なるNNMi Software Smart Plug-in (iSPI) によってパフォーマンスデータが収集されると、NPSはデータテーブルを構築し、ユーザーの選択肢に基づいてクエリを実行し、クエリ結果をWebベースのレポートに表示します。このレポートは、ネットワーク環境における問題を診断してトラブルシューティングするのに役立ちます。NPSは、パフォーマンスデータに対する効果的な保存、アクセス、および追跡を可能にします。

OBRでは、上記のデータベースタイプを使用する汎用データソースに対する設定が最初からサポートされています。ただし、このページを使用すると、MySQL、PostgreSQL、Sybaseなどのその他のタイプの汎用データベースについても、接続してデータを収集するようにOBRを設定することができます。特定のデータベースタイプに対して、OBRがシステムデータやネットワークデータなどのデータを収集するドメインを指定できます。このようなデータソースの設定方法の詳細については、HPEサポートにお問い合わせください。

詳細については、「[汎用データベース](#)」を参照してください。

## VMware vCenterデータ収集の管理

VMware vCenterは、ビジネスに不可欠なエンタープライズシステムでの仮想インフラストラクチャーを管理するための中心となる柔軟なプラットフォームを提供する、分散型サーバー/クライアントソフトウェアソリューションです。VMware vCenterは、パフォーマンスとイベントを一元的に監視し、仮想環境に優れた可視化を提供します。これにより、IT管理者が容易に環境を制御できるようになります。

OBRは、イベントの統計や各イベントの重要度統計のほか、各オペレーターによっていくつのイベントが処理されたかなどのオペレーター統計をVMware vCenterデータベースから収集します。

**注:** VMwareの統計情報のログレベルを2に設定することをお勧めします。ログレベルが1に設定されている場合、ログレベルが2のメトリックが、一部のOBRレポートで利用できない可能性があります。ログレベルと対応するメトリックについては、このURLを参照してください。

<https://communities.vmware.com/docs/DOC-5600>

詳細については、「[VMware VCenter](#)」を参照してください。



# Operations Agentデータソースのデータ収集の管理

OBRは、Operations Agent管理対象ノードから収集した各種のファクトについてレポートします。Operations Agentは、システム全体にわたって現在および過去のリソースデータに対するアラーム条件の収集、要約、タイムスタンプ<sup>1</sup>、および検出を行います。これらのエージェントは、パフォーマンス、リソース、およびエンドツーエンドなトランザクションの応答時間を測定する手段を提供し、ネットワークおよびデータベースの測定情報をサポートします。

## Operations Agentデータソース

OBRは、Operations Agentとの統合により、システムおよびアプリケーションのパフォーマンスデータ履歴を収集します。デプロイメントシナリオに応じて、RTSMまたはOMIはエージェントがインストールされて稼働しているホストを検出します。OBRはOperations Agentデータコレクターを使用して、ホストからファクトデータを収集します。各Operations Agentホストから収集するメトリックのリストは、コンテンツパックによって識別されます。

Operations Agentの詳細については、Operations Agentのマニュアルを参照してください。

## データ収集の管理

管理コンソールの[Operations Agent設定]ページを使用して、Operations Agentのデータ収集を管理することができます。新規のエージェントデータソース接続を作成する必要はありません。これは、トポロジデータの収集段階で、Operations Agentのインストール先のすべてのノードがデフォルトでOBRによって検出されるからです。検出されたエージェントデータソースまたはノードは、[Operations Agentデータソース]ページにリストされます。

詳細については、「[Operations Agent](#)」を参照してください。

<sup>1</sup>システムでイベントが発生した時刻であるタイムスタンプを記録するプロセス。通常、タイムスタンプは、イベントログの記録に使用されます。

# 管理データベース、プロファイルデータベース、Operationsデータベースのデータ収集の管理

次のBusiness Service Managementデータリポジトリからデータを収集するようにOBRを設定できます。

- **管理データベース:** 管理データベースでは、Business Service Management環境におけるシステム全体の管理関連メタデータが保管されます。
- **プロファイルデータベース:** プロファイルデータベースでは、Business Service Managementデータコレクターから取得された未処理の集約済み測定データが保管されます。プロファイルデータベースでは、OMi、BPM、RUM、およびサービスヘルスから収集された測定値も保管されます。
- **Operationsデータベース:** Operationsデータベースには、OMi 10データソースから取得されたイベント、KPI、およびHIデータが格納されます。

OBRでは、複数のプロファイルデータベースを設定して、それらのデータベースからデータを収集することができます。Business Service Management環境内では、複数のプロファイルデータベースをセットアップすることができます。これは、スケーリングが必要になる場合 (すべてのデータを保管するには1つのデータベースでは十分ではないことが予想される) またはデータを分離する必要がある場合 (重要なデータはすべてあるプロファイルデータベースに保管して、重要でないデータはすべて別のプロファイルデータベースに保管する) に行います。環境内にデプロイされているさまざまなプロファイルデータベースに関する情報は、管理データベースに保管されます。

管理データベースおよびプロファイルデータベースの詳細については、『Business Service Managementデータベースガイド』を参照してください。

管理コンソールの [BSM/APM/OMi] ページを使用して、データソース接続を設定することができます。複数のプロファイルデータベース接続を設定するには、[BSM/APM/OMi] ページで管理データベースを設定する必要があります。管理データベースのデータソース接続が設定されると、デプロイされたプロファイルデータベースがすべてOBRによって検出され、[BSM/OMi] ページにリスト表示されます。

## OMiデータ収集の管理

OMiは、ビジネス/サービス管理とインフラストラクチャー管理を組み合わせたものです。これにより、IT環境で発生する幅広い問題を、異なってはいるが補足的な観点から同時に監視および管理できます。OMiは、環境内のCIタイプの状況インジケータ (HI) を生成し、CIタイプの詳細なステータスを知らせます。このHIは、Network Node Manager (NNM)、SiteScope、およびOMなどの、環境内の他のドメインマネージャー製品によって生成されるイベントにマッピングされます。HIは、CIタイプのKPIを計算するのに使用さ

れます。これにより、CIタイプの集約状態が表示されます。KPIは、CIタイプの高レベルな状況をオペレーターに伝え、ビジネスの状況とイベントサマリーを示します。

## OMiデータ

OBRは一定期間Business Service ManagementプロファイルデータベースからのRTSMインスタンスに対するHI値およびKPI値の履歴を収集し、レポートおよびダッシュボードを通じてこれらの値のトレンドを表示します。OBRはデータベースコレクターを使用して、プロファイルデータベースからのHI値およびKPI値の履歴を収集します。KPI名、HIディメンションの詳細、および値の詳細は、BSM管理データベースから収集されます。

OMiの詳細は、OMiのマニュアルを参照してください。

## 管理パックの前提条件

OMi10データソースからデータを収集する次のOBRコンテンツパックのレポートを表示するには、対応する管理パックがインストールされている必要があります。

- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange
- Microsoft SQL Server
- Oracle
- Oracle WebLogic
- IBM WebSphere

これらの管理パックのインストールは、サービスヘルスおよびOMiのOBRレポートを表示する場合にも必須です。

詳細については、「[BSM/APM/OMi](#)」を参照してください。

## 第8章: 追加の設定

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。



管理コンソールを使用して、OBRのアクセス性、ユーザビリティ、操作性を向上する追加の管理タスクを実行できます。

管理コンソールを使用して、次の管理タスクを実行できます。

- データベース資格情報を表示します。
- ライセンスの詳細を表示します。
- セキュアな認証を設定します。
- ワークフロージョブストリームの実行を制御します。
- ユーザーアカウントを管理します。
- データ保持期間を設定します。
- OBRサービスを管理します。
- 時間シフトを設定します。
- コンテンツパックをインストールおよび管理します。
- リモートシステムにインストールされているコレクターを設定します。
- 保留中の設定を管理します。

## Verticaデータベースの管理

Verticaデータベースとタイムゾーンでは、一元化されたOBRデータベースとOBRのタイムゾーン設定の管理が必要です。OBRデータベースには、コンテンツパックに定義されているポリシーに基づいて、さまざまなデータソースから収集されたファクトおよびトポロジ情報が保存されます。データベース設定は、OBRアプリケーションのインストール後の設定ステップの実行時に行います。

詳細については、「[Verticaデータベースとタイムゾーン](#)」を参照してください。

## 管理データベースの管理

管理データベースには、OBR管理データベースの管理が含まれます。データベース設定は、OBRアプリケーションのインストール後の設定ステップの実行時に行います。

詳細については、「[管理データベース](#)」を参照してください。

## コレクターの設定

[コレクター] ページを使用して、リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターを作成して設定できます。

詳細については、「[コレクター](#)」を参照してください。

## データプロセスの管理

管理コンソールの [データ処理] ページを使用すると、インストール済みの各コンテンツパックに対応するジョブストリームの数とステータスを表示することができます。ジョブストリームを設定し、実行中にエラーが発生したときのバッチの最大再試行回数およびステップあたりの最大実行時間を指定することもできます。ジョブステップに許可されている最大再試行回数を超えると、ワークフローフレームワークによってジョブストリームがブロックされ、エラーイベントが生成されます。

最大実行時間と最大再試行回数の2つの設定パラメーターは、ストリームの実行機能に直接影響します。最大実行時間を非常に大きな値に設定すると、ハングしたプロセスの識別に時間がかかることがあります。小さな値に設定すると、ステップが頻繁にエラーとしてマークされすぎてしまうことがあります。また、最大再試行回数オプションは、再試行の結果として正常に実行される可能性がある場合にのみ正の

値に設定します。このオプションは、通常、リソースが利用不可になる問題を解消するために使用されません。

ただし、設定パラメーターの値を決定する方法としては、使用事例を理解し、テストを行って最適な値を決定するのが最も効果的です。

ワークフローフレームワーク内で同時に実行されるジョブステップの数は、実行されているジョブストリームの数に比例します。ただし、システム上にデプロイされているストリームの数が多い場合は、結果としてシステム上の負荷が非常に大きくなるため、システム障害が発生することがあります。このような状況では、データ処理のリソース制御機能を使用して、リソースの使用量を設定した限度に制限することによって高負荷が原因で発生する問題を緩和することができます。

ジョブストリームリソースを管理することで、次のようなタスクを実行できます。

- リソースに排他的にアクセスして、重要なリソースがロックされる問題を解決する。プールの数が0の場合、リソースへのアクセスは排他的になります。
- 開始されるプロセスの数を制御する。たとえば、「Summary」という名前のリソースのプール数を「5」に設定して、そのリソースをすべてのデータ集計ジョブに割り当てた場合、どの時点でも実行可能な5つの集計のインスタンス数は最大5つのみになります。この方法で、実行されるプロセスの数を制御することができます。

リソース定義の詳細を指定し、そのタイプのリソースに同時にアクセスできるストリーム数の制限を設定することもできます。デフォルトでは、すべてのリソースタイプについてこの数が無制限に設定されます。つまり、リソースタイプに基づく制御は行われません。

詳細については、「[データ処理](#)」を参照してください。

## セキュリティの管理

OBRでは、ライトウェイトシングルサインオン (LW-SSO) およびSAP BusinessObjects Trusted Authenticationを使用して、統合されたHPEおよびSAP BusinessObjectsアプリケーションにシームレスにアクセスすることができます。

### LW-SSO

Single Sign-On (シングルサインオン) を使用すると、OBRに1回ログオンすれば、ログオンのプロンプトを再表示させずに、複数の統合されたHPE製品またはソフトウェアシステムにアクセスすることができます。設定済みの製品グループに含まれる製品では、この認証が信頼されるので、1つのアプリケーションから別のアプリケーションに移動するときに追加の認証は必要ありません。統合されたアプリケーションに対するすべての要求は、LW-SSO認証を経由します。

LW-SSOは、OBRに組み込まれており、認証用の外部のコンピューターは必要ありません。共有キー (Init文字列<sup>1</sup>)のみを指定する必要があります。共有キーは、LW-SSO セッショントークン<sup>2</sup>の暗号化と復号化に使用されます。の暗号化と復号化に使用されます。シングルサインオン環境内の他のアプリケーションが、LW-SSOに対応し、同じInit文字列を使用していることを確認する必要があります。

OBRは、次のHPE製品とのLW-SSO認証をサポートしています。

- Business Service Management
- OM
- OMi

**注：**OBRでは、LW-SSO統合に参加するすべてのアプリケーションは、同じGMT時刻を使用する必要があります。

## SAP BusinessObjects Trusted Authentication

SAP BusinessObjects Trusted Authenticationは、OBRとSAP BusinessObjectsアプリケーションの間のシングルサインオンを簡素化します。アプリケーションがSAP BusinessObjects Central Management Server (CMS)<sup>3</sup>との信頼関係を確立していれば、Trusted Authenticationを使用して、パスワードを入力せずにユーザーをログオンさせることができます。

シングルサインオンを使用するには、Trusted Authenticationセッショントークンの暗号化と復号化に使用されるSAP BusinessObjects共有キー (共有シークレット)を指定する必要があります。Trusted Authentication環境内の他のすべてのアプリケーションが、Trusted Authenticationに対応し、同じ共有キーを使用していることを確認する必要があります。

OBRは、次のSAP BusinessObjectsアプリケーションとのTrusted Authenticationをサポートしています。

- SAP BusinessObjects中央管理コンソール(CMC)
- SAP BusinessObjects起動パッド

詳細については、『SAP BusinessObjects Enterprise管理ガイド』を参照してください。最新のマニュアルについては、<http://help.sap.com/bobip41?current=bobip41>を参照してください。

<sup>1</sup>Init文字列は初期情報を含む接続文字列です。この情報は、データソースとの接続を開こうとするときにデータプロバイダーからデータソースにパラメーターとして渡されます。

<sup>2</sup>セッショントークンは、「8バイトのバイナリ値」から成る一意の識別子として生成され、サーバーとクライアントの間の接続を識別するためにサーバーからクライアントに送信されます。

<sup>3</sup>CMSは、HPE OBRに付属しているSAP BusinessObjects Enterprise XIの主要なコンポーネントです。CMSは、セキュリティおよびサービスを管理します。CMSは、SAP BusinessObjects Enterpriseインフラストラクチャーの管理に役立つ情報が含まれるデータベースを管理します。

## ログオンバナー

インストール後の設定が完了したら、ログオンバナーを使用して、Operations Bridge Reporterの管理コンソールやSAP BusinessObjectsにログオンする際に表示するテキストを設定できます。このテキストは最初の画面として表示され、不正なエントリについてユーザーに警告を行います。

詳細については、「[セキュリティ](#)」を参照してください。

# 時間シフトの管理

OBRを使用すると、シフト時間を設定し、環境内の監視対象のシステムリソースに関するシフトベースの可用性レポートを使用することができます。OBRでは、特別な設定をしなくてもデフォルトのシフト時間(0～23時間の範囲)を定義します。

管理コンソールの[シフト管理]ページを使用して、シフト時間を定義することができます。設定したシフトは、すべての関連するレポートにグローバルで適用されます。

シフトを設定するときには、次の点に注意する必要があります。

- シフトベースのデータは、シフトが作成される現在の日付よりも前の最大初期履歴(デフォルトでは15日間に設定されます)に対して利用可能である。
- シフトの開始時間と終了時間を変更できる。
- シフトには時間範囲が定義されている必要がある。
- 値は24時間表示にする必要がある。
- シフトは複数定義することができる。
- 単一シフトには複数の時間範囲を定義することができる。
- 複数のシフトでは時間範囲が重なってもかまわない。
- シフトからは時間範囲を削除することができる。
- シフトを削除すると、そのシフト内のすべての時間範囲も削除される。
- 既存のシフトと同じ名前を持つシフトを作成することはできない。
- いずれのシフトにも対応しない時間範囲はオフシフトと呼ばれる。
- ノードレベルまたはグループレベルのシフトの設定はサポートされていません。

詳細については、「[シフト管理](#)」を参照してください。



# データエージングの管理

OBRは、コンテンツパックに事前定義されている収集ポリシーに基づいて、定期的な間隔でさまざまなデータソースからデータを収集します。収集されたデータは、多様なファクトテーブルのタイプでデータベースに保存されます。データがポーリングされたイベントとしてデータソースから収集される場合、それは未処理データと呼ばれ、「ポーリング時」テーブルに保存されます。データを5分間の要約済みデータとして収集することもできます。この種のデータは割合データと呼ばれ、「5分」テーブルに保存されます。

OBRデータベースは、ワークフロープロセスを通して、未処理データまたは割合データに対して集約ルーチンを実行します。集約ルーチンはデータを時間別および日別のデータに変換します。その後、そのデータは次のような物理データテーブルに保存されます。

- 時間別: このテーブルは、時間別レベルで集約された未処理データまたは割合データを格納します。
- 日別: このテーブルは、日別レベルで集約された時間別データを格納します。
- 月別: このテーブルは、月別レベルで集約された日別データを格納します。(OOTBコンテンツパックでは利用不可)
- 年別: このテーブルは、年別レベルで集約された月別データを格納します。(OOTBコンテンツパックでは利用不可)

月や年のレポートが生成されると、日別テーブルからのデータがオンラインで集約され、OBRレポートに表示されます。月別テーブルおよび年別テーブルは、すぐに使えるOOTBコンテンツパック用のデータベース内の物理テーブルではありません。

データテーブルはコンテンツパックに基づき異なります。特定のコンテンツパックで、利用可能なデータテーブルはそのコンテンツパックに対して定義されたモデルに基づきます。

## アクティブの保持

OBRでは、テーブルにデータが過剰に累積されることを防ぐため、データのエージングを行います。エージングとは、保持期間の概念であり、テーブルにデータが保存される日数のことです。エージングプロセスでは、そのテーブルに対して指定されている保持期間以上テーブル内に存在するデータが削除されます。どのテーブルにも、次のようなデフォルトの保持期間があります。

- ポーリング時テーブル: 90日間
- 5分間テーブル: 90日間
- 時間別テーブル: 365日間
- 日別テーブル: 1825日間
- 月別テーブル: 1825日間 (OOTBコンテンツパックでは利用不可)
- 年別テーブル: 1825日間 (OOTBコンテンツパックでは利用不可)

注: CIタイプやノードなど、OBRによって収集されるディメンションデータは、データベーステーブルに残ります。OBRはこのデータを削除しません。

詳細については、「[エージング](#)」を参照してください。

## ライセンスの管理

デフォルトでは、OBRには60日間有効な自動的にオンになる一時的なライセンスが含まれています。60日間経過した後も継続してOBRを使用するには、永久的なライセンスをインストールする必要があります。

OBRライセンスには次のものがあります。

- **Operations Bridge Reporterソフトウェア:** このライセンスには、データ収集フレームワーク、SAP BusinessObjects Enterprise、収集したメトリックを保存および処理するための高パフォーマンスなパフォーマンス管理データベース、追加設定なしのコンテンツパックが含まれています。さらに、最大50ノードのメトリックを収集して報告するためのエンタイトルメントも含まれています。
- **50ノードの追加拡張パック:** データ収集およびレポートのエンタイトルメントを追加し、環境に合わせてソリューションを拡張することができます。

OBRは、ライセンス取得のために、HPEライセンスマネージャーのライセンスパッケージと統合されます。HPEライセンスマネージャーは、OBRのライセンスフレームワーク、および一時的または永久的なライセンスのインストール機能を提供します。

基本的なライセンス情報は、管理コンソールの[ライセンス]ページに表示されます。永久的なライセンスを取得するには、HPEライセンスマネージャーを使用するか、HPE Webware Webサイトを使用してHPEライセンスセンターから直接ライセンスを取得します。

注: コンテンツパックをアンインストールする場合は、ディメンションライフサイクル(DLC)を実行して、管理コンソールの[管理]>[ライセンス]ページで適切なライセンス使用数を取得します。

ライセンスの詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「OBRのライセンス要件」を参照してください。

詳細については、「[ライセンス](#)」を参照してください。

CLIを使用してライセンスをアクティブ化するには、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「コマンドラインインターフェイスからライセンスをアクティブにする」を参照してください。

# ユーザーアカウントの管理

OBRでは、SAP BusinessObjects中央管理コンソール(CMC)を使用してユーザーアカウントを管理します。デフォルトで、OBRには、インストール後の設定段階に作成される管理者アカウントが含まれています。管理者アカウントは、OBRを管理および設定する権限を持つアカウントです。管理者権限を持つアカウントのみが、管理コンソールにログオンすることができます。SAP BusinessObjects CMCを使用すれば、管理者権限を持つ追加のアカウントを作成することができます。

## SAP BusinessObjects CMC

ユーザーアカウントを作成および管理するには、OBRと統合されたSAP BusinessObjects CMCを使用します。ユーザーアカウントおよびグループを作成した後で、それらに対するアクセス権を指定することができます。

SAP BusinessObjects CMCを使用して、次のようなユーザー管理タスクを実行できます。

- エンタープライズアカウントおよび一般的なアカウントの管理
- グループへのユーザーの追加
- パスワードの管理
- 別名の管理

詳細については、中央管理コンソールのマニュアルを参照してください。このガイドは、SAP BOBJのインストールディレクトリの次の場所にあります。

**Windows:**<ドライブ>:\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\Help\en

**Linux:** \$PMDB\_  
HOME/BOWebServer/webapps/BOE/WEBINF/eclipse/plugins/webpath.CmcAppBranding\_lang.en/web/help/en

最新のヘルプドキュメントについては、[http://help.sap.com/businessobject/product\\_guides/](http://help.sap.com/businessobject/product_guides/)を参照してください。

## SAP BusinessObjects BI起動パッド

SAP BusinessObjects BI起動パッドは、レポートおよびダッシュボードを表示して操作できるOBRのWebベースの一元管理GUIです。統合された検索機能やフォルダーのナビゲーションツリーを使用して、特定のレポートを見つけることができます。さらに、BI起動パッドを使用すると、たとえば、ログオン時に見たいレポートが表示されるようにスタートページをカスタマイズしたり、パスワードの変更、表示言語の選択、さまざまな情報の相互作用レベルの設定などを行ったりすることで、操作性をカスタマイズすることができます。

SAP BOBJ起動パッドの詳細および最新のヘルプドキュメントについては、<http://scn.sap.com/docs/DOC-19231>を参照してください。

詳細については、「[レポートプラットフォーム](#)」を参照してください。

## 保留中の設定の管理

このページでは、OBRの設定が完了しているかどうかを確認できます。

インストール後の設定が完了し、トポロジを選択すると、[保留中の設定] ページを使用して残りのパッケージを設定したり、インストールしたりできます。このページで、完了していない設定を確認して、設定することもできます。

このページに保留中の設定が表示される場合、表示されるリンクをクリックして設定を完了します。

詳細については、「[保留中の設定](#)」を参照してください。

## 第9章: OBRの監視

詳細については、画像にマウスカーソルを合わせて、強調表示されたセクションをクリックしてください。



OBRを起動するための最初の基本タスクを実行した後、次のタスクではOBRを監視し、正しく稼働することを確認します。

管理コンソールを使用して、次のような監視タスクを実行できます。

- OBRのステータスの表示を監視します。
- OBRのコンテンツを監視します。
- データプロセスを監視します。
- OBRデータベースを監視します。
- アプリケーションサーバープラットフォームを監視します。

内部監視は、長時間を要している問題のあるプロセスやユーティリティを特定するだけでなく、データが滞留している特定のノードを特定するのにも役立ちます。収集、調整、または集約のレベルで何らかの不具合が起きた場合に、問題が発生したノードを正確に判別するのにこの機能が役に立ちます。また、データベースおよびアプリケーションサーバープラットフォームの使用傾向や、さまざまなデータプロセスの傾向を表示することもできます。

## OBRのコンテンツの監視

OBRでは、ファクトテーブルはビジネスプロセスの測定値またはファクトで構成されます。多くの場合これは、ディメンションテーブルで囲まれた星型スキーマまたはスノーflakeスキーマの中心に位置します。ディメンションテーブルには、データ処理照会の実行時にデータを制約しグループ分けするのに使用される属性 (フィールド) が格納されます。ファクトテーブルは多くの場合、グリーンによって定義されます。ファクトテーブルのグリーンは、ファクトを定義する最小のレベルを表します。たとえば、CPUファクトテーブルのグリーンは、5分ごとのCPU使用率や、毎日のCPU使用率として示されることがあります。OBRデータベースでは、収集された未処理データまたは割合データは、「ポーリング時」テーブルまたは「5分間」テーブルと呼ばれるファクトテーブルに固有レコードとして保存されます。その後、ワークフローはこれらのテーブルに対してサマリルーチンを実行し、時間別、日別、月別、および年別のデータに変換します。変換されたデータは、時間別、週別、月別、および年別のファクトテーブルに保管されます。

**注:** 月別テーブルおよび年別テーブルは、すぐに使えるOOTBコンテンツパック用のデータベース内の物理テーブルではありません。

OBRでは、特定のコンテンツパックコンポーネントに関して、データのスループット (つまり、データベースに保管されるデータのボリューム) を監視できます。OBRの [コンテンツ] ページを使用することにより、特定のコンテンツパックコンポーネントのファクトテーブルの増加状況を監視できます。

詳細については、「[コンテンツヘルスのステータス](#)」を参照してください。

## データ収集ステータスの監視

[データ収集ステータス] ページを使用して、Operations Agentデータソースにより収集される最新データの時刻に関する概要を表示できます。このページには、Operations Agentコンテンツパックコンポーネントから最新データがプルされた時刻のタイムスタンプが表示されます。このページには、データソース、クラス、およびOperations Agentコンテンツパックコンポーネントにより実行された最新データの時間に関する情報も表示できます。

管理コンソールの [データ収集ステータス] ページには、インストールされているOperations Agentコンテンツパックコンポーネントの、最終ポールドータの詳細ステータスが表示されます。

**注:** Operations Agentコンテンツパックコンポーネントがインストールされていない場合、このページに詳細は表示されません。

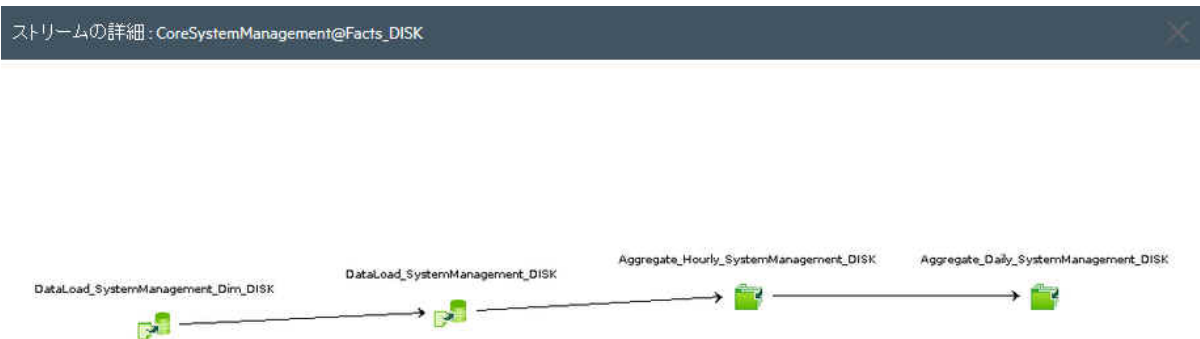
詳細については、「[データ収集ステータス](#)」を参照してください。

## データプロセスの監視

OBRには、未処理データの取り込み、そのデータに対する調整と集約ルーチンの実行、およびデータストアへのそのデータのロードというタスクを処理するワークフローフレームワークが備えられています。コンテンツパックには、事前定義されたワークフロー ジョブストリーム<sup>1</sup>が含まれます。これらの親タスクは、コンテンツパックのインストール中にロードされます。ジョブストリームは複数のジョブステップから構成されます。ジョブステップは、ワークフローフレームワークによりバッチ<sup>2</sup>で処理されます。

ワークフローフレームワークは、コンテンツパックに定義されているメタデータに基づいて、各ジョブストリームのフローとステップの実行を一元的に編成および管理します。

次の図は、サンプルとしてOBRジョブストリームの実行フローを示しています。



この例では、ジョブストリームはデータ収集で始まり、ファクトの集約で終わります。どのステップも前のステップに依存しています。したがって、ステップのいずれかが失敗した場合、ワークフローフレームワークではジョブストリームは正常に完了しません。ワークフローフレームワークでは、現在のストリームが正常に完了した場合にのみ、次に実行するジョブストリームがロードされます。

ワークフローフレームワークを使用して、次のようなタスクを実行できます。

- ワークフローの実行ステータスを監視する。
- データをデータストアに移動するプロセスを制御する。

<sup>1</sup>親子タスクを通じて関連付けられるワークフロー実行タスクの集まり。子タスクは、0、1、2、3、またはそれ以上の数の親タスクを持つことができます。

<sup>2</sup>ジョブストリームのランタイムインスタンスをバッチといいます。

ワークフロージョブストリームがどのように実行されるかを知ることが、OBRデータベース操作のステータスの監視において最も重要なタスクとなります。

## ジョブストリームの詳細の監視

OBRには、インストールされている各コンテンツパックのジョブストリームの実行を監視する手段が用意されています。管理コンソールの[データ処理のステータス]ページでは、次のような3つのタブの下にストリーム情報が表示されます。

- ストリームの詳細: このタブには、現在実行中のアクティブなストリームのステータスに関する情報が表示されます。また、ジョブストリームのステップごとの実行フローを表示することもできます。
- ストリームの履歴概要: このタブには、エラーまたは警告とともに完了したジョブストリームの数とステータスが表示されます。警告またはエラーの状態が原因でユーザーによって中止されたジョブストリームも、このタブに表示されます。
- ストリームの詳細履歴: このタブには、ある期間の実行中にジョブストリームで発生したエラーおよび警告状態の数のトレンドがグラフィックで表示されます。

[データ処理のステータス]ページを使用して、アクティブなジョブストリームの実行を監視し、実行が失敗した場合にはすべての問題をトラブルシューティングできます。さらに、一定期間にわたってストリームのトレンド分析を実行し、失敗の原因を判別することもできます。

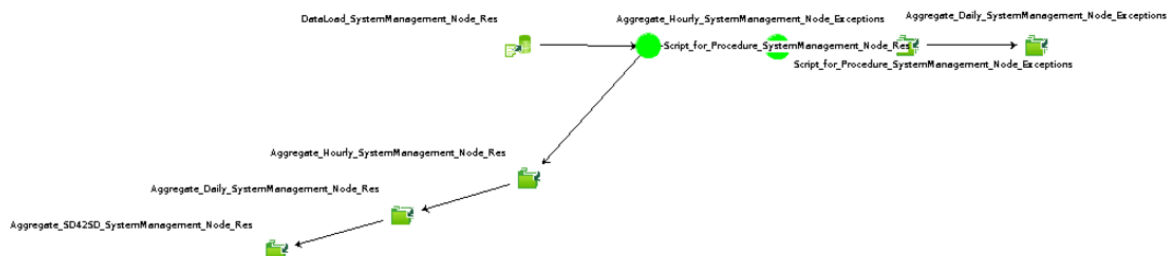
詳細については、「[データ処理のステータス](#)」を参照してください。

## ジョブストリームのステータスについて


[データ処理のステータス]ページに表示される情報と、ジョブストリームの状態とステータスとの関係を分かりやすくするために、ジョブストリームにおいて想定されるサンプルシナリオを以下に用意しました。

### シナリオ1

次のようなジョブストリームのサンプルを検討してみます。

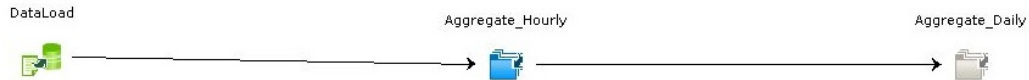





このジョブストリームには、8つのジョブステップがあります。緑色で示されているとおり、ジョブステップはすべて正常に完了しました。[完了/合計]列では、このストリームの値は8/8となります。ステップは8つあって、すべてのステップが実行を完了したからです。すべてのジョブステップが正常に完了したので、[ステップのステータス]列には  インジケータが表示されます。したがって、ジョブストリームのステータスは「OK」となります。次に、別のシナリオを見てみましょう

## シナリオ2

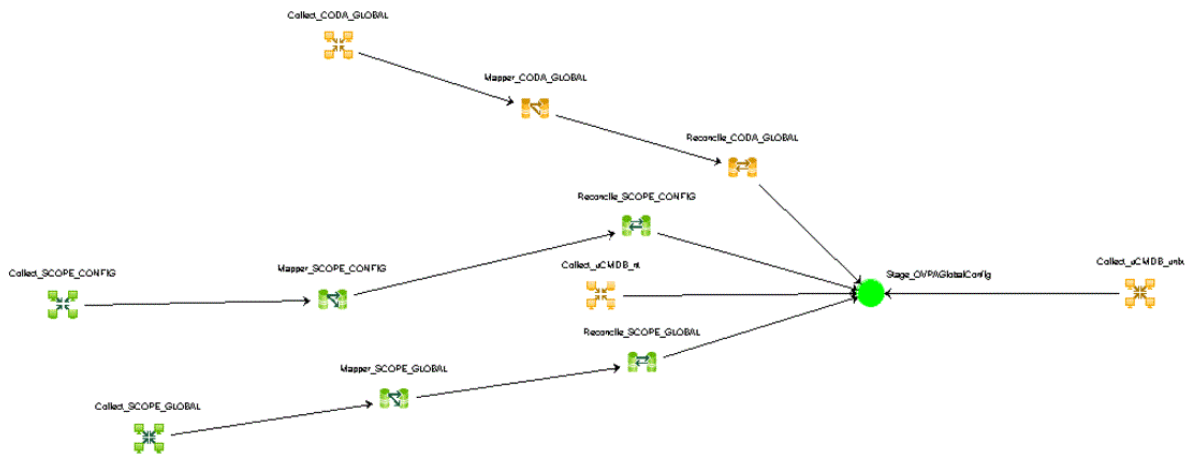
次のようなジョブストリームのサンプルを検討してみます。




このジョブストリームには、3つのジョブステップがあります。[完了/合計]列では、完了したのは1つのステップのみなので、このストリームの値は1/3となります。青色で示されているとおり、2番目のステップAggregate\_Hourlyは現在実行中です。ただし、[ステップのステータス]列には  インジケータが表示されます。それは、最初のジョブステップDataLoadが正常に完了したからです。

## シナリオ3

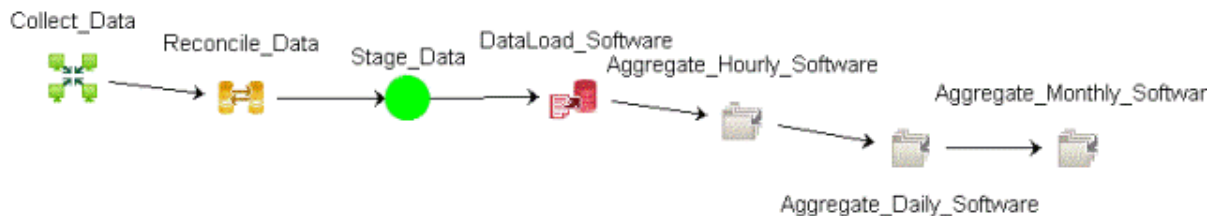
次のようなジョブストリームのサンプルを検討してみます。




このジョブストリームには、12のジョブステップがあります。[完了/合計]列では、このストリームの値は12/12となります。ただし、いくつかのジョブステップは警告のステータスで完了したため、[ステップのステータス]列には  インジケータが表示されます。ただし、これによってジョブストリームがブロックされることはありません。また、ご覧のように、Stage\_OVPAGlobalConfigジョブステップは正常に完了しています。

## シナリオ4

次のようなジョブストリームのサンプルを検討してみます。



このジョブストリームには、7つのジョブステップがあります。[完了/合計]列では、このストリームの値は4/7となります。ただし、DataLoad\_Softwareジョブステップが正常に完了しなかったため、[ステップのステータス]列には  インジケータが表示されます。ジョブステップが失敗すると、それが解決されるまで、残りのステップの実行はブロックされた状態が続きます。したがって、このストリーム中で完了したジョブステップは4つのみとなります。

## OBR PostgreSQL 管理データベースのバックアップおよび復元

OBR PostgreSQL 管理データベースは、次の3タイプの情報を保存します。

- データ処理ストリーム情報
- ステージテーブルの削除を制御する内部テーブル (stage\_control)
- 収集監査情報 (データ監査)

### データベースのバックアップ

データのリカバリを目的に管理データベースをバックアップできます。データベースをバックアップするには、次の手順を実行します。

1. PMDB Platform Timerサービスを停止します。
2. PMDB Platform Collectionサービスを停止します。
3. ロードされたすべてのデータ処理のストリームプロセスの実行が停止するまで待機します。
4. 管理コンソールの[データ処理] ページ上で、ストリームのステータスをチェックします。また、次のコマンドを入力して、ステータスをチェックすることもできます。  
`abcMonitor -stream ID=ALL, state=active`
5. PostgreSQLデータベースバックアップユーティリティを使って、データベースをバックアップします。

### データベースの復元

管理データベースを復元して、ステップの実行ステータスの履歴の詳細を取得できます。データベースを復元するには、次の手順を実行します。

1. PMDB Platform Timerサービスを停止します。
2. PMDB Platform Collectionサービスを停止します。
3. ロードされたすべてのデータ処理のストリームプロセスの実行が停止するまで待機します。
4. 管理コンソールの[データ処理] ページ上で、ストリームのステータスをチェックします。また、次のコマンドを入力して、ステータスをチェックすることもできます。  
`abcMonitor -stream ID=ALL, state=active`
5. PostgreSQL復元ユーティリティを使って、管理データベースを復元します。
6. 復元操作が完了した後、PMD Platform CollectionサービスとPMD Platform Timerサービスを再起動します。

サービスの始動後、データ処理フレームワークは、復元後のステップを前回停止した地点から自動的に開始します。その際、ステップのステータスは自動的に処理されます。古いデータベースを復元すると、stage\_controlテーブルとデータ監査テーブルのデータも古いデータになります。ただし、それらのテーブルは数時間以内にフレームワークによって自動的に更新されます。

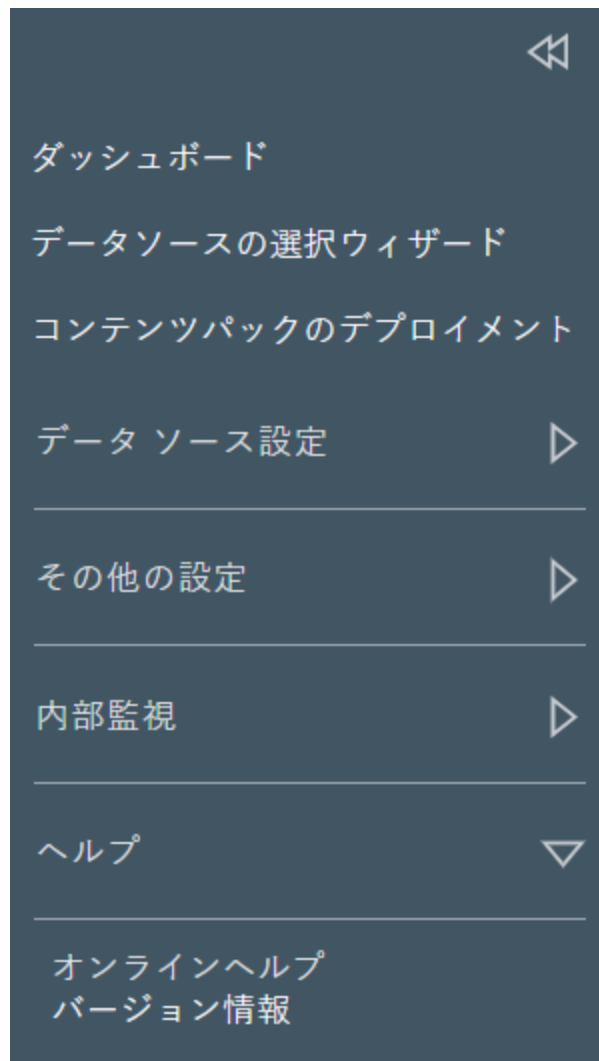
## アプリケーションプラットフォームの監視

管理コンソールの[プラットフォームサマリー] ページを使用して、管理コンソールのアプリケーションサーバーを監視することができます。アプリケーションサーバーのプラットフォームを監視すると、アプリケーションのパフォーマンス低下の原因を診断するデータが得られます。

詳細については、「[プラットフォームサマリー](#)」を参照してください。

## 第10章: ヘルプ

詳細については、画像にマウスマウスカーソルを合わせて、セクションをクリックしてください。



管理コンソールの[ヘルプ]ページから次の情報を確認できます。

- OBRのバージョン
- 管理者オンラインヘルプ

## オンラインヘルプ

このページを使用して、『管理者オンラインヘルプ』を表示します。

## OBRのバージョン情報

このページには、PMDBプラットフォームに関する詳細が表示されます。

このページの内容は以下のとおりです。

フィールド	説明
バージョン	製品のバージョン番号。
パッチレベル	製品のバージョン番号のパッチレベル。
ビルド番号	製品のビルド番号。

## 第III部 管理コンソール画面

このセクションには、さまざまな管理コンソール画面のコンテキスト依存の[ヘルプ]ページがリスト表示されます。これらの[ヘルプ]ページは、管理コンソール内の画面の概要を示しています。特定の画面のヘルプページを直接表示するには、画面の右上隅にある？アイコンをクリックします。

# 第11章: 設定ウィザード

設定ウィザードは、管理コンソールに初めてログオンする場合、または以前のセッションでインストール後の設定が完了していない場合に表示されます。設定ウィザードを使用して、OBRシステムのインストール後の設定を完了できます。

設定ウィザードには、以下の項目が表示されます。

## タイムゾーンの選択:

フィールド	説明
<ul style="list-style-type: none"><li>GMT</li><li>ローカル</li></ul>	指定されたオプションからタイムゾーンを選択します。

## Verticaデータベースの作成

フィールド	説明
リモートデータベース	Verticaデータベースが別のサーバーにインストールされているか、OBRサーバーとは異なるサーバーにインストールされている場合にのみ、このチェックボックスをオンにします。
TLSの有効化	TLS経由のVertica接続を有効にする場合に選択します。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Generated certificates	設定ウィザードでデフォルトのSSL証明書を生成できるようにする場合に選択します。
Provided certificates	データベース接続を保護するための独自の証明書を提供する場合に選択します。
Verticaデータベース情報の入力	
ホスト名	Verticaデータベースがインストールされているシステムのホスト名。
ポート	Verticaデータベースがインストールされているシステムのポート番号。デフォルトポートは5433です。
データベースファイルの場所	データベースファイルが保存される場所。 <b>注:</b> [リモートデータベース] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは無効になります。
カタログファイルの場所	データベースメタデータ情報が保存される場所。

	<p><b>注:</b> [リモートデータベース] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは無効になります。</p>
データベース名	<p>Verticaデータベースの名前。</p> <p>デフォルトでは、PMDBです。Verticaデータベース名は編集できます。</p>
Verticaデータベースユーザー (DBA権限) 情報の入力	
DBAユーザー名	<p>Verticaデータベースにログオンするための、DBA権限を持つVerticaデータベースユーザー名。</p> <p>Verticaユーザーがすでに作成されている場合は、ユーザー名とパスワードをそれぞれのフィールドに入力します。それ以外の場合は、作成するVerticaユーザーのユーザー名とパスワードの詳細を入力します。</p> <p><b>注:</b> [リモートデータベース] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは表示されません。</p>
パスワード	<p>Verticaデータベースへのログオンに使用するVerticaデータベースのパスワード。</p> <p><b>注:</b> [リモートデータベース] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは表示されません。</p>
パスワードの確認	<p>確認用にパスワードを再入力します。</p> <p><b>注:</b> [リモートデータベース] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは表示されません。</p>
Verticaデータベースユーザー情報の入力	
ユーザー名	Verticaデータベースのユーザー名を入力します。
パスワード	Verticaデータベースユーザー名のパスワードを入力します。
パスワードの確認	確認用にパスワードを再入力します。
TLS設定情報の入力	
TrustStoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
TrustStoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
パスワードの確認	TrustStoreにアクセスするために提供されたパスワードを再入力します。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Server certificate file	<p>サーバー証明書 server.crtファイルのパス。</p> <p>[Generated certificates] が選択されている場合、server.crtファイルはデータベースホストの{PMDB_HOME}/binフォルダーで作成されるため、こ</p>



	のフィールドは表示されません。
Server private key file	サーバープライベートキーserver.keyファイルのパス。  [Generated certificates] が選択されている場合、server.keyファイルはデータベースホストの{PMDB_HOME}/binフォルダーで作成されるため、このフィールドは表示されません。

確認のダイアログボックスが表示されます。[はい] をクリックして、Verticaデータベーススキーマを作成します。

Verticaデータベースを作成する各種シナリオの詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「Verticaデータベーススキーマの作成」セクションを参照してください。

## 管理データベースの作成

管理データベースユーザー (DBA権限) およびパスワード:

フィールド	説明
ユーザー名	PostgreSQLデータベース管理者の名前 (DBA権限)。デフォルト値は <b>postgres</b> です。
新しいDBAパスワード	PostgreSQLデータベース管理者のパスワード。
新しいDBAパスワードの確認	確認のためにパスワードを再入力します。

管理データベースユーザー情報:

フィールド	説明
ユーザー名	OBR管理データベースユーザーの名前。このフィールドは無効であり、デフォルト値は <b>pmdb_admin</b> です。
新しいパスワード	OBR管理データベースユーザーのパスワード。
新しいパスワードの確認	確認のためにパスワードを再入力します。

確認のダイアログボックスが表示されます。[はい] をクリックして、管理データベースのユーザーアカウントを作成します。

## コレクターの設定

フィールド	説明
名前	コレクターの名前が表示されます。(注: 一度設定したら変更できなくなる点に注意してください。)

フィールド	説明
ホスト名	コレクターホスト名。
有効	リモートシステムにインストールされているコレクターを有効化または無効化します。  データソースが既にデータ収集のコレクターのいずれかに割り当てられている場合、アプリケーションではコレクターを無効化できなくなります。
接続	OBRシステムとコレクターがインストールされているリモートシステム間の接続をテストします。
インストール	コレクターがインストールされているかどうかを示します。
ポリシー	必要な収集ポリシーがすべてコレクターシステムにインストールされているかどうかを示します。  必要なポリシーがリモートコレクターに存在しない場合、  アイコンをクリックしてポリシーを同期します。
データソース	データソースがコレクターで設定されているかどうかを示します。   をクリックして、リモートコレクターのデータソースを同期します。
テスト接続	コレクター接続をテストします。
新規作成	設定パラメーターを入力して、新規リモートコレクター接続を作成します。
編集	設定されたコレクターを編集します。
削除	データ収集に対して設定されているリモートコレクターを削除します。
保存	コレクターに対して行われた変更を保存します。

詳細については、「[コレクター](#)」を参照してください。

データソースの選択ウィザードを進めてデータソースを設定することも、ダッシュボードに移動して後からデータソースを設定することもできます。

## 第12章: データソースの選択ウィザード

インストール後のデータソースの選択ウィザードは、設定ウィザードの完了後にただちにデータソースを設定するよう選択した場合に表示されます。データソースの選択ウィザードを使用して、データソースのインストール後の設定、トポロジソースの選択およびコンテンツタイプの選択を行うことができます。データソースに基づいて、データソースの選択ウィザードを使用してOMi管理パックまたはOM SPIを選択できます。

**注:** データソースの選択ウィザードで選択を行っているときに、ブラウザを更新すると、[ダッシュボード] ページが表示されます。管理コンソールで使用可能なデータソースの選択ウィザードを使用して、データソースの選択を続行することができます。

データソースの選択ウィザードを使用し、デプロイメントシナリオに基づいて次のデータソースを設定します。

- [OMデプロイメントシナリオ](#)
- [BSM/APM/OMiデプロイメントシナリオ](#)
- [VMware vCenterのみのデプロイメントシナリオ](#)
- [その他のデプロイメントシナリオ](#)







詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

データソースの選択ウィザードには、以下の項目が表示されます。

### データソースの選択

Operations Manager i (OMi 10.x)	データソースとしてOMi 10.0xまたは10.10以降のバージョンを選択するオプション。
Business Service Manager (BSM/APM)	データソースとしてBSMを選択するオプション。
Operations Manager (OM)	データソースとしてOMを選択するオプション。
Network Node Manager i (NNMi)	データソースとしてNNMiを選択するオプション。
SiteScope	データソースとしてSiteScopeを選択するオプション。
Operations Agent	データソースとしてOperations Agentを選択するオプション。
VMware Vcenter	データソースとしてVMware Vcenterを選択するオプション。

## トポロジソースの設定

フィールド	説明
収集頻度 (時間)	データソースからデータを収集する時間 (時間単位)。
ホスト名	サービス定義ホストシステムのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。
収集を有効にする	サービス定義データ収集を有効または無効にします。
接続状態	サービス定義ソース接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li> は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
新規作成	新規サービス定義ソース接続を作成します。
テスト接続	サービス定義ソース接続をテストします。
編集	既存のサービス定義ソース接続を変更します。
保存	特定のサービス定義ソース設定属性を保存します。

トポロジソース接続の設定方法については、「[トポロジソース](#)」を参照してください。

## コンテンツタイプの選択

このページには、[データソースの選択] タブで選択したデータソースに応じたコンテンツタイプが表示されます。必要なコンテンツタイプを選択して、[次へ] をクリックします。

データソースのタイプ	コンテンツタイプ
Operations Manager i (OMi) 10.x	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービスヘルス (KPIおよびヘルスインジケータ)</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> <li>OMiイベント</li> </ul>
Business Service Manager (BSM/APM)	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービスヘルス (KPIおよびヘルスインジケータ)</li> <li>リアルユーザーモニタリング</li> <li>合成トランザクションモニタリング</li> <li>OMiイベント</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> </ul>
Operations Manager (OM)	<ul style="list-style-type: none"> <li>OMイベント</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> </ul>
Network Node Manager i (NNMi)	<ul style="list-style-type: none"> <li>Network Performance</li> </ul> <p>直接NNM統合 (NRT): [はい] または [いいえ] を選択します。</p>
SiteScope	<p>メトリックチャネル: ダイレクトAPI</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>System Performance</li> <li>Virtual environment performance</li> </ul>
Operations Agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>System Performance</li> <li>Virtual environment performance</li> </ul> <p>テクノロジー</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>VMware</li> <li>IBM LPAR</li> <li>Microsoft Hyper-V</li> <li>Solaris Zones</li> </ol>
VMware vCenter	<ul style="list-style-type: none"> <li>Virtual environment performance</li> </ul>

**ヒント:** [次へ] を連続してクリックして、データソースの選択ウィザードの最後に移動することができます。コンテンツタイプの選択は、[管理コンソール] > [データソースの選択ウィザード] で行うことができます。

### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。OMi管理パック/OM SPIの必

要な選択項目を選択して、[次へ]をクリックします。

**ヒント:** [次へ]を連続してクリックして、データソースの選択ウィザードの最後に移動することができます。OMi管理パック/OM SPIの選択は、[管理コンソール] > [データソースの選択ウィザード]で行うことができます。

## コンテンツパックのデプロイメント

このページには、[データソースの選択]タブで選択したデータソースに応じてインストールできるコンテンツパックのリストが表示されます。

詳細については、「[コンテンツパックのデプロイメント](#)」を参照してください。

**ヒント:** [次へ]を連続してクリックして、データソースの選択ウィザードの最後に移動することができます。コンテンツパックのインストールは、[管理コンソール] > [コンテンツパックのデプロイメント]ページで行うことができます。

## データソースの設定

[データソースの選択]タブで選択したデータソースに応じて表示されるデータソースを選択して、そのデータソースを設定します。

詳細については、「[データソースの設定](#)」を参照してください。

**ヒント:** [次へ]を連続してクリックして、データソースの選択ウィザードの最後に移動することができます。データソースの設定は、[管理コンソール] > [データソースの設定]タブで行うことができます。

## 第13章: ダッシュボード

ダッシュボードは、管理コンソールのメインページです。このページには、OBR、その関連サービス、データベース、およびホストプラットフォームの全体的なステータスが表示されます。データ収集のステータスの表示、コンテンツパックのパフォーマンスの確認、およびOBRが生成するオーケストレーションアラートとヘルスアラートのリストの表示を行うこともできます。

ダッシュボードを使用して、以下の操作を行います。

- [OBRのステータスの表示](#)
- [オーケストレーションアラートの詳細の表示](#)

# ホームページの使用

OBRはさまざまな自己監視タスクを実行します。これにより、データベースシステム、その主要サービス、データ収集、およびデータベースのロード操作が監視されます。この情報は、管理コンソールの[ホーム]ページに表示されます。[ホーム]ページには、OBRのコンポーネントの全体的なステータスが表示されます。この情報を使用すると、OBRでのパフォーマンス上の問題を直接トラブルシューティングできます。詳細を参照するには、ハイパーリンクを使用してこのページからドリルダウンするか、または[タスク]ペインから関連ページを開きます。

## OBRのステータスの表示







[ホーム]ページには、OBRサービス、ホストシステム、およびデータベースのステータスなどの情報が表示されます。インストールされているコンテンツパックコンポーネントのアクティブストリームの数とステータスおよびデータ収集のステータスを表示できます。また、OBRから報告されたABCおよびデータベースのアラートのリストを表示することもできます。

[ホーム]ページには次のようなテーブルが表示されます。

グループ	フィールド	説明
ステータスサマリー	サービスのステータス	<p>OBRデータベースおよびSAP BOBJ Enterpriseサービスのステータスを表示します。</p> <p>サービスのステータスは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>● は、すべてのサービスが正常に実行されていることを示します。</li><li>✖ は、1つまたはすべてのサービスが実行されていないことを示します。</li></ul> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、🔄 をクリックします。</p>
	接続性ステータス	<p>次のコンポーネントへのOBR接続のステータスを表示します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>Tomcatサービス (SAP BOBJ Tomcatサービス)</li><li>SAP BusinessObjects中央管理サービス (SAP BOBJ CMS)</li><li>HPE Vertica (Verticaデータベースサービス)</li></ul>
	ランタイムファイルの	<p>ファイルサイズに従って次のフォルダーにOBRファイルシステムのデータの分布を示します。</p>



グループ	フィールド	説明
	配布	<p><b>フォルダー</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><span style="color: red;">■</span> Transform_Cache</li> <li><span style="color: yellow;">■</span> Archive</li> <li><span style="color: gray;">■</span> Failed</li> <li><span style="color: black;">■</span> Stage</li> <li><span style="color: green;">■</span> Collect</li> <li><span style="color: cyan;">■</span> Extract</li> </ul> <p>データソースから収集されたデータが適切なVerticaデータベーステーブルにロードされる前に、データはOBRシステムに保持され、処理されます。また、データ処理ストリームを渡すことに失敗したデータ (\stage\failed_to_* フォルダー) は、OBRファイルシステムにも保存されます。ランタイムファイルの配布によって、これらのファイルにより使用されるディスク容量が示されます。</p>
	データ収集ステータス	<p>各データコレクター用に構成されたデータソースの数が表示されます。ステータスは次のように表されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><span style="color: green;">■</span> 成功</li> <li><span style="color: red;">■</span> 失敗</li> <li><span style="color: black;">■</span> 未開始</li> <li><span style="color: cyan;">■</span> 実行中</li> <li><span style="color: gray;">■</span> 無効</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>成功</b>: データソースからのデータ収集が問題なく発生した場合。</li> <li>• <b>失敗</b>: データソースからのデータ収集が失敗した場合。</li> <li>• <b>未開始</b>: データソースからのデータ収集が未発生の場合。</li> <li>• <b>実行中</b>: データソースからのデータ収集が実行中の場合。</li> <li>• <b>無効</b>: データソースからのデータ収集が無効の場合。</li> </ul> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、 をクリックします。</p>
	コンテンツヘルスのサマリー	<p>データソースからインストール済みのコンテンツパックのディメンションに関連付けられたファクトテーブルへのデータフローの稼働状態をグラフで表示します。ステータスは次のように表されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><span style="color: green;">■</span> 成功 1</li> <li><span style="color: yellow;">■</span> 実行中 15</li> </ul>

グループ	フィールド	説明
		<ul style="list-style-type: none"> <li>成功: データフローが問題なく発生した場合。</li> <li>実行中: データフローが実行中の場合。</li> </ul> <p>隣接するリンク [フルステータス] をクリックしてグラフによる詳細を表示するか、[コンテンツヘルスのステータス] をクリックして [コンテンツヘルスのステータス] ページに移動します。</p> <p>このテーブルに表示されるデータは定期的に更新されます。テーブルを最新データに更新するには、 をクリックします。</p>
アラート	オーケストレーションアラート	<p>完了に失敗したか、警告メッセージとともに完了したデータ処理ジョブストリームの数を表示します。詳細については、「<a href="#">オーケストレーションアラートの詳細の表示</a>」を参照してください。次のようなアイコンが、アラートのタイプを識別するのに使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、エラーアラートを示します。隣接するリンクをクリックして詳細を表示します。</li> <li> は、警告アラートを示します。隣接するリンクをクリックして詳細を表示します。</li> </ul>
	ヘルスアラート	<p>このテーブルは、OBRで生成されたすべてのエラー、警告および情報アラートの重要度、メッセージ、および日付を表示します。次のようなアイコンが、アラートのタイプを識別するのに使用されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、情報アラートを示します。このタイプのアラートの場合、アクションは必要ありません。</li> <li> は、エラーアラートを示します。これは重大な危険を示すアラートなので、すぐにアクションをとって問題を解決する必要があります。</li> <li> は、警告アラートを示します。正しく機能するためには、このタイプのアラートの解決が必要なことがあります。ただし、すぐにアクションをとる必要はない場合もあります。</li> </ul>

## オーケストレーションアラートの詳細の表示

OBRワークフローフレームワークは、すべてのジョブステップの情報を保存する実行ログファイルを作成します。[オーケストレーションアラート] タブは、正常完了に失敗した10件の最新アクティブデータプロセスを選択して、そのリストを表示します。[オーケストレーションアラート] タブに表示された情報を使用して、データ処理に関連した問題をトラブルシューティングできます。

エラーに関する詳細情報を表示するには、次の手順を実行します。

1. [オーケストレーションアラート] で、番号付きハイパーリンクをクリックします。  
[オーケストレーションアラート] ダイアログボックスが表示されます。
2. 以下が表示されます。

フィールド	説明
ステータス	アラートのタイプ。次の2つのタイプのうちのいずれかとなります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ エラー: このステータスは、深刻なエラーのためにジョブステップの実行プロセスの完了が失敗したことを示します。ジョブストリームの実行を続行できません。</li> <li>○ 警告: このステータスは、定義されている期間内にジョブステップが実行プロセスの完了に失敗したことを示します。</li> </ul>
ストリーム	ストリーム名。
ステップ	ジョブが実行を停止したステップ。
メッセージ	ジョブの実行停止につながったエラーメッセージを表示します。
時間	ジョブが実行を停止した時間。
	ジョブステップの実行中にどのようにエラーが生成されたかに関する詳細情報を含む、ジョブステップの実行ログを表示します。
ストリーム名	ストリーム名。
ログファイル	ログファイルの場所。
コマンド	エラーの生成時にジョブストリームの実行で使用されたコマンド。このフィールドは、ジョブステップがエラー状態の場合のみ表示されます。

## 第14章: データソースの選択ウィザード

このウィザードは、デプロイメントシナリオに基づいて必要なデータソースを選択できる、ガイド付きの設定ウィザードです。

データソースの選択ウィザードを使用し、デプロイメントシナリオに基づいて次のデータソースを設定します。

デプロイメントシナリオ	データソースのタイプ
OM	<ul style="list-style-type: none"><li>• Operations Manager (OM)</li><li>• Operations Agent</li><li>• VMware vCenter (オプション)</li><li>• Network Node Manager i (NNMi) (オプション)</li></ul>
BSM/APM/OMi	<ul style="list-style-type: none"><li>• Business Service Manager (BSM)</li><li>• Operations Manager i (OMi) 10.x</li></ul> <p><b>ヒント:</b> 環境にBSMのみがデプロイされている場合は、[<b>Business Service Manager (BSM)</b>] を選択します。環境にOMi 10.xのみがデプロイされている場合は、[<b>Operations Manager i (OMi) 10.x</b>] を選択します。環境にBSMとOMi 10.xの両方がデプロイされていて、BSMシステムとOMi 10システムが統合されている場合は、[<b>Business Service Manager (BSM)</b>] と[<b>Operations Manager i (OMi) 10.x</b>] の両方を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>• SiteScope (オプション)</li><li>• Operations Agent (オプション)</li><li>• VMware vCenter (オプション)</li></ul>
VMware vCenter	<ul style="list-style-type: none"><li>• VMware vCenter</li><li>• Network Node Manager i (NNMi) (オプション)</li></ul>
Other	Network Node Manager i (NNMi)

- [OMデプロイメントシナリオ](#)
- [BSM/APM/OMiデプロイメントシナリオ](#)
- [VMware vCenterのみのデプロイメントシナリオ](#)
- [その他のデプロイメントシナリオ](#)

[データソースの選択ウィザード] ページには、以下の項目が表示されます。

## データソースの選択

Operations Manager i (OMi 10.x)	データソースとしてOMi 10.0xまたは10.10以降のバージョンを選択するオプション。
Business Service Manager (BSM/APM)	データソースとしてBSMを選択するオプション。
Operations Manager (OM)	データソースとしてOMを選択するオプション。
Network Node Manager i (NNMi)	データソースとしてNNMiを選択するオプション。
SiteScope	データソースとしてSiteScopeを選択するオプション。
Operations Agent	データソースとしてOperations Agentを選択するオプション。
VMware vCenterのみ	データソースとしてVMware Vcenterを選択するオプション。

## コンテンツタイプの選択

このページには、[データソースの選択] タブで選択したデータソースに応じたコンテンツタイプが表示されます。必要なコンテンツタイプを選択して、[次へ] をクリックします。

データソースのタイプ	コンテンツタイプ
Operations Manager i (OMi) 10.x	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービスヘルス (KPIおよびヘルスインジケーター)</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> <li>OMiイベント</li> </ul>
Business Service Manager (BSM/APM)	<ul style="list-style-type: none"> <li>サービスヘルス (KPIおよびヘルスインジケーター)</li> <li>リアルユーザーモニタリング</li> <li>合成トランザクションモニタリング</li> <li>OMiイベント</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> </ul>
Operations Manager (OM)	<ul style="list-style-type: none"> <li>OMイベント</li> <li>エンタープライズアプリケーションパフォーマンス</li> </ul>
Network Node Manager i (NNMi)	<ul style="list-style-type: none"> <li>Network Performance</li> </ul> <p>直接NNM統合 (NRT): [はい] または [いいえ] を選択します。</p>
SiteScope	メトリックチャネル: ダイレクトAPI

	<ul style="list-style-type: none"> <li>• System Performance</li> <li>• Virtual environment performance</li> </ul>
Operations Agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>• System Performance</li> <li>• Virtual environment performance</li> </ul> テクノロジ <ul style="list-style-type: none"> <li>a. VMware</li> <li>b. IBM LPAR</li> <li>c. Microsoft Hyper-V</li> <li>d. Solaris Zones</li> </ul>
VMware vCenter	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Virtual environment performance</li> </ul>

### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

注：以前の選択内容を表示するには、[データソースの選択]、[コンテンツタイプの選択]、[OMi管理パック/OM SPIの選択] の各タブをクリックします。

各タブで行った選択を変更するには、必要なオプションを選択して [次へ] をクリックします。[終了] をクリックして更新を保存します。

## OMデプロイメントシナリオ

### データソースの選択

1. [データソースの選択] で [Operations Manager (OM)] および [Operations Agent] を選択します。
2. (任意)。ご使用の環境で仮想環境のデータソースおよびNNMiおよびNNMi SPI Performanceを利用できる場合は、[VMware vCenter]、[Network Node Manager i (NNMi)] を選択します。
3. [次へ] をクリックします。

### コンテンツタイプの選択

1. [コンテンツタイプの選択] > [Operations Manager (OM)] で、イベントに [OMイベント] を選択します。必要に応じて、追加のコンテンツタイプを選択できます。
2. [次へ] をクリックします。

## OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

1. [OMi管理パック/OM SPIの選択] で [管理パック] および [Smart Plug-In(SPI)] を選択します。

注: 必要な管理パックおよびSmart Plug-In (SPI) ポリシーがインストールされていることを確認する必要があります。

2. [完了] をクリックします。

# BSM/OMiデプロイメントシナリオ

## データソースの選択

1. [データソースの選択] で [Business Service Manager (BSM/APM)] および [Operations Manager i (OMi) 10.x] を選択します。
2. [Operations Manager i (OMi) 10.x] で、ご使用の環境にデプロイされているアプリケーションのバージョンを選択します。

ご使用の環境にBSMのみがデプロイされている場合は、[Business Service Manager (BSM/APM)] を選択します。環境にOMi 10.xのみがデプロイされている場合は、[Operations Manager i (OMi) 10.x] を選択します。ご使用の環境にBSMとOMi 10.xの両方がデプロイされていて、BSMシステムとOMi 10システムが統合されている場合は、[Business Service Manager (BSM/APM)] と [Operations Manager i (OMi) 10.x] の両方を選択します。

3. (任意)。システムパフォーマンスに [SiteScope] を選択し、仮想環境に Operations Agent データソースおよび VMware vCenter データソースを選択できます。
4. [次へ] をクリックします。

## コンテンツタイプの選択

1. [コンテンツタイプの選択] > [Business Service Manager (BSM/APM)] で、必要なコンテンツタイプを選択します。
2. [コンテンツタイプの選択] > [Operations Manager i (OMi) 10.x] で、必要なコンテンツタイプを選択します。
3. (任意)。

- a. システムのパフォーマンスに **[SiteScope]** を選択すると、**[SiteScopeメトリックチャネル]** セクションが表示されます。
- b. SiteScopeのメトリックチャネルとして **[プロファイルDB]** または **[ダイレクトAPI]** のいずれかを選択する必要があります。

設定ウィザードでオプションを選択した場合は、**[コンテンツパックのデプロイメント]** ページでダイレクトAPIのコンポーネントが自動的に選択されます。

**注:** OMi 10.xでシステムまたは仮想環境パフォーマンスを監視するためにSiteScopeを使用する場合、SiteScopeのメトリックチャネルはダイレクトAPIを介します。

4. (任意)。仮想環境に**Operations Agent**データソースおよび**VMware vCenter**データソースが選択されている場合、必要なコンポーネントタイプとテクノロジーを選択します。

データソース	テクノロジーの選択
Operations Agent	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ VMware</li> <li>○ IBM LPAR</li> <li>○ Microsoft Hyper-V</li> <li>○ Solaris Zones</li> </ul>

5. **[次へ]** をクリックします。

#### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

1. **[OMi管理パック/OM SPIの選択]** で **[管理パック]** および **[Smart Plug-In(SPI)]** を選択します。

**注:** 必要な管理パックおよびSmart Plug-In (SPI) ポリシーがインストールされていることを確認する必要があります。

2. **[完了]** をクリックします。

## VMware vCenterのみのデプロイメントシナリオ

### データソースの選択



1. [データソースの選択] で [VMware vCenter] を選択します。
2. (任意)。ご使用の環境でNNMiおよびNNMi iSPI Performanceを利用できる場合は、[Network Node Manager i (NNMi)] を選択します。
3. [次へ] をクリックします。

### コンテンツタイプの選択

1. [コンテンツタイプの選択] > [VMware vCenter] で、[仮想環境パフォーマンス] を選択します。必要に応じて、追加のコンテンツタイプを選択できます。
2. [次へ] をクリックします。

### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

1. [OMi管理パック/OM SPIの選択] で [管理パック] および [Smart Plug-In(SPI)] を選択します。

注：必要な管理パックおよびSmart Plug-In (SPI) ポリシーがインストールされていることを確認する必要があります。

2. [完了] をクリックします。

## その他のデプロイメントシナリオ

### データソースの選択

1. [データソースの選択] で [Network Node Manager i (NNMi)] を選択します。
2. [次へ] をクリックします。

### コンテンツタイプの選択

1. [コンテンツタイプの選択] > [Network Node Manager i (NNMi)] で、[ネットワークパフォーマンス] を選択します。
2. [直接NNM統合 (NRT)] に [はい] または [いいえ] を選択します。

[直接NNM統合 (NRT)] では、NNMiから直接ネットワークパフォーマンスデータを収集します。データ収集により、ネットワーク内のコンポーネントまたはインターフェイスヘルスについて、詳細なリアルタイムビューが得られます。Network Component\_Health/Network Interface\_Healthコンテンツパックをイン

ストールする必要があります。詳細なヘルスまたは使用率のレポートを表示できます。これらのコンテンツパックをインストールする場合は、ハードウェア要件を再確認する必要があります。

3. (任意)。[BSM/APM/OMiと統合されたNNM] チェックボックスをオンにします。

[BSM/APM/OMiと統合されたNNM] では、NPSからネットワークパフォーマンスデータを収集します。データ収集は時間別、日別および集計サマリーに基づきます。Network Performanceコンテンツパックをインストールする必要があります。エグゼクティブサマリーレポートを表示できます。

4. [次へ] をクリックします。

### OMi管理パック/OM SPIの選択

[OMi管理パック/OM SPIの選択] タブには、[コンテンツタイプの選択] タブで [エンタープライズアプリケーションパフォーマンス] が選択された場合にのみ選択オプションが表示されます。

1. [OMi管理パック/OM SPIの選択] で [管理パック] および [Smart Plug-In(SPi)] を選択します。

注：必要な管理パックおよびSmart Plug-In (SPi) ポリシーがインストールされていることを確認する必要があります。

2. [完了] をクリックします。

## 第15章: コンテンツパックのデプロイメント

[コンテンツパックのデプロイメント] ページを使用して、コンテンツパックコンポーネントのインストールおよび削除を行うことができます。

**注:** [コンテンツパックのデプロイメント] ページからコンテンツパックをインストールする前に、データソースの選択を完了する必要があります。

[コンテンツパックのデプロイメント] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- [コンテンツパックのインストールまたはコンテンツのアップグレード](#)
- [インストール済みコンテンツパックのアンインストール](#)

OBRでは、コンテンツパックは次の層またはコンポーネントによって構成されます。

### ドメインコンテンツパックコンポーネント

ドメインまたはコアドメインコンポーネントは、特定のコンテンツパックのデータモデルを定義します。これには、リレーショナルスキーマを生成するためのルールが含まれています。また、データベースへとデータを処理するためのデータ処理ルール (標準の事前集計ルールのセットを含む) も含まれています。ドメインコンポーネントには、1つまたは複数のレポートコンテンツパックコンポーネントで活用可能な、一般的に使用するディメンションとキューブを含めることができます。ドメインコンテンツパックコンポーネントは、設定済みのトポロジソースまたはデータの収集元であるデータソースに依存しません。

### ETLコンテンツパックコンポーネント

ETLコンテンツパックコンポーネントは、収集ポリシーと、変換ルール、調整ルール、およびステージングルールを定義します。また、データ処理ステップの実行順序を定義するデータ処理ルールも提供します。ETLコンテンツパックコンポーネントは、データソース依存型です。そのため、特定のドメインについて、各データソースアプリケーションは異なるETLコンテンツパックコンポーネントを持ちます。たとえば、Performance AgentおよびSiteScopeデータソースアプリケーションからシステムパフォーマンスデータを収集する場合は、**SysPerf\_ETL\_PerformanceAgent**および**ETL\_SystemManagement\_SiS**というETLコンポーネントをそれぞれインストールする必要があります。単一のデータソースアプリケーションは、複数のETLコンポーネントを持つことができます。たとえば、Operations Agentでサポートされる仮想技術 (Oracle Solaris Zones、VMware、IBM LPAR、Microsoft Hyper-Vなど) ごとにETLコンポーネントを1つ持つことが可能です。ETLコンポーネントは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、同じドメインコンポーネントにデータをフィードする複数のETLコンポーネントを持つこともできます。

### レポートコンテンツパックコンポーネント

アプリケーションコンテンツパックコンポーネントは、アプリケーション固有の集計ルール、ビジネスビュー、SAP BOBJユニバース、および特定のドメインに対するレポートを定義します。アプリケーションコンポーネン

トは、1つまたは複数のドメインコンポーネントに依存できます。また、1つ以上のドメインコンポーネントで定義されるデータモデルを拡張する柔軟性も提供します。



[コンテンツパックのデプロイメント] ページでは、[データソースの選択] タブで行った選択に基づいて、コンテンツパックのフィルター処理されたリストを表示することで、コンテンツパックコンポーネントの選択を簡略化します。フィルター処理されたリストからは、インストールするコンテンツまたは特定のコンテンツパックコンポーネントを選択できます。コンテンツパックのインストールおよびアンインストールの操作中、HPE\_PMDB\_Platform\_OrchestrationおよびTimerサービスは自動的に停止し、操作完了後に起動します。

[コンテンツパックのデプロイメント] ページでは、コンテンツパックコンポーネントのサイレントインストールまたはアンインストールを実行しながら、最新のステータスをページに表示します。

[コンテンツパックのデプロイメント] ページには、以下の項目が表示されます。

## コンテンツパックのデプロイメント

フィールド	説明
コンテンツ	OBRがデータを収集するコンテンツまたはドメインのタイプ。表示されるコンテンツのリストは、定義されているトポロジソース (RTSMまたはOM) に基づいてフィルター処理されます。
データソースアプリケーション	コンテンツに対してOBRがデータを収集する際の収集元となるデータソース。
コンテンツパックコンポーネント名	<p>コンテンツパックコンポーネントの名前。コンテンツパックは、通常はドメイン、ETL、およびレポートという3つのコンポーネントで構成されます。これらのコンテンツパックタイプの詳細については、『Operations Bridge Reporterコンセプトガイド』を参照してください。</p> <p>コンテンツパックコンポーネントの名前は、次の構文に基づきます。</p> <p><b>AcronymofContentPack_Component_&lt;Technology&gt;_&lt;DatasourceVersion&gt;</b></p> <p>例: SysPerf_Domain、VirtualEnvPerf_ETL_HyperV_PerformanceAgent、RealUsrTrans_Reports</p> <p>技術、データソース、およびデータソースのバージョンはオプションです。データソースおよびそのバージョンは、コンポーネントがデータソース依存型であるETLコンポーネントの場合にのみ付加されます。</p>
インストールされているバージョン	コンテンツパックコンポーネントのバージョン。

フィールド	説明
ステータス	インストールまたはアンインストールのプロセスのステータス。インストールまたはアンインストールのプロセス中に、[コンテンツパックのデプロイメント] ページは自動的に更新され、プロセスに関する最新のステータスが表示されます。
	コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴を表示します。
	インストールされているコンテンツパックコンポーネントを削除します。
インストール	選択したコンテンツパックコンポーネントをインストールします。

## コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
ステータス	インストールまたはアンインストールのプロセスのステータス。インストールまたはアンインストールのプロセス中に、[デプロイメントマネージャ] ページは自動的に更新され、プロセスに関する最新のステータスが表示されます。
インストール日	選択したコンテンツパックコンポーネントがインストールまたはアンインストールされた日時。
バージョン	コンテンツパックコンポーネントのバージョン。
メッセージ	インストールまたはアンインストールのステータスの説明。

使用準備が整ったすべてのコンテンツパックのリストは、[コンテンツパックのデプロイメント] ページにあります。

### コアコンテンツパック

このコンテンツパックは、他のコンテンツパックのインストール前またはインストール中にインストールする必要があります。コンポーネントは以下のとおりです。

- Core\_Domain
- Core\_Domain\_AppServer
- Core\_Domain\_EUM

## Cross-Domain Operations Events

**OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOMi 10からデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Operations Manager i
  - CrossOprEvent\_ETL\_OMi10
  - CrossOprEvent\_ETL\_OMi (トポロジがRTSMの場合)
  - CrossOprEvent\_Domain\_Reports

**OMi Extended:** OMi拡張コンテンツパックには、次のOMiの属性の拡張セットが含まれています。

- イベント注釈
- イベントプロパティの変更
- イベント転送の詳細
- カスタムメッセージ属性 (CMA)

OMi拡張コンテンツパックをインストールしてOMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Operations Manager i
  - CrossOprEvent\_ETL\_OMi\_Extended (トポロジがRTSMの場合)
  - CrossOprEvent\_Domain\_Reports\_Extended
  - CrossOprEvent\_ETL\_OMi10x\_Extended

**注:** CrossOprEvent\_ETL\_OMi10x\_Extendedを使用するには、CrossOprEvent\_Domain\_Reports\_Extendedを最新バージョンにアップグレードする必要があります。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain

## 状況と主要管理指標 (サービスヘルス)

**BSM:** このコンテンツパックをインストールしてBSMからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- BSMサービスヘルス
  - HIKPI\_ETL\_ServiceHealth
  - HIKPI\_Domain
  - HIKPI\_Reports\_ServiceHealth

**OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOMi 10からデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- BSMサービスヘルス
  - HIKPI\_ETL\_ServiceHealth\_OMi10
  - HIKPI\_Domain
  - HIKPI\_Reports\_ServiceHealth

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain

#### Server Automation

**Server Automation:** このコンテンツパックをインストールしてServer Automationからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- SA\_Core\_Domain
- SA\_CoreETL-Base

#### IBM WebSphere Application Server

**OM:** このコンテンツパックをインストールしてOMからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール/アップグレード] をクリックします。

- Operations Smart Plug-in for WebSphere Application Server
  - IBMWebSphere\_ETL\_WebSphereSPI
  - IBMWebSphere\_Domain
  - IBMWebSphere\_Reports

「[IBM WebSphereレポート用の前提条件ポリシー \(SPI\)](#)」も確認してください。

**BSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてBSM/OMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- OMi Management Pack for IBM WebSphere Application Server
  - IBMWebSphere\_ETL\_WebSphereMP
  - IBMWebSphere\_Domain
  - IBMWebSphere\_Reports

「[IBM WebSphereレポート用の前提条件ポリシー \(SPI\)](#)」も確認してください。SPIからデータを収集してOMiにフィードする基盤となるOM環境がある場合は、「[IBM WebSphereレポート用の前提条件ポリシー \(MP\)](#)」を確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - Core\_Domain\_AppServer
- Operation Manager
  - OprEvent\_Domain\_Reports
- System Performance
  - SysPerf\_Domain

#### Microsoft Active Directory

**OMおよびBSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOM、BSM、またはOMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Operations Smart Plug-in for Microsoft Active Directory、OMi Management Pack for Microsoft Active Directory
  - MicrosoftActiveDirectory\_ETL\_ADSPi
  - MicrosoftActiveDirectory\_Domain
  - MicrosoftActiveDirectory\_Reports

「[Microsoft Active Directoryレポート用の前提条件ポリシー \(SPI\)](#)」および「[Microsoft Active Directoryレポート用の前提条件ポリシー \(MP\)](#)」も確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をイン



ストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - MSAppCore

Microsoft Exchange Server

**OMおよびBSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOM、BSM、またはOMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

Microsoft Exchange 2007の場合

- Microsoft Exchange 2007用のOperations Smart Plug-in
  - MicrosoftExchange\_ETL\_ExchangeSPI2007
  - MicrosoftExchange\_Domain
  - MicrosoftExchange\_Reports

Microsoft Exchange 2010の場合

- Microsoft Exchange 2010用のOperations Smart Plug-in、Microsoft Exchange Server用のOMi管理パック
  - MicrosoftExchange\_ETL\_ExchangeSPI2010
  - MicrosoftExchange\_Domain
  - MicrosoftExchange\_Reports

Microsoft Exchange 2013の場合

- Microsoft Exchange 2013用のOperations Smart Plug-in、Microsoft Exchange Server用のOMi管理パック
  - MicrosoftExchange\_ETL\_ExchangeSPI2013
  - MicrosoftExchange\_Domain
  - MicrosoftExchange\_Reports

「[Microsoft Exchange Serverレポート用の前提条件ポリシー \(SPI\)](#)」も確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - MSAppCore
- System Performance
  - SysPerf\_Domain
  - SysPerf\_Reports

#### Microsoft SQL Server

**OMおよびBSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOM、BSM、またはOMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

- Operations Smart Plug-in for Microsoft SQL Server、OMi Management Pack for Microsoft SQL Server
  - MicrosoftSQLServer\_ETL\_DBSPI
  - MicrosoftSQLServer\_Domain
  - MicrosoftSQLServer\_Reports

「Microsoft SQL Serverレポート用の前提条件ポリシー (SPI)」および「Microsoft SQL Serverレポート用の前提条件ポリシー (MP)」も確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
- System Performance
  - SysPerf\_Domain

#### ネットワークコンポーネントヘルス

**Network Component Health:** このコンテンツパックをインストールして、Network Mode Manager i (NNMi) がBSMと統合されたネットワークコンポーネントヘルスのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

NNM iSPI for Performance:

- ComponentHealth\_Reports
- Core\_ComponentHealth

## ネットワークインターフェイスヘルス

**Network Interface\_Health:** このコンテンツパックをインストールして、Network Mode Manager i (NNMi) が BSMと統合されたネットワークインターフェイスヘルスのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

NNM iSPI for Performance:

- Core\_InterfaceHealth
- InterfaceHealth\_Reports

## Network Performance

**RTSM:** このコンテンツパックをインストールして、Network Mode Manager i (NNMi) が BSMと統合されたネットワークデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- NNM iSPI for Performance
  - NetworkPerf\_ETL\_PerfiSPI\_RTSM
  - NetworkPerf\_Domain
  - NetworkPerf\_Reports

**Non-RTSM:** このコンテンツパックをインストールして、Network Mode Manager i (NNMi) が BSMと統合されていないネットワークデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- NNM iSPI for Performance
  - NetworkPerf\_ETL\_PerfiSPI\_NonRTSM
  - NetworkPerf\_Domain
  - NetworkPerf\_Reports

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
- System Performance
  - SysPerf\_Reports

## Operations Events

**OM:** このコンテンツパックをインストールして OMI にログ記録されるイベントのレポートを生成する場合は、

次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

- Operation Manager
  - OprEvent\_ETL\_OM
  - OprEvent\_Domain\_Reports

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain

Oracle

**OMおよびBSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてOM、BSM、またはOMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

- Operations Smart Plug-in for Oracle、OMi Management Pack for Oracle
  - Oracle\_ETL\_DBSPI
  - Oracle\_Domain
  - Oracle\_Reports

「Oracle Databaseレポート用の前提条件ポリシー (SPI)」および「Oracle Databaseレポート用の前提条件ポリシー (MP)」も確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
- Operation Manager
  - OprEvent\_Domain\_Reports
- System Performance
  - SysPerf\_Domain

Oracle WebLogic Server

**OM:** このコンテンツパックをインストールしてOMからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール]をクリックします。

- Operations Smart Plug-in for Oracle WebLogic Server
  - OracleWebLogic\_ETL\_WebLogicSPI
  - OracleWebLogic\_Domain
  - OracleWebLogic\_Reports

「Oracle WebLogicレポート用の前提条件ポリシー (SPI)」も確認してください。

**BSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてBSM/OMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- OMi Management Pack for Oracle WebLogic Server
  - OracleWebLogic\_ETL\_WebLogicMP
  - OracleWebLogic\_Domain
  - OracleWebLogic\_Reports

「Oracle WebLogicレポート用の前提条件ポリシー (MP)」も確認してください。SPIからデータを収集してOMiにフィードする基盤となるOM環境がある場合は、「Oracle WebLogicレポート用の前提条件ポリシー (SPI)」を確認してください。

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - Core\_Domain\_AppServer
- Operation Manager
  - OprEvent\_Domain\_Reports
- System Performance
  - SysPerf\_Domain

Real User Transaction Monitoring (RUM)

**OM:** このコンテンツパックをインストールしてOMからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Real User Monitor
  - RealUsrTrans\_ETL\_RUM
  - RealUsrTrans\_Domain\_Reports

**BSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてBSM/OMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Real User Monitor
  - RealUsrTrans\_ETL\_RUM\_OMi
  - RealUsrTrans\_Domain\_Reports

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - Core\_Domain\_EUM
- Operation Manager
  - OprEvent\_Domain\_Reports
- System Performance
  - SysPerf\_Domain
  - SysPerf\_Reports
- 仮想化パフォーマンス
  - VirtualEnvPerf\_Domain
- Operation Events (Operations Manager)
  - ServiceHealth

合成トランザクション監視 (BPM)

**OM:** このコンテンツパックをインストールしてOMからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Business Process Monitor
  - SynTrans\_ETL\_BPM
  - SynTrans\_Domain\_Reports

**BSM/OMi:** このコンテンツパックをインストールしてBSM/OMiからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Business Process Monitor
  - SynTrans\_ETL\_BPM\_OMi
  - SynTrans\_Domain\_Reports

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
  - Core\_Domain\_EUM

#### System Performance

**Operations Agent:** このコンテンツパックをインストールしてOperations Agentからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- Performance Agent、Operations Agent
  - SysPerf\_ETL\_PerformanceAgent
  - SysPerf\_Domain
  - SysPerf\_Reports

**SiteScope:** このコンテンツパックをインストールしてSiteScopeからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- SiteScope
  - SysPerf\_ETL\_SiS\_APIまたはSysPerf\_ETL\_SiS\_DB (SysPerf\_ETL\_SiSは廃止されています)
  - SysPerf\_Domain
  - SysPerf\_Reports

Sitescope ETLの詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「付録C: ETLのリスト」を参照してください。

SysPerf\_SiS\_ETLコンテンツパックコンポーネントは廃止されています。SysPerf\_SiS\_ETLの代わりに、SysPerf\_SiS\_DBまたはSysPerf\_SiS\_APIを使用してください。

以前バージョンのOBRからアップグレードした場合は、次の手順に従ってSysPerf\_SiS\_ETLからSysPerf\_SiS\_DBまたはSysPerf\_SiS\_APIに移動してください。

1. OBR管理コンソールにログインします。
2. [管理] タブに進みます。
3. [データソースの選択] をクリックします。
4. 適切なデータソースを選択し、すべての[SiteScope] チェックボックスで[ダイレクトAPI] または[プロファイルDB] をオンにします。

注: これらのオプションは、[SiteScope] チェックボックスをオンにした後にのみ表示されます。

5. [保存] をクリックします。
6. [コンテンツパックのデプロイメント] をクリックします。
7. [ダイレクトAPI] をオンにした場合はSysPerf\_SiS\_APIを選択し、[プロファイルDB] をオンにした場合はSysPerf\_SiS\_DBを選択して、[インストール] をクリックします。

ヒント: このコンテンツパックとともに次の依存コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain

#### Virtual Environment Performance

**Operations Agent:** このコンテンツパックをインストールしてOperations Agentからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

注: Operations Agentバージョン11.x以前の場合は、VirtualEnvPerf\_ETL\_VMWare\_PerformanceAgentとVirtualEnvPerf\_ETL\_HyperV\_PerformanceAgent ETLを使用してください。Operations Agentバージョン12の場合は、Cloud Optimizer (旧名 Virtualization Performance Viewer (vPV)) コンテンツを使用してください。

- Performance Agent
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_HyperV\_PerformanceAgent
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_IBMLPAR\_PerformanceAgent
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_SolarisZones\_PerformanceAgent
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_VMWare\_PerformanceAgent
  - VirtualEnvPerf\_Domain
  - VirtualEnvPerf\_Reports



**SiteScope:** このコンテンツパックをインストールしてSiteScopeからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- SiteScope
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_VMware\_SiS\_API
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_VMware\_SiteScope
  - VirtualEnvPerf\_Domain\_VMWare
  - VirtualEnvPerf\_Reports\_VMWare

**VMware vCenter:** このコンテンツパックをインストールしてVMware vCenterからデータのレポートを生成する場合は、次のものを選択して、[インストール] をクリックします。

- VMware vCenter
  - VirtualEnvPerf\_ETL\_VMWare\_vCenter
  - VirtualEnvPerf\_Domain\_VMWare
  - VirtualEnvPerf\_Reports\_VMWare

**ヒント:** このコンテンツパックとともに次の依存型コンテンツパック (およびそれらのコンポーネント) をインストールして、機能するようにします。

- Core
  - Core\_Domain
- System Performance
  - SysPerf\_Domain

## コンテンツパックのインストール

1. 管理コンソールで、[コンテンツパックのデプロイメント] をクリックします。  
[コンテンツパックのデプロイメント] ページが表示されます。デフォルトでは、インストールされていないすべてのコンテンツパックコンポーネントがインストール用に選択されます。
2. コンテンツパックコンポーネントの選択を変更するには、[コンテンツパックコンポーネント名] 列で、インストールしない選択済みコンテンツパックのコンポーネントをクリアします。


**注:** インストールしていない選択済みコンテンツパックのコンポーネントをクリアすると同時に、コン

テンツパックの従属コンポーネントも確実にクリアしてください。

3. [インストール/アップグレード] をクリックし、コンテンツパックをインストールします。


**注:** コンテンツパックをインストールする前にHPE\_PMDB\_Platform\_Orchestrationサービスが完全に停止していることを確認します。

[インストールが開始しました] ステータスが、各コンテンツパックの[ステータス] 列に表示されます。[コンテンツパックのデプロイメント] ページは自動的に更新され、最新のステータスが表示されます。インストールが完了した後、[インストールに成功しました] ステータスが表示されます。インストールに失敗すると、[インストールに失敗しました] ステータスが表示されます。

4. インストールプロセスの詳細を参照するには、[ステータス] 列の  アイコンをクリックします。[コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴] ウィンドウが開きます。このウィンドウには、コンテンツパックコンポーネントのインストールに関する現在および過去のステータスの詳細が表示されます。

**注:** すでにインストールされているコンテンツパックコンポーネントをインストールプロセス中に削除することはできません。代わりに、[コンテンツパックのデプロイメント] ページでその他の操作を実行するには、すべてのコンテンツパックコンポーネントのインストールが完了するまで待機する必要があります。



## コンテンツパックのアップグレード

1. 管理コンソールで、[コンテンツパックのデプロイメント] をクリックします。[コンテンツパックのデプロイメント] ページが表示されます。デフォルトでは、インストールされていないすべてのコンテンツパックコンポーネントがインストール用に選択されます。
2. コンテンツパックをアップグレードするには、[インストールされているバージョン] 列の  アイコンをクリックします。

**注:** アップグレードに失敗した場合は、コンテンツパックをアンインストールせず、もう一度アップグレードを試してください。

## インストール済みコンテンツパックのアンインストール

1. 管理コンソールで、[コンテンツパックのデプロイメント] をクリックします。[コンテンツパックのデプロイメント] ページが表示されます。

2. 各コンテンツパックコンポーネントの列で  アイコンをクリックし、そのコンポーネントをアンインストールします。  
[コンテンツパックコンポーネント削除の概要] ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスには、アンインストールされる選択済みコンポーネントとすべての依存コンポーネントがリストされます。
3. **[OK]** をクリックし、選択したコンテンツパックコンポーネントの削除を確認します。  
[アンインストールが開始しました] ステータスが、各コンテンツパックの **[ステータス]** 列に表示されます。[コンテンツパックのデプロイメント] ページは自動的に更新され、アンインストールの最新のステータスが表示されます。アンインストールが完了した後、**[ステータス]** 列に [アンインストールに成功しました] または [アンインストールに成功しました (警告あり)] ステータスが表示されます。アンインストールに失敗すると、[アンインストールに失敗しました] ステータスが表示されます。
4. アンインストールプロセスの詳細を参照するには、**[ステータス]** 列の  アイコンをクリックします。  
[コンテンツパックコンポーネントのステータス履歴] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには、コンテンツパックコンポーネントのアンインストールに関する現在および過去のステータスの詳細が表示されます。

**注:** **[ステータス]** 列に [アンインストールに成功しました (警告あり)] ステータスまたは [アンインストールに失敗しました] ステータスが表示されている場合は、コンテンツパックコンポーネントのアンインストールを再実行してアンインストールを成功させる必要があります。

## 第16章: トポロジーソース

[トポロジーソース] ページを使用して、RTSMおよびOMデータソース接続を作成および設定し、エンタープライズのトポロジー関連データを取得することができます。このページでOBRをスケジュール設定して、特定の間隔でデータリポジトリからデータを収集することができます。さらに、接続およびデータ収集のステータスを表示することもできます。


トポロジーソースを設定できるのは、データソースの選択ウィザードで必要なトポロジーに従ってデータソースが選択されている場合のみです。






[データソース設定] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [トポロジーソース接続の作成](#)
- [トポロジーソース接続の変更](#)
- [トポロジーソースデータ収集の有効化または無効化](#)
- [トポロジーソース収集のスケジュール設定](#)
- [トポロジーソース接続のテスト](#)
- [トポロジーソース接続のステータスの表示](#)
- [トポロジーソースデータ収集のステータスの表示](#)

[トポロジーソース] ページには、以下の項目が表示されます。

### トポロジーソース

フィールド	説明
収集頻度 (時間)	データソースからデータを収集する時間 (時間単位)。
ホスト名	サービス定義ホストシステムのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。
収集を有効にする	サービス定義データ収集を有効または無効にします。
接続状態	サービス定義ソース接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li></ul>

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	<p>最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li> は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
新規作成	新規サービス定義ソース接続を作成します。
テスト接続	サービス定義ソース接続をテストします。
編集	既存のサービス定義ソース接続を変更します。
保存	特定のサービス定義ソース設定属性を保存します。

トポロジソースにHTTPSが有効化されている場合にデータ収集を設定するには、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「トポロジソースの設定」セクションを参照してください。

## 接続パラメーター: RTSM

フィールド	説明
ホスト名	Business Service ManagementサーバーのIPアドレスまたはFQDN。Business Service Managementデプロイメントが分散している場合は、ゲートウェイサーバーの名前をこのフィールドに入力します。
ポート	RTSM Webサービスに照会するためのポート番号。デフォルトポートは80です。
ユーザー名	RTSM Webサービスユーザーの名前。
パスワード	RTSM Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

## 接続パラメーター. OM

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。OM for Windowsが選択されている場合、このオプションは表示されません。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ]に[ORACLE]が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化]が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化]が選択されている場合に表示されます。
データソースのタイプ	環境で設定されているOMのタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• OM for Windows</li> <li>• OM for UNIX</li> <li>• OM for LINUX</li> <li>• OM for Solaris</li> </ul>
データベースタイプ	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。OM for Windowsデータソースタイプの場合、データベースタイプはMSSQLです。OM for Unix、OM for Linux、OM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのデータベースが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ホスト名は表示されません。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、データベースインスタンスは表示されません。
データベース名	OMデータベースの名前。このフィールドは、データソースタイプとしてOM for Windowsが選択されている場合のみ表示されます。データベースの名前

フィールド	説明
	はopenviewです。

## 接続パラメーター: VMware vCenter

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使われます。

## トポロジソース接続の作成

RTSMトポロジソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. [トポロジソース] で、必要なトポロジソースが選択されていることを確認します。
3. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
4. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	Business Service Management (BSM) サーバーのIPアドレスまたはFQDN。BSMデプロイメントが分散している場合は、ゲートウェイサーバーの名前をこのフィールドに入力します。  <b>注:</b> 複数のゲートウェイサーバーとロードバランサーが設定された分散BSMデプロイメントでは、ロードバランサーの仮想IPアドレスをこのフィールドに入力します。
ポート	RTSM Webサービスに照会するためのポート番号。ポート番号

フィールド	説明
	は80です。
ユーザー名	RTSM Webサービスユーザーの名前。
パスワード	RTSM Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

5. **[OK]** をクリックします。
6. **[保存]** をクリックします。
7. メッセージボックスで、**[はい]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**注:** 単一のRTSMデータソース接続を作成することができます。データソース接続が作成された場合、**[新規作成]** ボタンはデフォルトで無効になっています。

#### OMトポロジソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[トポロジソース]** をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. **[トポロジソース]** で、必要なトポロジソースが選択されていることを確認します。
3. **[新規作成]** をクリックします。  
**[接続パラメーター]** ダイアログボックスが表示されます。

**注:** 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

4. 次のフィールドに入力します。

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。OM for Windowsが選択されている場合、このオプションは表示されません。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、 <b>[データベースタイプ]</b> に <b>[ORACLE]</b> が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効]</b>



フィールド	説明
	化] が選択されている場合に表示されます。
Truststore/パスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
データソースのタイプ	環境で設定されているOMのタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ OM for Windows</li> <li>○ OM for UNIX</li> <li>○ OM for LINUX</li> <li>○ OM for Solaris</li> </ul>
データベースタイプ	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。OM for Windowsデータソースタイプの場合、データベースタイプはMSSQLです。OM for Unix、OM for Linux、OM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのデータベースが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ホスト名は表示されません。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、データベースインスタンスは表示されません。
データベース名	OMデータベースの名前。このフィールドは、データソースタイプとしてOM for Windowsが選択されている場合にのみ表示されます。データベースの名前はopenviewです。
ポート	OMデータベースサーバーを照会するためのポート番号。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ポート番号は表示されません。

フィールド	説明
	ポート番号を確認するには、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』のセクション「OMサーバーのポート番号の確認」を参照してください。
Windows認証	OMデータベースにアクセスするためのWindows認証を有効にするためのオプション。ユーザーは、データベースをホスティングしているWindowsシステムのアクセス資格情報と同じ情報を使用してOMIにアクセスすることができます。  このオプションは、データソースタイプとしてOM for Windowsが選択されている場合にのみ表示されます。
ユーザー名	OMデータベースユーザーの名前。  <b>注：</b> OM for Windowsデータソースタイプで [Windows認証] オプションが選択されている場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	OMデータベースユーザーのパスワード。  <b>注：</b> OM for Windowsデータソースタイプで [Windows認証] オプションが選択されている場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

5. **[OK]** をクリックします。
6. **[保存]** をクリックします。
7. メッセージボックスで、**[はい]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**注：** OM for WindowsとともにインストールされるデフォルトのSQL Server Expressはリモート接続を受け入れません。

新しく作成されるサービス定義データソースのデータ収集はデフォルトで有効になります。さらに、収集の頻度は24時間ごとにスケジュールされています。

**注：** [サービス定義] ページでOMのデータソース接続を作成すると、[Operation Manager] ページにも同じデータソース接続が表示されます。ただし、[サービス定義] ページでデータソース接続を更新しても、[Operations Manager] ページの接続の詳細は更新されません。

VMware vCenterトポロジソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. [トポロジソース] で、必要なトポロジソースが選択されていることを確認します。
3. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
4. 次のフィールドに入力します。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

5. [OK] をクリックします。
6. [保存] をクリックします。
7. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## トポロジソース接続の変更

RTSMトポロジソース接続を変更するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 特定のホストについて、[編集] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の接続パラメーターを入力します。

フィールド	説明
ホスト名	Business Service ManagementサーバーのIPアドレスまたはFQDN。

フィールド	説明
	作成プロセスでホスト名を指定した後に変更することはできません。このフィールドはデフォルトでは無効になっています。
ポート	RTSM Webサービスに照会するためのポート番号。デフォルトポートは80です。
ユーザー名	RTSM Webサービスユーザーの名前。デフォルトのユーザー名はadminです。
パスワード	RTSM Webサービスユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

#### OMTポロジソース接続を変更するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[トポロジソース]** を選択します。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 特定のホストについて、**[編集]** をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。

**注:** 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

3. **[接続パラメーター]** ダイアログボックスで、次の接続パラメーターを入力します。

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。OM for Windowsが選択されている場合、このオプションは表示されません。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、 <b>[データベースタイプ]</b> に <b>[ORACLE]</b> が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。

フィールド	説明
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化]が選択されている場合に表示されます。
データソースのタイプ	環境で設定されているOMのタイプを選択します。オプションには次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ OM for Windows</li> <li>○ OM for UNIX</li> <li>○ OM for LINUX</li> <li>○ OM for Solaris</li> </ul>
データベースタイプ	選択するデータソースタイプに応じて、データベースタイプが自動的に選択されます。OM for Windowsデータソースタイプの場合、データベースタイプはMSSQLです。OM for Unix、OM for Linux、OM for Solarisの場合、データベースタイプはOracleです。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのデータベースが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ホスト名は表示されません。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、データベースインスタンスは表示されません。
データベース名	OMデータベースの名前。このフィールドは、データソースタイプとしてOM for Windowsが選択されている場合にのみ表示されます。データベースの名前はopenviewです。
ポート	OMデータベースサーバーを照会するためのポート番号。データベースタイプがOracleで、Oracle RACの管理DBが選択されている場合、ポート番号は表示されません。

フィールド	説明
	ポート番号を確認するには、『Operations Bridge Reporter 設定ガイド』のセクション「OMサーバーのポート番号の確認」を参照してください。
Windows 認証	OMデータベースにアクセスするためのWindows 認証を有効にするためのオプション。ユーザーは、データベースをホスティングしているWindowsシステムのアクセス資格情報と同じ情報を使用してOMIにアクセスすることができます。  このオプションは、データソースタイプとしてOM for Windowsが選択されている場合にのみ表示されます。
ユーザー名	OMデータベースユーザーの名前。  注：OM for Windowsデータソースタイプで [Windows 認証] オプションが選択されている場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	OMデータベースユーザーのパスワード。  注：OM for Windowsデータソースタイプで [Windows 認証] オプションが選択されている場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

### VMware vCenter トポロジソース接続を変更するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 特定のホストについて、[編集] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の接続パラメーターを入力します。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterサーバーのIPアドレスまたはFQDN。

フィールド	説明
ユーザー名	VMware vCenterユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使われます。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックします。
6. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## トポロジソースデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 特定のホストについて、次のいずれかの手順を実行します。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## トポロジソース収集のスケジュール設定

RTSMトポロジソース収集をスケジュール設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[収集頻度 (時間)] 列の [時] ボックスに1～24時間の同期時間を指定します。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**OMT ポロジソース収集をスケジュール設定するには、次の手順を実行します。**

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[収集頻度 (時間)] の下にある [時] ボックスに1~24時間の同期時間を指定し、[適用] をクリックします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**VMware vCenterトポロジソース収集をスケジュール設定するには、次の手順を実行します。**

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[収集頻度 (時間)] の下にある [時] ボックスに1~24時間の同期時間を指定し、[適用] をクリックします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## トポロジソース接続のテスト

**RTSMトポロジソース接続をテストするには、次の手順を実行します。**

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 必要なホストを選択し、[テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**注:** RTSMトポロジソースへのテスト接続は、OracleビューがRTSMに存在する場合にのみ成功します。

**OMTポロジソース接続をテストするには、次の手順を実行します。**

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 必要なホストを選択し、[テスト接続] をクリックします。



**注:** 複数のOM接続を一度にテストすることはできません。

接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました]というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



**VMware vCenterトポロジソース接続をテストするには、次の手順を実行します。**

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. 必要なホストを選択し、[テスト接続] をクリックします。

**注:** 複数のVMware vCenter接続を一度にテストすることはできません。





接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました]というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## トポロジソース接続のステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. [接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## トポロジソースデータ収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [トポロジソース] をクリックします。  
[トポロジソース] ページには、以下の項目が表示されます。
2. [収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。  
最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

-  は、データ収集が進行中であることを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
-  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

VMware vCenterがトポロジソースの場合は、[収集ステータス]列は表示されません。



## 第17章: Operation Manager

[Operations Manager] ページを使用して、OMデータソースのリストを表示することができます。これにより、エンタープライズのビジネスに不可欠なシステム、アプリケーション、およびサービスのパフォーマンスとイベント関連データが収集されます。このページを使用して、データ収集頻度のスケジュール設定、データ収集の有効化または無効化、さらに要件に応じたデータ収集接続の追加または削除も行うことができます。

[Operations Manager] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [OMデータソース接続の作成](#)
- [OMデータソース接続の変更](#)
- [OMデータ収集の有効化](#)
- [OMデータ収集のスケジュール設定](#)
- [OMデータソース接続のテスト](#)
- [OMデータソース接続のステータスの表示](#)
- [OMデータ収集ステータスの表示](#)
- [OMデータソース接続の削除](#)

[Operations Manager] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
ホスト名/サービス名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	OMデータ収集を有効または無効にします。
頻度のスケジュール	OBRデータベースをOMデータソースと同期させる時間 (時間単位)。
ステータス	OM接続およびデータ収集ステータス。
接続	OM接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li></ul>
収集	最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>🔄 は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li>✅ は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li>❌ は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li>🕒 は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	OMデータソース接続をテストします。
削除	OMデータソース接続を削除します。
新規作成	新規OMデータソース接続を作成します。
編集	既存のOMデータソース接続を変更します。
保存	特定のOM設定属性を保存します。

## 接続パラメーター

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。
ポート	OMデータベースサーバーを照会するためのポート番号。SQL Serverがデータベースタイプの場合のデフォルトポートは1433、Oracleがデータベースタイプの場合は1521です。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。  <b>注:</b> データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細は、OMデータベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。

フィールド	説明
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。  <b>注:</b> 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。
ユーザー名	OMデータベースユーザーの名前。
パスワード	OMデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース] が選択されている場合:</b>	
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化] が選択されている場合:</b>	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択

フィールド	説明
	されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

## OMデータソース接続の作成

**注:** [トポロジソース] ページでOMのデータソース接続を作成すると、[Operation Manager] ページにも同じデータソース接続が表示されます。ただし、[トポロジソース] ページでデータソース接続を更新しても、[Operation Manager] ページの接続の詳細は更新されません。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Manager] をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。

**注:** 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。

3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。

フィールド	説明
ポート	OMデータベースサーバーを照会するためのポート番号。SQL Serverがデータベースタイプの場合のデフォルトポートは1433、Oracleがデータベースタイプの場合には1521です。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。  <b>注:</b> データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細は、OMデータベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。  <b>注:</b> 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。
ユーザー名	OMデータベースユーザーの名前。
パスワード	OMデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース] が選択されている場合:</b>	
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで

フィールド	説明
	使用します。
<b>[TLSの有効化] が選択されている場合:</b>	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

#### 4. [保存] をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したOMデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

## OMデータソース接続の変更

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Manager] をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 変更する必要がある特定のホストの列を選択し、[編集] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。

**注:** 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指



定する必要があります。

3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	Oracle RACのOMデータベースを有効にするためのオプション。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	OMデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。OMデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。
ポート	OMデータベースサーバーを照会するためのポート番号。SQL Serverがデータベースタイプの場合のデフォルトポートは1433、Oracleがデータベースタイプの場合には1521です。
データベースインスタンス	データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。デフォルトのデータベースインスタンスはOVOPSです。  <b>注:</b> データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細は、OMデータベース管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。  <b>注:</b> 認証にデータベースの方法を使用してOMデータベースサーバーに接続している場合は、"openview" データベースのSELECT権限とCONNECT権限を持つユーザーの詳細をここで指定する必要があります。
ユーザー名	OMデータベースユーザーの名前。
パスワード	OMデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース] が選択されている場合:</b>	
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle

フィールド	説明
	RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化] が選択されている場合：</b>	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
サービス名	OBRがOracleインスタンスに接続する際の名前を指定します。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
ORAファイル名	接続を確立するためのデータベースアドレスを定義する*.ora設定ファイル。このファイルをデータソースシステムからOBRシステムの{PMDB_HOME}/configフォルダーに手動でコピーします。Oracle RACのOMが選択されている場合のみ、このオプションが表示されます。
データベースタイプ	OMデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	データベースユーザーの名前。
パスワード	データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. **[保存]** をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[Operations Manager]** をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 1つ以上のホストの場合、次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - **[収集を有効にする]** 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - **[収集を有効にする]** 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMデータ収集のスケジュール設定

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[Operations Manager]** をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 1つ以上のホストについて、**[頻度のスケジュール]** 列内の **[時]** ボックスに1～24時間の収集時間を指定します。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## OMデータソース接続のテスト

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[Operations Manager]** をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 接続をテストする特定のホストを選択します。





**注:** 複数のOM接続を一度にテストすることはできません。

3. **[テスト接続]** をクリックします。  
接続が存在する場合は、**[テスト接続が成功しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMデータソース接続のステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Manager] をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 1つ以上のホストについて、[接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## OMデータ収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Manager] をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 1つ以上のホストについて、[収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。  
最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。
  -  は、データ収集が進行中であることを示します。
  -  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
  -  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
  -  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

## OMデータソース接続の削除

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Manager] をクリックします。  
[Operations Manager] ページが開きます。
2. 1つ以上のOMデータソース接続を削除する列を選択します。
3. [削除] をクリックします。  
[正常に削除しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。






## 第18章: SiteScope

SiteScopeページを使用して、環境内の複数のSiteScopeモニターからデータを収集する、SiteScopeデータソースを設定できます。このページを使用すると、データ収集を有効化または無効化したり、要件に応じてデータ収集接続を追加または削除することができます。

[SiteScope] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [SiteScopeのデータソース接続の作成](#)
- [SiteScopeデータソース接続の変更](#)
- [SiteScopeデータ収集の有効化または無効化](#)
- [SiteScopeデータソース接続のテスト](#)
- [SiteScopeデータソース接続のステータスの表示](#)
- [SiteScopeデータ収集ステータスの表示](#)
- [SiteScopeデータソース接続の削除](#)

[SiteScope] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	データ収集を有効または無効にします。
接続状態	SiteScope接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li></ul>
収集ステータス	最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、データ収集が進行中であることを示します。</li><li>•  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li><li>•  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li></ul>

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>□□ は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	SiteScopeデータソース接続のテスト。
データソースの検出	RTSMTポロジソースを設定している場合、このボタンは関連付けられたすべてのSiteScopeサーバーを検出します。また、SiS_Profileビューをデプロイ済みである必要があります。
新規作成	新規 SiteScopeデータソース接続を作成します。  <b>注:</b> 新規接続の作成後、またはSiteScope接続がすでに存在する場合、[新規作成] オプションは無効です。
編集	既存のSiteScopeデータソース接続を変更します。
削除	SiteScopeデータソース接続を削除します。
保存	このページで行われた変更を保存します。

## 接続パラメーター

新規 SiteScopeデータソースを作成するには次のフィールドに記入する必要があります。

フィールド	説明
<b>接続設定</b>	
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	SiteScopeサーバーを照会するためのポート番号。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
ユーザー名	現在のSiteScopeユーザーの名前。
パスワード	SiteScopeユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<p><b>一般的なデータ統合の設定:</b> これらの設定はSiteScopeサーバーとOBRサーバーとの間の汎用データ統合を作成します。接続が正常に確立すると、SiteScopeサーバーはデータをOBRサーバーにプッシュします。</p> <p>また、レポート対象となるSiteScopeモニターに手動で適用しなくてはならないタグをOBRで作成する必要があります。タグの適用の詳細については、SiteScopeのマニュアルを参照してください。</p>	

フィールド	説明
統合の作成	SiteScopeサーバーとOBRサーバー間に統合を作成するチェックボックス。
統合名	統合の名前を入力します。  注: 後で変更することはできません。
エンコーディング	OBRとSiteScopeとの間の通信で使用するエンコーディングのタイプ。
Init文字列	SiteScopeサーバーへの接続を確立するために使用される共有キー。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
レポート間隔 (秒)	(ユーザー設定可能) SiteScopeがデータをOBRにプッシュする頻度。
要求のタイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続がタイムアウトになるまでに待機する時間。ゼロ (0) の値にするとタイムアウト期間が無限になります。
接続タイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続が再確立されるまでのタイムアウト。ゼロ (0) の値にするとタイムアウトは適用されません。
再試行回数	OBRとの接続エラーの発生中にSiteScopeサーバーが試みる再試行の回数。
要求時に認証	オプションで、選択した場合、Webサーバーのユーザー名とパスワードを使用して認証が実行されます。
認証ユーザー名	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。
認証パスワード	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。
プロキシアドレス	SiteScope上でプロキシが有効な場合、プロキシアドレスを入力します。
プロキシユーザー名	プロキシサーバーのユーザー名を入力します。
プロキシパスワード	プロキシサーバーのパスワードを入力します。
タグの作成	選択すると、SiteScopeサーバーから手動で適用する必要がある、SiteScopeモニター用のタグを作成します。
タグ名	タグのユーザー定義名。

## SiteScopeのデータソース接続の作成

新規SiteScopeデータソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [SiteScope] をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
<b>接続設定</b>	
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	SiteScopeサーバーを照会するためのポート番号。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
ユーザー名	現在のSiteScopeユーザーの名前。
パスワード	SiteScopeユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<p><b>一般的なデータ統合の設定:</b> これらの設定はSiteScopeサーバーとOBRサーバーとの間の汎用データ統合を作成します。接続が正常に確立すると、SiteScopeサーバーはデータをOBRサーバーにプッシュします。</p> <p>また、レポート対象となるSiteScopeモニターに手動で適用しなくてはならないタグをOBRで作成する必要があります。タグの適用の詳細については、SiteScopeのマニュアルを参照してください。</p>	
統合の作成	SiteScopeサーバーとOBRサーバー間に統合を作成するチェックボックス。
統合名	統合の名前を入力します。 <b>注:</b> 後で変更することはできません。
エンコーディング	OBRとSiteScopeとの間の通信で使用するエンコーディングのタイプ。
Init文字列	SiteScopeサーバーへの接続を確立するために使用される共有キー。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
レポート間隔 (秒)	(ユーザー設定可能) SiteScopeがデータをOBRにプッシュする頻度。
要求のタイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続がタイムアウトになるまでに待機する時間。ゼロ (0) の値にするとタイムアウト期間が無限になります。



フィールド	説明
接続タイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続が再確立されるまでのタイムアウト。ゼロ (0) の値にするとタイムアウトは適用されません。
再試行回数	OBRとの接続エラーの発生中にSiteScopeサーバーが試みる再試行の回数。
要求時に認証	オプションで、選択した場合、Webサーバーのユーザー名とパスワードを使用して認証が実行されます。
認証ユーザー名	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。
認証パスワード	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。
プロキシアドレス	SiteScope上でプロキシが有効な場合、プロキシアドレスを入力します。
プロキシユーザー名	プロキシサーバーのユーザー名を入力します。
プロキシパスワード	プロキシサーバーのパスワードを入力します。
タグの作成	選択すると、SiteScopeサーバーから手動で適用する必要がある、SiteScopeモニター用のタグを作成します。
タグ名	タグのユーザー定義名。

4. **[保存]** をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新しく作成したSiteScopeデータソース接続に対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。また、収集の頻度は15分ごとにスケジュール設定されています。

## SiteScopeのデータソース接続の変更

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[SiteScope]** をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. 変更する必要がある特定のホストの列を選択し、**[編集]** をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. **[接続パラメーター]** ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
<b>接続設定</b>	
ホスト名	SiteScopeサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	SiteScopeサーバーを照会するためのポート番号。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
ユーザー名	現在のSiteScopeユーザーの名前。
パスワード	SiteScopeユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<p><b>一般的なデータ統合の設定:</b>  これらの設定はSiteScopeサーバーとOBRサーバーとの間の汎用データ統合を作成します。接続が正常に確立すると、SiteScopeサーバーはデータをOBRサーバーにプッシュします。</p> <p>また、レポート対象となるSiteScopeモニターに手動で適用しなくてはならないタグをOBRで作成する必要があります。タグの適用の詳細については、SiteScopeのマニュアルを参照してください。</p>	
統合の作成	SiteScopeサーバーとOBRサーバー間に統合を作成するチェックボックス。
統合名	統合の名前を入力します。  <b>注:</b> 後で変更することはできません。
エンコーディング	OBRとSiteScopeとの間の通信で使用するエンコーディングのタイプ。
Init文字列	SiteScopeサーバーへの接続を確立するために使用される共有キー。
SSLを使用	オプションで、選択した場合、SiteScopeサーバーもSecure Sockets Layer (SSL) での通信をサポートするよう有効化する必要があります。
レポート間隔 (秒)	(ユーザー設定可能) SiteScopeがデータをOBRにプッシュする頻度。
要求のタイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続がタイムアウトになるまでに待機する時間。ゼロ (0) の値にするとタイムアウト期間が無限になります。
接続タイムアウト (秒)	ユーザー設定可能な、接続が再確立されるまでのタイムアウト。ゼロ (0) の値にするとタイムアウトは適用されません。
再試行回数	OBRとの接続エラーの発生中にSiteScopeサーバーが試みる再試行の回数。
要求時に認証	オプションで、選択した場合、Webサーバーのユーザー名とパスワードを使用して認証が実行されます。

フィールド	説明
認証ユーザー名	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのユーザー名を指定します。
認証パスワード	OBRがBasic認証を使用するよう設定されている場合、サーバーにアクセスするためのパスワードを指定します。
プロキシアドレス	SiteScope上でプロキシが有効な場合、プロキシアドレスを入力します。
プロキシユーザー名	プロキシサーバーのユーザー名を入力します。
プロキシパスワード	プロキシサーバーのパスワードを入力します。
タグの作成	選択すると、SiteScopeサーバーから手動で適用する必要がある、SiteScopeモニター用のタグを作成します。
タグ名	タグのユーザー定義名。

4. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## SiteScopeデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[SiteScope]** をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. 次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - **[収集を有効にする]** 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - **[収集を無効にする]** 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。





## SiteScopeデータソース接続のテスト

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[SiteScope]** をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. テストする特定のホストを選択し、**[テスト接続]** をクリックします。  
接続が存在する場合は、**[テスト接続が成功しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## SiteScope データソース接続のステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [SiteScope] をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. [接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## SiteScope データ収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [SiteScope] をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. [収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。  
最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。
  -  は、データ収集が進行中であることを示します。
  -  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
  -  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
  -  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

## SiteScope データソース接続の削除

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [SiteScope] をクリックします。  
[SiteScope] ページが開きます。
2. [削除] をクリックします。  
[正常に削除しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 第19章: 汎用データベース


[汎用データベース] ページを使用して、あらゆるデータタイプの収集元である汎用データベースを設定することができます。このページは、通常はNetwork Node Manager i (NNMi) からパフォーマンスデータを収集するようNetwork Performance Server (NPS)を設定するために使用されます。このページを使用して、データ収集頻度のスケジュール設定、データ収集の有効化または無効化、さらに要件に応じたデータ収集接続の追加または削除も行うことができます。

OBRでは、Oracle、Sybase、またはMicrosoft SQL Serverデータベースタイプを使用する汎用データソースに対する設定を最初からサポートしています(特別な設定をする必要はありません)。ただし、このページを使用すると、MySQLやPostgreSQLのようなその他のタイプの汎用データベースに接続してデータを収集するようにOBRを設定することもできます。特定のデータベースタイプに対して、OBRがシステムデータやネットワークデータなどのデータを収集するドメインを指定できます。このようなデータソースの設定方法の詳細については、HPEサポートにお問い合わせください。

[Operations Manager] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [汎用データベース接続の作成](#)
- [汎用データベース接続の変更](#)
- [汎用データベースのデータ収集の有効化または無効化](#)
- [汎用データベースのデータ収集のスケジュール設定](#)
- [汎用データベース接続のテスト](#)
- [汎用データベースの接続ステータスの表示](#)
- [汎用データベースの収集ステータスの表示](#)
- [汎用データベース接続の削除](#)

[汎用データベース] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
ホスト名	汎用データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	汎用データベースからのデータ収集を有効または無効にします。
頻度のスケジュール	OBRデータベースを汎用データベースと同期させる時間(時間単位)。
接続状態	汎用データベース接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li></ul>

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>❌ は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	<p>最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>⬆️ は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li>✅ は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li>❌ は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li>🕒 は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
設定	既存の汎用データベース接続を変更します。
テスト接続	汎用データベース接続をテストします。
削除	汎用データベース接続を削除します。
新規作成	新規汎用データベース接続を作成します。
保存	特定の汎用データベース属性を保存します。

## 接続パラメーター

フィールド	説明
ホスト名	汎用データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。 <b>注:</b> データソースから収集されるデータのタイムゾーンと同じタイムゾーンを選択する必要があります。異なるタイムゾーンに設定することはできません。
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Sybase IQ、Sybase ASE、Oracle、PostgreSQL、VerticaまたはMSSQLのいずれかです。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからOBRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスのURL。各データベースタイプに対するURLの構文は次のとおりです。

フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>Oracle:</b> jdbc:hp:oracle://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;;SID=&lt;sid&gt;</li> </ul> <p>Oracle Real Application Cluster (RAC) で、TNS ORAファイルをOBRシステムにコピーし、次のURL構文内に絶対パスを入力します。</p> <pre>jdbc:hp:oracle:TNSNamesFile=&lt;TNS ORAファイルの絶対パス&gt;;TNSServerName=&lt;サービス名&gt;</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li>• <b>MSSQL:</b> jdbc:jtds:sqlserver://&lt;サーバー&gt; &lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;;instance=&lt;DBインスタンス&gt;</li> <li>• <b>Sybase IQ:</b> jdbc:sybase:Tds:&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> <li>• <b>Sybase ASE:</b> jdbc:sybase:Tds:&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;?ServiceName=&lt;DBインスタンス&gt;</li> <li>• <b>PostgreSQL:</b> jdbc:postgresql://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> <li>• <b>Vertica:</b> jdbc:vertica://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> </ul> <p>ここで、&lt;サーバー&gt;、&lt;ポート&gt;、&lt;SID&gt;、&lt;データベース&gt;、&lt;DBインスタンス&gt;は入力する必要のある置換可能な変数です。</p>
ユーザー名	汎用データベースユーザーの名前。
パスワード	汎用データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

## 汎用データベース接続の作成

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	汎用データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。
タイムゾーン	データをソースデータベースに保存するタイムゾーン。

フィールド	説明
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Sybase IQ、Sybase ASE、Oracle、MSSQL、PostgreSQL、またはVerticaのいずれかです。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからOBRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	<p>データベースインスタンスのURL。各データベースタイプに対するURLの構文は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>Oracle:</b> jdbc:hp:oracle://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;;SID=&lt;sid&gt;</li> </ul> <p>Oracle Real Application Cluster (RAC) で、TNS ORAファイルをOBRシステムにコピーし、次のURL構文内に絶対パスを入力します。</p> <pre>jdbc:hp:oracle:TNSNamesFile=&lt;TNS ORAファイルの絶対パス&gt;;TNSServerName=&lt;サービス名&gt;</pre> <ul style="list-style-type: none"> <li><b>MSSQL:</b> jdbc:jtds:sqlserver://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;;instance=&lt;DBインスタンス&gt;</li> <li><b>Sybase IQ:</b> jdbc:sybase:Tds:&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> <li><b>Sybase ASE:</b> jdbc:sybase:Tds:&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;?ServiceName=&lt;DBインスタンス&gt;</li> <li><b>PostgreSQL:</b> jdbc:postgresql://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> <li><b>Vertica:</b> jdbc:vertica://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース&gt;</li> </ul> <p>ここで、&lt;サーバー&gt;、&lt;ポート&gt;、&lt;SID&gt;、&lt;データベース&gt;、&lt;DBインスタンス&gt;は入力する必要のある置換可能な変数です。</p>
ユーザー名	汎用データベースユーザーの名前。
パスワード	汎用データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	コントローラーがインストールされているシステムの名前。

#### 4. [保存] をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

#### 注: データソースとしてのSybase IQ

Sybase IQをデータソースとして設定していて、ネットワークデータソースを設定しても収集が実行されていない場合は、次の手順を実行してください。

1. Sybase IQサーバーからjconn4.jarを\$PMDB\_HOME/libディレクトリにコピーします。



2. 収集サービスを再起動します。

**注:** リモートコレクターから収集するよう汎用DBが設定されている場合、jconn4.jarファイルをコレクターシステムに手動でコピーし、汎用データベースの設定を継続する必要があります。

jconn4.jarファイルをコピーするには、次の手順に従います。

1. 汎用DBサーバーからjconn4.jarをコレクターシステム上の\$PMDB\_HOME/libディレクトリにコピーします。
2. 収集サービスを再起動します。

## 汎用データベース接続の変更

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 変更する必要がある特定のホストの列を選択し、[編集] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	汎用データベースサーバーのアドレス (IPまたは名前)。
ポート	データベースサーバーを照会するためのポート番号。
タイムゾーン	データベースインスタンスが設定されるタイムゾーン。
データベースタイプ	汎用データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Sybase IQ、Sybase ASE、Oracle、PostgreSQL、VerticaまたはMSSQLのいずれかです。
ドメイン	選択されたデータベースタイプからOBRがデータを収集するドメインを選択します。
URL	データベースインスタンスのURL。各データベースタイプに対するURLの構文は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li> <b>Oracle:</b> jdbc:hp:oracle://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;;SID=&lt;sid&gt;  Oracle Real Application Cluster (RAC) で、TNS ORAファイルをOBRシステムにコピーし、次のURL構文内に絶対パスを入力します。  jdbc:hp:oracle:TNSNamesFile=&lt;TNS ORAファイルの絶対パス&gt;;TNSServerName=&lt;サービス名&gt; </li> <li> <b>MSSQL:</b> jdbc:jtds:sqlserver://&lt;サーバー&gt;:&lt;ポート&gt;/&lt;データベース </li> </ul>

フィールド	説明
	>;instance=<DBインスタンス> ○ <b>Sybase IQ:</b> jdbc:sybase:Tds:<サーバー>:<ポート>/<データベース> ○ <b>Sybase ASE:</b> jdbc:sybase:Tds:<サーバー>:<ポート>?ServiceName=<DBインスタンス> ○ <b>PostgreSQL:</b> jdbc:postgresql://<サーバー>:<ポート>/<データベース> ○ <b>Vertica:</b> jdbc:vertica://<サーバー>:<ポート>/<データベース> ここで、<サーバー>、<ポート>、<SID>、<データベース>、<DBインスタンス>は入力する必要のある置換可能な変数です。
ユーザー名	汎用データベースユーザーの名前。
パスワード	汎用データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	コントローラーがインストールされているシステムの名前。

4. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 汎用データベースのデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[汎用データベース]** をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストの場合、次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - **[収集を有効にする]** 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - **[収集を有効にする]** 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 汎用データベースのデータ収集のスケジュール設定

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[汎用データベース]** をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。



2. 1つ以上のホストについて、[頻度のスケジュール] 列内の[時] ボックスに1～24時間の収集時間を指定します。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 汎用データベース接続のテスト

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 特定のデータベース接続の列を選択します。  





注: 複数の接続を一度にテストすることはできません。
3. [テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 汎用データベースの接続ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## 汎用データベースの収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。  
最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

-  は、データ収集が進行中であることを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
-  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

## 汎用データベース接続の削除

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [汎用データベース] をクリックします。  
[汎用データベース] ページが表示されます。
2. 1つ以上のデータベース接続を削除する列を選択します。
3. [削除] をクリックします。  
[正常に削除しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## 第20章: VMware vCenter

[VMware vCenter Data Source] ページを使用して、VMware vCenterデータソースのリストを表示することができます。これにより、VMwareによってお使いの環境にインストールされたパフォーマンスとビジネスに不可欠なイベント関連データが収集されます。このページを使用して、データ収集頻度のスケジュール設定、データ収集の有効化または無効化、さらに要件に応じたデータ収集接続の追加または削除も行うことができます。

[VMware vCenter] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- [VMware vCenterデータソース接続の作成](#)
- [VMware vCenterデータソース接続の変更](#)
- [VMware vCenterデータ収集の有効化](#)
- [VMware vCenterデータ収集のスケジュール設定](#)
- [VMware vCenterデータソース接続のテスト](#)
- [VMware vCenterデータソース接続のステータスの表示](#)

[VMware vCenterデータソース] ページには、次のものが含まれます。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	VMware vCenterデータソースのデータ収集の有効化または無効化。
頻度のスケジュール	OBRデータベースをVMware vCenterデータソースと同期させる時間 (分単位)。
接続状態	VMware vCenter接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li><li>•  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li></ul>
編集	既存のVMware vCenterデータソース接続を変更します。
テスト接続	VMware vCenterデータソース接続のテスト。
新規作成	新規VMware vCenterデータソース接続を作成します。
保存	特定のVMware vCenter設定属性を保存します。

## 接続パラメーター

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。VMware vCenterデータベースがリモートシステム上で設定されている場合は、リモートシステムのマシン名をここで入力する必要があります。
ユーザー名	VMware vCenterデータベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

注: トポロジソースとしてVMware vCenterを設定していた場合は、データ収集パラメーターは自動的に設定されます。

## VMware vCenterデータソース接続の作成

注: [トポロジソース] ページでVMware vCenterのデータソース接続を作成すると、[VMware vCenterデータ収集] ページにも同じデータソース接続が表示されます。[VMware vCenter収集設定] ページから、追加のデータソースを作成することができます。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterデータベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	コントローラーがインストールされているシステムの名前。

4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

新たに作成したVMware vCenterデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

## VMware vCenterデータソース接続の変更

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. 変更する必要がある特定のホストの列を選択し、[編集] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
ホスト名	VMware vCenterデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
ユーザー名	VMware vCenterデータベースユーザーの名前。
パスワード	VMware vCenterデータベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	コントローラーがインストールされているシステムの名前。

4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## VMware vCenterのデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストの場合、次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## VMware vCenterデータ収集のスケジュール設定

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[頻度のスケジュール] 列内の [分] ボックスに5～60分の収集時間を指定します。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## VMware vCenterデータソース接続のテスト

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. 特定のVMware vCenter接続ホストを選択します。

**注:** 複数のVMware vCenter接続を一度にテストすることはできません。

3. [テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## VMware vCenterデータソース接続のステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [VMware vCenter] をクリックします。  
[VMware vCenter] ページが表示されます。
2. 1つ以上のホストについて、[接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

VMware vCenterデータソースの設定の詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「VMware vCenterデータソースの設定」セクションを参照してください。



## 第21章: Operations Agent (OA)

[Operations Agent (OA)] ページを使用して、Operations Agentのデータ収集を管理することができます。Operations Agentの新規データソース接続を作成する必要はありません。これは、トポロジデータの収集時に、Operations Agentがインストールされているすべてのノードがデフォルトで自動的に検出されるためです。これらのデータソースまたはノードは、[Operations Agent] ページにリストされています。このページを使用すると、Operations Agentのデータ収集のスケジュール設定、データ収集の有効化または無効化、Operations Agentの接続の削除を行うことができます。

[Operations Agent] ページを使用して、以下を行います。

- [Operations Agentデータソースの詳細の表示](#)
- [Operations Agentデータソースのデータ収集の有効化](#)
- [Operations Agentデータソース同期のスケジュール設定](#)
- [Operations Agentデータソース接続のテスト](#)
- [データ収集のためのビュー/ノードグループベースのルールの割り当て](#)
- [データ収集のためのパターンベースのルールの割り当て](#)

[Operations Agentデータソース] ページには、以下の項目が表示されます。

**[ホスト] タブ: Operations Agentデータソースのサマリー**

フィールド	説明
ETLコンテンツパックコンポーネント名	インストールされているコンテンツパックのトポロジビューのリスト。これらのトポロジビューには、Operations Agentコレクターが関連データを収集するために使用する特定のCI属性が含まれています。  [すべて] は、すべてのビューを示します。[未割り当て] は、どのトポロジビューも割り当てられていないOperations Agentデータソースを示します。
ホスト	特定のビューのOperations Agentデータソースの数。
パス	未処理のデータが正常に収集された別個のOperations Agentデータソースの数。
失敗	データの収集に失敗した別個のOperations Agentデータソースの数。
未収集	データが収集されなかった別個のOperations Agentデータソースの数。
有効	データ収集を有効にされている別個のOperations Agentデータソースの数。

フィールド	説明
無効	データ収集を無効にされている別個のOperations Agentデータソースの数。

**[ホスト] タブ: ホスト: <ETLコンテンツバックコンポーネント名>**

OBRには、Operations AgentがインストールされているOMTポロジから検出されたすべての管理対象ノードが表示されます。OM for Windows環境では、テーブルにメッセージが許可されたノードもリスト表示されます。ただし、メッセージが許可されたノードは、ライセンスの計算に影響しません。

フィールド	説明
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
有効	Operations Agentデータソースのデータ収集を選択するオプション。
収集頻度	OBRデータベースをOperations Agentデータソースと同期させる時間 (時間単位)。 分は15分単位で設定できます。
割り当て済みコレクター	OBRで設定されたデータ収集に対して有効化されているリモートコレクターのリスト。
コレクター割り当てモード	リモートコレクターで適用可能なルールのリスト。  ユーザー: 事前に割り当て済みのルールを上書きするとき、またはホストにリモートコレクターを手動で割り当てるときに選択します。  システム: リモートコレクターの割り当てが[割り当て]タブからユーザーによって指定されたルールに基づく場合。  未割り当て: ホストに対して定義済みのルールがないことを示します。ルールタイプ「ユーザー」を使用してリモートコレクターを手動でホストに割り当てるか、リモートコレクターをホストに割り当てるために[割り当て]タブからルールを追加/変更する必要があります。
接続	Operations Agentデータソース接続のステータス。
収集	最後に収集が試みられた日付と現地時刻および現在のステータスを示すデータ収集ステータス。
テスト接続	Operations Agentデータソース接続をテストします。
グループの編集	リストされているノードを編集して、有効/無効のステータス、[割り当て済みコレクター]、および[収集頻度]を変更します。[保存]をクリックして変更を保存します。
保存	Operations Agentデータソース接続に対して行われた変更を保存します。

**[ホスト割り当て] タブ: ホスト割り当て**

フィールド	説明
コレクター名	リモートコレクターのホスト名。
割り当て済みパターン	コレクターに割り当てられたルールまたはノード/ビューグループを表示します。
割り当て済みホストグループ	コレクターに割り当てられたホストを示します。
割り当て済みホストの合計数	コレクターに割り当てられたホストの合計数を示します。
更新	コレクターの詳細を更新します。

### ホスト割り当ての更新

フィールド	説明
コレクター名	OBRシステムで設定したリモートコレクター。
割り当ての基準: Host Group	リモートコレクターをOperations Agentに割り当てるために正規表現を記述する場合に選択します。
割り当ての基準: Host Pattern(Regular Expression)	インストール済みのコンテンツパックのビューまたはノードグループにリモートコレクターを割り当てる場合に選択します。
新しいパターンの追加	新しいパターンを定義します。[割り当ての基準: Host Pattern(Regular Expression)]が選択されている場合にのみ表示されます。
利用可能なグループ	割り当ての基準が「Host Group」の場合、ユーザーによって定義されたルールを一覧表示します。
割り当て済みグループ	割り当ての基準が「Host Pattern(Regular Expression)」の場合、インストール済みのコンテンツパックのビューまたはノードグループを一覧表示します。

## Operations Agentデータソースの詳細の表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent] をクリックします。  
[Operations Agent] ページが開きます。
2. [ホスト] タブ: [Operations Agentデータソースのサマリー] には、以下の内容が表示されます。

フィールド	説明
ETLコンテンツパックコンポーネント名	インストールされているコンテンツパックのトポロジビューのリスト。これらのトポロジビューには、Operations Agentコレクターが関連データを収集するために使用する特定のCI属性が含まれています。  [すべて] は、すべてのビューを示します。[未割り当て] は、どのトポロジビューも割り当てられていないOperations Agentデータソースを示します。
ホスト	特定のビューのOperations Agentデータソースの数。
パス	未処理のデータが正常に収集された別個のOperations Agentデータソースの数。
失敗	データの収集に失敗した別個のOperations Agentデータソースの数。
未収集	データが収集されなかった別個のOperations Agentデータソースの数。
有効	データ収集を有効にされている別個のOperations Agentデータソースの数。
無効	データ収集を無効にされている別個のOperations Agentデータソースの数。

3. Operations Agentデータソースの詳細を表示するには、[Operations Agentデータソースのサマリー] テーブル内のビュー名または番号をクリックします。次のようなタスクを実行できます。
- [ホスト] 列中の番号をクリックし、すべてのOperations Agentデータソースの詳細をリストします。
  - [成功] 列中の番号をクリックし、データが正常に収集されたOperations Agentデータソースの詳細を表示します。
  - [失敗] 列中の番号をクリックし、データの収集に失敗したOperations Agentデータソースの詳細を表示します。
  - [未収集] 列中の番号をクリックし、データがまったく収集されなかったOperations Agentデータソースの詳細を表示します。
  - [有効/無効] 列中の番号をクリックし、データ収集を有効または無効にされたOperations Agentデータソースの詳細を表示します。

次のように [Operations Agentデータソースアプリケーションの詳細 <ビュー名 >] テーブルが表示されません。


フィールド	説明
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
有効	Operations Agentデータソースのデータ収集を選択するオプション。

フィールド	説明
収集頻度	OBRデータベースをOperations Agentデータソースと同期させる時間(時間単位)。 分は15分単位で設定できます。
割り当て済みコレクター	OBRで設定されたデータ収集に対して有効化されているリモートコレクターのリスト。
コレクター割り当てモード	リモートコレクターで適用可能なルールのリスト。 ユーザー: 事前に割り当て済みのルールを上書きするとき、またはホストにリモートコレクターを手動で割り当てるときに選択します。 システム: リモートコレクターの割り当てが[割り当て]タブからユーザーによって指定されたルールに基づく場合。 未割り当て: ホストに対して定義済みのルールがないことを示します。ルールタイプ「ユーザー」を使用してリモートコレクターを手動でホストに割り当てるか、リモートコレクターをホストに割り当てるために[割り当て]タブからルールを追加/変更する必要があります。
接続状態	Operations Agentデータソース接続のステータスを選択および表示するオプション。
収集ステータス	最後に収集が試みられた日付と現地時刻および現在のステータスを示すデータ収集ステータスを選択および表示するオプション。
テスト接続	Operations Agentデータソース接続をテストします。
グループの編集	リストされているノードを編集して、有効/無効のステータス、[割り当て済みコレクター]、および[収集頻度]を変更します。[保存]をクリックして変更を保存します。
保存	Operations Agentデータソース接続に対して行われた変更を保存します。

## Operations Agentデータソースのデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent] をクリックします。  
[Operations Agent] ページが開きます。
2. [Operations Agentデータソースのサマリー] テーブルで、列内の番号をクリックし、データ収集を有効または無効にするOperations Agentデータソースをリストします。[Operations Agentデータソースアプリケーションの詳細] テーブルが表示されます。

3. Operations Agentデータソースのリストをフィルター処理するには、ホスト名を[ホスト名]ボックスに入力し、[検索]をクリックします。
4. 次のような方法でOperations Agentデータソースのデータ収集を有効または無効にできます。
  - 1つ以上のホストについて、[収集を有効にする]列内のチェックボックスをオンにします。
  - データ収集を無効にするには、[収集を有効にする]チェックボックスをオフにします。
  - 1つ以上のホストで、ホストを選択して[グループの編集]をクリックし、[有効]チェックボックスをオンまたはオフにして収集を有効/無効にします。[保存]をクリックします。

**ヒント:**  アイコンを使用してノードのリストをフィルター処理し、それらのノードでデータ収集を簡単に有効または無効にできます。

5. [保存]をクリックします。  
[正常に保存しました]というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

**注:** Operations Agentデータソース接続の収集は、デフォルトで有効になっています。

管理コンソールでは、Operations Agentの管理対象ノードを属性のセットでフィルター処理し、フィルター処理したグループに対して有効または無効を設定できます。

## Operations Agentデータソースのデータ同期のスケジュール設定

デフォルトでは、各種のOperations Agentデータソースからのデータ収集は1時間ごとのスケジュールに設定されています。ただし、必要に応じてこれを変更することができます。

Operations Agentデータソースのポーリング頻度をスケジュール設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent (OA)] をクリックします。  
[Operations Agent (OA)] ページが開きます。
2. [Operations Agentデータソースのサマリー] テーブルで、列内の番号をクリックし、データ収集を有効または無効にするOperations Agentデータソースをリストします。[Operations Agentデータソースアプリケーションの詳細] テーブルが表示されます。
3. 特定のホストについて、[収集頻度] 列に1~24時間のポーリング時間を指定します。  
1つ以上のホストについて、ホストを選択して[グループの編集]をクリックし、[収集頻度] 列に1~24時間のポーリング時間を指定します。[保存] をクリックします。

**注:** Operations Agentデータソースのリストをフィルター処理するには、ホスト名を[ホスト名]ボックスに入力し、[検索]をクリックします。

4. [保存]をクリックします。

[正常に保存しました]というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## ノードのブラックリスト

Operations Agentへの接続が失われると、ホストからのデータ収集は行われません。3回の連続するデータ収集の実行の間、ノードにアクセスできない場合、そのノードはブラックリストのカテゴリに記入されます。ノードがブラックリスト化されると、データ収集の実行間隔は、24時間に達するまで、3回再試行するたびに倍加されます。ノードへの接続が元通りになると、そのノードはブラックリスト化されたノードとは見なされなくなり、データ収集の実行間隔も元の値に戻ります。

ブラックリスト化されたホストは、**Javaの監視&中央管理コンソール**から見ることができます。OBRシステムから<B0のインストールディレクトリ>\Program Files (x86)\SAP BusinessObjects\SAP BusinessObjects Enterprise XI 4.0\win64\_x64\sapjvm\bin\jconsole.exeを使用してコンソールにアクセスし、<ホスト名>;<ポート>資格情報を使用してログオンします。ここでOBRのポートは21409です。

ノードのブラックリスト化を無効にするには、以下の手順を実行します。

1. {PMDB.HOME}/config/collection.propertiesファイルを参照します。
2. property pa.collector.blacklist.modeパラメーターを特定します。
3. 値をFALSEに設定します。デフォルト値はTRUEです。

## Operations Agentデータソース接続のテスト

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent (OA)] をクリックします。  
[Operations Agent (OA)] ページが開きます。
2. [Operations Agentデータソースのサマリー] テーブルで、列内の番号をクリックし、データ収集を有効または無効にするOperations Agentデータソースをリストします。[Operations Agentデータソースアプリケーションの詳細] テーブルが表示されます。
3. Operations Agentデータソース接続を選択します。

**注:** Operations Agentデータソースのリストをフィルター処理するには、ホスト名を[ホスト名]ボ


クズに入力し、[検索]をクリックします。一度に複数のOperations Agentデータソース接続をテストすることはできません。


4. [テスト接続]をクリックします。

接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました]というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## データ収集のためのビュー/ノードグループベースの ルールの割り当て

ビューまたはノードをまとめてグループ化することによってOperations Agentデータソースからデータを収集できます。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent (OA)] をクリックします。
2. [ホスト割り当て] タブをクリックします。
3. 環境に基づいて [コレクター名] を選択します。[編集] をクリックします。
4. [割り当ての基準] で、[ホストグループ] を選択します。
5. [利用可能なグループ] フィールドで、選択に基づくホスト名のパターンを選択し、 をクリックして、ルールを追加します。選択したルールが [割り当て済みグループ] に移動します。

ヒント:  をクリックしてすべてのルールを追加します。


6. [保存] をクリックします。


## データ収集のためのパターンベースのルールの割り当て

ノードをまとめてグループ化することによってOperations Agentデータソースからデータを収集できます。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [Operations Agent (OA)] をクリックします。
2. [ホスト割り当て] タブをクリックします。



3. 環境に基づいて [コレクター名] を選択します。[編集] をクリックします。
4. [割り当ての基準] で、[Host Pattern(Regular Expression)] を選択します。
5. [利用可能なグループ] フィールドで、選択に基づくホスト名のパターンを選択し、 をクリックして、ルールを追加します。選択したルールが [割り当て済みグループ] に移動します。

ヒント:  をクリックしてすべてのルールを追加します。

6. [保存] をクリックします。

## 第22章: BSM/APM/OMi

[BSM/APM/OMi] ページを使用すると、管理データベース、プロファイルデータベース、およびOMiをデータソースとして作成および設定できます。

管理データベース接続およびプロファイルデータベース接続によって、Business Process Monitor (BPM)、Real User Monitor (RUM) などのさまざまなBSMアプリケーションで使用されるエンタープライズのパフォーマンス関連データを収集します。OBRをスケジュール設定して、特定の間隔でデータリポジトリからデータを収集することができます。さらに、接続およびデータ収集のステータスを表示することもできます。

[OMi] ページを使用して、OMiデータソースを表示できます。このデータソースは、環境内の管理対象エンティティからイベントおよび状況インジケータを収集します。このページを使用すると、OMiのデータ収集時間のスケジュール設定、データ収集の有効化または無効化、および要件に応じたデータ収集接続の削除を行うことができます。

新規のOMiデータソース接続を作成する前に、BSM管理データベース用のデータソース接続が存在することを確認してください。OBRは管理データベースからOMi用のKPIメタデータを収集するため、このデータ接続はOMi接続の前提条件です。







環境内に1つ以上のOMiセットアップがある場合は、トポロジソースとして設定されたBSM RTSMIに属するOMiデータソースを設定する必要があります。

[BSM/APM/OMi] ページを使用して、以下の操作を行います。

プロファイル/Operationsデータベースおよび管理データベースのデータ収集の管理	OMi用のデータ収集の管理
<ul style="list-style-type: none"><li>管理データベースおよびプロファイルデータベースの新規接続の作成</li><li>管理データベースおよびプロファイルデータベースの新規接続の変更</li><li>プロファイルデータベースのデータ収集の有効化または無効化</li><li>プロファイルデータベースの同期のスケジュール設定</li><li>管理データベース接続およびプロファイルデータベース接続のテスト</li><li>管理データベースおよびプロファイルデータベースの接続ステータスの表示</li><li>管理データベースおよびプロファイルデータベースの収集ステータスの表示</li><li>管理データベース接続の削除</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>OMiデータソース接続の作成</li><li>OMiデータソース接続の変更</li><li>OMiデータ収集の有効化または無効化</li><li>OMiデータ収集のスケジュール設定</li><li>OMiデータソース接続のテスト</li><li>OMiデータソース接続のステータスの表示</li><li>OMiデータ収集ステータスの表示</li><li>OMiデータソース接続の削除</li></ul>

[BSM/APM/OMi] ページには、次のオプションを備えている3つのタブ (管理データベース、プロファイルデータベース、およびOMi) があります。

## 管理データベース

フィールド	説明
ホスト名	管理データベースホストシステムのIPアドレスまたはFQDN。
データソース	管理データベース用に設定されたデータソースの名前。
接続状態	<p>管理データベース接続のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	<p>最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li> は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	管理データベース接続をテストします。
新規作成	新規管理データベース接続を作成します。
編集	既存の管理データベース接続を変更します。
削除	管理データベース接続を削除します。
データベースの検出	プロファイルデータベースを検出します(同じ管理データベースホストシステムに存在する場合)。







## 管理データベース: 新規作成: 接続パラメーター

フィールド	説明
<ul style="list-style-type: none"> <li>BSM</li> <li>OMi</li> </ul>	オプションからデータソースを選択します。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ]に[ORACLE]が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。  注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとして[MSSQL]を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして[MSSQL]を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。

フィールド	説明
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース]</b> が選択されている場合:	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	コレクターをリモートシステムにインストールした場合は、ローカルコレクターまたはリモートコレクターのいずれかを選択できます。  このトポロジソースを使用してリモートコレクターを設定するには、ドロップダウンリストから利用可能なリモートシステムのいずれかを選択します。

フィールド	説明
	デフォルトによりOBRシステムにインストールされているコレクターを使用するには、ローカルを選択します。

## プロファイルデータベース

フィールド	説明
ホスト名	プロファイルデータベースホストシステムのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	データ収集を有効化または無効化するオプション。
頻度のスケジュール	OBRデータベースをプロファイルデータベースと同期させる時間 (時間単位)。
接続状態	<p>プロファイルデータベース接続のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	<p>最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li> は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	プロファイルデータベースソース接続をテストします。
新規作成	新規プロファイルデータベース接続を作成します。
編集	既存のプロファイルデータベース接続を変更します。
削除	プロファイルデータベース接続を削除します。
保存	プロファイルデータベース接続のパラメーターに対して行われた変更を保存します。

# プロファイルデータベース: 新規作成: 接続パラメータ

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	プロファイルデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
ポート	プロファイルデータベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	プロファイルデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。  注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。  注: データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Operation Manager</li> <li>• OMi</li> <li>• RUM</li> <li>• BPM</li> <li>• サービスヘルス</li> </ul>
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対する

フィールド	説明
	Windows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース]</b> が選択されている場合:	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。  注: データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。  <ul style="list-style-type: none"> <li>• Operation Manager</li> <li>• OMi</li> <li>• RUM</li> </ul>



フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• BPM</li> <li>• サービスヘルス</li> </ul>
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合:	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
ドメイン	<p>データ収集を有効にするドメインを選択します。</p> <p><b>注:</b> データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Operation Manager</li> <li>• OMi</li> <li>• RUM</li> <li>• BPM</li> <li>• サービスヘルス</li> </ul>
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベース

フィールド	説明
	のセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

## OMi

フィールド	説明
ホスト名	OMiデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。
収集の有効化	データ収集を有効化または無効化するオプション。
頻度のスケジュール	OBRデータベースをOMiデータベースと同期させる時間 (時間単位)。
データソース	OMiデータベース用に設定されたデータソースの名前。
接続状態	OMi接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li> は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li> は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	OMiデータベース接続をテストします。
新規作成	新規OMiデータベース接続を作成します。 <p><b>注:</b> 新規接続の作成後、またはOMi接続がすでに存在する場合、[新規作成] オプションは無効です。</p>

フィールド	説明
編集	既存のOMiデータベース接続を変更します。
削除	OMiデータベース接続を削除します。
保存	このページで行われた変更を保存します。

## OMi: 新規作成: 接続パラメーター

フィールド	説明
イベント Operations	データソースを選択します。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ]に[ORACLE]が選択されている場合にのみ表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。  <b>注:</b> データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
Windows認証	データベースタイプとして[MSSQL]を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。

フィールド	説明
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  <b>注:</b> [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  <b>注:</b> [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース] が選択されている場合:</b>	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化] が選択されている場合:</b>	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。

フィールド	説明
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、[Oracle RACのデータベース]を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

## 管理データベース、プロファイルデータベース、Operationsデータベースの新規接続の作成

### 新規管理データベースの作成

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [管理データベース] をクリックします。
2. [管理データベース] で、[新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスに、次の接続パラメーターを指定または入力します。

フィールド	説明
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ BSM</li> <li>○ OMi</li> </ul>	オプションからデータソースを選択します。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ] に [ORACLE] が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。

フィールド	説明
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。  注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。  注: [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
[Oracle RACのデータベース] が選択されている場合:	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、[Oracle RACのデータベース] を選択した場合にのみ表示されます。

フィールド	説明
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. **[保存]** をクリックします。
5. **[テスト接続]** をクリックし、接続をテストします。
6. **[データベースの検出]** をクリックし、対応するプロファイルデータベースを自動的に検出します。

**注:** 管理データベースとプロファイルデータベースがBSMシステム(ローカルデータベース)と同じシステム上にある場合、**[データベースの検出]** をクリックすると、対応するプロファイルデータベースが自動的に検出されます。データベースが異なるシステム(リモートデータベース)上にある場合、**[プロファイルデータベース]** タブを使用して、手動でプロファイルデータベースを設定する必

必要があります。

**注:** [Oracle RACのデータベース] オプションを選択して、管理データベースを設定し、テスト接続に成功した後で[データベースの検出]をクリックしても、対応するプロファイルデータベースは自動的に検出されません。[プロファイルデータベース] タブを使用して、手動でプロファイルデータベースを設定する必要があります。

7. [保存] をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。




新たに作成した管理データベース接続を保存した後、OBRでは、プロファイルデータベース情報が管理データベースのデータソースから取り出され、[プロファイルデータベース] セクションの下にすべての利用可能なプロファイルデータベースのデータソースがリストされます。

プロファイルデータベースのデータソース接続の詳細を表示するには、次の手順を実行します。




1. [データベースの検出] をクリックします。

変更を保存するためのメッセージが表示されます。[保存] をクリックします。[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

2. 次のプロファイルデータベースの詳細を表示します。

フィールド	説明
ホスト名	プロファイルデータベースホストシステムのIPアドレスまたはFQDN。
収集を有効にする	データ収集を有効化または無効化するオプション。
頻度のスケジュール	OBRデータベースをプロファイルデータベースと同期させる時間 (時間単位)。
接続状態	プロファイルデータベース接続のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。</li> <li> は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。</li> </ul>
収集ステータス	最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。 <ul style="list-style-type: none"> <li> は、データ収集が進行中であることを示します。</li> </ul>



フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>○  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。</li> <li>○  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。</li> <li>○  は、データ収集が開始しなかったことを示します。</li> </ul>
テスト接続	プロファイルデータベースソース接続をテストします。
新規作成	新規プロファイルデータベース接続を作成します。
編集	既存のプロファイルデータベース接続を変更します。
削除	プロファイルデータベース接続を削除します。
保存	プロファイルデータベース接続のパラメーターに対して行われた変更を保存します。

Oracle RACのプロファイルDBのみが選択されている場合、または、Oracle RACのManagementDBとプロファイルDBの両方が選択されている場合、プロファイル管理データベースのパラメーターを設定してください。このような場合は、[プロファイルデータベース]に[新規作成]オプションが表示されます。

プロファイルデータベースのデータソースに対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

プロファイルデータベースを検出するには、HPE BSMゲートウェイサーバーの%topaz\_home%\Confフォルダーからseed.propertiesおよびencryption.propertiesファイルをOBRシステムの%PMDB\_HOME%\configフォルダーにコピーします。Oracle RACの場合は、bsm-tnsnames.oraファイルを%PMDB\_HOME%\configフォルダーにコピーします。

複数の管理データベース (BSMおよびOMitポロジの両方) を設定した場合は、%PMDB\_HOME%\configに複数のフォルダー (%PMDB\_HOME%\config\<管理DBのホスト名>など) を作成し、seed.propertiesおよびencryption.propertiesファイルを各フォルダーにコピーします。Oracle RACの場合は、bsm-tnsnames.oraファイルを%PMDB\_HOME%\configフォルダーにコピーし、ファイル名を変更して一意になるようにします。

bsm-tnsnames.oraファイルの名前は、Oracle RACでBSMのデータベース接続の詳細を入力するときに指定する必要があります。

## 新規プロファイルデータベースの作成

1. 管理コンソールで、[収集設定] > [BSM/APM/OMi] > [プロファイルデータベース] をクリックします。
2. [プロファイルデータベース] で、[新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスに、次の接続パラメーターを指定または入力します。

フィールド	説明
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	プロファイルデータベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	プロファイルデータベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	プロファイルデータベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。  注：データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。  ドロップダウンから管理データベースホストを選択し、ドメインのリストを表示します。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。  注：データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、

フィールド	説明
	<p>コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Operation Manager</li> <li>○ OMi</li> <li>○ RUM</li> <li>○ BPM</li> <li>○ サービスヘルス</li> </ul>
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	<p>プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p><b>注:</b> [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>
パスワード	<p>プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p><b>注:</b> [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース]</b> が選択されている場合:	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScope

フィールド	説明
	からのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。 ドロップダウンから管理データベースホストを選択し、ドメインのリストを表示します。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。  <b>注:</b> データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Operation Manager</li> <li>○ OMi</li> <li>○ RUM</li> <li>○ BPM</li> <li>○ サービスヘルス</li> </ul>
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合:	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	プロファイルデータベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScope

フィールド	説明
	からのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。 ドロップダウンから管理データベースホストを選択し、ドメインのリストを表示します。
ドメイン	データ収集を有効にするドメインを選択します。  <b>注:</b> データ収集を有効にする元となるドメインを選択する必要があります。インストール後の設定時にトポロジ設定をスキップして、コンテンツパックをインストールした場合は、ここに戻り、データ収集を有効にするドメインを次のドメインから選択する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>○ Operation Manager</li> <li>○ OMi</li> <li>○ RUM</li> <li>○ BPM</li> <li>○ サービスヘルス</li> </ul>
ユーザー名	プロファイルデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	プロファイルデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

5. **[保存]** をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 新規Operationsデータベースの作成

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[BSM/APM/OM]** > **[OMi]** をクリックします。
2. **[OMi]** で、**[新規作成]** をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. **[接続パラメーター]** ダイアログボックスに、次の接続パラメーターを指定または入力します。

フィールド	説明
イベント Operations	データソースを選択します。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ]に[ORACLE]が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース]を選択した場合には表示されません。  注：データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、OracleまたはMSSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
Windows認証	データベースタイプとして[MSSQL]を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして[MSSQL]を選択した場合のみ表示されます。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、プロファイルデータベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  注：[Windows認証]オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、プロファイルデータベー

フィールド	説明
	<p>スのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。</p> <p><b>注:</b> [Windows認証] オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。</p>
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[Oracle RACのデータベース]</b> が選択されている場合:	
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。
<b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合:	
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
データベースタイプ	データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。

フィールド	説明
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。
ユーザー名	OMiデータベースユーザーの名前。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
パスワード	OMiデータベースユーザーのパスワード。これは、BSM設定ウィザードで指定したものです。
収集ステーション	このオプションは、リモートシステムにインストールされているコレクターで使用します。

4. **[保存]** をクリックします。

[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 管理データベース、プロファイル、およびOperations データベースの新規接続の変更

変更できるのは、管理データベースのデータソース接続のみであり、プロファイルデータベースのデータソース接続は変更できません。

管理データベースのデータソース接続を変更するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[BSM/APM/OMi]** > **[管理データベース]** をクリックします。
2. **[管理データベース]** で、**[設定]** をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. **[接続パラメーター]** ダイアログボックスに、次の接続パラメーターを指定または入力します。

フィールド	説明
データソース	データソース(BSM または OMi) を選択します。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、データベースタイプとして [Oracle] を選択した場合にのみ表示されます。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、 <b>[データベースタイプ]</b> に <b>[ORACLE]</b> が選択されている場合にのみ表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合にのみ表示されます。



フィールド	説明
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、 <b>[TLSの有効化]</b> が選択されている場合に表示されます。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
Windows認証	データベースタイプとして <b>[MSSQL]</b> を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合には表示されません。  <b>注:</b> データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして <b>[MSSQL]</b> を選択した場合のみ表示されます。
サービス名	サービスの名前。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ORAファイル名	Oracle Real Application Clusterへの接続情報が含まれるORAファイル。このオプションは、 <b>[Oracle RACのデータベース]</b> を選択した場合にのみ表示されます。
ユーザー名	管理データベースユーザーの名前。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  <b>注:</b> <b>[Windows認証]</b> オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。
パスワード	管理データベースユーザーのパスワード。これは、管理データベースのセットアップ時にBSM設定ウィザードで指定したものです。  <b>注:</b> <b>[Windows認証]</b> オプションを選択した場合、このフィールドは無効になります。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

個々のプロファイルデータベースのデータソース接続は設定できませんが、プロファイルデータベース接続の更新済みリストを管理データベースから取得することはできます。**[更新]** ボタンを使用して、データベースを同期し、プロファイルデータベースの変更内容の更新済みリストを取得できます。変更内容には次のようなものがあります。

- 管理データベースから検出された新規のプロファイルデータベース。
- 管理データベースから削除された既存のプロファイルデータベース。
- 既存データベースの設定データにおける変更。

プロファイルデータベース接続のリストを更新するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[BSM/APM/OMi]** をクリックします。  
[BSM/APM/OMi] ページが開きます。
2. **[プロファイルデータベース]** で、**[設定]** をクリックします。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

Operationsデータベース接続のリストを更新するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[データソースの設定]** > **[BSM/APM/OMi]** をクリックします。  
[BSM/APM/OMi] ページが開きます。
2. **[OMi]** で、**[設定]** をクリックします。
3. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## プロファイルデータベースのデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. 1つ以上のホストについて、[プロファイルデータベース] で次のステップのうちの1つを実行します。
  - [収集を有効にする] チェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - [収集を有効にする] チェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## プロファイルデータベースの同期のスケジュール設定

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. [プロファイルデータベース] で、1～24時間の同期時間を [頻度のスケジュール設定 (時間)] ボックスに指定します。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 管理データベース接続およびプロファイルデータベース接続のテスト

管理データベースのデータソース接続をテストするには、次の手順を実行します。



1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [管理データベース] をクリックします。
2. 特定の管理データベースのデータソース接続について、[テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

プロファイルデータベースのデータソース接続をテストするには、次の手順を実行します。



1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [プロファイルデータベース] をクリックします。
2. 特定のプロファイルデータベースのデータソース接続について、[テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 管理データベースおよびプロファイルデータベースの接続ステータスの表示

管理データベースのデータソースの接続ステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. [管理データベース] で [接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

プロファイルデータベースのデータソースの接続ステータスを表示するには、次の手順を実行します。





1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. 1つ以上のプロファイルデータベースについて、[プロファイルデータベース] で、[接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## 管理データベースおよびプロファイルデータベースの収集ステータスの表示

管理データベースのデータソースの収集ステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. [管理データベース] で [収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。





最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

-  は、データ収集が進行中であることを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
-  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

プロファイルデータベースのデータソースの収集ステータスを表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. 1つ以上のプロファイルデータベースについて、[プロファイルデータベース] で、[収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。

最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

-  は、データ収集が進行中であることを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
-  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
-  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

## 管理データベース接続の削除

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] をクリックします。
2. [管理データベース] で、特定のホストを選択し、[削除] をクリックします。
3. メッセージボックスで、[はい] をクリックします。  
[正常に削除しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

個々のプロファイルデータベースのデータソース接続は削除できませんが、管理データベースのデータソース接続を削除すると、すべてのプロファイルデータベースデータソース接続が自動的に削除されます。ただし、管理データベース接続を削除しても、OBRデータベースから収集したデータは削除されません。

## OMiデータソース接続の作成

新規のOMiデータソース接続を作成する前に、BSM管理データベース用のデータソース接続が [BSM/APM/OMi] ページに存在することを確認してください。OBRは管理データベースからOMi用のKPIメタデータを収集するため、このデータ接続はOMi接続の前提条件です。

環境内に1つ以上のOMiセットアップがある場合は、トポロジーソースとして設定されたBusiness Service Management RTSMに属するOMiデータソースを設定する必要があります。

新規OMiデータソース接続を作成するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [新規作成] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、[データソース] を選択し、次の値を入力します。

フィールド	説明
データソース	データソースイベントまたはOperations。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ] に [ORACLE] が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。

フィールド	説明
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。

4. **[OK]** をクリックします。
5. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

作成できるOMiデータソース接続は1つのみです。新規のOMiデータソース接続を作成した後や、接続がすでに存在する場合は、[新規作成] ボタンは無効になります。

新しく作成したOMiデータソース接続に対するデータ収集はデフォルトで有効になっています。さらに、収集の頻度は1時間ごとにスケジュールされています。

## OMiデータソース接続の変更

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. 特定のホストについて、[設定] をクリックします。  
[接続パラメーター] ダイアログボックスが表示されます。
3. [接続パラメーター] ダイアログボックスで、次の値を入力します。

フィールド	説明
データソース	データソースイベントまたはOperations。
Oracle RACのデータベース	このオプションは、Oracle RACのデータベースを選択する場合に有効にします。
TLSの有効化	TLS経由のJDBC接続を有効にします。このオプションは、[データベースタイプ] に[ORACLE] が選択されている場合に表示されます。デフォルトでは、このフィールドが選択されています。
Truststoreパス	truststoreパスへのフルパス。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
Truststoreパスワード	トラストストアにアクセスするためのパスワード。このオプションは、[TLSの有効化] が選択されている場合に表示されます。
ホスト名	管理データベースサーバーのIPアドレスまたはFQDN。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
ポート	管理データベースサーバーに照会するためのポート番号。

フィールド	説明
	[Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。
データベースタイプ	管理データベースを作成するために使用されるデータベースエンジンのタイプ。これは、Oracle、MSSQLまたはPostgreSQLのいずれかです。
管理データベース	プロファイルデータベースを管理データベースにリンクします。SiteScopeからのみデータを収集する場合は、管理データベースを選択する必要はありません。
データベースインスタンス	管理データベースインスタンスのシステム識別子 (SID)。 [Oracle RACのデータベース] を選択した場合には表示されません。  注: データベースのホスト名、ポート番号、およびSIDに関する詳細については、Business Service Management管理者にお問い合わせください。
Windows認証	データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合、MSSQLに対するWindows認証を有効化するオプションがあります。つまり、ユーザーはデータベースをホスティングするWindowsシステムと同じ資格情報をSQL Serverへのアクセスで使用できます。
データベース名	データベースの名前。このフィールドは、データベースタイプとして [MSSQL] を選択した場合のみ表示されます。

4. [OK] をクリックします。
5. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMiデータ収集の有効化または無効化

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. 次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオンにして、データ収集を有効にします。
  - [収集を有効にする] 列のチェックボックスをオフにして、データ収集を無効にします。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。





## OMiデータ収集のスケジュール設定

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [頻度のスケジュール] 列内の [時] ボックスに1～24時間までの収集時間を指定します。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMiデータソース接続のテスト





1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [テスト接続] をクリックします。  
接続が存在する場合は、[テスト接続が成功しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## OMiデータソース接続のステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [接続ステータス] 列の接続ステータスインジケータをチェックします。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていることを示します。
  -  は、ホストシステムがデータソースに接続されていないことを示します。

## OMiデータ収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [収集ステータス] 列の収集ステータスインジケータをチェックします。  
最後に収集が試みられた日付と時刻および現在のステータスを示す収集のステータス。

- 。  は、データ収集が進行中であることを示します。
- 。  は、前回のデータ収集の試行が正常に完了したことを示します。
- 。  は、前回のデータ収集の試行が失敗したことを示します。
- 。  は、データ収集が開始しなかったことを示します。

コンテンツパックのCI属性を有効化してビジネスニーズに関連する追加の情報を収集する方法については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「コンテンツパックのCI属性の有効化」セクションを参照してください。

## OMiデータソース接続の削除

1. 管理コンソールで、[データソースの設定] > [BSM/APM/OMi] > [OMi] をクリックします。
2. [削除] をクリックします。  
[正常に削除しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 第23章: Verticaデータベース & タイムゾーン

[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページを使用して、一元化されたOBRデータベースおよびタイムゾーンを管理できます。このページでは、OBRデータベースの詳細を表示して、データベース管理者パスワードを変更できます。

[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- データベース設定の詳細の表示
- OBRデータベースパスワードの変更
- Verticaに対するTLSの有効化および無効化

[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページには、以下の項目が表示されます。

### タイムゾーン

フィールド	説明
タイムゾーン	初期設定中に選択されるタイムゾーンのタイプ。

### Verticaデータベース

フィールド	説明
データベースタイプ	OBRデータベースで使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ホスト名	OBRデータベースが実行されているホストシステムのFQDNまたはIPアドレス。
ポート	データベースを照合するためのポート番号。デフォルトポートは21424です。
ユーザー名	OBRデータベースユーザーアカウントの名前。このアカウントは、インストール後の段階に作成されます。
TLS	Verticaデータベースに対してTLSを有効または無効にします。

### パスワードの変更

フィールド	説明
古いパスワード	既存のVerticaデータベースパスワードを入力します。

フィールド	説明
新しいパスワード	新しいパスワードを入力します。パスワードには英数字の値を指定します。
新しいパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

## TLSの有効化

フィールド	説明
TrustStoreファイル	TrustStoreパスを入力します。
TrustStoreパスワード	TrustStoreパスワードを入力します。
TrustStoreパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

## Verticaデータベースとタイムゾーン設定の表示

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [Verticaデータベース & タイムゾーン] をクリックします。  
[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページが表示されます。

フィールド	説明
タイムゾーン	初期設定中に選択されるタイムゾーンのタイプ。
データベースタイプ	OBRデータベースで使用されるデータベースエンジンのタイプ。
ホスト名	OBRデータベースが実行されているホストシステムの名前またはIPアドレス。
ポート	データベースを照合するためのポート番号。
ユーザー名	OBRデータベースユーザーアカウントの名前。このアカウントは、インストール後の段階に作成されます。
TLS	Verticaデータベースに対してTLSを有効または無効にします。

## OBRデータベースパスワードの変更

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [Verticaデータベース & タイムゾーン] をクリックします。  
[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページが表示されます。
2. [パスワードの変更] をクリックします。

[パスワードの変更] ダイアログボックスが表示されます。

3. [パスワードの変更] ダイアログボックスで、次のデータベースパスワードの詳細を入力します。

フィールド	説明
古いパスワード	既存のデータベース管理者パスワードを入力します。
新しいパスワード	新しいパスワードを入力します。
新しいパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

4. [保存] をクリックします。  
パスワードが正常に変更されたことを示す [パスワードが正常に変更されました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

OBRデータベースのパスワードを変更した後に、**HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator**サービスを再起動する必要があります。次の手順を実行します。

#### Windowsの場合

1. [スタート] で、[検索] に「**ファイル名を指定して実行**」と入力します。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが表示されます。
2. [名前] フィールドに「**services.msc**」と入力し、**Enter**キーを押します。
3. **HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator**を右クリックし、[再起動] をクリックします。

#### Linuxの場合:

コマンドラインインターフェイスで次のコマンドを実行し、サービスを再起動します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator restart
```

## VerticaでのTLSの有効化

VerticaでTLSを有効にするには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [Verticaデータベース & タイムゾーン] をクリックします。  
[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページが表示されます。
2. [TLS] オプションで、[有効] を選択します。確認のダイアログボックスが開きます。
3. [はい] をクリックします。[TLSの有効化] ダイアログボックスが表示されます。

4. [TLSの有効化] ダイアログボックスで、次のデータベースパスワードの詳細を入力します。

フィールド	説明
TrustStoreファイル	TrustStoreパスを入力します。
TrustStoreパスワード	TrustStoreパスワードを入力します。
TrustStoreパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

5. [OK] をクリックします。確認のメッセージが表示されます。

詳細な手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

## VerticaでのTLSの無効化

VerticaでTLSを無効にするには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [Verticaデータベース & タイムゾーン] をクリックします。  
[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページが表示されます。
2. [TLS] オプションで、[無効] を選択します。
3. [保存] をクリックします。

## 第24章: 管理データベース

[管理データベース] ページを使用して、OBR管理データベースを管理できます。このページでは、OBRデータベースの詳細を表示して、管理データベースのパスワードを変更できます。

[管理データベース] ページを使用して、以下の操作を行います。

- 管理データベースの詳細の表示
- OBR管理データベースパスワードの変更

[管理データベース] ページには、以下の項目が表示されます。

### 管理データベース

フィールド	説明
データベースタイプ	OBR管理データベースで使用されるデータベースエンジンのタイプ。
データベース名	OBR管理データベースインスタンスの名前。
ホスト名	OBR管理データベースが実行されているホストシステムの名前またはIPアドレス。
ポート	管理データベースに照会するためのポート番号。デフォルトポートは21425です。
ユーザー名	OBR管理データベースユーザーアカウントの名前。このアカウントは、インストール後の段階に作成されます。

### パスワードの変更

フィールド	説明
古いパスワード	既存のデータベース管理者パスワードを入力します。
新しいパスワード	新しいパスワードを入力します。パスワードには英数字の値を指定します。
新しいパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

## 管理データベースの設定の表示

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [管理データベース] をクリックします。[管理データベース] ページが表示されます。

フィールド	説明
データベースタイプ	
データベース名	
ホスト名	OBR管理データベースが実行されているホストシステムの名前またはIPアドレス。
ポート	
ユーザー名	OBR管理データベースユーザーアカウントの名前。このアカウントは、インストール後の段階に作成されます。

## OBR管理データベースパスワードの変更

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [管理データベース] をクリックします。  
[管理データベース] ページが表示されます。
2. [パスワードの変更] をクリックします。  
[パスワードの変更] ダイアログボックスが表示されます。
3. [パスワードの変更] ダイアログボックスで、次のデータベースパスワードの詳細を入力します。

フィールド	説明
古いパスワード	既存の管理データベース管理者パスワードを入力します。
新しいパスワード	新しいパスワードを入力します。パスワードには英数字の値を指定します。
新しいパスワードの確認	確認のために新しいパスワードを再入力します。

4. [OK] をクリックします。  
パスワードが正常に変更されたことを示す [パスワードが正常に変更されました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## 第25章: コレクター


[コレクター] ページを使用して、リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターを作成して設定できます。

[コレクター] ページを使用して、次のようなタスクを実行できます。

- リモートシステムにインストールされているコレクターの設定
- リモートシステムにインストールされているコレクターの無効化
- リモートシステムにインストールされているコレクターのテスト

### コレクターのサマリー

フィールド	説明
名前	コレクターの名前が表示されます。  アイコンを使用して、名前をアルファベット順にソートします。 <b>注:</b> 一度設定すると変更できません。
ホスト名	コレクターホスト名。  アイコンを使用して、名前をアルファベット順にソートします。
有効	リモートシステムにインストールされているコレクターを有効化または無効化します。 データソースが既にデータ収集のコレクターのいずれかに割り当てられている場合、アプリケーションではコレクターを無効化できなくなります。
接続	OBRシステムとコレクターがインストールされているリモートシステム間の接続をテストします。
インストール	コレクターがインストールされているかどうかを示します。
ポリシー	必要な収集ポリシーがすべてコレクターシステムにインストールされているかどうかを示します。  アイコンをクリックして、新しく作成したリモートコレクターのポリシーを同期します。
データソース	データソースがコレクターで設定されているかどうかを示します。

フィールド	説明
	 アイコンをクリックして、新しく作成したリモートコレクターのデータソースを同期します。
テスト接続	コレクター接続をテストします。
新規作成	設定パラメーターを入力して、新規リモートコレクター接続を作成します。
編集	リモートコレクターの設定パラメーターを変更します。 <b>重要:</b> 必ず一度に1つのコレクターのパラメーターを編集して、変更を保存してください。
削除	データ収集に対して設定されているリモートコレクターを削除します。
保存	コレクターに対して行われた変更を保存します。



### 設定パラメーター

フィールド	説明
名前	リモートシステムにインストールされているコレクターの表示名。この名前にはスペースまたは特殊文字を含めることができません。 <b>注:</b> 一度設定すると変更できません。
ホスト名	コレクターホスト名。

## リモートシステムにインストールされているコレクターの設定

リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターを設定するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [コレクター] をクリックします。[コレクターの設定] ページが表示されます。
2. [新規作成] をクリックすると、[設定パラメーター] セクションが開きます。
3. [名前] フィールドに、コレクターの名前を入力します。

4. [ホスト名] フィールドに、コレクターのホスト名を入力します。
5. [保存] をクリックして、設定を完了します。
6. [コレクターの設定] ページの [ポリシー] で、 アイコンをクリックして、新しく作成したリモートコレクターのポリシーを同期します。
7. [データソース] の  アイコンをクリックして、新しく作成したリモートコレクターのポリシーを同期します。

## リモートシステムにインストールされているコレクターの無効化

リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターを無効化するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [コレクター] をクリックします。[コレクターの設定] ページが表示されます。
2. [コレクターのサマリー] セクションで [有効] フィールドのチェックを外します。
3. [保存] をクリックします。

**注:** ソースがコレクターに割り当てられている場合、[有効] チェックボックスをオフにすることはできません。どのデータソースもコレクターに割り当てられていないようにする必要があります。

## リモートシステムにインストールされているコレクターのテスト

リモートシステムにインストールされている (OBRシステムにインストールされていない) コレクターをテストするには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [コレクター] をクリックします。[コレクターの設定] ページが表示されます。

2. テストするコレクターを選択してから **[テスト接続]** をクリックします。  
接続が存在する場合は、**[テスト接続が成功しました]** というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## 第26章: データ処理

[データ処理] ページを使用して、ワークフロージョブストリームを制御することができます。このページの情報 は、以下の2つのタブに分けて表示されます。

### ストリームの詳細

このタブでは、ジョブストリームを設定して、ストリームの最大再試行回数およびステップごとの最大実行時間を指定することができます。再試行回数および実行時間は、すべてのコンテンツパック、特定のコンテンツパックコンポーネント、ジョブストリーム、またはストリーム内の特定のジョブステップに対して指定できます。

### ストリームリソースコントロール

このタブにはジョブストリームリソースの詳細が表示されるため、ジョブストリームの特定のステップに接続されたリソースを管理して、リソースタイプにアクセス可能なジョブの数に制限を設定するのに役に立ちます。

[データ処理] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [最大再試行回数および最大実行時間の設定](#)
- [ストリームリソースの詳細の設定](#)

[ストリームの詳細] タブには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
レベル	最大再試行回数および最大実行時間を設定するレベルを選択します。オプションには次のものがあります。 <ul style="list-style-type: none"><li>• すべてのコンテンツパック</li><li>• コンテンツパック</li><li>• ストリーム</li><li>• ステップ</li></ul>
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。[レベル] リストで [コンテンツパック]、

フィールド	説明
	[ストリーム]、または [ステップ] を選択した場合にのみ、このドロップダウンリストが表示されます。
ストリーム名	選択したコンテンツパック内のジョブストリームの名前。[レベル] リストで [ストリーム]、または [ステップ] を選択した場合にのみ、このドロップダウンリストが表示されます。
ステップID	ジョブステップの固有ID。[レベル] リストで [ステップ] を選択した場合にのみ、この列が表示されます。
ビジネス名	ストリームのエイリアス名。[レベル] リストで [ステップ] を選択した場合にのみ、この列が表示されます。
最大再試行回数	失敗時のジョブステップの最大再試行回数。このフィールドで設定可能な最大値は8640です。
最大実行時間 (分)	ジョブステップが実行を完了するための最大時間 (分)。このフィールドで設定可能な最大値は180分です。
保存	行われた変更を保存します。

[ストリームリソースコントロール] タブには、以下の項目が表示されます。



フィールド	説明
リソースタイプ	データプロセスで使用されるリソースのタイプ。
無制限のリソース	無制限のリソースにアクセスするオプション。このオプションを選択すると、[リソース数] フィールドが無効になります。
リソース数	リソースに同時にアクセス可能なストリームの最大数。このフィールドで設定可能な最大値は20,000です。
保存	行われた変更を保存します。

## 最大再試行回数および最大実行時間の設定



インストールされているすべてのコンテンツパック、特定のコンテンツパック、コンテンツパック内の特定のジョブストリーム、またはジョブストリーム内の特定のジョブステップの最大再試行回数および最大実行時間を設定することができます。次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [データ処理] をクリックします。  
[データ処理] ページが表示されます。

2. [ストリームの詳細] タブで、次のいずれかの手順を実行します。
  - すべてのコンテンツパックの最大再試行回数と最大実行時間を設定するには、[レベル] リストで [すべてのコンテンツパックコンポーネント] を選択します。
  - 特定のコンテンツパックの最大再試行回数と最大実行時間を設定するには、[レベル] リストで [コンテンツパックコンポーネント] を選択し、[コンテンツパックコンポーネント名] リストでコンテンツパックコンポーネントを選択します。
  - 特定のジョブストリームの最大再試行回数と最大実行時間を設定するには、[レベル] リストで [ストリーム] を選択し、[コンテンツパックコンポーネント名] リストでコンテンツパックコンポーネントを選択してから、[ストリーム名] リストでジョブストリームを選択します。
  - 特定のジョブステップの最大再試行回数と最大実行時間を設定するには、[レベル] リストで [ステップ] を選択し、[コンテンツパックコンポーネント名] リストでコンテンツパックを選択してから、[ストリーム名] リストでジョブストリームを選択します。

3. [最大再試行回数] 列に、値を入力します。  または  アイコンをクリックして値を増減できます。

注: このフィールドで設定可能な最大値は8640です。



4. 最大実行時間 (分) 列で、値を入力します。  または  アイコンをクリックして値を増減できます。

注: このフィールドで設定可能な最大値は180分です。

5. [保存] をクリックします。  
[ジョブの詳細を正常に保存しました。] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## ストリームリソースの詳細の設定

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [データ処理] をクリックします。  
[データ処理] ページが表示されます。
2. [ストリームリソースコントロール] タブをクリックして、リソースの詳細を表示します。
3. 次のステップのうちのいずれかを実行します。
  - 特定のリソースタイプについて、ジョブストリームが無制限にリソースにアクセスできるようにするには、[無制限のリソース] 列のチェックボックスをオンにします。
  - リソースタイプにアクセスできるストリームの数を指定するには、[リソース数] 列のボックスに値を入

かします。  または  アイコンをクリックして値を増減できます。

**注:** このフィールドで設定可能な最大値は20,000です。

4. **[保存]** をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。



## 第27章: セキュリティ

[セキュリティ] ページを使用して、OBRで使用されるセキュリティ認証プロトコルであるライトウェイトシングルサインオン (LW-SSO) およびSAP BusinessObjects Trusted Authenticationを設定することができます。

[セキュリティ] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [LW-SSO認証の設定](#)
- [SAP BusinessObjects Trusted Authenticationの設定](#)
- [ログオンバナーの設定](#)

注: このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

[セキュリティ] ページには、以下の項目が表示されます。

### [LW-SSO] タブ

フィールド	説明
LW-SSO	LW-SSOを有効または無効にするオプション。
ドメイン	LW-SSOが有効なドメイン。デフォルトでは、OBRホストシステムのドメインが有効です。
有効期限	LW-SSOセッションが有効な期間。デフォルト値は60分です。  注: LW-SSOの有効期限は、アプリケーションセッションの有効期限以上の長さにする必要があります。推奨される値は60分です。高レベルのセキュリティが不要なアプリケーションの場合は、300分のような大きな値に設定することができます。  LW - SSO統合に参加するすべてのアプリケーションは、同じGMT時刻を使用する必要があります。
Init文字列	LW-SSOセッショントークンの暗号化と復号化に使用される共有キー。  注: LW-SSOの場合は、Single Sign-On (シングルサインオン) 環境内の他のアプリケーションでLW-SSOが有効で、同じInit文字列で動作していることが必要です。
保護されたドメイン	LW-SSOが保護されているドメイン。デフォルトでは、OBRホストシステムのドメインが保護されます。

## [BO信頼された認証] タブ

フィールド	説明
有効	SAP BusinessObjects Trusted Authenticationを有効または無効にするオプション。
共有シークレット	Trusted Authenticationセッショントークンの暗号化と復号化に使用される共有キー。

## [ログオンバナー] タブ

フィールド	説明
バナーの表示	ログオンバナーの表示メッセージを有効または無効にするチェックボックスです。
バナーメッセージ	OBRのログオン時に表示されるテキストです。

## LW-SSO認証の設定

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [セキュリティ] をクリックします。  
[セキュリティ] ページが表示されます。
2. [LW-SSOの設定] で、認証の詳細を指定するか、入力します。

フィールド	説明
LW-SSO	LW-SSOを有効または無効にするオプション。
ドメイン	LW-SSOが有効なドメイン。デフォルトでは、OBRホストシステムのドメインが有効です。
有効期限	LW-SSOセッションが有効な期間。デフォルト値は60分です。  <b>注:</b> LW-SSOの有効期限は、アプリケーションセッションの有効期限以上の長さにする必要があります。推奨される値は60分です。高レベルのセキュリティが不要なアプリケーションの場合は、300分のような大きな値に設定することができます。  LW-SSO統合に参加するすべてのアプリケーションは、同じGMT時刻を使用する必要があります。
Init文字列	LW-SSOセッショントークンの暗号化と復号化に使用される共有キー。

フィールド	説明
	注: LW-SSOの場合は、Single Sign-On (シングルサインオン) 環境内の他のアプリケーションでLW-SSOが有効で、同じInit文字列で動作している必要があります。
保護されたドメイン	LW-SSOが保護されているドメイン。デフォルトでは、OBRホストシステムのドメインが保護されます。

3. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

注: このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

## SAP BusinessObjects Trusted Authenticationの設定

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [セキュリティ] をクリックします。  
[セキュリティ] ページが表示されます。
2. [BO信頼された認証] タブをクリックします。
3. [BO信頼された認証の設定] で、認証の詳細を指定または入力します。

フィールド	説明
有効	SAP BusinessObjects Trusted Authenticationを有効または無効にするオプション。
共有シークレット	Trusted Authenticationセッショントークンの暗号化と復号化に使用される共有キー。

4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。保存が正常に行われると、共有キーの値がCMCアクセス用に自動的に設定されます。

注: このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

## ログオンバナーの設定

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [セキュリティ] をクリックします。  
[セキュリティ] ページが表示されます。

2. [ログオンバナー] タブをクリックします。
3. [ログオンバナー設定] で、次の詳細を指定するか、入力します。

フィールド	説明
バナーの表示	ログオンバナーの表示メッセージを有効または無効にするチェックボックスです。
バナーメッセージ	OBRのログオン時に表示されるテキストです。

4. [保存] をクリックします。

ログオンバナーの設定後、管理コンソールからSAP BusinessObjectsまたはCMCを起動すると、ログオンバナー警告メッセージが表示されます。

標準シナリオでは、管理コンソールでログオンバナーを有効にした後、管理コンソールからSAP BusinessObjects起動パッドまたはCMCを起動すると、ログオンバナー警告メッセージが表示されます。[OK] をクリックすると、SAP BusinessObjectsまたはCMCのログオン画面がそれぞれ表示されます。ユーザー資格情報を入力してログオンし、タスクを続行します。

SAP BusinessObjectsがリモートサーバーにインストールされているカスタムシナリオまたは分散シナリオでは、管理コンソールでログオンバナーを有効にした後、次の手順を実行します。

1. OBRシステムで、{PMDB\_HOME}/data/に移動します。
2. リモートSAP BusinessObjectsシステムで、config.prpファイルを{PMDB\_HOME}/data/config.prpに手動でコピーします。
3. WebブラウザでSAP BusinessObjectsまたはCMCを起動すると、ログオンバナー警告メッセージが表示されます。
4. [OK] をクリックすると、SAP BusinessObjectsまたはCMCのログオン画面がそれぞれ表示されます。
5. ユーザー資格情報を入力してログオンし、タスクを続行します。

管理コンソールからSAP BusinessObjects起動パッドまたはCMCを起動すると、ログオンバナー警告メッセージが表示されます。[OK] をクリックすると、SAP BusinessObjectsまたはCMCのログオン画面がそれぞれ表示されます。ユーザー資格情報を入力してログオンし、タスクを続行します。

Webブラウザから直接SAP BusinessObjects起動パッドまたはCMCを起動するには、次のURLを使用します。

<https://<システムのFQDN>:8443/BI/>

<https://<システムのFQDN>:8443/CMC/>

<システムのFQDN>は、SAP BusinessObjectsのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

**注:** OBRではデフォルトでHTTPSが有効になっています。HTTPSを無効にしている場合は、次のURLを使用して、SAP BusinessObjects起動パッドまたはCMCを起動することもできます。

http://<システムのFQDN>:8080/CMC

http://<システムのFQDN>:8080/CMC

<システムのFQDN>は、SAP BusinessObjectsのインストール先のシステムの完全修飾ドメイン名です。

## ログオンバナーの無効化

1. 管理コンソールで、[**その他の設定**] > [**セキュリティ**] をクリックします。  
[セキュリティ] ページが表示されます。
2. [**ログオンバナー**] タブをクリックします。
3. [**ログオンバナー設定**] で、[**バナーの表示**] チェックボックスをオフにします。
4. [**保存**] をクリックします。

## 第28章: シフト

[シフト管理] ページを使用して、新しい時間シフトの作成、シフトの変更、および必要なくなったシフトの満了を行うことができます。

[シフト管理] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- [時間シフトの表示](#)
- [新しい時間シフトの作成](#)
- [時間シフトの変更](#)
- [時間シフトの満了](#)

[シフト管理] ページには、以下の項目が表示されます。

### シフト管理

フィールド	説明
シフト名	シフトの名前。
有効開始	シフトベースのデータの収集をOBRが開始する日付。
有効期限	シフトが満了する日付。満了しないようにシフトが設定されている場合は、[期限を満了しない]が表示されます。
シフトを満了する	必要なくなったシフトを満了します。
新規作成	新規シフトを作成します。
編集	選択したシフトを編集します。

### シフトの新規作成

フィールド	説明
シフト名	作成するシフトの名前 (プライム、夜間、または深夜)。
有効開始	シフトが開始する日付。

フィールド	説明
有効期限	シフトが満了する日付。
キャンセル	変更をキャンセルします。
保存	変更を保存します。

## シフトの編集

フィールド	説明
新規シフト日	クリックして、シフトの編集を開始します。
シフト日	シフト期間に含める曜日。
開始時刻	シフトの開始時刻。値は24時間表示である必要があります。開始時刻の範囲は0～23時間です。
終了時刻	シフトの終了時刻。値は24時間表示である必要があります。終了時刻の範囲は1～24時間です。
シフト日の削除	行を削除します。
シフト名	シフトの名前。このフィールドはデフォルトでは無効になっています。
有効開始	シフトが開始する日付。このフィールドはデフォルトでは無効になっています。
有効期限	シフトが満了する日付。[期限を満了しない] チェックボックスをオンにすると、このフィールドは無効になります。
キャンセル	変更をキャンセルします。
保存	変更を保存します。

## シフト情報の表示

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [シフト] をクリックします。  
[シフト管理] ページが表示されます。
2. 以下が表示されます。

フィールド	説明
シフト名	シフトの名前。
有効開始	シフトベースのデータの収集をOBRが開始する日付。
有効期限	シフトが満了する日付。満了しないようにシフトが設定されている場合は、[期限を満了しない]が表示されます。
シフトを満了する	必要なくなったシフトを満了します。

## 新しい時間シフトの作成

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [シフト] をクリックします。  
[シフト管理] ページが表示されます。
2. 新しいシフトを作成するには、[新規作成] をクリックします。  
[新規作成] ボックスが開きます。
3. 次のフィールドに入力します。

フィールド	説明
シフト名	作成するシフトの名前 (プライム、夜間、または深夜)。
有効開始	シフトが開始する日付。
有効期限	シフトが満了する日付。
キャンセル	変更をキャンセルします。
保存	変更を保存します。

4. [保存] をクリックします。  
新規作成したシフトが[シフト管理] テーブルに表示されます。

## 時間シフトの変更

シフトには、このシフトに対して定義したすべての時間範囲が含まれます。シフトを変更する際には、シフト内の時間範囲を変更したり、シフトに新しい時間範囲を追加したりすることができます。

シフトを変更するには、次の手順を実行します。



1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [シフト] をクリックします。  
[シフト管理] ページが表示されます。
2. [シフト名] 列で、変更するシフトをクリックします。
3. [編集] をクリックします。[シフトの編集] ボックスが表示されます。
4. シフトを編集するには、[新規シフト日] をクリックして、以下を実行します。
  - [シフト日] 列で曜日を変更する。
  - シフトの開始時刻と終了時刻を変更する。
  - [シフト日の削除] をクリックしてシフト日を削除する。

**注:** [シフト名] または [有効開始] の値を変更することはできません。これらのフィールドはデフォルトで無効になっています。シフトを変更した場合、OBRによって収集済みのデータは再処理されなくなります。

5. [保存] をクリックして変更を保存します。

## 時間シフトの満了

時間シフトをいったん作成すると、OBRでは削除することができません。これは、このシフト期間に基づいて収集および集計されたデータがデータ分析目的のために使用可能であるためです。このデータは、OBRデータベースに残ります。ただし、時間シフトがなくなつた場合には、満了することによって無効にすることができます。満了した時間シフトに対して、OBRはデータを格納しません。

シフトを満了するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [シフト] をクリックします。  
[シフト管理] ページが表示されます。
2. [シフト名] 列で、満了するシフトをクリックします。
3. [シフトを満了する] をクリックしてシフトを満了します。
4. 確認メッセージボックスで、[はい] をクリックします。

**注:** シフトを変更した場合、OBRによって収集済みのデータは再処理されなくなります。

## 第29章: エージング

[エージング] ページを使用して、OBRデータベーステーブルに保存されているデータの保持期間を管理することができます。OBRがテーブル内にデータを保持する期間 (この期間経過後にデータは消去されます) を指定することができます。

[エージング] ページを使用して、[アクティブ保持期間の設定](#)を行えます。

[エージング] ページには、以下の項目が表示されます。

### エージング

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	エージングとアーカイブの詳細を表示するコンテンツパックコンポーネントの名前。
インストール日	コンテンツパックコンポーネントがインストールされた日時。
バージョン	コンテンツパックコンポーネントのバージョン番号。
保持の設定	保持ポリシーを設定するオプション。

### 保持の設定

フィールド	説明
時間タイプ	<p>収集済みまたは要約済みデータを保管するのに使用されるデータテーブルのタイプ。タイプは以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>5分: このテーブルは、5分ごとに収集された要約データを格納します。</li><li>ポーリング時: このテーブルは、ポーリング時のデータまたは未処理のデータを格納します。</li><li>時間別: このテーブルは、時間別レベルで集約された未処理データまたは割合データを格納します。</li><li>日別: このテーブルは、日別レベルで集約された時間別データを格納します。</li><li>年別: このテーブルは、年別レベルで集約された月別データを格納しま</li></ul>

フィールド	説明
	<p>す。</p> <p><b>注:</b> 月別テーブルおよび年別テーブルは、すぐに使えるOOTBコンテンツパック用のデータベース内の物理テーブルではありません。</p>
アクティブの保持	<p>OBRがデータを保持する期間。デフォルト値は以下のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 割合または5分間のデータ: 90日間</li> <li>• 未処理またはポーリング時のデータ: 90日間。</li> <li>• 日別データ: 1825日間</li> <li>• 時間別データ: 365日間</li> <li>• 年別データ: 1825日間</li> </ul>

## アクティブ保持期間の設定

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [エージング] をクリックします。  
[エージング] ページが表示されます。
2. 特定のコンテンツパックコンポーネントについて、[保持の設定] をクリックします。  
コンテンツパックの保持の詳細設定が表示されます。  
  
コンテンツパックのコンポーネント名を入力するか、テーブルからコンテンツパックのコンポーネント名を選択できます。
3. 特定のタイプの定期的なデータについて、データを保持する日数を入力します。
4. [保存] をクリックします。  
[正常に保存しました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

### 重要な考慮事項:

- コアコンテンツパックコンポーネントのアクティブ保持期間ポリシーを変更することはできません。
- すべてのコンテンツパックのETLおよびアプリコンポーネントのアクティブ保持期間ポリシーを変更することはできません(変更が可能なのは、すべてのコンテンツパックのドメインコンポーネントのみにおいてです)。

**注意:** サービスヘルスコンテンツパックコンポーネントおよびOMiコンテンツパックコンポーネントの場合は、「ポーリング時」テーブルの保持期間を変更しないでください。このテーブル内のデータは、スナップショットデータであり、短期間ではステータスが変化しない場合があります。ただし、時間別および日別のデータの保持期間は変更できます。

## 第30章: ライセンス取得

[ライセンス] ページには、OBRライセンスの詳細が表示されます。ライセンスタイプを変更するには、このページにあるハイパーリンクを使用してHPE Password Centerにアクセスします。

[ライセンス取得] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [ライセンス情報の表示](#)
- [永久的なライセンスキーの取得](#)
- [永久的なライセンスキーのインストール](#)
- [SAP BOBJライセンスの再アクティブ化](#)

[ライセンス取得] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
ライセンス機能	ライセンスされた機能が表示されます: Operations Bridge Reporterサーバー
アクティブライセンスのタイプ	既存のライセンスのタイプです。次のライセンスタイプがあります。 <ul style="list-style-type: none"><li>• インスタントオン (IO): 60日間評価ライセンス (デフォルト)</li><li>• 永久的 (PERM): 永久的なライセンス</li></ul>
ライセンス有効期限までの日数	ライセンスの有効期限までの残りの日数。
ライセンス資格	現在のライセンスでサポートされる最大ノード数。
ライセンス使用状況	現在のライセンスで使用中のノード数。
残りのノード	現在のライセンスで追加可能な残りのノード数または現在のライセンスの使用数を超過しているノード数。
Vertica資格	現在のVerticaライセンスでサポートされる最大ノード数。
Vertica使用率	現在のVerticaライセンスで使用中のノード数。
HPEパスワードセンターの起動	永久的なライセンスキーを取得するために、HPEライセンスセンターのWebサイトにアクセスするのに使用するリンク。

## ライセンス情報の表示

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [ライセンス] をクリックします。  
[ライセンス取得] ページが表示されます。
2. [OBRライセンスの詳細] には、以下が表示されます。

フィールド	説明
ライセンス機能	ライセンスされた機能が表示されます: Operations Bridge Reporterサーバー
アクティブライセンスのタイプ	既存のライセンスのタイプです。次のライセンスタイプがあります。 <ul style="list-style-type: none"> <li>◦ インスタントオン (IO)</li> <li>◦ 永久的 (PERM)</li> </ul>
ライセンス有効期限までの日数	ライセンスの有効期限までの残りの日数。
ライセンス資格	現在のライセンスでサポートされる最大ノード数。
ライセンス使用状況	現在のライセンスで使用中的ノード数。
残りのノード	現在のライセンスで追加可能な残りのノード数または現在のライセンスの使用数を超過しているノード数。
Vertica資格	現在のVerticaライセンスでサポートされる最大ノード数。
Vertica使用率	現在のVerticaライセンスで使用中的ノード数。

## 永久的なライセンスキーの取得

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [ライセンス] をクリックします。  
[ライセンス取得] ページが表示されます。
2. 自分のユーザーIDとパスワードを使用して、HPEパスポートにログオンします。アカウントを持っていない場合は、操作を続ける前にアカウントを作成する必要があります。
3. Webサイトに書かれている指示に従って、ライセンスキーを取得します。

または

1. [HPEソフトウェアライセンスWebサイト](#)にアクセスします。
2. 自分のユーザーIDとパスワードを使用して、HPEサポートにログインします。アカウントを持っていない場合は、操作を続ける前にアカウントを作成する必要があります。
3. Webサイトに書かれている指示に従って、ライセンスキーを取得します。

## 永久的なライセンスキーのインストール

HPEライセンスマネージャーを使用して永久的なライセンスキーをインストールする必要があります。

ライセンスをインストールするには、次の手順を実行します。

1. OBRのインストール時に使用したものと同一ユーザー名でOBRシステムにログインします。
2. コマンドプロンプトを開き、次のコマンドを実行します。

```
SHRLicenseManager -install <ライセンスのファイルパス>
```

ここで、<ライセンスファイルのパス>は、ライセンスファイルの保存先のパスです。

3. インストールされているライセンスをリストするため、コマンドプロンプトで次のコマンドを実行します。

```
SHRLicenseManager -list
```

インストールされているライセンスのリストの例を次に示します。

```
PID:1502
```

```
(1) License Feature :HPE Operations Bridge Reporter B0 Pack
```

```
License Feature Id :1004
```

```
Active License Type :Instant On
```

```
Days to License Expiry :60
```

```
License Entitlement :50
```

```
(2) License Feature :HPE Operations Bridge Reporter Server
```

```
License Feature Id :1002
```

```
Active License Type :Instant On
```

```
Days to License Expiry :60
```

```
License Entitlement :50
```

```
(3) License Feature :HPE Operations Bridge Reporter Collector
```

```
License Feature Id :1006
```

Active License Type :Instant On

Days to License Expiry :60

License Entitlement :50

4. ライセンスを適用するには管理者サービスを再起動してインストールする必要があります。HPE\_PMDB\_Platform\_AdministratorサービスをHPE OBRシステムで再起動するには、次の手順に従います。

#### Windowsの場合:

- a. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックします。[ファイル名を指定して実行] ダイアログボックスが表示されます。
- b. [開く] に「service.msc」と入力します。[サービス] ウィンドウが表示されます。
- c. 右側のペインで、[HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator] サービスを右クリックしてから[再起動] をクリックします。
- d. [サービス] ウィンドウを閉じます。

#### Linuxの場合:

コマンドプロンプトに次のコマンドを入力します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Administrator restart
```

## SAP BOBJライセンスの再アクティブ化とSAP BOBJサーバーの再有効化

SAP BOBJライセンスは、OBRライセンスの有効性に依存します。OBRライセンスが期限切れの場合、SAP BOBJライセンスキーを非アクティブ化してすべてのSAP BOBJサーバーを無効化します。

SAP BOBJライセンスを再びアクティブにするには、次の手順を実行します。

1. 新規のOBRライセンスキーを取得します。「[永久的なライセンスキーの取得](#)」(213ページ)を参照してください。
2. 新規のOBRライセンスキーをインストールします。「[永久的なライセンスキーのインストール](#)」(214ページ)を参照してください。

**注:** 永久的なライセンスキーをインストールした後で、少なくとも5分待ってから管理コンソールにアクセスしてSAP BOBJライセンスを再びアクティブにしてください。

3. OBR管理コンソールにアクセスします。

OBRライセンスを再びアクティブにして管理コンソールにアクセスすると、OBRが自動でSAP BOBJライセンスキーを再びアクティブにします。ただし、SAP BOBJサーバーは無効な状態のままになっています。SAP BOBJを機能させるには、サーバーを手動で有効にする必要があります。

SAP BOBJサーバーを有効にするには、次の手順を実行します。

#### Windowsの場合：

1. 管理者としてOBRシステムにログオンします。
2. [スタート] > [プログラム] > [BusinessObjects XI 4.x] > [SAP Business Intelligence] > [Central Configuration Manager] をクリックします。[Central Configuration Manager] ウィンドウが表示されます。
3. [Display Name] 列で、[Server Intelligence Agent (OBR)] を選択します。
4. メインツールバーで、[Manage Servers] アイコンをクリックします。[Log On] ダイアログボックスが表示されます。
5. [システム] リストで、SAP BusinessObjectsがインストールされているシステムを選択します。
6. [ユーザー名] と[パスワード] フィールドに、SAP BusinessObjectsサーバーのユーザー資格情報を入力します。

デフォルトのユーザー名はAdministratorで、デフォルトのパスワードは<管理コンソールのパスワード>です。

7. [接続] をクリックします。[Manage Servers] ウィンドウが表示されます。
8. [更新] アイコンをクリックして、サーバーリストを更新します。
9. [Select All] をクリックして、リストされているすべてのサーバーを選択し、[Enable] アイコンをクリックして、サーバーを再起動します。
10. [閉じる] をクリックして、ウィンドウを閉じます。
11. 開いているすべてのウィンドウを閉じます。

#### Linuxの場合：

1. 次のURLを使用して中央管理コンソールにログオンします。

`http://<OBRシステムのFQDN>:8080/CMC`

ここでの<OBRシステムのFQDN>は、OBRシステムの完全修飾ドメイン名です。

2. **Administrator**として、パスワード (<管理コンソールのパスワード>) を入力してログオンします。
3. [Servers] をクリックして、左側のメニューのサーバーリストを選択します。



複数のサーバーを選択するには、ShiftキーまたはCtrlキーを押しながらサーバーをクリックします。

4. 選択したサーバーのグループを右クリックし、**[Enable Server]** をクリックします。

新しいライセンスをインストールした後でBusiness Objectsサービスがアクティブにならない場合は、[「BusinessObjectのサービスのトラブルシューティング」](#)を参照してください。

## 第31章: レポートプラットフォーム

[レポートプラットフォーム] ページを使用して、ユーザーアカウントの作成および管理を行うことができます。この際、OBRに統合されているSAP BusinessObjects CMCを使用します。SAP BusinessObjects InfoViewを使用すると、対話型機能およびカスタマイズのオプションを指定して、OBRレポートを表示する際にユーザーのエクスペリエンスをカスタマイズすることができます。

[レポートプラットフォーム] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- [SAP BusinessObjects 中央管理コンソールへのアクセス](#)
- [SAP BusinessObjects BI起動パッドへのアクセス](#)
- [管理者アカウントのパスワードの作成](#)
- [BusinessObjectsのサービスのトラブルシューティング](#)

**注:** このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

[レポートプラットフォーム] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
Business Objects CMC	SAP BusinessObjects CMCを起動します。
Business Objects ローンチパッド	SAP BusinessObjects BI起動パッドを起動します。

## SAP BusinessObjects 中央管理コンソールへのアクセス

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [レポートプラットフォーム] をクリックします。  
[レポートプラットフォーム] ページが表示されます。
2. [CMCの起動] をクリックします。  
SAP BusinessObjects CMCのログインページが表示されます。
3. タイプ

フィールド	説明
システム	デフォルトで表示されるSAP BusinessObjectsがインストールされているシステムの名前。
ユーザー名	SAP BusinessObjects CMCユーザーの名前。
パスワード	SAP BusinessObjects CMCユーザーのパスワード。
認証	CMCにログオンする認証タイプ。デフォルトのタイプは [Enterprise] です。

4. **[ログオン]** をクリックします。  
SAP BusinessObjects CMCが開きます。

注: このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

## SAP BusinessObjects BI起動パッドへのアクセス

1. 管理コンソールで、**[その他の設定]** > **[レポートプラットフォーム]** をクリックします。  
[レポートプラットフォーム] ページが表示されます。
2. **[BI起動パッドの起動]** をクリックします。  
SAP BusinessObjects BI起動パッドの**[ログオン]** ページが表示されます。
3. タイプ

フィールド	説明
システム	デフォルトで表示されるSAP BusinessObjectsがインストールされているシステムの名前。
ユーザー名	SAP BusinessObjects BI起動パッドユーザーの名前。
パスワード	SAP BusinessObjects BI起動パッドユーザーのパスワード。

4. **[ログオン]** をクリックします。  
SAP BusinessObjects BI起動パッドポータルが開きます。

注: このページは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、表示されます。

## 管理者アカウントのパスワードの作成

デフォルトの管理者ユーザー名のパスワードを作成する場合は、次の手順を実行します。

1. SAP BusinessObjects CMCにアクセスします。
2. 中央管理コンソールのログオン画面で、[ユーザー名] フィールドに、「Administrator」と入力します。
3. [ログオン] をクリックします。[CMC ホーム] 画面が表示されます。
4. [ユーザーとグループ] をクリックします。[ユーザーとグループ] 画面が表示されます。
5. 右側のペインで、[Administrators] をダブルクリックします。
6. [Administrator] を右クリックしてから、[プロパティ] をクリックします。[プロパティ: Administrator] ダイアログボックスが表示されます。
7. [Enterprise/パスワード設定] の下にある [パスワード] フィールドに新しいパスワードを入力します。
8. [確認] フィールドに、確認のためにパスワードを再入力します。必要な場合は、この画面で管理者ユーザー名を変更し、他の必要な詳細を指定することができます。
9. [保存して閉じる] をクリックして変更を受け入れます。
10. [ログアウト] をクリックして、中央管理コンソールを終了します。

注: このタスクは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、有効です。

## BusinessObjectsのサービスのトラブルシューティング

1. <http://<OBRシステムのFQDN>:8443/CMCリンク>から、**CMC**アプリケーションにログインします。
2. [ライセンスキー] をクリックして、ライセンスが存在するかどうかを確認します。ライセンスが存在しない場合、「[SAP BOBJライセンスの再アクティブ化](#)」を参照して、ライセンスを取得する必要があります。
3. ライセンスが存在する場合は、[サーバー] をクリックし、サーバーが有効化されているかを確認できるページを開きます。
4. サーバーが有効化されていない場合は、[有効] ボタンをクリックしてすべてのサーバーを有効化します。
5. 次のページに進みます。
6. [サーバー] セクションでアイテムを有効化します。

## 第32章: 保留中の設定

このページでは、コンテンツパックコンポーネントのインストールおよびデータソース設定のステータスを確認できます。このページに表示されるステータスに基づいて、残りのコンテンツパックのインストールや、データソースの設定を決定できます。

[保留中の設定] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネントのインストール状況	選択されたデータソースを基に、コンテンツパックコンポーネントがインストールされているかどうかが表示されます。  必要なコンテンツパックコンポーネントがインストールされていない場合、表示されるリンクをクリックしてインストールします。
データソースの設定	コンテンツパックコンポーネントから、選択されたデータソースへの接続が設定されているかどうかが表示されます。  必要な接続が完了していない場合、表示されるリンクをクリックして接続を完了させます。

## 第33章: プラットフォームサマリー

[プラットフォームサマリー] ページには、管理コンソールのアプリケーションサーバー稼働状態と可用性の詳細なステータスが表示されます。



[プラットフォームサマリー] ページを使用して、[アプリケーションサーバーの詳細を表示](#)します。

[プラットフォームサマリー] ページには、以下の項目が表示されます。



### アプリケーションサーバーの情報

フィールド	説明
ホスト名	管理コンソールアプリケーションサーバーの名前。
ポート	管理コンソールアプリケーションサーバーを照会するためのポート番号。
ホストOS	アプリケーションサーバーにインストールされているオペレーティングシステム。
サーバータイプ	アプリケーションサーバーのタイプ。
仮想マシン名	アプリケーションサーバーホスト仮想マシンの名前。
仮想マシンのバージョン	アプリケーションサーバーホスト仮想マシンのバージョン番号。
仮想マシンのベンダー	ホスト仮想マシンのプロバイダー。



### アプリケーションサーバーの可用性

フィールド	説明
アプリケーションサーバーの可用性	<p>次の期間中にアプリケーションサーバーが利用可能であった時間を示すグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>過去7日間</li><li>過去1日</li></ul> <p>凡例の説明:</p> <p> <b>利用可能</b> は、サーバーが利用可能であった割合を示します。</p> <p> <b>利用不可</b> は、サーバーが利用不可であった割合を示します。</p>

## メモリー使用率

フィールド	説明
メモリのタイプ	使用されるメモリのタイプのオプション - ヒープメモリまたは非ヒープメモリ。
最新のメモリー使用率 (%)	<p>ヒープメモリー使用率の割合を示すグラフィック表示。</p> <p><b>凡例の説明:</b></p> <p> <b>良好</b> は、ヒープメモリー使用率が危険限度内にあることを示します。</p> <p> <b>危険域</b> は、ヒープメモリー使用率が危険限度外にあることを示します。</p>
経過時間ごとのメモリー使用率	<p>次の期間中の、経過時間ごとのメモリー使用率のインタラクティブなグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>過去1日</li> <li>過去7日間</li> </ul>

## CPU使用率

フィールド	説明
最新のCPU使用率 (%)	<p>CPU使用率の割合を示すグラフィック表示。</p> <p><b>凡例の説明:</b></p> <p> <b>良好</b> は、CPU使用率が危険限度内にあることを示します。</p> <p> <b>危険域</b> は、CPU使用率が危険限度外にあることを示します。</p>
経過時間ごとのCPU使用率 (%)	<p>次の期間中にアプリケーションサーバーが使用したCPUの割合を示すインタラクティブなグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>過去1日</li> <li>過去7日間</li> </ul>



## アプリケーションサーバーの詳細の表示

アプリケーションサーバー、その可用性、CPU、およびメモリー使用率に関する情報を表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[内部監視] > [プラットフォームサマリー] をクリックします。  
[プラットフォームサマリー] ページが表示されます。
2. [アプリケーションサーバーの情報] には、以下が表示されます。

フィールド	説明
ホスト名	管理コンソールアプリケーションサーバーの名前。
ポート	管理コンソールアプリケーションサーバーを照会するためのポート番号。
ホストOS	アプリケーションサーバーにインストールされているオペレーティングシステム。
サーバータイプ	アプリケーションサーバーのタイプ。
仮想マシン名	アプリケーションサーバーホスト仮想マシンの名前。
仮想マシンのバージョン	アプリケーションサーバーホスト仮想マシンのバージョン番号。
仮想マシンのベンダー	ホスト仮想マシンのプロバイダー。

3. [アプリケーションサーバーの可用性 (%)] には、アプリケーションサーバーの可用性が表示されます。

フィールド	説明
アプリケーションサーバーの可用性	<p>次の期間中にアプリケーションサーバーが利用可能であった時間を示すグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 過去7日間</li> <li>○ 過去1日</li> </ul> <p><b>凡例の説明:</b></p> <p> <b>利用可能</b> は、サーバーが利用可能であった時間 (時間単位) を示します。</p> <p> <b>利用不可</b> は、サーバーが利用不可であった時間 (時間単位) を示します。</p>

4. [メモリ使用率] で、[メモリのタイプ] リスト中の[ヒープメモリ] を選択して、ヒープ<sup>1</sup>メモリ使用率を表示します。
5. [経過時間ごとのメモリ使用率] には、以下が表示されます。

<sup>1</sup>動的なメモリ割り当て、またはヒープに基づいたメモリ割り当ては、そのプログラムのランタイム中にコンピュータープログラムで使用するメモリストレージの割り当てです。



フィールド	説明
最新のメモリ使用率 (%)	<p>ヒープメモリ使用率の割合を示すグラフィック表示。</p> <p><b>凡例の説明:</b></p> <p><span style="color: green;">■</span> <b>利用可能</b> は、ヒープメモリ使用率が危険限度内にあることを示します。</p> <p><span style="color: red;">■</span> <b>利用不可</b> は、ヒープメモリ使用率が危険限度外にあることを示します。</p>
経過時間ごとのメモリ使用率	<p>次の期間中の、経過時間ごとのメモリ使用率のインタラクティブなグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 過去1日</li> <li>○ 過去7日間</li> </ul>

6. [メモリ使用率] で、[メモリのタイプ] リスト中の [非ヒープメモリ] を選択して、非ヒープメモリ使用率を表示します。
7. [経過時間ごとのメモリ使用率] には、以下が表示されます。

フィールド	説明
最新のメモリ使用率 (%)	<p>ヒープメモリ使用率の割合を示すグラフィック表示。</p> <p><b>凡例の説明:</b></p> <p><span style="color: green;">■</span> <b>利用可能</b> は、ヒープメモリ使用率が危険限度内にあることを示します。</p> <p><span style="color: red;">■</span> <b>利用不可</b> は、ヒープメモリ使用率が危険限度外にあることを示します。</p>
経過時間ごとのメモリ使用率	<p>次の期間中の、経過時間ごとのメモリ使用率のインタラクティブなグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 過去1日</li> <li>○ 過去7日間</li> </ul>

8. [CPU使用率] には、アプリケーションサーバーの現在のCPU使用率が表示されます。

フィールド	説明
最新のCPU使用率 (%)	<p>CPU使用率の割合を示すグラフィック表示。</p> <p><b>凡例の説明:</b></p>

フィールド	説明
	<p>■ <b>良好</b> は、CPU使用率が危険限度内にあることを示します。</p> <p>■ <b>危険域</b> は、CPU使用率が危険限度外にあることを示します。</p>
経過時間ごとのCPU使用率 (%)	<p>次の期間中にアプリケーションサーバーが使用したCPUの割合を示すインタラクティブなグラフィック表示。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>○ 過去1日</li><li>○ 過去7日間</li></ul>

## 第34章: データ収集ステータス

[データ収集ステータス] ページを使用して、Operations Agentデータソースにより収集される最新データの時刻に関する概要を表示できます。このページには、Operations Agentコンテンツパックコンポーネントから最新データがプルされた時刻のタイムスタンプが表示されます。このページには、データソース、クラス、およびOperations Agentコンテンツパックコンポーネントにより実行された最終データの経過時間に関する情報も表示できます。

[データ収集ステータス] ページを使用して、[データ収集ステータスの表示](#)を実行できます。

### Operations Agent監査

次のフィールドに値を入力して、フィルターを設定します。

フィールド	説明
ドメイン名	[Operations Agent] ページに表示されるコンテンツパックコンポーネント名またはドメイン名。
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
遅延 (日数)	遅延日数を入力します。

### Operations Agent監査サマリー

フィールド	説明
ドメイン名	ドメインのインストールされているコンテンツコンポーネントの名前。
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
最終データの経過時間	最終データポーリングが発生してからの時間。

### データソースの表示

フィールド	説明
ドメイン名	選択されたホストのデータソースのドメイン名。
ホスト名	選択されたホストのデータソースのホスト名。
データソース	選択されたホストのデータソースの名前。
クラス	選択されたホストのクラスの名前。
最終データの時間	最終データポーリングが発生してからの時間。

## データ収集ステータスの表示

1. 管理コンソールで、[内部監視] > [データ収集ステータス] をクリックします。  
[データ収集ステータス] ページが表示されます。
2. 次のフィールドに値を入力し、フィルターを設定して、**Enter**キーを押します。

フィールド	説明
ドメイン名	[Operations Agent] ページに表示されるコンテンツパックコンポーネント名またはドメイン名。
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
遅延 (日数)	遅延日数を入力します。

3. [Operations Agent監査サマリー] を表示します。

フィールド	説明
ドメイン名	ドメインのインストールされているコンテンツコンポーネントの名前。
ホスト名	Operations Agentデータソースの名前。
最終データの経過時間	最終データポーリングが発生してからの時間。

4. 特定ホストの概要を表示するには、[Operations Agent監査サマリー] テーブルに含まれる該当ホストの名前をクリックするか、[データソースの表示] をクリックします。

フィールド	説明
ドメイン名	選択されたホストのデータソースのドメイン名。
ホスト名	選択されたホストのデータソースのホスト名。
データソース	選択されたホストのデータソースの名前。
クラス	選択されたホストのクラスの名前。
最終データの時間	最終データポーリングが発生してからの時間。

## 第35章: データ処理のステータス

[データ処理のステータス] ページを使用して、データをデータストアに移動するワークフロープロセスを監視することができます。インストールされている各コンテンツパックコンポーネントのジョブストリームのステータスを監視することができます。このページを使用して、作業負荷の実行履歴のトレンドや変動を表示したり、ジョブストリームに関する操作データに着目したりすることもできます。

[データ処理] ページを使用して、以下の操作を行います。

- [アクティブデータストリーム数の表示](#)
- [ストリームの詳細履歴の表示](#)
- [ストリームの履歴トレンドの表示](#)

[データ処理のステータス] ページには、以下の項目が表示されます。





### [最新ストリームの概要] タブ


[最新ストリームの概要] タブには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
ストリーム数	ジョブストリームの総数。この値は、現在実行されているストリームの数、実行するためにロードされているストリームの数、または最後の実行で完了したストリームの数を示します。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。

### ストリームコンテンツパックコンポーネント:<コンテンツパックコンポーネント名>

フィールド	説明
ストリーム名	ジョブストリームの名前。

フィールド	説明
完了/合計	ストリーム内のジョブステップのステータス。[完了] は、ジョブストリーム内の完了したステップの数を示します。そのステップが正常に完了したか、または警告やエラーが発生したかは関係ありません。合計は、ストリーム内のジョブステップの総数を示します。
ステップのステータス	<p>ジョブステップの実行のステータスは次のとおりです。</p> <p> は、ジョブストリームの実行が開始されていなくても、このジョブストリームは実行用にロードされていることを示します。</p> <p> は、ストリーム内のすべてのジョブステップが正常に完了したことを示します。</p> <p> は、一部のジョブステップは完了したけれども、警告が生成されたことを示します。</p> <p> は、ストリーム内のジョブステップが完了できず、エラーが生成されたことを示します。</p>
開始時刻	ジョブステップの実行が開始された時刻 (現地時間)。

ジョブストリームの図表示を見るには、特定のストリーム名の  アイコンをクリックします。[ストリームの詳細] 図が開き、ジョブステップの実行フローとステータスが示されます。

### [ストリームの履歴概要] タブ

[ストリームの履歴概要] タブには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
ストリーム数	指定の期間中に実行されるジョブストリームの総数。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。

## ストリームコンテンツパックコンポーネント: &lt;コンテンツパックコンポーネント名&gt;

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。

## ジョブストリームの詳細の表示





コンテンツパックコンポーネントのジョブストリームの数を表示するには、次の手順を実行します。


1. 管理コンソールで、[内部監視] > [データ処理のステータス] をクリックします。  
[データ処理のステータス] ページが表示されます。
2. [最新ストリームの概要] タブには、以下が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
ストリーム数	ジョブストリームの総数。この値は、現在実行されているストリームの数、実行するためにロードされているストリームの数、または最後の実行で完了したストリームの数を示します。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。

ストリームの詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1. [最新ストリームの概要] テーブルで、特定のコンテンツパックコンポーネント名をクリックします。ストリームコンテンツパックコンポーネント: <コンテンツパックコンポーネント名> テーブルが表示されます。
2. ストリームコンテンツパックコンポーネント: <コンテンツパックコンポーネント名> には、以下が表示されます。

フィールド	説明
ストリーム名	ジョブストリームの名前。
完了/合計	ストリーム内のジョブステップのステータス。[完了] は、ジョブストリーム内の完了したステップの数を示します。そのステップが正常に完了したか、または警告やエラーが発生したかは関係ありません。合計は、ストリーム内のジョブステップの総数を示します。
ステップのステータス	<p>ジョブステップの実行のステータスは次のとおりです。</p> <p> は、ジョブストリームの実行が開始されていなくても、このジョブストリームは実行用にロードされていることを示します。</p> <p> は、ストリーム内のすべてのジョブステップが正常に完了したことを示します。</p> <p> は、一部のジョブステップは完了したけれども、警告が生成されたことを示します。</p> <p> は、ストリーム内のジョブステップが完了できず、エラーが生成されたことを示します。</p>
開始時刻	ジョブステップの実行が開始された時刻 (現地時間)。

3. ジョブストリームの図表示を見るには、特定のストリーム名の  アイコンをクリックします。[ストリームの詳細] 図が開き、ジョブステップの実行フローとステータスが示されます。

ジョブストリーム図に表示された情報を理解し、それを表内の情報に関連付けるには、「[ジョブストリームのステータスについて](#)」を参照してください。ストリームのアラートをトラブルシューティングするには、『Operations Bridge Reporterトラブルシューティングガイド』を参照してください。

## ストリームの履歴概要の表示

コンテンツパックコンポーネントの履歴ジョブストリームの数を表示するには、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[内部監視] > [データ処理のステータス] をクリックします。  
[データ処理のステータス] ページが表示されます。



2. [ストリームの履歴概要] をクリックし、[ストリームの詳細] オプションのいずれかを選択します。

- 過去1日
- 過去7日間

**注:** ジョブステップに関する情報はワークフローフレームワークによってランタイムテーブルに最大7日間保存されます。その後、PMDB\_Platform\_IM\_Serviceによってデータは自動的に消去されます。

3. このテーブルには、以下が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
ストリーム数	指定の期間中に実行されるジョブストリームの総数。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。

ジョブストリームの詳細を表示するには、次の手順を実行します。

1. [ストリームの履歴概要] テーブルで、特定のコンテンツパックコンポーネント名をクリックします。ストリームコンテンツパックコンポーネント: <コンテンツパックコンポーネント名> テーブルが表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックコンポーネントの名前。
OK	正常に完了したジョブストリームの数。
警告	警告メッセージとともに完了したジョブストリームの数。それらの警告は、ストリーム内の残りのジョブステップの実行の妨げにはなりません。
エラー	完了に失敗したジョブストリームの数。これにより、エラー状態が解決されるまで、ジョブストリーム全体が実行を停止します。
総数	実行中のストリームの総数。


## ストリームの履歴トレンドの表示

1. 管理コンソールで、[内部監視] > [データ処理のステータス] をクリックします。  
[データ処理] ページが表示されます。
2. [ストリームの詳細履歴] タブの [フィルタの選択] の下にある [CP] リストからコンテンツパックコンポーネントを選択します。
3. [ストリーム] リストで、ストリームを選択します。
4. [重要度] リストで、グラフを生成する対象として適切な重要度オプションを選択します。オプションには次のものがあります。
  - 警告: 実行中のジョブストリームで警告状態が検出された回数を表示します。
  - エラー: 実行中のジョブストリームでエラー状態が検出された回数を表示します。
5. [状態] リストで、ジョブストリームの必要な状態を選択します。オプションには次のものがあります。
  - すべて: ジョブストリームのすべての状態。
  - 終了: 実行中に警告やエラーが検出されたかどうかに関係なくジョブストリームが正常に完了した状態。
  - 中止: ジョブストリームの実行がユーザーによって中止された状態。
6. [検索] をクリックします。

選択したストリームのグラフが表示されます。このグラフは、指定の期間中にジョブストリームが警告またはエラーを生成した回数を表示します。

## 第36章: コンテンツヘルスのステータス

[コンテンツ] ページでは、インストール済みの各コンテンツパックについてOBRファクトテーブルのデータのステータスを監視できます。データソースから各コンテンツパックのディメンションに関連付けられたファクトテーブルへのデータフローの稼働状態を検証できます。




注意のステータス(  )が「状況」というラベルの行に示されている場合、データ内のギャップによる影響を受けるCIまたはディメンション、レポート、ファクトテーブルにドリルダウンできます。

CIがデータのログを記録していない場合、使用停止状態になっているかどうか検証します。使用停止になっている場合は、それらのディメンションとファクトテーブルをOBRから削除できます。

[コンテンツヘルスのステータス] ページを使用すると、次のようなタスクを実行できます。

- [インストールされたコンテンツパックコンポーネントの表示](#)
- [ファクトテーブルの詳細の表示](#)

[コンテンツヘルスのステータス] ページには、以下の項目が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックの名前。
総数	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたファクトテーブルの総数を示します。
影響を受けたファクト	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたファクトテーブルの数を示します。
状況	Verticaデータベースのファクトテーブルに基づき、コンテンツパックのデータの状況を示します。 <b>凡例の説明:</b>  は、データテーブルに問題がなかったことを示します。  は、データテーブルに注意を払う必要があることを示します。 ファクトテーブルで次のいずれかの状況が発生する場合、その状況は  とマークされます。 <ul style="list-style-type: none"><li>• データがディメンションの10%超について使用できない。</li><li>• データが時間別テーブルで過去6時間にわたり使用できない。</li></ul>


フィールド	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>データが日別テーブルで過去1日にわたり使用できない。</li> <li>テーブルが設定された期間を超えてデータを保有する。</li> </ul> <p>これらのしきい値は、{PMDb_HOME}/adminServer/webapps/AdminService/threshold.prpファイルから設定できます。</p> <p>ソースでのデータの利用不可によりテーブルを除外するには、{PMDb_HOME}/adminServer/webapps/AdminService/tableExclusion.prpファイルを変更します。</p>
影響を受けたレポート	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたレポートの数を示します。
影響を受けたレポートの表示	影響を受けたレポートのリストを表示します。

## ファクトテーブルコンテンツパックコンポーネント名: <コンテンツパックコンポーネント名>

フィールド	説明
ファクト	時間別および日別の影響を受けたファクトテーブルのリストを表示します。
ステータス	<p>ファクト収集のステータスを表示します。</p> <p>デフォルトでは、次の場合に注意のステータス(⚠)が示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>時間別のテーブルが12時間更新されていない。</li> <li>日別のテーブルが24時間更新されていない。</li> </ul>
行数	現在ファクトテーブルにある行の総数。
最終更新日時	<p>データが最後にファクトテーブルにロードされたタイムスタンプ。</p> <p>{PMDb_HOME}/adminServer/webapps/AdminService/latency.prpファイルの値を変更することによって、デフォルトの期間を設定できます。</p>
ファクト	テーブル内のディメンションの総数に対して、ファクトデータを持つディメンションの数の比率
ディメンション	テーブル内のディメンションの総数に対して、ファクトデータを持つディメンションの数。



フィールド	説明
主ディメンション	ファクトテーブルに関連付けられた主ディメンション
影響を受けたレポート	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたレポートの数を示します。  クリックして、[影響したレポート] から影響を受けたレポートの名前を表示して起動することができます。


OBRレポートにおけるデータのギャップのトラブルシューティングに関する詳細については、『Operations Bridge Reporterトラブルシューティングガイド』の「レポートに関する問題のトラブルシューティング」セクションを参照してください。

特定ファクトの欠落するディメンション (CI) を表示するには、特定ファクトの  アイコンをクリックします。  
[欠落するディメンション (CI)] テーブルが開きます。

## インストールされたコンテンツパックコンポーネントの表示


1. 管理コンソールで、[内部監視] > [コンテンツヘルスのステータス] をクリックします。  
[コンテンツヘルスのステータス] ページが表示されます。
2. 以下が表示されます。

フィールド	説明
コンテンツパックコンポーネント名	コンテンツパックの名前。
総数	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたファクトテーブルの総数を示します。
影響を受けたファクト	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたファクトテーブルの数を示します。
状況	Verticaデータベースのファクトテーブルに基づき、コンテンツパックのデータの状況を示します。 <b>凡例の説明:</b>  は、データテーブルに問題がなかったことを示します。  は、データテーブルに注意を払う必要があることを示します。


フィールド	説明
	<p>ファクトテーブルで次のいずれかの状況が発生する場合、その状況は  とマークされます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>データがディメンションの10%超について使用できない。</li> <li>データが時間別テーブルで過去6時間にわたり使用できない。</li> <li>データが日別テーブルで過去1日にわたり使用できない。</li> <li>テーブルが設定された期間を超えてデータを保有する。</li> </ul> <p>これらのしきい値は、{PMDB_HOME}/adminServer/webapps/AdminService/threshold.prpファイルから設定できます。</p> <p>ソースでのデータの利用不可によりテーブルを除外するには、{PMDB_HOME}/adminServer/webapps/AdminService/tableExclusion.prpファイルを変更します。</p>
影響を受けたレポート	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたレポートの数を示します。
影響を受けたレポートの表示	影響を受けたレポートのリストを表示します。

## ファクトテーブルの詳細の表示

- 管理コンソールで、[内部監視] > [コンテンツヘルスのステータス] をクリックします。  
[コンテンツヘルスのステータス] ページが表示されます。
- 特定のコンテンツパックコンポーネントについて、[コンテンツパックコンポーネント名] をクリックします。  
[ファクトテーブル] タブが開きます。
- [ファクトテーブル] タブには、以下が表示されます。

フィールド	説明
ファクト	時間別および日別の影響を受けたファクトテーブルのリストを表示します。
ステータス	<p>ファクト収集のステータスを表示します。</p> <p>デフォルトでは、次の場合に注意のステータス () が示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>時間別のテーブルが12時間更新されていない。</li> <li>日別のテーブルが24時間更新されていない。</li> </ul>

フィールド	説明
行数	現在ファクトテーブルにある行の総数。
最終更新日時	データが最後にファクトテーブルにロードされたタイムスタンプ。  {PMDB_HOME}/adminServer/webapps/AdminServiceIにあるlatency.prpファイルの値を変更することによって、デフォルトの期間を設定できます。
ファクト	テーブル内のディメンションの総数に対して、ファクトデータを持つディメンションの数の比率  クリックして新しいペインを起動し、データをログに記録していないCIまたはディメンションを表示できます。  この比率にはデフォルトのしきい値である90%が割り当てられます。このため、10%を超えるディメンションにファクトデータがない場合、注意のステータス(⚠)が表示されます。{PMDB_HOME}/adminServer/webapps/AdminServiceIにあるthreshold.prpファイルでしきい値を設定できます。
ディメンション	テーブル内のディメンションの総数に対して、ファクトデータを持つディメンションの数。
主ディメンション	ファクトテーブルに関連付けられた主ディメンション
影響を受けたレポート	対応するコンテンツパックのデータのギャップによって影響を受けたレポートの数を示します。  クリックして、[影響したレポート]から影響を受けたレポートの名前を表示して起動することができます。

特定ファクトの欠落するディメンション (CI) を表示するには、特定ファクトの  アイコンをクリックします。[欠落するディメンション (CI)] テーブルが開きます。

**注:** このページに表示されるファクトテーブル情報は、7日間データベースに保存された後、消去されます。

## 第37章: オンラインヘルプ

このページを使用して、『管理者オンラインヘルプ』を表示します。

### OBRのバージョン情報

このページには、PMDBプラットフォームに関する詳細が表示されます。

このページの内容は以下のとおりです。

フィールド	説明
バージョン	製品のバージョン番号。
パッチレベル	製品のバージョン番号のパッチレベル。
ビルド番号	製品のビルド番号。





# 第IV部付録

## Config.prpファイル内のパラメーター

以下の表に、config.prpのパラメーターを示します。

パラメーター	パラメーターの詳細
#OBRのSAP BOコンポーネントを実行しているシステムの完全修飾ホスト名	bo.cms = bohost
#SAP BOが接続をリッスンしているポート番号	bo.cms.port = 6400
#SAP BO InfoViewApp Webアプリケーションが実行されているポート番号	bo.infoview.port = 8080
#BOおよび以降のOBR管理コンソールにログインするときの認証タイプ <b>注:</b> サポートされているオプション - EnterpriseおよびGroupベース	bo.authType = secEnterprise
#信頼された認証をSAP BOで有効にするパラメーター <b>注:</b> これらはCACのセットアップ時に更新されます	bo.trusted.auth.enable = false bo.trusted.auth.shared.secret =
#SAP BOのインストール場所	bo.install.path=C:/Program Files (x86)/Business Objects/
#Javaメッセージサービスを実行するホストおよびポートの詳細 <b>注:</b> OBR 9.40では廃止されます	jms.host=localhost jms.port=21401
#OBRからHTTP経由でJMX Beanにアクセスできるポート	jmx.port=21422
# Abc_ DataServicesWSMaxTimeToLaunch=60	BSMR_ABC_Version=0.16.5
#Tomcat Mbeanが公開されるポートの詳細	tomcat.jmx.port=21416

パラメーター	パラメーターの詳細
#OBRモジュールのデフォルトのロガー クラス	logger.classname=com.hp.bto.bsmr.util.logger.BsmrLogger Factory
#OBR管理コンソールのデフォルトの 画像ソース	DefaultImageSource=svcgen.32.gif
#画像サイズ	GeneratedImageWidth=1035 GeneratedImageHeight=400
#BSMがインストール済み - 廃止	bsm.install=false
#OBRのインストールを示します。値 =Enterprise – OBRのインストール、 値=OBRのヘッドレスインストール	SHR.install=Enterprise
#OBRのOSアーキテクチャ	pmdb.os.platform=64
#DWH DB JDBCドライバの名前	database.driver.name=SQL Anywhere 12  SQL Anywhere 12はSAP BusinessObjectsデータベースで す。
#ABCの接続の詳細 - 廃止	abc.db.host=localhost  abc.db.instance=dwabc  abc.db.port=3699  abc.db.pmdb.user=dwabc  abc.db.pmdb.user.pwd=dwabc
#DWH DB接続の詳細 (Vertica)	database.type=vertica  database.port=5433  database.sybase.engine=databaseEngine  database.host=databaseHost  database.dsn=BSMR
#bsmによるスクリプトの開始/停止 (PMDBホームに相対)	bsm.start.script=bin/hp_bsm_pmdb_start  bsm.stop.script=bin/hp_bsm_pmdb_stop
#管理DBの接続の詳細 (PostgreSQL)	management.db.type=postgres management.db.driver=org.postgresql.Driver management.db.hostname = localhost management.db.port=21425 management.db.dialect=org.hibernate.dialect.PostgreSQLD ialect
#分散収集を指定するためのプロパ	collection.distributed.mode = false

パラメーター	パラメーターの詳細
ティ-廃止	
#loader.logのログレベル	loader.debug.level=INFO
#aggregate.logのログレベル	aggregate.debug.level=INFO aggregate.daily.interval=6
#runProcコマンドのログレベル	runProc.debug.level=INFO
#SHRからVerticaデータベースに接続するために作成される64ビットDSNの名前	database.dsn64=SHRDB
#SISグループ名に対して追加されました	SISGroupName=SIS
#収集の最大履歴および初期履歴をサポートするために追加されました	collector.maxHistory=360 collector.initHistory=360
#DBコレクターの最大履歴および初期履歴をサポートするために追加されました	dbcollector.maxHistory=360 dbcollector.initHistory=360
#収集MBeanが有効になっているホストおよびポートの詳細	collection.host = localhost collection.jmx.port = 21409
#新規に検出されたHPE Operations Agentが収集用に設定されるデフォルトの頻度 (分単位)	pa.frequency=60
#ファイルが {PMD.B.HOME}/stage/archiveフォルダーに到達してからのデータの保持期間 (時間単位)  注: この期間が経過したファイルは削除されます	stage.archive.retention.period=48
#OBRの文字エンコーディングシステム	characterSet=UTF8
#ディスク領域のIMLしきい値  注: SHR 9.40では廃止されます	im.disk.space.errorLimit=5 im.disk.space.warnLimit=15
#設定されたRTSMのテスト接続時に照会に使用されるビュー名	default.cmdb.view = Oracle
#デフォルトの集約バッチサイズに対して追加されました	aggregate.batchsize=20000000

パラメーター	パラメーターの詳細
#デフォルトのステージバッチサイズ	stage.batchsize=10000000
#デフォルトのローダーバッチサイズ	loader.batchsize=10000000
#データベースアラートを生成するために内部監視で使用される最小値と最大値	dbspace.min.percentage=70 dbspace.max.percentage=85 stage.backup.failedRows=false
#SSLを有効化するために追加されました	bo.protocol=http bo.ssl.enabled.port=8443 shr.admin.ui.port=21412
#ダウンタイムユーティリティ用に追加されました	downtimedays=7
#認証チェーン用に追加されました。カンマ区切りの値を付加して、このプロパティを更新する必要があります	shr.auth.classes=com.hp.bto.bsmr.security.auth.BOAuthenticator
#リモートコレクターが設定済みかどうかを示すプロパティ  <b>注:</b> 最初のリモートコレクターを設定すると、自動的にtrueに変更されます	remote.poller.is.enabled=false
#CAC認証用に追加されました。CAC認証の場合は値をcertbasedにし、それ以外の場合はdefaultにする必要があります	shr.loginMethod=default
#RTSM収集の場合に照会されるWebサービスのURL	ucmdbservice.url=/axis2/services/UcmdbService
#エラーで終了する前に、OBR管理DB (PostgreSQL)に接続する最大再試行回数	management.db.connection.retry=3
#プールに保持されているOBR管理DBへの接続が失効していないことを確認する時間間隔 (ミリ秒単位)。失効している場合は更新します	management.db.connection.check.interval=30000
#OBR認証で使用されるBOのユーザーグループ	shr.user.groups=administrators
#各種デプロイメント設定 (低、中、高)のCPUとメモリーに関する最小要件	low_volume_cpu_number=4 low_volume_ram_size=8

パラメーター	パラメーターの詳細
	medium_volume_cpu_number=8 medium_volume_ram_size=16 high_volume_cpu_number=32 high_volume_ram_size=64
#リモートBOセットアップであるかどうかを示すパラメーター  <b>注:</b> システムでインストール用に選択した機能に基づき、OBRインストーラーによって更新されます	isRemoteBO=false

aggregate.daily.intervalはデフォルトで6時間おきに実行されます。日単位の集約実行間の遅延を削減するには、config.prpファイルで時間単位の値を指定したパラメーター aggregate.daily.delayを追加します。

# その他の管理の詳細

このセクションでは、次の作業を実行します。

- [カスタムグループの設定](#)
- [ディメンションの管理](#)
- [レポートでのダウンタイムの設定](#)
- [レポートでのカスタマーの設定](#)
- [レポートでの場所の設定](#)

# カスタムグループの設定

OBRのカスタムグループは、特定のディメンションで構成されるノードのセットに属する情報を取得するのに役立ちます。OBRのカスタムグループは、適合済みディメンションのみに対して作成可能です。たとえば、特定のネットワークにリンクされたノードを表示する場合に、カスタムグループを作成し、特定のネットワークの一部であるノードだけに属する情報を表示させることができます。カスタムグループはXMLとして作成され、プラットフォームストリームを通じて、OBRにインポートされます。

カスタムグループを作成するには、

1. カスタムグループ用にXMLを作成します。カスタムグループのXMLを作成する際の構文については、「[カスタムグループの作成](#)」を参照してください。
2. XMLファイルを作成したら、次のフォルダー内に、このファイルを保存します。

**Windows:** %PMDB\_HOME%\config

**Linux:** \$PMDB\_HOME/config

カスタムグループを作成後には

- カスタムグループは、PMDBプラットフォームストリームである**PMDB\_Platform@CustomGroup**によって実行されます。
- カスタムグループがOBRにインポートされたかどうかを確認するには、PMDB\_Platform@CustomGroupストリームが正しくロードされたことを確認します。
- OBRディメンションストリームがOBRデータテーブルにカスタムグループ情報を投入するまで待つ必要があります。

**注:** ストリーム**PMDB\_Platform@CustomGroup**は1日3回実行され、8時間間隔でカスタムグループ情報が設定されます。

OBRを使用すると、次の操作を実行できます。

- 構文の値を変更することで、単一のXMLファイルでオペレーティングシステムに複数のカスタムグループを作成。
- レポートの**プロンプト**セクションから、適切なカスタムグループを選択。



## カスタムグループの作成

カスタムグループを作成するには、次の構文をXMLファイルにコピーします。

**注:** XMLファイルには任意のファイル名を入力できますが、<名前>customgroup.xmlという形式に従わなくてはなりません。この場合の<名前>には、オペレーティングシステムによってサポートされているあらゆるファイル文字列を入力できます。

たとえば、shr\_customgroup.xmlまたはSHR9XXcustomgroup.xmlなどになります。

```
<groups>
<group name=" " type=" ">
<instances type=" ">
<instance>
<attribute name=" " value=" " operator=" " relation=" " />
</instance>
</instances>
</group>
</groups>
```

**注:** カスタムグループに定義する各エンティティタイプに属性タグをコピーします。

上記の例で使用されるタグの説明については、次の表のとおりです。

フィールド	説明
group name	新しいカスタムグループ名。
type	グループのタイプ。
instances type	K_CIテーブルに適合するディメンションテーブル。ディメンションはこのテーブルから抽出されます。
attribute name	<instance type>タグで定義されるディメンションテーブル内の(数値の列ではなく)文字列の列の名前。
value	ディメンションテーブル内の列の値はこの値に一致してはなりません。
operator	ノード名の値を検索するためのオペレーター。

フィールド	説明
	<p>値の完全一致検索を実行するには、EQUALS演算子を使用します。例: "abcvalue1"</p> <p>値のパターンベース一致の検索を実行するには、LIKE演算子を使用します。値を"abcvalue1%"または"%abcvalue1%"などとして指定できます。</p> <p>IN、NOT IN、NOT LIKE、EXISTS、"="、または"!="などのその他の演算子の場合は、二重引用符で囲われた値を指定する必要があります。たとえば、IN演算子は"'abcvalue1','abcvalue2','abcvalue3'"のような値を持つこととなります。</p> <p><b>注:</b> OBRデータベースに対する、XMLのすべての値の比較では、大文字小文字を区別しません。</p>
relation	<p>属性名と属性値の関係を決めます。relationの値はANDまたはORです。</p> <p><b>注:</b> relationの値を定義しない場合は、OBRによって、デフォルト値はANDとされます。</p>

カスタムグループ構文の例は次のとおりです。

Windows®オペレーティングシステムとLinuxオペレーティングシステムのカスタムグループ

```
<groups>
<group name="Windows" type="CUSTOMGROUP">
<instances type="K_CI_System">
<instance>
<attribute name="OS" value="NT" operator="LIKE" relation="OR" />
<attribute name="OS" value="Windows" operator="LIKE" relation="OR" />
<attribute name="OS" value="windows" operator="LIKE" relation="OR" />
<attribute name="OS" value="Win" operator="LIKE" relation="OR" />
<attribute name="OS" value="win" />
</instance>
</instances>
</group>
</groups>
```

## UNIXオペレーティングシステムでのカスタムグループ

```
<groups>  
<group name="Unix" type="CUSTOMGROUP">  
<instances type="K_CI_System">  
<instance>  
<attribute name="OS" value="%ux%" operator="LIKE" relation="OR" />  
<attribute name="OS" value="%UX%" operator="LIKE" relation="OR" />  
<attribute name="OS" value="AIX" operator="LIKE" relation="OR" />  
<attribute name="OS" value="Sun%" operator="LIKE" />  
</instance>  
</instances>  
</group>  
</groups>
```

# ディメンションの管理

データソースがOBRで設定されている場合、レポートを生成するために使うディメンションおよびファクトデータがノード (ホスト、ネットワークデバイス、アプリケーションなど) から収集されます。ディメンションデータはトポロジソースから収集されます。ただし、ノードまたはCIを環境から削除しても、OBRデータベースからは削除されません。これは、削除されたディメンションについての履歴レポートを生成できるようにするための処置です。

**非アクティブのディメンション:** ノードが環境から削除されたときに、OBRデータベース内に非アクティブのディメンションを保有し続ける場合。

**重複ディメンション:** 古いノードの名前で新しいノードが環境に追加されると、OBRデータベースに重複ディメンションが存在することになります。

環境に永久的にリタイアしたノードまたはCIがあり、それらに対するレポートを今後生成しない場合は、非アクティブのディメンションを削除できます。コマンド行インターフェイス (CLI) を使用してOBRシステムからローカルおよび適合済みディメンションの両方に対して実行できます。

新しいノードを追加済みで、それらが古いノードの名前を取っている場合、該当の重複ディメンションの名前を変更できます。コマンド行インターフェイス (CLI) を使用してOBRシステムからローカルディメンションのみに対して実行できます。

**注:** ディメンションを削除すると、ディメンションとそのファクトデータは永久的に削除されます。この操作を実行する前に、OBRデータベースのバックアップを取ってください。

詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリ」セクションを参照してください。

ファクト、ディメンション、ディメンションのタイプの詳細については、『Operations Bridge Reporterコンセプトガイド』の「アーキテクチャ」セクションを参照してください。

**注:** ディメンションマネージャーは、DNS名に従うのではなく、CI UIDに基づきノードを示します。ノードの長い名前または短縮名に変更がある場合、その名前はディメンションマネージャーにリストされません。

使用可能なコマンドを列挙しているCLIヘルプを表示するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager --help
```

このセクションのコマンドを実行する前に、HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestrationサービスを停止してください。

## 非アクティブのディメンションの管理

OBRデータベースで一定期間非アクティブ状態のままのディメンションを特定して、それらを削除することができます。

## 非アクティブのディメンションの一覧表示

非アクティブのディメンションのリストを生成するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -inactive_dim_list -caption <caption name> -inactive <number of days inactive> -output_dir <directory location>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[非アクティブディメンションパラメーター](#)」(253ページ)を参照してください。

## 非アクティブのディメンションの削除

非アクティブのディメンションを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -inactive_dim_delete -caption <caption name> -file <input file> -mode <test/commit>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[非アクティブディメンションパラメーター](#)」(253ページ)を参照してください。

**注意:** commitモードでコマンドを実行すると、ディメンションとそのファクトデータは完全に削除されません。この操作を実行する前に、OBRデータベースのバックアップを取ってください。

詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリ」セクションを参照してください。

前記のコマンドで使用されるパラメーターの説明については、次の表のとおりです。

### 非アクティブディメンションパラメーター

パラメーター	説明
inactive_dim_list	非アクティブのディメンションをリストするための操作。
inactive_dim_delete	非アクティブのディメンションを削除する操作。

## 非アクティブディメンションパラメーター (続き)

パラメーター	説明
caption	ディメンションのキャプション名またはテーブル名。各コンテンツパックの/docフォルダーに存在するモデルインターフェイスのドキュメントから取得します。 例: 「K_CI_System」または「System」。
file	削除の対象となる非アクティブのディメンションをリストする入力CSVファイルの絶対パス。
inactive	ディメンションにデータが存在しない日数。 例: 180
output_dir	非アクティブのディメンションをリストする出力CSVファイルのディレクトリの場所。 例: ディレクトリの場所: {PMDb_HOME}\DLC CSVファイル: <dimension_table_name>_0_*.csv
mode	オペレーションのモード [test/commit] 変更または削除されるデータを確認するにはtest (デフォルト) モードを使用します。変更を完全にOBRデータベースに適用するにはcommitモードを実行します。 commit操作を実行する前にtestモードを使用して影響したファイルを確認する必要があります。

## 重複ディメンションの管理

古いノードの名前で新しいノードが環境に追加されると、OBRデータベースに重複ディメンションが存在することになります。重複するエントリをリストで仕分けて削除したり名前を変更したりすることができます。最新のタイムスタンプが付いた構成アイテム (CI) が元のディメンションと見なされ、それ以前のエントリは重複ディメンションと見なされます。この機能は適合済みディメンションのみでサポートされます。

## 重複ディメンションの一覧表示

重複ディメンションのリストを生成するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -duplicate_dim_list -caption <caption name> -output_dir <output directory>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[重複ディメンションパラメーター](#)」(255ページ)を参照してください。

## 重複ディメンションの削除

重複ディメンションを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -duplicate_dim_delete -caption <caption name> -file <input file> -mode <test/commit>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[重複ディメンションパラメーター](#)」(255ページ)を参照してください。

**注:** ディメンションマネージャーは、一致したディメンションと各ファクトテーブルからの重複データのみを削除します。ローカルディメンションから重複データは削除されません。

**注意:** commitモードでコマンドを実行すると、ディメンションとそのファクトデータは完全に削除されます。この操作を実行する前に、OBRデータベースのバックアップを取ってください。

詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「データベースのバックアップとリカバリ」セクションを参照してください。

前記のコマンドで使用されるパラメーターの説明については、次の表のとおりです。

### 重複ディメンションパラメーター

パラメーター	説明
duplicate_dim_list	重複ディメンションをリストするための操作。
duplicate_dim_delete	重複ディメンションを削除する操作。
caption	ディメンションのキャプション名またはテーブル名。各コンテンツパックで入手可能なモデルインターフェイスのドキュメントから取得します。 例: 「K_CI_System」または「System」。
file	重複ディメンションを削除します。削除または名前変更の対象となる重複ディメンションをリストする入力CSVファイルの絶対パス。
mode	オペレーションのモード [test/commit]  レポートへの変更を確認するにはtest (デフォルト) モードを使用します。変更を完全にOBRデータベースに適用するにはcommitモードを実行します。  commit操作を実行する前にtestモードを使用して影響したファイルを確認する必要があります。

## ビジネスキーの使用によるディメンションの管理

適合済みディメンションのビジネスキー (CI\_UID) をリストするには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -dim_list -business_keys all -caption <caption name> -output_dir
<directory location>
```

要件に基づいてビジネスキー (CI\_UID) を削除するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -dim_delete -caption <caption name> -file <input file> -mode
<test/commit>
```

重複ディメンションまたは古いディメンションのビジネスキー (CI\_UID) を変更するには、次の手順を実行します。

1. 生成された.csvの中で、列ヘッダーをOLD\_CIID、DSI\_KEY\_ID、NEW\_CIIDに変更します。
2. OLD\_CIID列からNEW\_CIID列に値を手動でコピーします。
3. 次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -rename_key -caption <caption name> -file <input file>
```

名前変更オプション用のinput fileは、caption name\_0\_timestamp.csvの形式になります。

### ディメンションパラメーター

パラメーター	説明
dim_list	ディメンションをリストするための操作。
dim_delete	ディメンションを削除する操作。
business_keys	ビジネスキーをリストするためのカンマ区切りの値/パターン («*」ワイルドカードのみをサポート)。すべてのビジネスキー (CI_UID) をリストするには「-business_keys all」を使用します。
rename_key	ビジネスキー (CI_UID) の古い値の名前を新しい値で変更する操作。
caption	ディメンションのキャプション名またはテーブル名。各コンテンツパックで入手可能なモデルインターフェイスのドキュメントから取得します。 例: 「K_CI_System」または「System」。
file	削除または名前変更の対象となるビジネスキーをリストする入力CSVファイルの絶対パス。
output_dir	出力CSVファイルのディレクトリの場所。 例: C:\DLC
mode	オペレーションのモード [test/commit]



## ディメンションパラメーター (続き)

パラメーター	説明
	レポートへの変更を確認するにはtest (デフォルト) モードを使用します。変更を完全にOBRデータベースに適用するにはcommitモードを実行します。

## 自然キーの使用によるディメンションの管理

適合済みディメンションの自然キーをリストするには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -dim_list -natural_keys all -caption <caption name> -output_dir
<directory location>
```

要件に基づいて自然キーを削除するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -dim_delete -caption <caption name> -file <input file> -mode
<test/commit>
```

重複ディメンションまたは古いディメンションの自然キー (CI\_UID) を変更するには、次の手順を実行します。

1. 生成された.csvの中で、列ヘッダーをOLD\_NK\_CI\_UID、NEW\_NK\_CI\_UIDに変更します。
2. .csvから、dsi\_key\_id列を削除します。
3. OLD\_NK\_CI\_UID列からNEW\_NK\_CI\_UID列に値を手動でコピーします。
4. 次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -rename -caption <caption name> -file <input file>
```

名前変更オプション用のinput fileは、caption name\_0\_timestamp.csvの形式になります。

前記のコマンドで使用されるパラメーターの説明については、次の表のとおりです。

## ディメンションパラメーター

パラメーター	説明
dim_list	ディメンションをリストするための操作。
dim_delete	ディメンションを削除する操作。
natural_keys	自然キーをリストするためのカンマ区切りの値/パターン («*」ワイルドカードのみがサポートされます)。すべての自然キーをリストするには「-natural_keys all」を使用します。
rename	自然キーの古い値の名前を新しい値で変更する操作。
caption	ディメンションのキャプション名またはテーブル名。各コンテンツパックで入手可

## ディメンションパラメーター (続き)

パラメーター	説明
	能なモデルインターフェイスのドキュメントから取得します。 例: 「K_CI_System」または「System」。
file	削除または名前変更の対象となる自然キーをリストする入力CSVファイルの絶対パス。
output_dir	出力CSVファイルのディレクトリの場所。 例: C:\DLC
mode	オペレーションのモード [test/commit] レポートへの変更を確認するにはtest (デフォルト) モードを使用します。変更を完全にOBRデータベースに適用するにはcommitモードを実行します。

## データソース内の非アクティブまたは重複ディメンションの管理

OBRのデータ収集元であるランタイムサービスモデル (RTSM) データソースにおいて、一定期間非アクティブ状態のままであったディメンションをリストして削除することができます。

### データソース内の非アクティブディメンションの一覧表示

RTSMデータソース内で非アクティブのディメンションのリストを生成するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -check_datasource -list_inactive -output_dir <directory location>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[データソースのディメンションパラメーターの確認](#)」(259ページ)を参照してください。

### データソース内の重複ディメンションの一覧表示

RTSMデータソース内の重複ディメンションのリストを生成するには、次のコマンドを実行します。

```
dimensionmanager -check_datasource -list_duplicate -output_dir <directory location>
```

コマンドのパラメーターの詳細については、「[データソースのディメンションパラメーターの確認](#)」(259ページ)を参照してください。

前記のコマンドで使用されるパラメーターの説明については、次の表のとおりです。

#### データソースのディメンションパラメーターの確認

パラメーター	説明
list_inactive	データソースの非アクティブのディメンションをリストするための操作。
list_duplicate	データソースの重複ディメンションをリストするための操作。
check_datasource	RTSMデータソースのディメンションを検証する操作。
output_dir	非アクティブのディメンションをリストする出力CSVファイルのディレクトリの場所。 <b>例:</b> ディレクトリの場所: {PMDB_HOME}\DLC CSVファイル: <dimension_table_name>_0_*.csv

## レポートでのダウンタイムの設定

ダウンタイムとは、既知または不明な理由によりシステム、ネットワーク、またはアプリケーションがユーザーに対して利用不可である期間を意味します。システム、アプリケーション、またはネットワークの可用性 (通常は特定の期間における稼働時間の割合として示されます) を計算するのに、ダウンタイムは重要です。OBRを使用してサービスレベル契約 (SLA) ベースのレポートを生成する際には、可用性情報を正確にするために、事前定義されているダウンタイムを除外する必要があります。これは、ダウンタイムによってレポート内のCIデータが歪曲する可能性があるためです。

**注:** OBRは、NNMi/NPSから受信した初期サンプルに基づいて可用性メトリックを算出します。初期サンプルをNNMi/NPSから受信した後にメトリック値を更新することはできません。

OBRには、次の2つのタイプのダウンタイムがあります。

- **計画ダウンタイム:** これは、バックアップの実行、ソフトウェアパッチの適用、システムの再起動のような保守ジョブを実行するためにシステムまたはネットワークをダウンさせる計画された期間を意味します。計画ダウンタイムは、論理的な管理側開始イベントの結果です。
- **免除ダウンタイム:** これは、ハードウェア障害、ソフトウェア障害、停電のような物理的なイベントが発生したためにシステムが利用不可である予定外の期間を意味します。

ダウンタイムは、関連付けられているCIに基づいて設定されます。たとえば、定期的な保守イベントを除外したり、既知の物理ホストをダウンさせる特定のホストCIの休日除外したりする必要性が生じることがあります。

OBRを使用すると、次の操作を実行できます。

- 1回のみ実行したり、毎週または毎月繰り返し実行したりするように、ダウンタイムを設定する。
- ダウンタイムによって影響を受ける複数のCIを選択する。

ダウンタイム情報は、XMLファイル内にCIごとに定義されます。XMLファイルでは、CIのダウンタイム期間、継続時間、特定のインスタンスを手動で指定する必要があります。OBRは、データベースにデータをロードする前に、このXMLファイルのダウンタイム情報を使用して、収集されたファクトデータを更新します。

ダウンタイム期間は「ポーリング時」データまたは「5分間」データのみでマークされます。このデータが時間別テーブルおよびそれ以上に対して要約されると、そこからダウンタイム期間が実行されます。OBR OOTB可用性レポートは、ある期間における環境内のノードの全体的な稼働時間およびダウンタイムを表示します。

次の表に、ダウンタイムが適用可能かどうかに関する情報をコンテンツパックごとに示します。

コンテンツパック	ダウンタイムが適用可能かどうか
Real User Monitor	いいえ
Business Process Monitor	いいえ
サービスヘルス	いいえ
IBM WebSphere Application Server	はい
Microsoft Active Directory	はい
Microsoft Exchange	はい
Microsoft SQL Server	はい
Oracle	はい
Oracle WebLogic Server	はい
Network	いいえ
Operation Manager	いいえ
OMi	いいえ
System Management	はい
Virtualization	はい

## ダウンタイムXMLファイルの作成

コンテンツパックをインストールすると、ユーザーはいつでもダウンタイム情報を提供できます。ダウンタイム情報をOBRに提供するには、次の手順を実行します。

1. デプロイメントシナリオに応じて、ダウンタイムによって影響を受けるCIまたは管理対象ノードを識別します。
2. CIの詳細をModel Automation XMLファイルから取得します。詳細については、『Operations Bridge Reporterコンテンツ開発ガイド』を参照してください。
3. ダウンタイムを発生させる頻度を決定します (1回のみ実行したり、毎週または毎月繰り返し実行したりするように設定できます)。
4. 繰り返しパターンに基づき、以下のいずれかの例を使用してダウンタイムスケジュールXMLファイルを作成します。
  - [1回実行するダウンタイムのスケジュール](#)
  - [毎週実行するダウンタイムのスケジュール](#)

- 。 毎月実行するダウンタイムのスケジュール

5. XMLファイルを作成したら、C:\HP-SHR\PMDB\data\downtimeフォルダー内にこのファイルを配置します。

downtimeフォルダー内にXMLファイルを配置すると、OBRにおけるデータ処理は、ダウンタイムエンリッチメントを収集済みデータで処理します。エンリッチされたデータは、レポート作成用に集計されてデータベース内に保存されます。ダウンタイムエンリッチメントは、[内部監視]>[データ処理のステータス] ページ (特定のコンテンツパックに対するダウンタイムストリームの詳細が表示されます) で監視できます。

## 1回実行するダウンタイムのスケジュールの構文

1回のみ実行するダウンタイムのスケジュールを作成するには、以下のいずれかのXML構文を使用できます。

### 構文1

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
  <name>Sample1</name>
  <category>Other</category>
  <schedule >
    <type>ONCE</type>
    <startDate>2012-02-07 10:00:00</startDate>
    <endDate>2012-02-07 22:00:00</endDate>
  </schedule>
  <instances type="System">
    <instance>
      <attribute name="CI_UID"
        value="c2fa6553dd16af591b128e19feec3d49"/>
    </instance>
  </instances>
</downtime>
```

**構文2**

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
  <name>Sample1</name>
  <category>Application maintenance</category>
  <schedule >
    <type>ONCE</type>
    <startDate>2012-02-07 10:00:00</startDate>
    <endDate>2012-02-07 22:00:00</endDate>
  </schedule>
  <selectedCIs>
    <ci>
      <id>ciid_bizsvc1</id>
    </ci>
    <ci>
      <id>ciid_bizsvc2</id>
    </ci>
  </selectedCIs>
</downtime>
```

上記のサンプルで使用されるタグの説明については、次の表のとおりです。

タグ	説明
<name>	ダウンタイムの名前をタグに入力します。
<category>	<p>ダウンタイムに割り当てられたカテゴリ。オプションの内訳は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Application installation</li> <li>• Application maintenance</li> <li>• Hardware installation</li> </ul>

タグ	説明
	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Hardware maintenance</li> <li>• Network maintenance</li> <li>• Operating system reconfiguration</li> <li>• Other</li> <li>• Security issue</li> </ul>
<schedule>	ダowntimeのスケジュールをXMLのこのセクションで定義します。
<type>	作成するダowntimeスケジュールのタイプを定義します。値は、ONCE、WEEKLY、またはMONTHLYのいずれかです。
<startDate>	監視対象コンポーネントまたはCIIに対してスケジュール設定されたダowntimeの開始日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。この値はいつでも変更することができます。ただし、ダowntime情報でエンリッチされたデータは再処理されません。
<endDate>	CIIに対してスケジュール設定されたダowntimeの終了日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。この値はいつでも変更することができます。ただし、ダowntime情報でエンリッチされたデータは再処理されません。
<instances type>	このセクションでは、ダowntimeによって影響を受けるCIタイプ（ノート、CPU、ディスク、Webサーバー、アプリケーション、イベントなど）を定義します。作成するダowntimeXMLは、1つのCIタイプに対してのみ適用可能です。追加のCIIについては、XMLファイルを別途作成する必要があります。
<instance>	CIタイプの各インスタンスは、異なる<instance>タグで定義する必要があります。attribute nameにはインスタンスメトリック、valueにはこのメトリックの値をそれぞれ指定します。特定のCIインスタンスが複数のメトリックによって定義された場合、同数で同一タイプのメトリックによって追加のインスタンスが定義されなければなりません。CIパラメーターの詳細については、Model Automation XSDを参照してください。
<selectedCIs>	このセクションでは、ダowntimeによって影響を受ける複数のCIを直接定義することができます。これらのCIIは、一意のIDを使用して参照できます。このセクションは、RTSMがトポロジソースであるSaOBデプロイメントシナリオおよびAPMデプロイメントシナリオでOBRがデプロイされている場合に適用可能です。



## 毎週実行するダウンタイムのスケジュールの構文

週単位で実行するダウンタイムのスケジュールを作成するには、以下のいずれかのXML構文を使用できます。

### 構文1

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
  <name>Sample2</name>
  <category>Other</category>
  <schedule >
    <type>WEEKLY</type>
    <days>
      <selectedDays>SUNDAY</selectedDays>
      <selectedDays>MONDAY</selectedDays>
      <selectedDays>TUESDAY</selectedDays>
      <selectedDays>WEDNESDAY</selectedDays>
    </days>
    <startTimeInSecs> 57600</startTimeInSecs>
    <durationInSecs> 10800</durationInSecs>
    <validFrom>2012-02-02 12:00:00</validFrom>
    <validTo>2012-03-10 12:00:00</validTo>
  </schedule>
  <instances type="CPU">
    <instance>
      <attribute name="CI_UID"
        value="c2fa6553dd16af591b128e19feec3d49"/>
    </instance>
```

```
<instance>
  <attribute name="CI_UID"
    value="b1ta83456aa13rf352h908e19teec3d49"/>
</instance>
</instances>
</downtime>
```

## 構文2

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
  <name>Sample2</name>
  <category>Other</category>
  <schedule >
    <type>WEEKLY</type>
    <days>
      <selectedDays>SUNDAY</selectedDays>
    </days>
    <startTimeInSecs> 57600</startTimeInSecs>
    <durationInSecs> 10800</durationInSecs>
    <validFrom>2012-02-02 12:00:00</validFrom>
    <validTo>2012-03-10 12:00:00</validTo>
  </schedule>
  <selectedCIs>
    <ci>
      <id>ciid_bizsvc1</id>
    </ci>
    <ci>
```

```

        <id>ciid_bizsvc2</id>

    </ci>

</selectedCIs>

</downtime>

```

上記のサンプルで使用されるタグの説明については、次の表のとおりです。

タグ	説明
<name>	ダウンタイムの名前をタグに入力します。
<category>	ダウンタイムに割り当てられたカテゴリ。オプションの内訳は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> <li>• Application installation</li> <li>• Application maintenance</li> <li>• Hardware installation</li> <li>• Hardware maintenance</li> <li>• Network maintenance</li> <li>• Operating system reconfiguration</li> <li>• Other</li> <li>• Security issue</li> </ul>
<schedule>	ダウンタイムのスケジュールをXMLのこのセクションで定義します。
<type>	作成するダウンタイムスケジュールのタイプを定義します。値は、ONCE、WEEKLY、またはMONTHLYのいずれかです。
<days>	CIタイプに対するダウンタイムが計画されている曜日をこのセクションで指定します。
<startTimeInSecs>	スケジュール設定されたダウンタイムの開始時刻を秒単位で指定します。たとえば、57600秒と指定したとします。57600秒は16時間に等しいため、ダウンタイムは、<days>タグで定義されている日の午後4時に開始するようスケジュール設定されます。
<durationInSecs>	ダウンタイムの期間を秒単位で指定します。たとえば、10800秒と指定したとします。10800秒は3時間に等しいため、ダウンタイム期間は、午後4～7時の3時間継続します。
<validFrom>	データエンリッチメントを目的としたダウンタイム情報の収集をOBRが開始しなければならない開始日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。

タグ	説明
<validTo>	データエンリッチメントを目的としたダウンタイム情報の収集をOBRが終了しなければならない終了日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。
<instances type>	このセクションでは、ダウンタイムによって影響を受けるCIタイプ(ノート、CPU、ディスク、Webサーバー、アプリケーション、イベントなど)を定義します。作成するダウンタイムXMLは、1つのCIタイプに対してのみ適用可能です。追加のCIについては、XMLファイルを別途作成する必要があります。
<instance>	CIタイプの各インスタンスは、異なる<instance>タグで定義する必要があります。attribute nameにはインスタンスメトリック、valueにはこのメトリックの値をそれぞれ指定します。特定のCIインスタンスが複数のメトリックによって定義された場合、同数で同一タイプのメトリックによって追加のインスタンスが定義されなければなりません。CIパラメーターの詳細については、Model Automation XSDを参照してください。
<selectedCIs>	このセクションでは、ダウンタイムによって影響を受ける複数のCIを直接定義することができます。これらのCIは、一意のIDを使用して参照できます。このセクションは、RTSMがトポロジソースであるSaOBデプロイメントシナリオおよびAPMデプロイメントシナリオでOBRがデプロイされている場合に適用可能です。

## 毎月実行するダウンタイムのスケジュールの構文

月単位で実行するダウンタイムのスケジュールを作成するには、以下のいずれかのXML構文を使用できます。

### 構文1

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
  <name>Sample3</name>
  <category>Other</category>
  <schedule >
    <type>MONTHLY</type>
    <days>
```

```
        <selectedDays>4</selectedDays>
        <selectedDays>8</selectedDays>
    </days>
    <startTimeInSecs>57600</startTimeInSecs>
    <durationInSecs>10800</durationInSecs>
    <validFrom>2012-02-02 12:00:00</validFrom>
    <validTo>2012-03-10 12:00:00</validTo>
</schedule>
<instances type="CPU">
    <instance>
        <attribute name="CI_UID"
            value="c2fa6553dd16af591b128e19feec3d49"/>
    </instance>
</instances>
</downtime>
```

## 構文2

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" standalone="yes"?>
<downtime>
    <name>Sample3</name>
    <category>Other</category>
    <schedule >
        <type>MONTHLY</type>
        <days>
            <selectedDays>4</selectedDays>
            <selectedDays>8</selectedDays>
        </days>
```

```

<startTimeInSecs>57600</startTimeInSecs>
<durationInSecs>10800</durationInSecs>
<validFrom>2012-02-02 12:00:00</validFrom>
<validTo>2012-03-10 12:00:00</validTo>
</schedule>
<selectedCIs>
  <ci>
    <id>ciid_bizsvc1</id>
  </ci>
  <ci>
    <id>ciid_bizsvc2</id>
  </ci>
</selectedCIs>
</downtime>

```

上記のサンプルで使用されるタグの説明については、次の表のとおりです。

タグ	説明
<name>	ダウンタイムの名前をタグに入力します。
<category>	<p>ダウンタイムに割り当てられたカテゴリ。オプションの内訳は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• Application installation</li> <li>• Application maintenance</li> <li>• Hardware installation</li> <li>• Hardware maintenance</li> <li>• Network maintenance</li> <li>• Operating system reconfiguration</li> <li>• Other</li> <li>• Security issue</li> </ul>
<schedule>	ダウンタイムのスケジュールをXMLのこのセクションで定義します。

タグ	説明
<type>	作成するダウンタイムスケジュールのタイプを定義します。値は、ONCE、WEEKLY、またはMONTHLYのいずれかです。
<days>	CIタイプに対するダウンタイムが計画されている日をこのセクションで指定します。たとえば、4と8はそれぞれ、特定のCIに対するダウンタイムが計画されている月の4日と8日を意味します。
<startTimeInSecs>	スケジュール設定されたダウンタイムの開始を秒単位で指定します。たとえば、57600秒と指定したとします。57600秒は16時間に等しいため、ダウンタイムは、<days>タグで定義されている日の午後4時に開始するようスケジュール設定されます。
<durationInSecs>	ダウンタイムの期間を秒単位で指定します。たとえば、10800秒と指定したとします。10800秒は3時間に等しいため、ダウンタイム期間は、午後4～7時の3時間続きます。
<validFrom>	データエンリッチメントを目的としたダウンタイム情報の収集をOBRが開始しなければならない開始日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。
<validTo>	データエンリッチメントを目的としたダウンタイム情報の収集をOBRが終了しなければならない終了日時を指定します。日時形式はyyyy-mm-dd hh:mm:ssです。
<instances type>	このセクションでは、ダウンタイムによって影響を受けるCIタイプ（ノート、CPU、ディスク、Webサーバー、アプリケーション、イベントなど）を定義します。作成するダウンタイムXMLは、1つのCIタイプに対してのみ適用可能です。追加のCIについては、XMLファイルを別途作成する必要があります。
<instance>	CIタイプの各インスタンスは、異なる<instance>タグで定義する必要があります。attribute nameにはインスタンスメトリック、valueにはこのメトリックの値をそれぞれ指定します。特定のCIインスタンスが複数のメトリックによって定義された場合、同数で同一タイプのメトリックによって追加のインスタンスが定義されなければなりません。CIパラメーターの詳細については、Model Automation XSDを参照してください。
<selectedCIs>	このセクションでは、ダウンタイムによって影響を受ける複数のCIを直接定義することができます。これらのCIは、一意のIDを使用して参照できます。このセクションは、RTSMがトポロジソースであるSaOBデプロイメントシナリオおよびAPMデプロイメントシナリオでOBRがデプロイされている場合に適用可能です。

## 過去のダウンタイムの設定

OBRの過去のダウンタイムは、次の手順を実行して設定できます。

1. 管理者としてシステムにログオンします。
2. 次のフォルダーでダウンタイムを設定します。

**Windows:** %pmdb\_home%\datadowntime

**Linux:** \$pmdb\_home/data/downtime

ダウンタイムを設定するには、「[レポートでのダウンタイムの設定](#)」(260ページ)を参照してください。

3. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「cmd」と入力します。コマンドプロンプトウィンドウが開きます。
4. 「downtime」と入力して、ダウンタイムストリームに関連するCIを設定します。

OBRのすべてのストリームへの過去のダウンタイムは次の手順で実行できます。

1. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「cmd」と入力します。コマンドプロンプトウィンドウが開きます。
2. 「downtimeutility」と入力して、次の画像で示すようにすべてのダウンタイムストリームを処理します。

```
G:\Users\Administrator>downtimeutility
PID:28108
Started processing all the streams...
Processing downtime streams, please wait for some time...
in executer
Waiting for all running streams to complete there job
Aborting all ABC streams...
Aborted all ABC streams...
Running ABCBatch load (loading all streams)..
Finished loading streams..
Running streams..
Starting Timer service..
in executer
Successfully processed all the streams...
```

すべてのストリームへの過去のダウンタイムを実行するには、時間がかかります。単一のストリームへの過去のダウンタイムを実行する場合、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールにログオンします。
2. [ホーム] ページへ移動し、OBRで設定されるストリームのリストの[コンテンツパックコンポーネント名] で、[PMDBプラットフォーム] をクリックします。
3. 過去のダウンタイムを実行する特定のストリームのストリームIDを選択します。



4. [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「cmd」と入力します。コマンドプロンプトウィンドウが開きます。
5. 「downtimeutility -streamid <ストリームID>」と入力します
6. これによって、特定のストリームとその関連するCIのみへの過去のダウンタイムが実行されます。

**注:** 過去のダウンタイムを実行することで、**HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestration** サービスが停止します。ストリームの再処理は、現在実行中のストリームの実行後に開始されます。サービスは、ストリームの再処理の後に自動的に再起動されます。

過去のダウンタイムは7日間に自動的に設定されます。この値を変更するには、次の手順を実行します。

1. 次のフォルダーにあるファイルconfig.prpを開きます。

**Windows:** %pmdb\_home%\data

**Linux:** \$pmdb\_home/data

2. **downtimedays** フィールドに割り当てられた値を変更します。デフォルトの日数は7です。

## レポートでのカスタマーの設定

OBRを使用するマネージドサービスプロバイダー (MSP) は、次を行うことによってカスタマー別のレポートを生成したりデータを集計したりすることができます。

1. カスタマーおよび、カスタマーとディメンションとの関連付けをXMLファイルでプロビジョニングする。
2. SAP BusinessObjects Universeでカスタマー名のオブジェクトを使用してカスタムレポートを作成する。

適合済みディメンション [構成アイテム (CI)] のみをカスタマーに関連付けることができます。定期的に処理される単一のXMLファイル内で複数のカスタマーを設定できます。XMLファイル内で定義された条件を満たすより新しいディメンションが、自動的にカスタマーに関連付けられます。

カスタマーをプロビジョニングしてOBRでディメンションに関連付けるには、次の手順を実行します。

1. カスタマーの名前が付いたXMLファイルを作成して、そのファイルを適切なディメンションに関連付けます。このXMLファイルの構文については、「[カスタマーXMLの作成](#)」を参照してください。
2. XMLファイルをPMDB\_HOME/configフォルダーに保存します。
3. 数分間待つてから、PMDB\_Platform@CustomerDefinitionストリームが正常に実行したか検証します。このストリームはXMLを処理して、OBRがレポートを生成するために使うCSVファイルを作成します。

設定したカスタマー別にグループ化されたレポートを生成するには、SAP BusinessObjects Universeからカスタマー名のオブジェクトを使用します。すぐに使用可能なOOTBレポートを編集するか、新規レポートを作成することができます。

**注：** OOTBレポートを修正する場合はそれらのコピーを作成する必要があります。

## カスタマーXMLの作成

カスタマーをプロビジョニングするには、次の構文をXMLファイルにコピーしてください。

**注：** XMLファイルには任意のファイル名を入力できますが、<名前>customerenrich.xmlという形式に従わなくてはなりません。この場合の<名前>には、オペレーティングシステムによってサポートされているあらゆるファイル用文字列を入力できます。

たとえば、shr\_customerenrich.xmlまたはSHR9XXcustomerenrich.xmlなどになります。

```

<customers>
<customer name="">
<Address1></Address1>
<Address2></Address2>
<City></City>
<State></State>
<Zipcode></Zipcode>
<Phonenumber></Phonenumber>
<Description></Description>
<instances type="">
<instance>
<attribute name="" value="" operator="" relation=""/>
<attribute name="" value="" operator=""/>
</instance>
</instances>
</customer>
</customers>

```

上記の構文で使用される属性タグの説明については、次の表のとおりです。

フィールド	説明
<customer name>	カスタマーの名前を入力します。このフィールドへの値の入力は必須です。
<address1>	住所をここに入力します。(省略可能)
<address2>	住所をここに入力します。(省略可能)
<city>	市町村名を入力します。(省略可能)
<state>	都道府県名を入力します。(省略可能)
<zipcode>	ここに郵便番号を入力します。入力可能なのは数字のみです。(省略可能)
<phonenumber>	ここに電話番号を入力します。入力可能なのは数字のみです。(省略可能)
<description>	任意の説明文を入力します。(省略可能)

フィールド	説明
<instances type>	K_CIテーブルに適合するディメンションテーブル名。ディメンションのリストを得るには、各コンテンツパックの/docフォルダーで入手可能なモデルインターフェイスのドキュメントを参照してください。ディメンションはこのテーブルから抽出されます。
<attribute name>	<instance type>タグで定義されるディメンションテーブル内の (数値の列ではなく) 文字列の列の名前。
<value>	ディメンションテーブル内の列の値はこの値に一致しなくてはなりません。
<operator>	<p>ノード名の値を検索するためのオペレーター。</p> <p>値の完全一致検索を実行するには、EQUALS演算子を使用します。例: "abcvalue1"</p> <p>値のパターンベース一致の検索を実行するには、LIKE演算子を使用します。値を"abcvalue1%"または"%abcvalue1%"などとして指定できます。</p> <p>IN、NOT IN、NOT LIKE、EXISTS、"="、または"!="などのその他の演算子の場合は、二重引用符で囲われた値を指定する必要があります。たとえば、IN演算子は"'abcvalue1','abcvalue2','abcvalue3'"のような値を持つこととなります。</p> <p><b>注:</b> OBRデータベースに対する、XMLのすべての値の比較では、大文字小文字を区別しません。</p>
<relation>	<p>複数の属性と値のペアが指定されている場合に、ANDまたはOR演算子が実行される必要があるかどうか判断します。</p> <p>relationの値を定義しない場合は、OBRによって、デフォルト値はANDとされます。</p>

## 適用可能なコンテンツパック

次のコンテンツパックの適合済みディメンションに、カスタマーを関連付けることができます。

- Cross-Domain Operations Events
- IBM WebSphere Application Server
- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange Server
- Microsoft SQL Server
- Network Performance
- Oracle

- Oracle WebLogic Server
- System Performance
- 仮想化インフラストラクチャ管理

カスタマー情報は次のコンテンツパックのデータソースから使用可能です。

- Real User Transaction Monitoring
- Health and Key Performance Indicators
- Synthetic Transaction Monitoring

カスタマー情報はOperations Eventsコンテンツパックでは使用できません。

## カスタマーXMLの例

```
<customers>
<customer name="Hewlett-Packard Company">
<Address1>3000 Hanover Street</Address1>
<Address2></Address2>
<City>Palo Alto</City>
<State>California</State>
<ZipCode>94304</ZipCode>
<PhoneNumber>16508571501</PhoneNumber>
<Description></Description>
<instances type="K_CI_Oracle">
<instance>
<attribute name="CI_UID" value="8c5e2d0fd63a0b0bd66d6e" operator="EQUALS"
relation="OR" />
<attribute name="CI_UID" value="3f5a2d0fd64a0b0wg66d6e" operator="EQUALS"
relation="OR" />
<attribute name="CI_UID" value="98cd49a3e850a455788286" operator="EQUALS" />
</instance>
</instances>
```

</customer>

</customers>

## レポートでの場所の設定

OBRを使用して、地理的な場所に基づいたインフラストラクチャーおよびアプリケーションについてのレポートを生成できます。

場所別にグループ化されたレポートを生成するには、以下のようにディメンションを場所の情報と関連付ける必要があります。

1. XMLファイルを作成し、場所の詳細を入力して、その場所にディメンションを関連付けます。このXMLファイルの構文については、「[場所XMLの作成](#)」を参照してください。
2. XMLファイルをPMDB\_HOME/configフォルダーに保存します。
3. 数分間待ってから、PMDB\_Platform@platform\_poller\_registry\_buildストリームが正常に実行したか検証します。このストリームはXMLを処理して、OBRがレポートを生成するために使うCSVファイルを作成します。

適合済みディメンション [構成アイテム (CI)] のみを場所に関連付けることができます。XMLファイル内で定義された条件を満たすより新しいディメンションが、自動的に場所に関連付けられます。

## 場所XMLの作成

場所のレコードを作成するには、次の構文をXMLファイルにコピーします。

**注:** XMLファイルには任意のファイル名を入力できますが、<名前>locationenrich.xmlという形式に従わなくてはなりません。この場合の<名前>には、オペレーティングシステムによってサポートされているあらゆるファイル用文字列を入力できます。

たとえば、shr\_locationenrich.xmlまたはSHR9XXlocationenrich.xmlなどになります。

```
<locations>
<location name="">
<Country></Country>
<State ></State>
<City></City>
<Region></Region>
<Address></Address>
```

```

<Building></Building>

<Floor></Floor>

<instances type=" ">

<instance>

<attribute name="" value="" operator="" relation=""/>

<attribute name="" value="" operator="" />

</instance>

</instances>

</location>

</locations>

```

上記の例で使用されるタグの説明については、次の表のとおりです。

**注:** 入力した値にカンマ(,)が使用されていないことを確認します。

フィールド	説明
<location name>	場所の名前を入力します。このフィールドへの値の入力は必須です。
<country>	国名を入力します。(省略可能)
<state>	都道府県名を入力します。(省略可能)
<city>	市町村名を入力します。(省略可能)
<region>	領域の名前を入力します。このフィールドへの値の入力は必須です。
<address>	住所をここに入力します。(省略可能)
<building>	建物の名前を入力します。(省略可能)
<floor>	階を入力します。(省略可能)
<instances type>	K_CIテーブルに適合するディメンションテーブル名。ディメンションのリストを得るには、各コンテンツパックの/docフォルダーで入手可能なモデルインターフェイスのドキュメントを参照してください。ディメンションはこのテーブルから抽出されます。
<attribute name>	<instance type>タグで定義されるディメンションテーブル内の(数値の列ではなく)文字列の列の名前。
<value>	場所を作成するディメンションテーブルの列の値。たとえば、「K_CI_Oracle」ディメンションテーブルの「node_name」列の値です。または、「K_CI_System」ディメンションテーブルの「dns_name」列の値などになります。
< operator>	ノード名の値を検索するためのオペレーター。



フィールド	説明
	<p>値の完全一致検索を実行するには、EQUALS演算子を使用します。例： "abcvalue1"</p> <p>値のパターンベース一致の検索を実行するには、LIKE演算子を使用します。値を"abcvalue1%"または"%abcvalue1%"などとして指定できます。</p> <p>IN、NOT IN、NOT LIKE、EXISTS、"="、または"!="などのその他の演算子の場合は、二重引用符で囲われた値を指定する必要があります。たとえば、IN演算子は"'abcvalue1','abcvalue2','abcvalue3'"のような値を持つこととなります。</p> <p><b>注：</b> OBRデータベースに対する、XMLのすべての値の比較では、大文字小文字を区別しません。</p>
<relation>	<p>複数の属性と値のペアが指定されている場合に、ANDまたはOR演算子が実行される必要があるかどうか判断します。</p> <p>relationの値を定義しない場合は、OBRによって、デフォルト値はANDとされます。</p>

## 適用可能なコンテンツパック

次のコンテンツパックの適合済みディメンションに、場所を関連付けることができます。

- IBM WebSphere Application Server
- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange Server
- Microsoft SQL Server
- Oracle
- Oracle WebLogic Server
- System Performance
- 仮想化インフラストラクチャ管理

場所の情報は次のコンテンツパックのデータソースから使用可能です。

- Network Performance
- Real User Transaction Monitoring
- Synthetic Transaction Monitoring

場所の情報は次のコンテンツパックでは使用できません。

- Operations Events
- Cross-Domain Operations Events
- Health and Key Performance Indicators

## 場所のXMLの例

```
<locations>
<location name="Santa Clara County">
<Country>USA</Country>
<State>California</State>
<City>Palo Alto</City>
<Region>San Francisco Bay Area</Region>
<Building>239</Building>
<Floor>5th floor A block</Floor>
<instances type="K_CI_System">
<instance>
<attribute name="dns_name" value="abc%" operator="LIKE" relation="OR" />
<attribute name="dns_name" value="xyz1" operator="EQUALS" relation="OR" />
<attribute name="dns_name" value="pqr2%" operator="LIKE" />
</instance>
</instances>
</location>
</locations>
```

# OBRのレポート

OBRのレポートは、次のようにグループ化されています。

- Operations Bridge Reporter
  - Business Service Management
    - End User Management
      - Real User Monitor
      - 合成トランザクション監視 (BPM)
    - サービスヘルス
  - Infrastructure Management
    - Service and Operations Bridge (OMi)
    - Enterprise Application Management
      - Microsoft Active Directory
      - Microsoft Exchange
      - Microsoft SQL Server
      - Oracle
      - IBM WebSphere
      - Oracle WebLogic
    - Operations (OM)
    - Network
      - Component Health
      - Executive Summary
      - Interface Health
    - System Management
    - Virtualized Environment Management

データソースからデータを収集するようにOBRを設定する手順、デプロイする必要がある前提条件ポリシー、コンテンツパックのインストールの詳細については、次の表に記載された個別のガイドを参照してください。

コンテンツパック	リファレンスガイド名
Real User Monitor (RUM)	Operations Bridge Reporter Real User Transaction Monitoringコンテンツパックリファレンス
合成トランザクション監視 (BPM)	Operations Bridge Reporter Synthetic Transaction Monitoringコンテンツパックリファレンス
サービスヘルス	Operations Bridge Reporter Health and Key Performance Indicatorsコンテンツパックリファレンス
Microsoft Active Directory	Operations Bridge Reporter Microsoft Active Directoryコンテンツパックリファレンス
Microsoft Exchange	Operations Bridge Reporter Microsoft Exchange Serverコンテンツパックリファレンス
Microsoft SQL Server	Operations Bridge Reporter Microsoft SQL Serverコンテンツパックリファレンス
Oracle	Operations Bridge Reporter Oracleコンテンツパックリファレンス
Oracle WebLogic	Operations Bridge Reporter Oracle WebLogic Serverコンテンツパックリファレンス
IBM WebSphere	Operations Bridge Reporter IBM WebSphere Application Serverコンテンツパックリファレンス
Operations (OM)	Operations Bridge Reporter Operations Eventsコンテンツパックリファレンス
ネットワークコンポーネントヘルス	Operations Bridge Reporter Network Component Healthコンテンツパックリファレンス
Network Executive Summary	Operations Bridge Reporter Network Performanceコンテンツパックリファレンス
ネットワークインターフェイスヘルス	Operations Bridge Reporter Network Interface Healthコンテンツパックリファレンス
System Management	Operations Bridge Reporter System Performanceコンテンツパックリファレンス
Virtualized Environment Management	Operations Bridge Reporter Virtual Environment Performanceコンテンツパックリファレンス
Cross-Domain Operations Events	Operations Bridge Reporter Cross-Domain Operations Eventsコンテンツパックリファレンス

SPIデータソースからデータを収集するようにOBRを設定する手順の詳細については、[Operations SPI](#)を参照してください。OMi MPからデータを収集するように設定する手順については、[Operations Manager i 管理パック](#)を参照してください。

## Operations Smart Plug-in用のデータソースとの統合

異なるエンタープライズアプリケーションから収集されたデータについてのレポートを表示するために、OBRはOperationsスマートプラグイン (SPI) のコレクターによって収集されたメトリックを活用します。SPIコレクターはOperations Agentによって提供されたデータストアにデータを保存します。OBRでのSPIデータソースとの統合により、Operations AgentのデータストアからOBRのデータベースへのデータ転送が容易になります。

この統合は、OBRをOMデプロイメントシナリオでデプロイすると確立されます。

OBRでは、次のエンタープライズアプリケーションに関するパフォーマンスレポートが提供されます。

- Microsoft Active Directory
- Microsoft Exchange
- Microsoft SQL Server
- Oracle Database
- Oracle WebLogic Server
- IBM WebSphere Application Server

## 統合の作業

1. SPIのインストールおよび設定により、必要なインストールメンテーション、スクリプト、プログラム、およびポリシーが、アプリケーションを実行しておりOperations Agentがすでにインストールされているノードに確実に転送されるようになります。

**ヒント:** SPIを正常にインストールおよび設定するには、SPIドキュメントの記載に従います。

2. SPIコレクターは、ノード上にデプロイされたポリシーで使用可能なルールおよび仕様に基づいて、ノード上のデータの収集を開始します。
3. SPIは収集されたデータをOperations Agentのデータストアに保存します。各SPIによって少なくとも1つのデータソースがAgentのデータストア内に作成されます。
4. データソースからデータを収集し、コンテンツパックをインストールするようOBRを設定した後、OBRはAgentのデータストアから履歴データの収集を開始します。

**ヒント:** SPIデータソースからデータを収集するようOBRを設定する手順や、コンテンツパックをインストールする手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

# Operations SPIデータからOBRレポートを生成するための前提条件

OBRとOperations SPIとを統合する前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。満たしていない場合、空白のOBRレポートが生成されます。

- データがOperations SPIデータストア内でログ記録を行っていることを確認します。
  - a. Operations SPIがインストールされ、設定されていることを確認します。Operations SPIのデプロイと設定に関する詳細については、本書の各章で該当するOperations SPIについて挙げられている参照ドキュメントを参照してください。
  - b. すべての必要なOperations SPIポリシーが適切にデプロイされていることを確認します。
  - c. Operations SPIコレクターがOperations Agentデータベースにメトリックのログを記録していることを確認します。Operations SPIがデータベースにメトリックのログを記録しているかの検証の詳細については、『Operations Bridge Reporterトラブルシューティングガイド』を参照してください。

**注：** Operations SPIによって満たされていない前提条件がある場合、OBRはデータソースから必要な情報を収集できず、レポートが生成されません。

- OBRがOperations SPIデータストアに対して設定されていることを確認します。
  - a. トポロジソース (OMまたはRTSM) がファクトメトリックをOperations SPIのデータストアから収集するよう設定されていることを確認します。これは、[OBR管理コンソール] > [トポロジ設定] > [テスト接続] (成功する必要がある) で検証できます。詳細については『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「OBRの設定」セクションを参照してください。
  - b. Operations SPIに関連するOBRコンテンツパックがインストールされていることを確認します。これは、[OBR管理コンソール] > [コンテンツパックのデプロイメント] から検証できます。コンテンツパックのデプロイメントステータスを示す列が表示されます。

**注：** Operations SPIデータストアがOBRに対して設定されていない場合、必要な情報をデータソースから収集できず、レポートは生成されません。

各OBRレポートは、HPE Operations AgentのデータストアにあるOperations SPIメトリックの特定のセットを使用します。メトリックデータの収集は、ノード上にデプロイされたOperations SPIポリシーによって管理されます。つまり、関心のあるレポートを正しく表示できるようにするためには、すべての前提条件ポリシーをデプロイする必要があります。

# Operations Manager i管理パック用のデータソースとの統合

異なるエンタープライズアプリケーションから収集されたデータのレポートを表示するため、OBRは、Operations Manager i管理パック (OMi MP) によって収集されたメトリックを活用します。OMi MPコレクターは、Operations Agentが提供するデータストアにデータを保存します。OBRとOMi MPデータソースとが統合されることにより、Operations AgentのデータストアからOBRデータベースへのデータ転送が容易になります。

この統合は、RTSMデプロイメントシナリオでOBRビューをデプロイすると確立されます。

OBRでは、次のエンタープライズアプリケーションに関するパフォーマンスレポートが提供されます。

- OMi MP for Microsoft Active Directory
- OMi MP for Microsoft SQL Server
- OMi MP for Microsoft Exchange
- OMi MP for Oracle Database
- OMi MP for Oracle WebLogic
- OMi MP for IBM WebSphere

## 統合の作業

1. OMi MPのインストールおよび設定により、必要なインストルメンテーション、スクリプト、プログラム、およびポリシーが、アプリケーションを実行しておりOperations Agentがすでにインストールされているノードに確実に転送されるようになります。

**ヒント:** OMi MPを正常にインストールおよび設定するには、OMi MPドキュメントの記載に従います。

2. OMi MPコレクターは、ノード上にデプロイされたポリシーで使用可能なルールおよび仕様に基づいて、ノード上のデータの収集を開始します。
3. OMi MPは収集されたデータをOperations Agentのデータストアに保存します。各OMi MPによって少なくとも1つのデータソースがAgentのデータストア内に作成されます。
4. データソースからデータを収集し、コンテンツパックをインストールするようOBRを設定した後、OBRは

Agentのデータストアから履歴データの収集を開始します。

**ヒント:** OMi MPデータソースからデータを収集するようにOBRを設定し、コンテンツパックをインストールする手順については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。



# Operations Manager i管理ノックデータからOBRレポートを生成するための前提条件

OBRとOMi MPとを統合する前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。満たしていない場合、空白のOBRレポートが生成されます。

- **データがOperations Agentデータストア内でログ記録を行っていることを確認します。**
  - a. OMi MPがインストールされ、設定されていることを確認します。OMi MPのデプロイと設定に関する詳細については、本書の各章で該当するOMi MPIについて挙げられている参照ドキュメントを参照してください。
  - b. すべての必要なOMi MPポリシーが適切にデプロイされていることを確認します。
  - c. OMi MPコレクターがOperations Agentデータベースにメトリックのログを記録していることを確認します。OMi MPがデータベースにメトリックのログを記録しているかの検証の詳細については、『Operations Bridge Reporterトラブルシューティングガイド』を参照してください。

**注:** OMi MPによって満たされていない前提条件がある場合、OBRはデータソースから必要な情報を収集できず、空白のレポートが生成されます。

- **OMi MPが設定されているBusiness Service Management (BSM) システムにOBRが接続する設定になっていることを確認します。**
  - a. トポロジソース (RTSM) がファクトメトリックをOMi MPのデータストアから収集するよう設定されていることを確認します。これは、[OBR管理コンソール] > [データソース設定] > [トポロジソース] > [テスト接続] (成功する必要がある) で検証できます。詳細については『Operations Bridge Reporter設定ガイド』の「OBRの設定」セクションを参照してください。
  - b. OMi MPIに関連するOBRコンテンツパックがインストールされていることを確認します。これは、[OBR管理コンソール] > [コンテンツパックのデプロイメント] から検証できます。コンテンツパックのデプロイメントステータスを示す列が表示されます。

**注:** OMi MPデータストアがBSMソースでOBRの使用向けに設定されていない場合、データソースから必要な情報を収集できず、空白のレポートが生成されます。

各OBRレポートは、Operations AgentのデータストアにあるOMi MPメトリックの特定のセットを使用します。メトリックデータの収集は、ノード上にデプロイされたOMi MPポリシーによって管理されます。つまり、関心のあるOBRレポートを正しく表示できるようにするためには、すべての前提条件ポリシーをデプロイする必要があります。

# OBRを監視するためのOMLポリシー

Operations Manager for Linux (OML) のOBRポリシーテンプレートは、OBRをOMLに統合するための一連の設定データです。これらのポリシーテンプレートは、特定の設定タスクおよび監視タスクの詳細を定義します。これらのポリシーを使用して、OMLはWindowsおよびLinux上のすべてのOBRサービスを監視します。

OBR\_OML\_Monitoring\_policies.zipファイルには、OBR LinuxおよびWindowsサービスを監視するためのOMLポリシーテンプレートが含まれます。

OMLポリシーテンプレートは、OBRシステム内の次の場所にあります。

```
$PMDB_HOME/scripts/OMLPolicies/OBR_OML_Monitoring_policies.zip
```

このドキュメントでは、OBR LinuxおよびWindowsサービス用のOMLポリシーをリストし、これらのポリシーをOMLシステムにインポートして、ノードまたはノードグループ上にデプロイする手順を順を追って示します。

## 前提条件

**注:** OMLポリシーテンプレートは、OBR 10.01以降のバージョンでのみサポートされます。

OBRポリシーをOMLにインポートする前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。

- OBRシステムにAgentがインストールされていることを確認します。
- OBR-Agentの共存に必要な手順を実行し、証明書を要求して適用します。  
共存の設定と証明書の詳細については、『Operations Bridge Reporterインタラクティブインストールガイド』を参照してください。
- OBR-AgentノードをOMLサーバーに追加します。  
詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。

## OMLによって監視されるOBRサービス

OMLは、次のOBR-OMLポリシーを使用してOBR Linuxサービスを監視します。

### OBR Linuxサービス

- HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator
- HPE\_PMDB\_Platform\_Collection
- HPE\_PMDB\_Platform\_DB\_Logger
- HPE\_PMDB\_Platform\_IA
- HPE\_PMDB\_Platform\_IM
- HPE\_PMDB\_Platform\_JobManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL
- HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestration
- HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQL
- HPE\_PMDB\_Platform\_TaskManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_Vertica
- TrendTimer

ポリシーテンプレートZipファイルには、OBR Linuxサービスごとに1つのポリシーテンプレートが含まれます。

LinuxシステムでOBRサービスを監視するためのポリシーは、次のとおりです。

- OBR\_LinuxAdministrationService
- OBR\_LinuxCollectionService
- OBR\_LinuxDBLoggerService
- OBR\_LinuxIAService
- OBR\_LinuxIMService
- OBR\_LinuxJobManagerService
- OBR\_LinuxNRT\_ETLService
- OBR\_LinuxOrchestrationService
- OBR\_LinuxTaskManagerService

- OBR\_LinuxTimerService
- OBR\_LinuxPostgreSQLService
- OBR\_LinuxVerticaService

## **OBR Windowsサービス**

次のWindowsサービスのポリシールールはすべて、単一のポリシーの下にあります。

- HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator
- HPE\_PMDB\_Platform\_Collection
- HPE\_PMDB\_Platform\_DBLogger
- HPE\_PMDB\_Platform\_IA
- HPE\_PMDB\_Platform\_IM
- HPE\_PMDB\_Platform\_JobManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL\_UTILITY
- HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestration
- HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQL
- HPE\_PMDB\_Platform\_TaskManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_Timer

OBRサービスはすべて、次のポリシーテンプレートを使用して処理されます。

- OBR\_Windows\_Services

# OBRのOMLポリシーテンプレートのインポートおよびデプロイ

## OMLシステムへのポリシーテンプレートのインポート

1. コマンドプロンプトを開き、適切な資格情報を使用してOMLシステムに接続します。
2. OBRシステムからOMLシステムにOMLポリシーZipファイルをダウンロードまたは転送します。

OMLポリシーテンプレートは、OBRシステム内の次の場所にあります。

```
$PMDB_HOME/scripts/OMLPolicies/OBR_OML_Monitoring_policies.zip
```

OBR\_OML\_Monitoring\_policies.zipファイルには、OBR LinuxおよびWindowsサービスを監視するためのOMLポリシーテンプレートが含まれます。

3. unzip <file\_name>コマンドを使用して、ファイルを解凍します。
  4. 次のコマンドを使用して、ポリシーをOMLシステムにアップロードします。
- ```
opctempl -upload dir=<zip file extracted path with the directory name>
```
5. 13のポリシーの成功メッセージを受信したら、次のコマンドを実行してアップロードを検証します。

```
opctempl -list
```

LinuxとWindowsのサービス名を確認します。

## ポリシーテンプレートのデプロイ

1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

```
http://<サーバー名>.<ドメイン名>:9662
```

ここで

<server\_name>と<domain\_name>は、OMLサーバーの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を表します。


2. 適切な資格情報を使用してOML管理コンソールにログオンします。
3. 以下に示すように、[HPOM] をクリックしてから [登録ポリシー] をクリックします。

[登録ポリシー] に、OBRポリシーが表示されています。


|                          |                                                                                                             |                                                                                                                                                                     |       |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| <input type="checkbox"/> |  Infrastructure Management |   | 2 / 0 |
| <input type="checkbox"/> |  Management Server         |   | 0 / 3 |
| <input type="checkbox"/> |  midas                     |   | 2 / 0 |
| <input type="checkbox"/> |  <b>OBR Policies</b>       |   | 0 / 9 |
| <input type="checkbox"/> |  SiteScope Integration     |   | 3 / 0 |
| <input type="checkbox"/> |  SNMP                      |   | 0 / 3 |

4. [OBR Policies] を選択して、ポリシーテンプレートバージョン1.0をクリックします。



LinuxおよびWindowsオプションが表示されます。


**Elements in Policy Group "OBR Policies/1.0"**  

/ Policy Bank / OBR Policies / 1.0

Details 1.0  Filter

Found 2 Elements

| <input type="checkbox"/> | Type                                                                              | Name    | ↑ Assigned | Mode |
|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|---------|------------|------|
| <input type="checkbox"/> |  | Linux   |            |      |
| <input type="checkbox"/> |  | Windows |            |      |

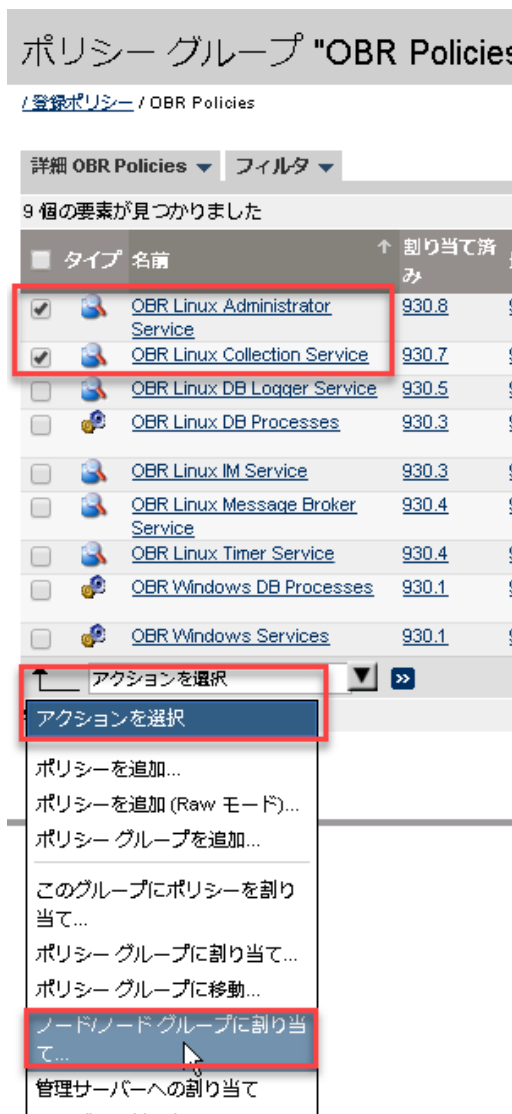
↑ Choose an action  

Found 2 Elements

5. OBRがインストールされているオペレーティングシステムに応じて、適切なオペレーティングシステムタイプを選択します。

**Linuxの場合：**

- a. [Linux] をクリックし、リストされたチェックボックスをクリックしてポリシーテンプレートを選択します。



- b. [アクションを選択] をクリックして、[ノード/ノードグループに割り当て] を選択します。










#### Windowsの場合：

- a. [Windows] をクリックしてから [OBR\_Windows\_Services] をクリックします。
- b. [アクションを選択] をクリックして、[ノード/ノードグループに割り当て] を選択します。



詳細 OBR Policies ▼ フィルタ ▼

9 個の要素が見つかりました

| タイプ                                 | 名前                                                                                                                 | ↑ 割り当て済み |
|-------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------|
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux Administrator Service  | 930.8    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux Collection Service     | 930.7    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux DB Logger Service      | 930.5    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux DB Processes           | 930.3    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux IM Service             | 930.3    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux Message Broker Service | 930.4    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Linux Timer Service          | 930.4    |
| <input type="checkbox"/>            |  OBR Windows DB Processes         | 930.1    |
| <input checked="" type="checkbox"/> |  OBR Windows Services             | 930.1    |

アクションを選択

- アクションを選択
- ポリシーを追加...
- ポリシーを追加 (Raw モード)...
- ポリシー グループを追加...
- このグループにポリシーを割り当て...
- ポリシー グループに割り当て...
- ポリシー グループに移動...
- ノード/ノード グループに割り当て...**
- 管理サーバーへの割り当て

6. [ノード/ノード グループに割り当て...] アクションを選択したら、ポリシーテンプレートを選択して **>>** アイコンをクリックします。

詳細 OBR Policies ▼ フィルタ ▼

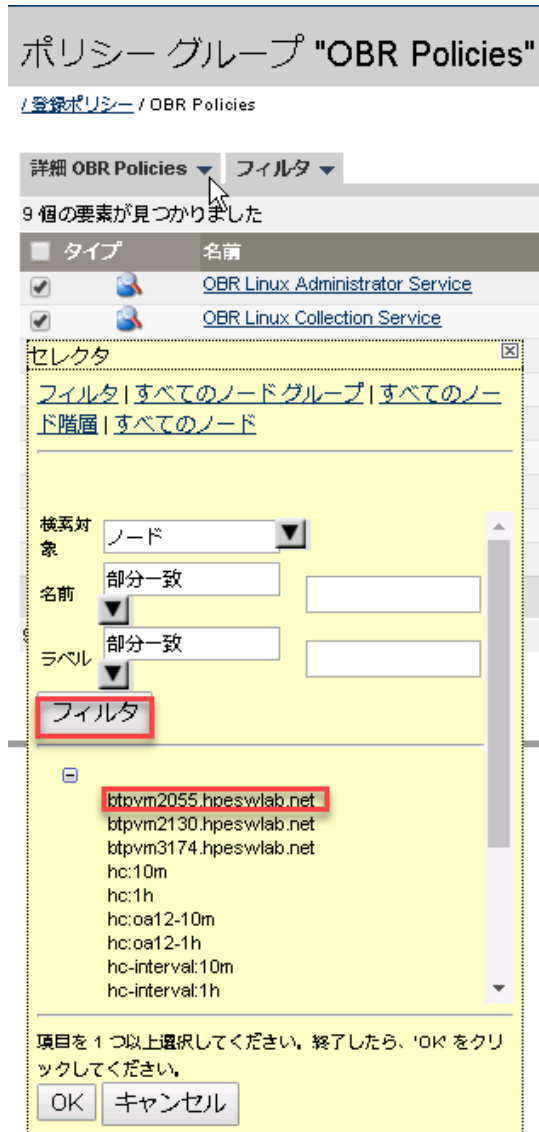
9 個の要素が見つかりました

| <input type="checkbox"/>            | タイプ | 名前                                               | ↑ 割り当て済み |
|-------------------------------------|-----|--------------------------------------------------|----------|
| <input checked="" type="checkbox"/> |     | <a href="#">OBR Linux Administrator Service</a>  | 930.8    |
| <input checked="" type="checkbox"/> |     | <a href="#">OBR Linux Collection Service</a>     | 930.7    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Linux DB Logger Service</a>      | 930.5    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Linux DB Processes</a>           | 930.3    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Linux IM Service</a>             | 930.3    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Linux Message Broker Service</a> | 930.4    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Linux Timer Service</a>          | 930.4    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Windows DB Processes</a>         | 930.1    |
| <input type="checkbox"/>            |     | <a href="#">OBR Windows Services</a>             | 930.1    |

↑ アクションを選択 ▼ **>>**

9 個の要素が見つかりました

ノードのリストが示されたセクターのポップアップが表示されます。

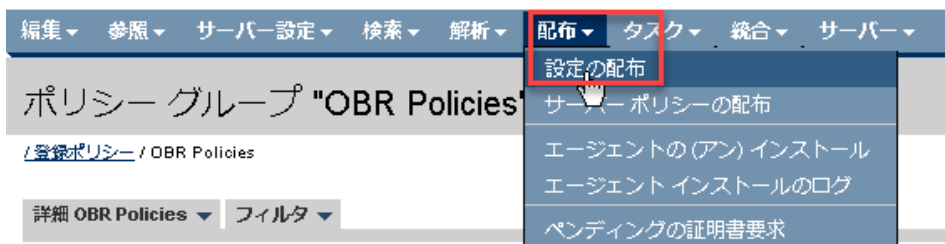


7. [フィルタ] をクリックしてノードを選択し、[OK] をクリックします。

選択したポリシーがノードグループに割り当てられ、次のメッセージが表示されます。

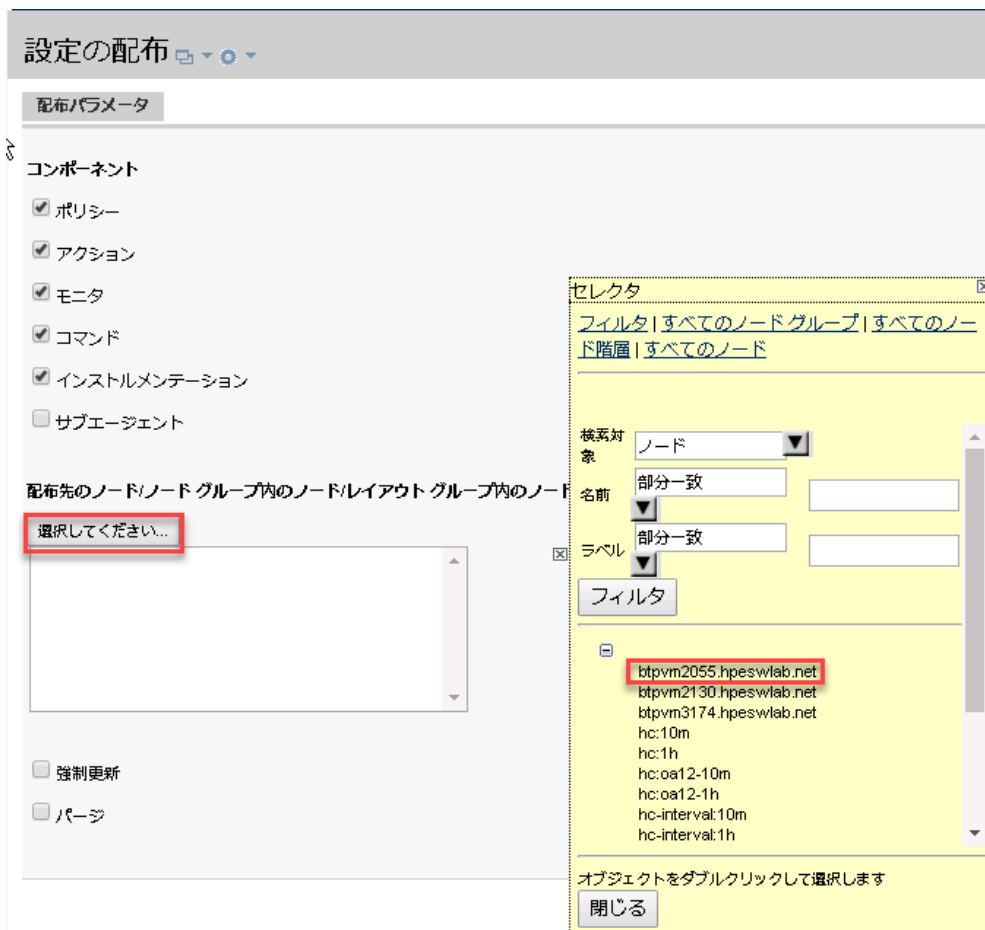


8. [配布] > [設定の配布] をクリックします。



9. [設定の配布] ページで、[選択してください] をクリックします。

セレクターのポップアップウィンドウが表示されます。



10. セレクトのポップアップで、ポリシーをデプロイするノード/ノードグループをダブルクリックします。  
 選択したノードがボックスに一覧表示されます。
11. [強制更新] チェックボックスをオンにして、[配布] をクリックします。

編集 ▾ 参照 ▾ サーバ設定 ▾ 検索 ▾ 解析 ▾ 配布 ▾ タスク ▾ 統合 ▾  
サーバ ▾

### 設定の配布 ▾


**配布パラメータ**

**コンポーネント**

- ポリシー
- アクション
- モニタ
- コマンド
- インストールメンテーション
- サブエージェント

配布先のノード/ノードグループ内のノード/レイアウトグループ内のノード

選択してください...

btpvm2055.hpeswlab.net 

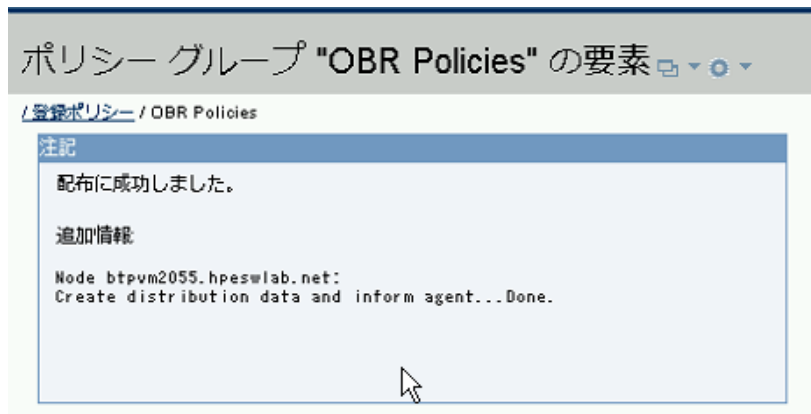
**強制更新**

パーシ

キャンセル **配布**

**注:** [強制更新] を選択し、選択したノード/ノードグループ上で旧バージョンの既存のポリシーテンプレートを上書きします。

12. ポリシーテンプレートのデプロイメントが完了すると、次のメッセージが表示されます。



選択したポリシーテンプレートが、選択したノードに正常にデプロイされました。

## OBRを監視するためのOMiポリシー

Operations Manager i (OMi) のOBRポリシーテンプレートは、OBRをOMiに統合するための一連の設定データです。これらのポリシーテンプレートは、特定の設定タスクおよび監視タスクの詳細を定義します。これらのポリシーを使用して、OMiはLinux上のVerticaサービスを含め、WindowsおよびLinux上のすべてのOBRサービスを監視します。

OBRのOMiポリシーは、OBRインストールディレクトリの次の場所にあります。

```
$PMDB_HOME/scripts/OMiPolicies/OBR_OMi_Monitoring_policies.zip
```

OBR\_OMi\_Monitoring\_policies.zipファイルには、LinuxおよびWindows用のOBRポリシーテンプレートが含まれます。

このドキュメントでは、LinuxおよびWindows用のOBR-OMiポリシーをリストし、これらのポリシーをインポートおよびデプロイする手順を順を追って示します。

## 前提条件

**注：** OMiポリシーテンプレートは、OBR 10.01以降のバージョンでのみサポートされます。

OBRポリシーをOMiにインポートする前に、次の前提条件を満たしていることを確認してください。

- OBRにAgentがインストールされていることを確認します。
- OBR-Agentの共存に必要な手順を実行し、証明書を要求して適用します。

共存の設定と証明書の詳細については、『Operations Bridge Reporterインタラクティブインストールガイド』を参照してください。

- OBR-AgentノードをOMiサーバーに追加します。

詳細については、『Operations Bridge Reporter設定ガイド』を参照してください。



## OMiによって監視されるOBRサービス

OMiは、次のOBR-OMiポリシーを使用してOBR Linuxサービスを監視します。

### OBR Linuxサービス

- HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator
- HPE\_PMDB\_Platform\_Collection
- HPE\_PMDB\_Platform\_DB\_Logger
- HPE\_PMDB\_Platform\_IA
- HPE\_PMDB\_Platform\_IM
- HPE\_PMDB\_Platform\_JobManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL
- HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestration
- HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQL
- HPE\_PMDB\_Platform\_TaskManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_Vertica
- TrendTimer

### OBR Windowsサービス

次のWindowsサービスのポリシールールはすべて、単一のポリシーの下にあります。

- HPE\_PMDB\_Platform\_Administrator
- HPE\_PMDB\_Platform\_Collection
- HPE\_PMDB\_Platform\_DBLogger
- HPE\_PMDB\_Platform\_IA
- HPE\_PMDB\_Platform\_IM
- HPE\_PMDB\_Platform\_JobManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL
- HPE\_PMDB\_Platform\_NRT\_ETL\_UTILITY
- HPE\_PMDB\_Platform\_Orchestration

- HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQL
- HPE\_PMDB\_Platform\_TaskManager
- HPE\_PMDB\_Platform\_Timer

## OBRのOMiポリシー

このセクションでは、LinuxおよびWindowsシステムでOBRサービスを監視するために使用するOMiポリシーをリストします。

## 測定しきい値ポリシー

測定しきい値ポリシーを使用すると、さまざまなソースからのパフォーマンスメトリックを監視できます。パフォーマンスメトリックが指定したしきい値を超えたときに、イベントを作成してコマンドを起動するようにポリシーを設定できます。

OBR Linuxサービス監視ポリシーはすべて、測定しきい値に分類されます。

LinuxシステムでOBRサービスを監視するためのポリシーは、次のとおりです。

- OBR\_LinuxAdministrationService
- OBR\_LinuxCollectionService
- OBR\_LinuxDBLoggerService
- OBR\_LinuxIAService
- OBR\_LinuxIMService
- OBR\_LinuxJobManagerService
- OBR\_LinuxNRT\_ETLService
- OBR\_LinuxOrchestrationService
- OBR\_LinuxTaskManagerService
- OBR\_LinuxTimerService
- OBR\_LinuxPostgreSQLService
- OBR\_LinuxVerticaService

## サービスプロセスモニタリングポリシー

サービスプロセスモニタリングポリシーを使用すると、サービスのステータス (Windows上) およびプロセス (Operations Agentでサポートされるすべてのオペレーティングシステム上) を監視できます。サービスのステータスまたは実行中のプロセスの数に変化が起きたときに、イベントを作成してコマンドを起動するようにポリシーを設定できます。OBR Windowsサービスのポリシーは、OMiの[サービスプロセスモニタリング]の下にリストされます。

- OBR\_Windows\_Services

OMi測定しきい値ポリシーおよびサービスプロセスモニタリングポリシーの詳細については、『OMi Administration Guide』を参照してください。

## ポリシーのインポートおよびデプロイ

OBRのOMiポリシーは、OBRインストールディレクトリの次の場所にあります。

```
$PMDB_HOME/scripts/OMiPolicies/OBR_OMi_Monitoring_policies.zip
```

OBR\_OMi\_Monitoring\_policies.zipファイルには、LinuxおよびWindows用のOBRポリシーテンプレートが含まれます。

ポリシーテンプレートZipファイルをデスクトップにダウンロードまたはコピーして、OMiシステムにインポートできます。

## OMiシステムへのポリシーのインポート

1. Webブラウザで、以下のURLを入力します。

```
https://<サーバー名>.<ドメイン>/omi
```

ここで

<server\_name>と<domain\_name>は、OMiサーバーの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を表します。

2. ポリシーテンプレートをデプロイする権限を使用して、OMi管理コンソールにログインします。

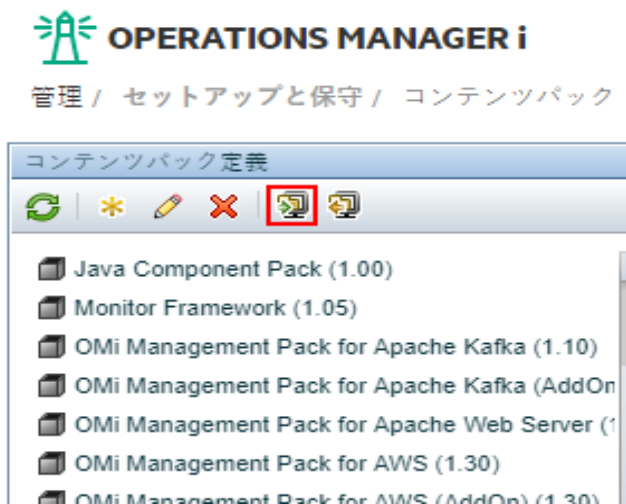


**注:** ノードのすべてのセカンダリマネージャーは、ノードにポリシーをデプロイする権限を持っています。権限の詳細については、『OMi Administration Guide』を参照してください。

3. OMiシステムで、[管理] > [設定とメンテナンス] > [コンテンツパック] に移動します。

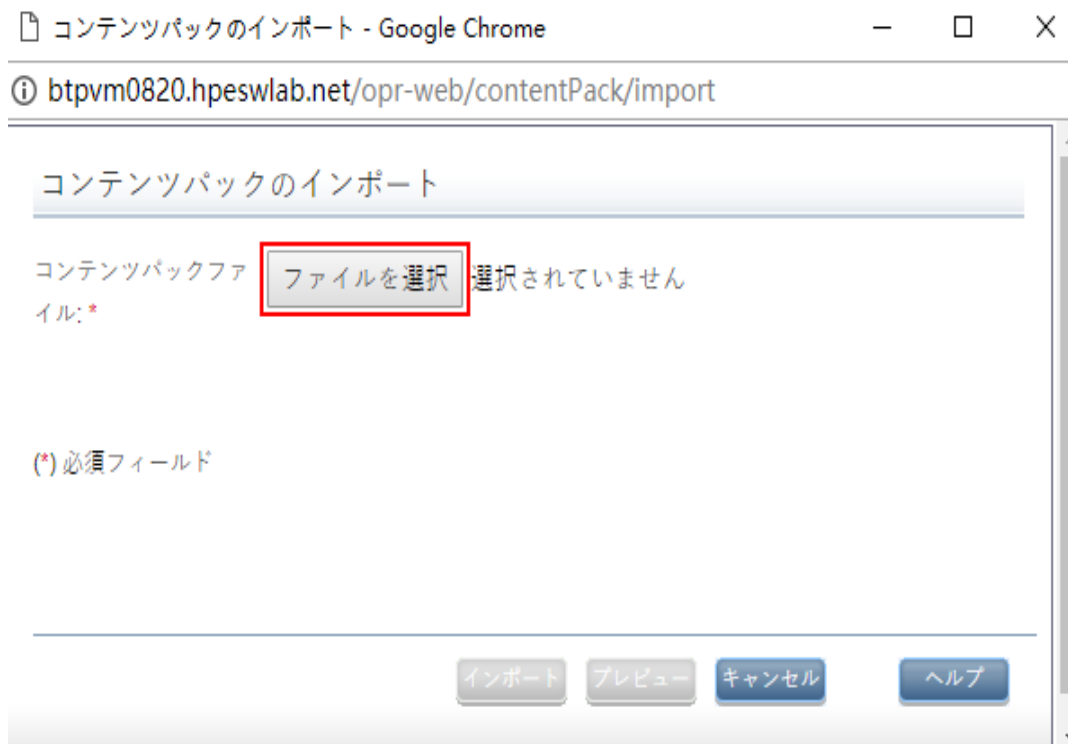


4. [コンテンツパック定義のインポート] アイコンをクリックします。

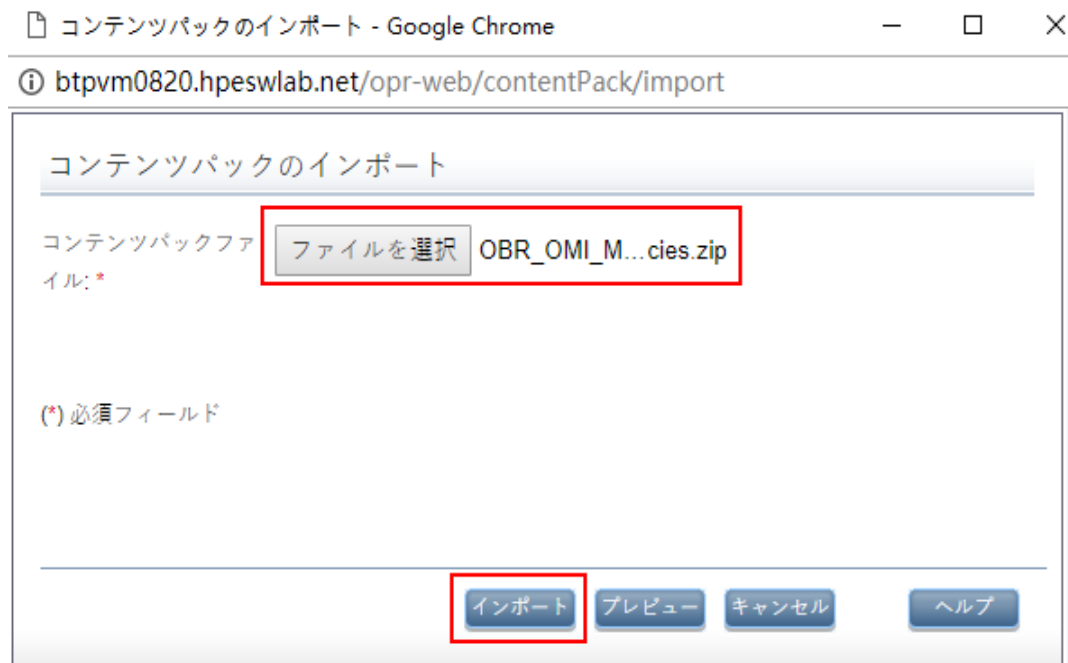


[コンテンツパックのインポート] ページが表示されます。

5. [ファイルの選択] をクリックし、システムからコンテンツパックZipファイルを選択して、[開く] をクリックします。



6. [インポート] をクリックして、ポリシーをOMiシステムにインポートします。



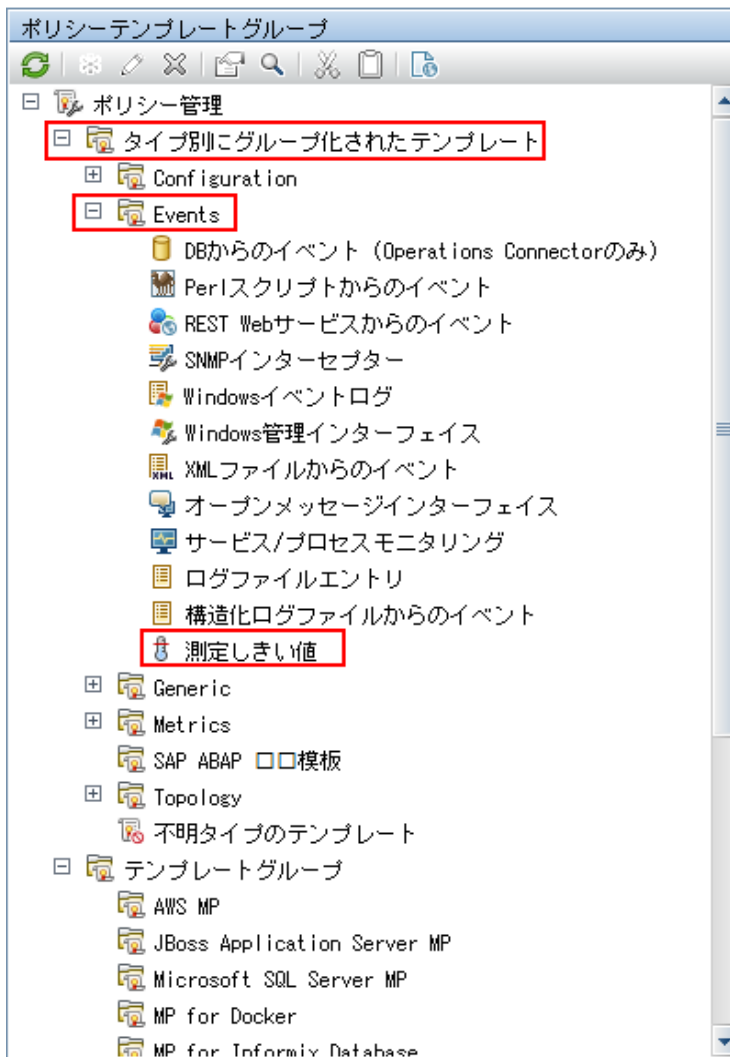
OBR-OMiポリシーコンテンツパックをインポートしたら、[OMi管理] ページの[管理] > [監視] > [ポリシーテンプレート] ですべてのポリシーを表示できます。

OMiシステムへのインポートが完了すると、OBRポリシーはOMi管理コンソールのポリシーテンプレートグループに配置されます。

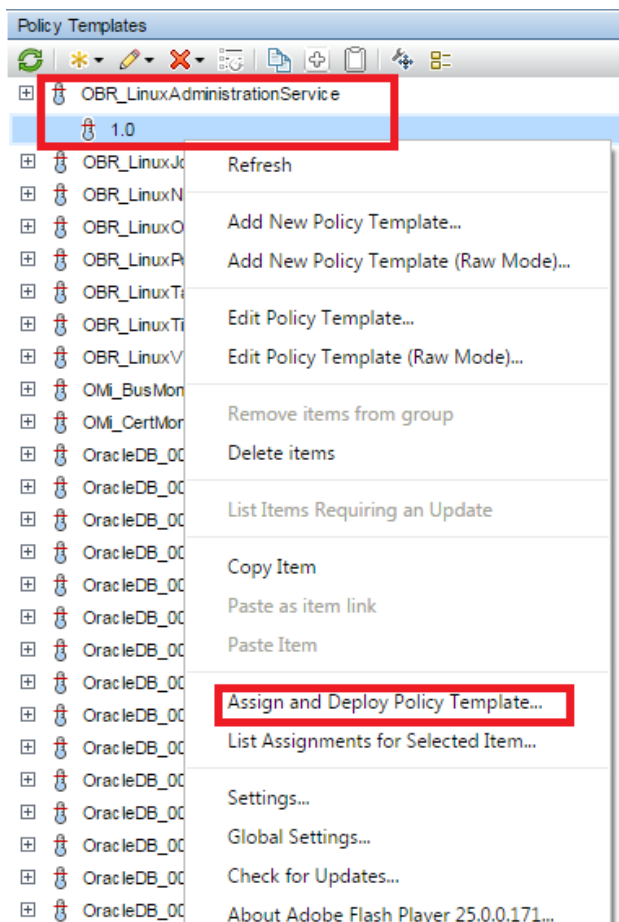
- Linux用のOBRサービスポリシーは、[測定しきい値]の下にあります。
- WindowsサービスおよびデータベースポリシーとLinuxデータベースポリシーは、[サービス/プロセスモニタリング]の下に配置されます。

## Linuxポリシーテンプレートのデプロイ

1. OMi管理コンソールで、[管理] > [監視] > [ポリシーテンプレート] に移動します。
2. ポリシーテンプレートグループとポリシータイプを選択します。



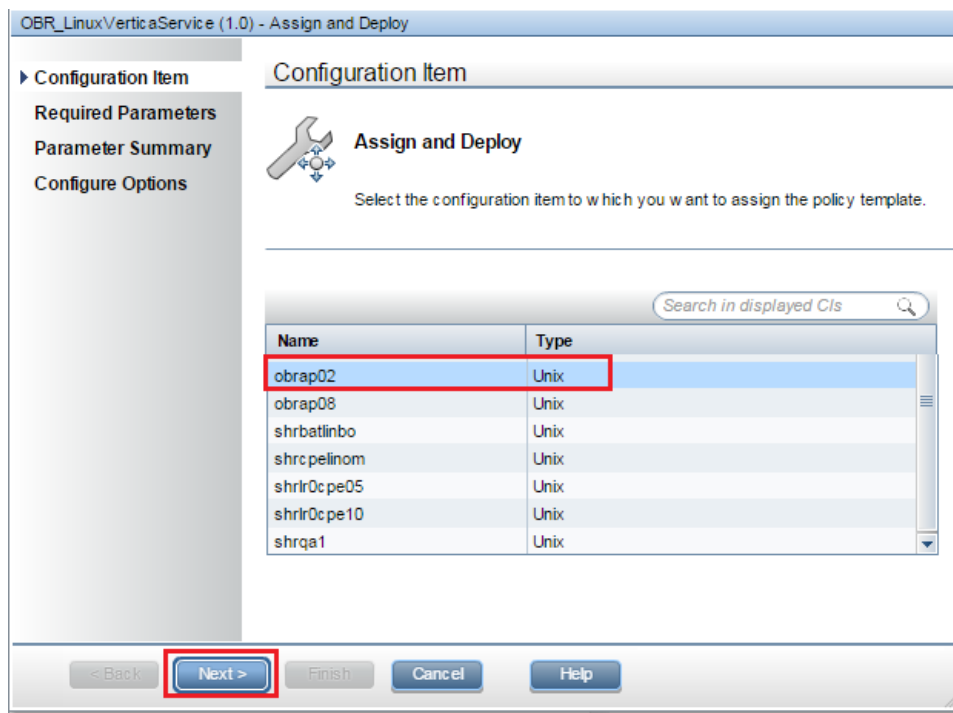
3. ポリシーを選択して、デプロイするポリシーのバージョンを右クリックします。



4. [ポリシーテンプレートの割り当てとデプロイ] を選択します。[割り当てとデプロイ] ポップアップが表示されます。次の手順を実行します。



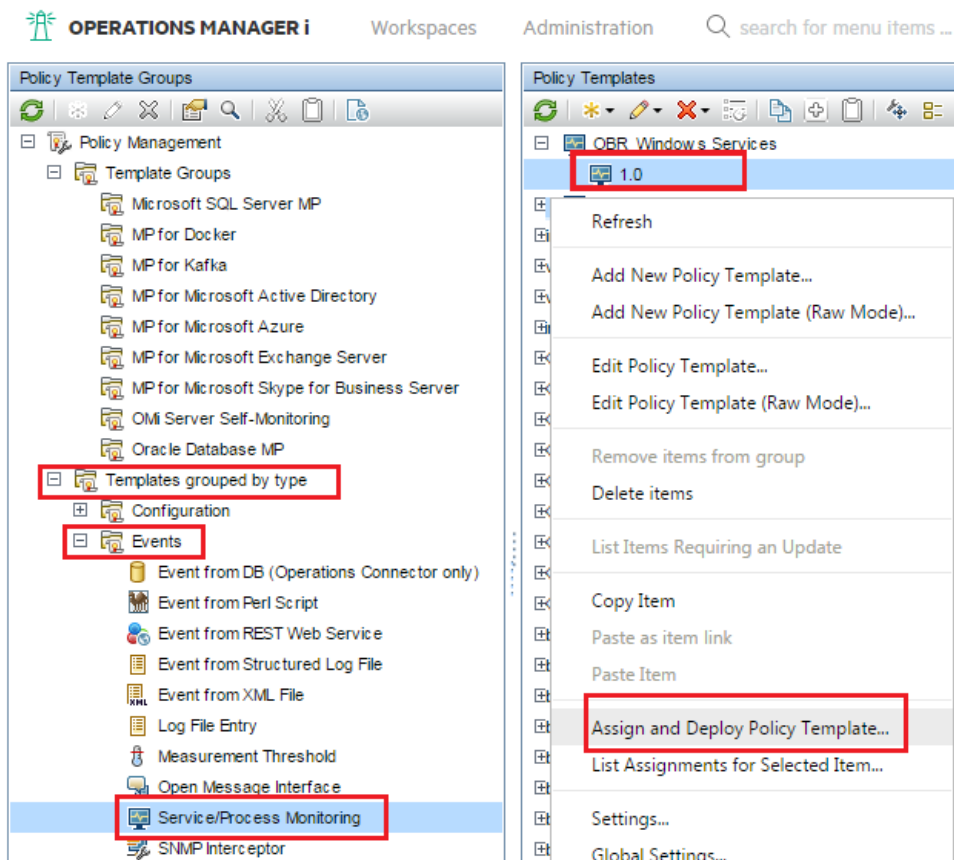
- a. i. ポリシーテンプレートをデプロイするノードを選択して、[次へ]をクリックします。



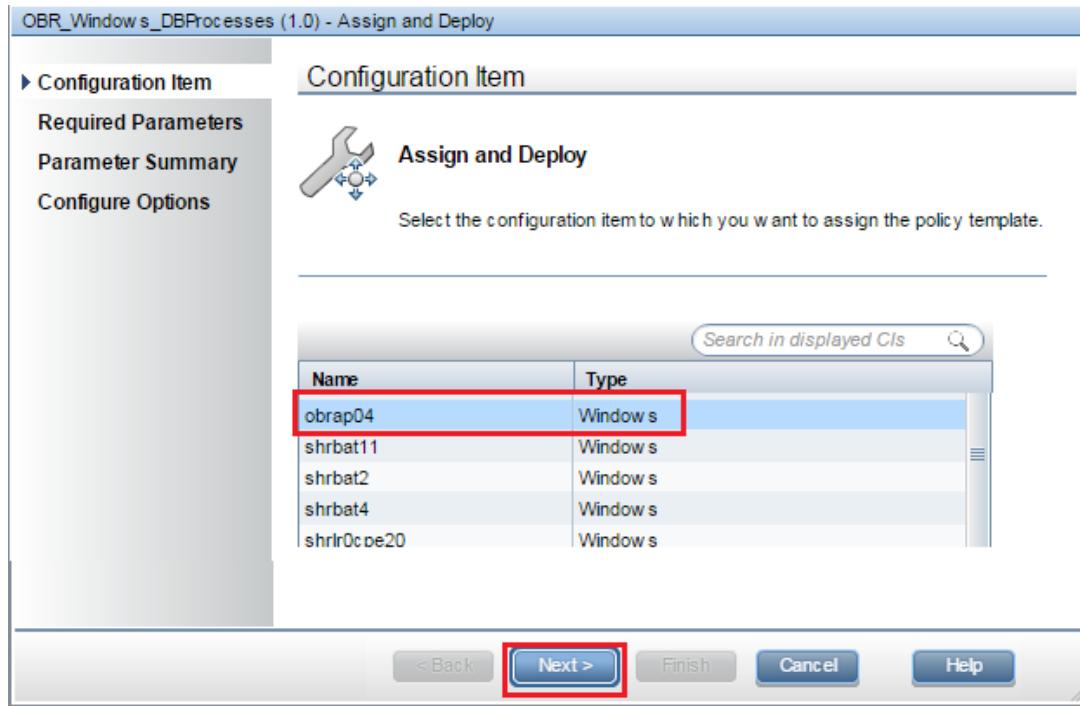
- ii. 必要に応じてパラメーターの値を選択して編集し、[次へ]をクリックします。
- iii. 設定オプションを選択して、[終了]をクリックします。

## Windowsポリシーテンプレートのデプロイ

1. OMi管理コンソールで、[管理] > [監視] > [ポリシーテンプレート] に移動します。
2. ポリシーテンプレートグループとポリシータイプを選択します。
3. ポリシーを選択して、デプロイするポリシーのバージョンを右クリックします。



4. [ポリシーテンプレートの割り当てとデプロイ] を選択します。
5. ポリシーテンプレートをデプロイするノードを選択して、[次へ] をクリックします。



- 必要に応じてパラメーターの値を選択して編集し、[次へ]をクリックします。
- 設定オプションを選択して、[終了]をクリックします。  
ポリシーテンプレートが選択したノードにデプロイされます。

# OBRログファイルインベントリ

OBRはログ記録目的ではほとんどの場合、log4j APIを使用します。ログファイルは、コレクター、ローダー、メタデータリポジトリ、内部監視、管理コンソール、パッケージマネージャー、データ処理などの各モジュールごとに保持されます。これらのログファイルは、%PMDB\_HOME%\logフォルダーに配置されています。OBRは、すべてのモジュールからのエラーメッセージを格納するアプリケーション全体のログファイルも保持します。これらのログファイルを使用してトラブルシューティングを行うことができます。

OBRで使用できるログファイルは次のとおりです。

| ログファイル                   | ディスク上の場所                                                           | モジュール                    | 説明                                                                                      |
|--------------------------|--------------------------------------------------------------------|--------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| AdministratorService.log | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | Administrator Service    | PMDB Platform Administratorサービスに関連するログメッセージが含まれます。                                      |
| aggregate.log            | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log  | Aggregate                | 割合テーブルから時間別、日別、および予測テーブルへのデータに関連するログメッセージと、時間別テーブルから日別テーブルへのデータに関連する要約されたログメッセージが含まれます。 |
| aggrgen.log              | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log  | Aggregate                | 集計スクリプトの生成に関連するログメッセージが含まれます。<br><br>Appender: aggrgenAppender                          |
| analyseStat.log          | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log  | データベース                   | Verticaデータベースのメンテナンスに関連するログメッセージが含まれます。                                                 |
| audit.log                | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | trendproc、<br>trendtimer | バックエンドプロセスの開始時刻、終了時刻、および継続時間を記録します。プロセスが始まると、ファイルはプロセスが                                 |

| ログファイル                                           | ディスク上の場所                                                                                                                                      | モジュール                | 説明                                                                                  |
|--------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
|                                                  |                                                                                                                                               |                      | いつ終了したかも記録してそのプロセスのPIDが終了したことを示すプロセスID (PID) を割り当てます。                               |
| autopassJ.log                                    | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/                                                                            | OBR ライセンス            | ライセンス関連のタスクのメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>AutopassAppender                           |
| backend.log                                      | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/                                                                            | trendproc、trendtimer | データ処理ジョブのすべてのステップのログ情報が含まれます。<br>Appender:<br>backendLogAppender                    |
| BOEInstall_0.log<br><br>BusinessObjects.12.7.log | <b>Windows:</b> <SAP BOBJインストールディレクトリ>\BusinessObjects Enterprise 12.0\Logging\BOEInstall_0.log<br><b>Linux:</b><br>/opt/HP/BSM/BO/setup/logs | Business Objects     | SAP BusinessObjectsのインストールログファイル。                                                   |
| BSMRAbcservice.log                               | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/                                                                            | Orchestration        | PMDB Platform Orchestrationサービスに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>abclogAppender   |
| BSMRApp.log                                      | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/                                                                            | NA                   | データ処理を除くすべてのOBRモジュールからのエラーメッセージを格納するアプリケーション全体のログファイル。<br>Appender:<br>bsmrappender |

| ログファイル                    | ディスク上の場所                                                                       | モジュール    | 説明                                                                                                               |
|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| BSMRCollectionService.log | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | コレクター    | PMDB Platform Collectionサービスに関連するログメッセージが含まれます。                                                                  |
| BSMRDBLoggerService.log   | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | ロガー      | PMDB Platform DB Loggerサービスに関連するログメッセージが含まれます。                                                                   |
| bsmrfrontend.log          | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | 管理コンソール  | 管理コンソールのUI Webアプリケーションに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>BSMRFrontEndAppender                                   |
| bsmrin.log                | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | 内部監視     | データ処理ジョブストリーム、パフォーマンス管理データベース (PMDB) プラットフォーム、およびコンテンツパックの内部監視に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>BSMRIMAppender |
| BSMRIMService.log         | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | 内部監視     | PMDB Platform IMサービスに関連するログメッセージが含まれます。                                                                          |
| catalina*.log             | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\adminServer\logs<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | 管理者コンソール | 管理コンソールおよびSAP BusinessObjects起動パッドで使用されるApache Tomcatサーバーに関するログメッセージが含まれます。                                      |
| collections.log           | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | コレクター    | データソースの設定済み収集、ジョブのスケジュール設定、保守情報など                                                                                |

| ログファイル          | ディスク上の場所                                                                                   | モジュール             | 説明                                                                                                                         |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                 | <b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                                                         |                   | の収集フレームワークに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>collectionAppender                                                           |
| collectStep.log | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                 | 収集                | データを{PMDB_<br>HOME}/collectディレクトリから{PMDB_<br>HOME}/stageディレクトリに移動する収集手順に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>collectAppender |
| customer.log    | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                 | カスタマー<br>エンリッチメント | カスタマーエンリッチメントのログメッセージが含まれます。<br><br>Appender:<br>CustomerAppender                                                          |
| customgroup.log | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                 | カスタムグループ          | XMLファイルで定義されたカスタムグループのインポートに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>customgroupAppender                                         |
| cpPatch.log     | <b>Windows:</b><br>\${pmdb.home}/log/cpp<br>atch.log<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | コンテンツ<br>パック      | パッチインストールログファイル。<br><br>Appender:<br>cpPatchAppender                                                                       |
| customgroup.log | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                 | カスタムグループ          | XMLファイルで定義されたカスタムグループのインポートに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>customgroupAppender                                         |

| ログファイル           | ディスク上の場所                                                           | モジュール          | 説明                                                                                        |
|------------------|--------------------------------------------------------------------|----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------|
| customscript.log | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | カスタムスクリプト      | データウェアハウス内のデータプロセスに定義されたカスタムスクリプトに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>customscriptAppender |
| datetime.log     | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | 日付、時間管理        | データウェアハウス内の日付および時間のメンテナンスに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>datetimeAppender             |
| dbcollector.log  | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | コレクター          | データベースの収集に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>dbCollectorAppender                          |
| dbdelete.log     | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | データベース         | 保持ルールに基づくデータベース内のデータの消去に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>DbdeleteAppender               |
| d1c.log          | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | ディメンションライフサイクル | ディメンションライフサイクルの管理に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>DLCAppender                          |
| downtime.log     | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | ダウンタイム         | 設定済みのダウンタイム情報を使用したダウンタイムの設定とパフォーマンスデータのエンリッチに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:              |



| ログファイル              | ディスク上の場所                                                                       | モジュール         | 説明                                                                                                                                                        |
|---------------------|--------------------------------------------------------------------------------|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                     |                                                                                |               | downtimeAppender                                                                                                                                          |
| downtimeutility.log | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | ダウンタイム        | ダウンタイムユーティリティの再処理に関連するログメッセージが含まれます。<br><br>Appender:<br>downtimeutilityAppender                                                                          |
| DR.log              | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | ディザスターリカバリ    | ディザスターリカバリに関連するログメッセージが含まれます。                                                                                                                             |
| dw_abclauncher.log  | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | Orchestration | ジョブストリームに関連するログメッセージが含まれます。プロセス固有のログメッセージは、そのプロセスの固有のログファイルで表示できます。たとえば、ローダープロセス用のloader.logがあります。<br><br>Appender:<br>abclauncher-RollingLogFileAppender |
| host-manager*.log   | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\adminServer\logs<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | 管理コンソール       | 管理コンソールおよびSAP BusinessObjects起動パッドで使用されるApache Tomcatサーバーに関するログメッセージが含まれます。                                                                               |
| enrich.log          | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/             | 場所エンリッチメント    | 全般的なエンリッチメントのログメッセージが含まれます。<br><br>Appender:<br>enrichAppender                                                                                            |
| hpacollector.log    | <b>Windows:</b> %PMDB_                                                         | コレクター         | Performance Agentの                                                                                                                                        |

| ログファイル            | ディスク上の場所                                                                   | モジュール      | 説明                                                                   |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------------|------------|----------------------------------------------------------------------|
|                   | HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                           |            | 収集に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>hpaCollectorAppender           |
| hpsacollector.log | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | コレクター      | Server Automationの収集に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>hpsaAppender |
| IAEngine.log      | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | 内部アラート     | 内部アラートに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>iaEngineLogAppender        |
| IAEvent.log       | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | 内部アラート     | 内部アラートに関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>iaEventLogAppender         |
| License.log       | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | ライセンス      | ライセンス関連のタスクのメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>licenseAppender             |
| loader.log        | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | ローダー       | ステージ領域からデータストアへのデータのロードに関連するログメッセージが含まれます。                           |
| localhost*.log    | %PMDB_<br>HOME%\adminServer\logs                                           | 管理コンソール    | 管理コンソールおよびSAP BusinessObjects起動パッドのサーバーアクセスに関するログメッセージが含まれます。        |
| location.log      | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_              | 場所エンリッチメント | 場所エンリッチメントからのログメッセージが含まれます。                                          |

| ログファイル             | ディスク上の場所                                                                                                                                           | モジュール              | 説明                                                                                                                  |
|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                    | HOME/log/                                                                                                                                          |                    | Appender:<br>LocationAppender                                                                                       |
| manager*.log       | %PMDB_<br>HOME%\adminServer\logs                                                                                                                   | 管理<br>コン<br>ソール    | 管理コンソールおよび<br>SAP BusinessObjects<br>起動パッドのサーバーア<br>クセスに関するログメッ<br>セージが含まれます。                                       |
| mapperStep.log     | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                                                                         | Mapper             | 収集されたデータの変換<br>に関連するログメッセー<br>ジが含まれます。変換に<br>は、ピボット変換、行フィ<br>ルタリングなどがありま<br>す。<br>Appender:<br>mapperAppender       |
| metadata.log       | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                                                                         | メタデー<br>タリ<br>ポジトリ | メタデータリポジトリの維<br>持、アクセス、および修<br>正に関連するログメッ<br>セージが含まれます。<br>Appender:<br>MetadataRepositoryA<br>ppender              |
| mybsm.log          | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                                                                         | MyBSM統<br>合        | MyBSMコンソールからの<br>OBRレポートの起動に<br>関連するログメッセージ<br>が含まれます。                                                              |
| nodefilter.log     | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/                                                                         | 収集                 | ノードフィルターに関連す<br>るログメッセージが含ま<br>れます。                                                                                 |
| OvInstallerLog.txt | %temp%\..\HPOvInstal<br>ler\HP-SHR_9.30\HP-<br>SHR_9.30_<タイムスタンプ<br>>_<br>HPOvInstallerLog.htm<br>l<br>%temp%\..\HPOvInstal<br>ler\HP-SHR_9.30\HP- | インストー<br>ラー        | OBRインストーラーに関<br>連するログメッセージが<br>含まれます。このフォル<br>ダーは、LCOREコンポーネ<br>ントやOVPerIなど、<br>OBRのコンポーネントごと<br>にログファイルを保管しま<br>す。 |

| ログファイル                  | ディスク上の場所                                                            | モジュール       | 説明                                                                                                                                       |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------------|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                         | SHR_9.30_<タイムスタンプ>_HPOvInstallerLog.txt.                            |             |                                                                                                                                          |
| packagemanager.log      | %PMDB_HOME%\log\packagemanager.log                                  | パッケージマネージャー | コンテンツパックのデプロイメントに関連するログメッセージが含まれます。<br><br>Appender:<br>pkgmgrAppender                                                                   |
| pollerDataProcessor.log | <b>Windows :</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/ | コレクター       | リモートコレクターからOBRサーバーへのデータダウンロードに関連するログが含まれます。                                                                                              |
| Postgresql-<日時>.log     | <Postgres_install_directory>/data/pg_log                            | PostgreSQL  | PostgreSQLログファイル情報。                                                                                                                      |
| postinstallconfig.log   | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/  | インストール後の作業  | OBRのインストール後設定に関連するログメッセージが含まれます。<br>Verticaでのデータベーススキーマ作成に関する詳細、PostgresqlでのOBR管理データベーススキーマ作成に関する詳細。<br>Appender:<br>postinstallAppender |
| reconcilStep.log        | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/  | 調整          | 収集されたデータの調整に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>reconcileAppender                                                                         |
| remotepoller.log        | <b>Windows:</b> %PMDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_HOME/log/  | リモートコレクター   | 設定、メタデータ同期、OBRサーバーと設定されたさまざまなコレクター間のデータ転送に関連するログメッセージが含まれます。                                                                             |

| ログファイル            | ディスク上の場所                                                             | モジュール          | 説明                                                                                       |
|-------------------|----------------------------------------------------------------------|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
|                   |                                                                      |                | Appender:<br>remotepollerAppender                                                        |
| reload.log        | \${pmdb.home}/log/reload.log                                         | 再ロード           | 失敗したデータの再ロードを扱うcontribユーティリティ (reload.exe) のログファイル。<br><br>Appender:<br>reloadAppender   |
| shiftmaint.log    | <b>Windows:</b> %PMDDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDDB_HOME/log/ | シフト管理          | 管理コンソールで設定したシフトに基づいたシフトファクトテーブルの投入に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>shiftMaintAppender |
| sis_aggregate.log | <b>Windows:</b> %PMDDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDDB_HOME/log/ | SiteScopeコレクター | 収集サービスの一部として実行されるSiteScope集計プロセスからのログファイルが含まれます。<br><br>Appender:<br>sisAggrAppender     |
| siscollector.log  | <b>Windows:</b> %PMDDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDDB_HOME/log/ | SiteScopeコレクター | SiteScopeコレクターからのログが含まれます (GDIとDAの両方)<br><br>Appender:<br>sisCollectorAppender           |
| sqlexecutor.log   | <b>Windows:</b> %PMDDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDDB_HOME/log/ | SQL Executor   | カスタムSQL実行に関連するログメッセージが含まれます。<br><br>Appender:<br>sqlExecutorAppender                     |
| stage.log         | <b>Windows:</b> %PMDDB_HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDDB_HOME/log/ | Stage          | データのステージング、ステージング領域の削除に関連するログメッセージが含まれます。                                                |

| ログファイル                     | ディスク上の場所                                                                   | モジュール                                  | 説明                                                                   |
|----------------------------|----------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------|----------------------------------------------------------------------|
|                            | HOME/log/                                                                  |                                        | Appender:<br>stageAppender                                           |
| stderr*.log                | %PMDB_<br>HOME%\adminServer\logs                                           | 管理者コンソール                               | Tomcatサーバーによって標準エラーにログ記録されるメッセージが含まれます。                              |
| stdout*.log                | %PMDB_<br>HOME%\adminServer\logs                                           | 管理者コンソール                               | Tomcatサーバーによって標準出力にログ記録されるメッセージが含まれます。                               |
| topologycollector.log      | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | コレクター                                  | トポロジの収集に関連するログメッセージが含まれます。<br>Appender:<br>topologyCollectorAppender |
| trend.log                  | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | Aggregate、<br>trendproc、<br>trendtimer | OBRのすべてのバックエンドプロセスのメッセージが含まれます。各メッセージは、ログ記録されたプロセスの開始時刻と終了時刻を示します。   |
| TrendTimerService.log      | <b>Windows:</b> %PMDB_<br>HOME%\log\<br><b>Linux:</b> \$PMDB_<br>HOME/log/ | トレンドタイマー                               | OBRタイマーサービスに関連するログメッセージが含まれます。                                       |
| VC_collector/collector.log | \${pmdb.home}/log/VC_collector/collector.log                               | VCコレクター                                | VC Collector logfiles<br>Appender:<br>vcAppender                     |

## OBRサービスログファイル

OBRのすべてのサービスにログファイルが関連付けられています。これらのログファイルにはコンソールエラーメッセージが含まれます。これらのログファイルは、log4j APIを介して制御されず、サービスの開始時に上書きされます。

| ログファイル                    | サービス                                                           |
|---------------------------|----------------------------------------------------------------|
| BSMRService.log           | パフォーマンス管理データベース (PMDB) <sup>1</sup><br>プラットフォーム管理者サービスのログファイル。 |
| BSMRCollectionService.log | PMDB Platform Collectionサービスのログファイル。                           |
| BSMRDBLoggerService.log   | PMDB Platform DB Loggerサービスのログファイル。                            |
| BSMRIMService.log         | PMDB Platform IMサービスのログファイル。                                   |
| Trend.log                 | PMDB Platform Timerサービスのログファイル。                                |
| Postgresql-<日時>.log       | OBR PostgreSQL Serviceのログファイル。                                 |

## ログファイルのメッセージ形式

ログファイルのすべてのエントリは、次の形式で記録されます。

| 形式          | 説明                                                                             |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------|
| タイムスタンプ     | タイムスタンプフィールドは、ログエントリが発生したときの時刻を表します。YYYY-MM-DD hh:mm:ss,nnnという形式の24時間表示を使用します。 |
| 重要度         | 重要度フィールドは、そのログエントリの重要度レベルです。重要度レベルは、DEBUG、INFO、WARN、ERROR、FATALに設定されます。        |
| Class_name  | ログ記録要求の発行元の完全修飾クラス名。                                                           |
| Method_name | ログ記録要求の発行元のメソッドの名前。                                                            |
| メッセージ       | ログ記録イベントに関連付けられているアプリケーションが表示したメッセージ。                                          |

<sup>1</sup>環境内のIT要素の稼働状態、パフォーマンス、可用性データの共通のリポジトリのログファイル。プラットフォームデータストアには、コンテンツパック内のメタデータ仕様に基づいてデータストア内で処理、変換、および集約されるパフォーマンスデータが格納されます。

# デフォルトパスワードの変更

このセクションでは、次の項目のデフォルトパスワードの変更方法を説明します。

[管理コンソールのログオンパスワード](#)

[Verticaデータベースのパスワード](#)

[管理データベースのパスワード](#)

[SAP BusinessObjectsデータベースのパスワード](#)

## 管理コンソールのログオンパスワード

デフォルトの管理者ユーザー名のパスワードを変更する場合は、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、**[その他の設定]** > **[レポートプラットフォーム]** をクリックします。  
[レポートプラットフォーム] ページが表示されます。
2. **[CMCの起動]** をクリックします。[中央管理コンソール(CMC)へのログオン] ページが表示されます。
3. 中央管理コンソールのログオン画面で、**[ユーザー名]** フィールドに「Administrator」と入力し、**[パスワード]** フィールドに <管理コンソールのパスワード> を入力します。
4. **[ログオン]** をクリックします。[CMC ホーム] 画面が表示されます。
5. **[ユーザーとグループ]** をクリックします。[ユーザーとグループ] 画面が表示されます。
6. 右側のペインで、**[Administrators]** をダブルクリックします。
7. **[Administrator]** を右クリックしてから、**[プロパティ]** をクリックします。[アカウントマネージャー] ダイアログボックスが表示されます。
8. ナビゲーションパネルで、**[アカウントマネージャー]** をクリックします。
9. **[Enterpriseパスワード設定]** の下にある **[パスワード]** フィールドに新しいパスワードを入力します。
10. **[確認]** フィールドに、確認のためにパスワードを再入力します。必要な場合は、この画面で管理者ユーザー名を変更し、他の必要な詳細を指定することができます。
11. **[保存して閉じる]** をクリックして変更を受け入れます。
12. **[ログアウト]** をクリックして、中央管理コンソールを終了します。

注: このタスクは、OBRがシステムにインストールされている場合にのみ、有効です。



## Verticaデータベースのパスワード

管理コンソールから、デフォルトのVerticaデータベース管理者ユーザーのパスワードを変更する場合、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [Verticaデータベース & タイムゾーン] をクリックします。  
[Verticaデータベース & タイムゾーン] ページが開きます。
2. [パスワードの変更] をクリックします。  
[パスワードの変更] ダイアログボックスが開きます。
3. [パスワードの変更] ダイアログボックスで、次のデータベースパスワードの詳細を入力します。

| フィールド       | 説明                                               |
|-------------|--------------------------------------------------|
| 古いパスワード     | 既存のデータベース管理者パスワードを入力します。                         |
| 新しいパスワード    | 新しいパスワードを入力します。パスワードは英数字の値で、25文字以内の長さでなければなりません。 |
| 新しいパスワードの確認 | 確認のために新しいパスワードを再入力します。                           |

4. [OK] をクリックします。  
パスワードが正常に変更されたことを示す [パスワードが正常に変更されました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。
5. コマンドプロンプトから{PMDB\_HOME}/binに移動します。
6. HPE\_PMDB\_Platform\_Verticaファイルを開きます。
7. SECURITYに新しいパスワードを入力します。ファイルを保存して終了します。
8. Verticaサービスが実行されているかどうかを確認し、etc/init.dに移動して次のコマンドを実行します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Vertica start
```

サービスが停止している場合、次のコマンドを実行してサービスを起動します。

```
service HPE_PMDB_Platform_Vertica status
```

# 管理データベースのパスワード

PostgreSQLデータベース管理者 - postgresユーザーのデフォルトのパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

デフォルトのPostgreSQLデータベース管理者ユーザーのパスワードを変更する場合は、次の手順を実行します。

## Windowsの場合：

1. [スタート] > [管理ツール] > [コンピューターの管理] に進みます。  
[コンピューターの管理] ページが表示されます。
2. [システムツール] > [ローカルユーザーとグループ] > [ユーザー] に進みます。
3. [postgres] を右クリックしてから、[パスワードの設定] をクリックします。  
警告メッセージが表示されます。
4. [続行] をクリックします。[postgresのパスワードを設定] が表示されます。
5. [新しいパスワード] に新しいパスワードを入力します。確認のためにパスワードを [パスワードの確認] に再入力します。
6. [OK] をクリックします。
4. サービスウィンドウを開きます。
5. [HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQL] を右クリックしてから、[プロパティ] をクリックします。  
HPE\_PMDB\_Platform\_PostgreSQLの [プロパティ] ページが表示されます。
6. [ログオン] タブをクリックします。
7. **手順5**で入力したパスワードを入力し、確認のために再入力します。
8. [OK] をクリックします。

## Linuxの場合：

1. コマンドラインコンソールにログオンします。
2. 次のコマンドを実行します。  

```
passwd postgres
```
3. 新しいパスワードを入力し、Enterキーを押します。

Postgres - pmdb\_adminユーザーのデフォルトのパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

デフォルトの管理データベースユーザーのパスワードを変更する場合は、次の手順を実行します。

1. 管理コンソールで、[その他の設定] > [管理データベース] をクリックします。  
[管理データベース] ページが表示されます。
2. [パスワードの変更] をクリックします。  
[パスワードの変更] ダイアログボックスが表示されます。
3. [パスワードの変更] ダイアログボックスで、次のデータベースパスワードの詳細を入力します。

| フィールド       | 説明                                               |
|-------------|--------------------------------------------------|
| 古いパスワード     | 既存の管理データベース管理者パスワードを入力します。                       |
| 新しいパスワード    | 新しいパスワードを入力します。パスワードは英数字の値で、25文字以内の長さでなければなりません。 |
| 新しいパスワードの確認 | 確認のために新しいパスワードを再入力します。                           |

4. [OK] をクリックします。  
パスワードが正常に変更されたことを示す [パスワードが正常に変更されました] というメッセージが情報メッセージパネルに表示されます。

## SAP BusinessObjects データベースのパスワード

OBRはデフォルトのSAP BusinessObjectsデータベースパスワードでインストールされています。このタスクを実行して、デフォルトのSAP BusinessObjectsデータベースパスワードを変更します。

OBRのインストール後、SAP BusinessObjectsに組み込まれているデータベースのデフォルトのパスワードを変更するには、次の手順を実行します。

### Windowsの場合:

#### タスク1: updateSQLAnywhereDBコマンドを使用したパスワードの変更

1. 管理者としてシステムにログオンします。
2. コマンドラインコンソールから、パス%PMDB\_HOME%\libに移動します。
3. perl updateSQLAnywhereDB.plコマンドを実行します。
4. 新しいパスワードを入力し、Enterキーを押します。

**注:** パスワードの最初の文字が数字でないことを確認してください。パスワードにスペースまたは特殊文字を含めることはできません。

5. 確認のためにパスワードを再入力します。

## タスク2: Central Configuration Managerの更新

1. [スタート] から、[検索] に「**Central Configuration Manager**」と入力します。[Central Configuration Manager] ウィンドウが表示されます。
2. Server Intelligence Agent (SIA) を選択し、右クリックして、[**Stop**] を選択します。SIAが停止するまで待機します。
3. [**Properties**] を右クリックして選択し、[**Configuration**] タブをクリックします。
4. [**Configuration**] タブで、エラーのポップアップが表示される場合もありますが、[**OK**] をクリックして続行し、BOE120の[**Specify**] をクリックします。
5. [**データソース設定の更新**] をクリックします。
6. [**OK**] をクリックします。
7. [**SQL Anywhere (ODBC)**] を選択し、[**OK**] をクリックします。
8. [Select Data Source] ウィンドウが開きます。[**マシンデータソース**] タブを選択します。
9. [**BI4\_CMS\_DSN**] をダブルクリックし、updateSQLAnywhereDB.plコマンドを使用して変更したパスワードを入力して、[**OK**] をクリックします。
10. クラスターキーを「1ShrAdmin」と入力します。
11. [**BI4\_Audit\_DSN**] を選択して、BI4\_Audit\_DSNデータベースについて手順5～10を繰り返します。
12. [Central Configuration Manager] ウィンドウで[SIA]を選択し、右クリックして[**開始**]を選択します。

SAP BusinessObjects BI起動パッドにログオンして、レポートにアクセスできるかどうかを確認します。

## Linuxの場合:

### タスク1: updateSQLAnywhereDBコマンドを使用したパスワードの変更

1. rootとしてシステムにログインします。
2. コマンドラインコンソールから、パス\$PMDB\_HOME/libに移動します。
3. perl updateSQLAnywhereDB.plコマンドを実行します。
4. 新しいパスワードを入力し、Enterキーを押します。

**注:** パスワードの最初の文字が数字でないことを確認してください。パスワードにスペースまたは

特殊文字を含めることはできません。

5. 確認のためにパスワードを再入力します。

SAP BusinessObjects BI起動パッドにログオンして、レポートにアクセスできるかどうかを確認します。

#### タスク2: データベースパスワードとSAP BusinessObjectsの同期

SAP BusinessObjectsシステムで、次の手順を実行します。

1. SAP BusinessObjectsシステムのコマンドプロンプトにログオンします。
2. 次のコマンドを使用して、shrboadminユーザーに切り替えます。

```
su - shrboadmin
```

3. 次のコマンドを実行して、\$BOBJEDIRディレクトリに移動します。

```
cd $BOBJEDIR
```

4. 次のコマンドを実行します。

```
.cmsdbsetup.sh
```

5. ノード名を指定するよう求められたら、入力として「OBR」と入力します。

次のメッセージが表示されます。

ノードは停止されます。続行しますか?

6. 「3」と入力し、Enterキーを押して続行します。

次の画面が表示されます。

```

SAP BusinessObjects

Current CMS Data Source: BI4_CMS_DSN_1452664266

err: Error: Failed to get cluster name. (STU00165)
err: Error description: SAP BusinessObjects BI platform CMS: Unable to connect to the CMS system
      ID or password

Current cluster key: [[8t2h5f7UfnlE2JbhkbRNUg]]

update (Update Data Source Settings)
reinitialize (Recreate the current data source)
copy (Copy data from another Data Source)
change cluster (Change current cluster name)
change cluster key (Change current cluster key)

[update(6)/reinitialize(5)/copy(4)/change cluster(3)/change cluster key(2)/back(1)/quit(0)]
-----
[update]6

```

- 「6」と入力し、Enterキーを押して更新します。

次のメッセージが表示されます。

```

The destination data source must contain deployment information for this cluster.
Do not use this option for clustering with a different CMS cluster.
Refer to the administration guide for details on CMS clustering workflows.
Do you want to continue?
[yes (1) /no (0)] [no]1

```

- 「1」と入力し、Enterキーを押して続行します。
- 「2」と入力し、以下に示すようにSQLAnywhereを選択します。

```

-----
SAP BusinessObjects

Specify Source CMS database connection information.

Select the type of database connection from the following:
[SAPHANA (8) /Oracle (7) /DB2 (6) /Sybase (5) /MySQL (4) /MaxDB (3) /SQLAnywhere (2) /back (1) /quit (0)]
-----
[SAPHANA]2

```

- 次のファイルから、ODBCデータソース名 (DSN)を入力します。

\$BOBJEDIR/enterprise\_xi40/odbc.ini

次の画像に例示するように (BI4\_CMS\_DSN\_1452664266)、DNS名はBI4\_CMS\_DSN\_<number>で始まります。

```
[shrboadmin@vm06687 /]$ cd /opt/HP/BSM/BOE4/sap_bobj/enterprise_xi40/
[shrboadmin@vm06687 enterprise_xi40]$ vi odbc.ini

[ODBC Data Sources]
BI4_CMS_DSN_1452664266=SQLAnywhere 12.0
BI4_Audit_DSN_1452664266=SQLAnywhere 12.0

[BI4_CMS_DSN_1452664266]
UID=dba
DatabaseName=BI4_CMS
ServerName=BI4_1452664266
Host=localhost:2638
Driver=/opt/HP/BSM/BOE4/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so

[BI4_Audit_DSN_1452664266]
UID=dba
DatabaseName=BI4_Audit
ServerName=BI4_1452664266
Host=localhost:2638
Driver=/opt/HP/BSM/BOE4/sqlanywhere/lib64/libdbodbc12.so
```

11. 求められたら、ユーザー名として「dba」と入力します。
12. **タスク1:** updateSQLAnywhereDBコマンドを使用したパスワードの変更で作成した新しいパスワードを入力します。

新しいパスワードがSAP BusinessObjectsと同期されます。

# ドキュメントに関するフィードバックの送信

このドキュメントに関するご意見は、電子メールでドキュメントチームまでお寄せください。このシステムで電子メールクライアントが設定されている場合は、上にあるリンクをクリックすると、表題の行に以下の情報が付いた状態で電子メールウィンドウが開きます。

## 管理ガイド (Operations Bridge Reporter 10.22) に関するフィードバック

電子メールにフィードバックを記入して、送信ボタンをクリックしてください。

使用できる電子メールクライアントがない場合は、上記の情報をWebメールクライアントの新しいメッセージにコピーして、フィードバックをdocfeedback@hpe.com に送信してください。

お客様からのご意見をお待ちしております。